

東海大学大学院平成25年度博士論文

ジョナサン・スウィフト、悪疾と諷刺

指導 奥田良二教授

東海大学大学院文学研究科

英文学専攻

小島 弘一

ジョナサン・スウィフト、悪疾と諷刺

目次

はじめに	1
1 スウィフトの病氣罹患	
第1章 スウィフトの生い立ち	8
第2章 スウィフトの病氣	14
第3章 醜悪詩	29
第4章 スウィフトに結婚に対する適応性はあったのか	43
2 スウィフトの女性観	
第1章 スウィフトは女性に何を求めたか	54
第2章 スウィフトを取り巻く3人の女性たち	
第1節 ジェーン・ワーリング	59
第2節 エスター・ヴァイナミリー	64
第3節 詩篇『カデナスとヴァネッサ』にみるヴァネッサ像	71
第4節 書簡から読み解くスウィフトとヴァネッサ	79
第5節 エスター・ジョンソン	91
第6節 誕生日祝詩にみるステラ像	98
3 社会改革者としてのスウィフト	
第1章 スウィフトの諷刺表現	110
第2章 『ドレイピア書簡』	128
第3章 『謙虚な提案』にみる諷刺手法	142
4 作家としてのスウィフト	
第1章 『桶物語』 「狂気」の章	156

第2章	『ガリヴァー旅行記』	165
第3章	ガリヴァーのペルソナで理念を語ったのか	175
第4章	政界と王室の姿	183
第5章	スウィフトの人間嫌いの萌芽	190
第6章	終章 ヒエラルキーの倒置	199

5 詩人としてのスウィフト

第1章	憂国の詩人スウィフト	204
第2章	情景詩人スウィフト	
第1節	叙景詩「朝の情景」	211
第2節	叙景詩「夕立の情景」	214
第3章	最後の長編詩	
第1節	詩篇 「スウィフト博士の死」	217
第2節	詩篇 「ラブソディ」	225
第3節	詩篇 「軍団クラブ」	228

結び		233
----	--	-----

Appendix		237
Chronology of Jonathan Swift		239
Works		
Primary Sources		241
Secondary Sources		242
Third Sources		244
Works Consulted		246

はじめに

18世紀、英文学界で諷刺文学の地位を確立したジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667 - 1745) は、同名の父親ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) の死後、アイルランドのダブリンで生を受けた。この事実が彼にアイルランド生まれという烙印を押すこととなった。祖先にイングランドの貴族を持つ彼は、終生アイルランド生まれと呼ばれることに劣等感を強く感じていた。アイルランドの被植民地化の歴史をひも解くと、遠くプラントジネット朝ヘンリー2世 (Henry II, 1133 - 89, 在位 1154 - 89) による篡奪にまで遡らなくてはならない。以来アイルランドは、イングランドによる被統治国家の地位に甘んじなくてはならなかった。そのため、共にイングランド国王を戴く、共同王国の一員であるにも拘らず、三流国民として扱われていた。アイルランドは6世紀には、既に土着の宗教を排除して、カトリックを信仰する国家でもあった。イングランド王国の絶対的統治者ヘンリー8世 (Henry VIII, 1491 - 1547, 在位 1509 - 47) は、ローマ・カトリックから袂を分かって設立した、英国国教会の最高主権者にして、至高の存在に自分を据えた。以来イングランドは、プロテスタントを信奉する国家となった。スウィフトは、一族の栄華を政界に身を投じて果たそうとの野心を持っていたが、アイルランド生まれという出自が障壁となった。また、スウィフトが学んだトリニティ・カレッジ (Trinity College, Dublin. 以後 T.C.D. と表記) は、聖職者養成を目的に設立された教育機関であったため、イングランドでの求職運動は進展しなかった。イングランドでの立身出世の道を見失ったスウィフトは、カトリック信仰のアイルランドで、プロテスタントの聖職に付くことになった。終始彼が目指していたのはイングランドの政界であったが、果たせなかった。折に触れて頻繁にロンドン訪問をしている事実からも、彼は諦めていなかった事は推察できる。彼は著書の大半の出版をロンドンで行ったのも、アイルランドの印刷技術に問題があったことも理由であるが、政界に近づく便法を探っていたと考えられる。

スウィフト一族は、生活の基盤を求めて、大半がアイルランド移住を果たしていた。スウィフトの母アビゲイル (Abigail) は、幼い我が子を見捨てるようにして、彼の姉ジェーン (Jane) を連れて、自分の生まれ故郷イングランドに戻ってしまった。6歳にしてスウィフトは、単身辺境であるアイルランド南東部、レスター地方キルケニーにある、キルケニー校 (Kilkenny College) の寄宿舎に追いやられたのであった。同校は1780年創立のグラマースクールでアイルランドにおけるプロテスタントの支配階級の最も優れた教育機関であり、土着貴族の子弟がこぞって入学を争った名門校であった。異境に放置されたままのスウィフトは、キルケニーの地で愛の薄い、孤独な生活を送ったのである。この環境が、彼の「冷たい気質」を醸成したのだった。肉親に見捨てられるような境遇が、彼の女性観の底辺にあるといえる。T.C.D.在学中、パトロンの変更により、経済力が向上したことで遊郭に足を踏み入れ、その結果梅毒に冒されてしまう。この悲劇が、他人を寄せ付けない気質を醸成し、さらに彼自身を冷たい気質にしたといえる。彼の売春婦に対する異常な差別

の一端も、この当時の彼の心境が反映している。

彼の学資は一族の長兄、ゴッドウィン (Godwin Swift) によって賄われたが、その援助の細さに終生不満を漏らしていた。この経済的困窮もまた、金銭にあざとい性格を作り上げたのである。1682年、アイルランドの最高学府T.C.D.に入学したが、経済的不遇の環境は次兄の叔父、ウィリアム・スウィフト (William Swift) にパトロンの座が引き継がれるまで変わらなかった。1686年頃より、彼の経済力が向上したことは、T.C.D.の忘備録 (Buttery Book) から判明した。当時同校では、校則違反者に罰金を科すことで、その罪を免除する風習があった。この罰金の高額支払者に、スウィフトの名前が見られた。この頃より素行が著しく乱れ、校則違反が目に見えようになった。彼の校則違反は、主として礼拝不出席、夜間点呼時における欠席、許可なくしての市中徘徊および、外出許可証の不携帯、夜間無許可での外出、飲み屋への出入り等であった。彼はこれらの校則違反の廉で、70回以上罰を与えられたと、T.C.D.の忘備録に記述されている。1686年3月18日に、従兄弟のトーマス (Thomas) や、その仲間のウォーレン (Warren) 達4名と共に、公衆の面前で訓戒という屈辱的な罰すら与えられた。1688年11月20日には、副学寮長ロイド (Duien Lloyd) と上級評議員に対する傲慢な態度や、流言蜚語を学生寮の壁に書き連ねた罪により、学生監に跪いての謝罪を申し渡されたほどであった。これらの行為が、スウィフトに不行跡の刻印を押すこととなった。T.C.D.の忘備録によれば、スウィフトの学則無視の原因は不明であるが、経済的に豊かになったことも原因の一端にあると考えられる。経済的に豊かになったことが、従来友人たちと行動を共に出来なかった彼の欲望を解き放ったのである。豊かとなった経済力が、彼に遊郭に立ち入る余裕を与え、T.C.D.の学則違反を起こさせたのであり、その結果、売春婦から梅毒を罹患させられたのであった。以後、終生この梅毒性内耳炎に起因する、難聴とめまいに苦しめられることとなった。フランス病とも、ナポリ病とも言われていた梅毒は、原因は分からぬものの、肉体的交渉によって発症することはよく知られていた病気であった。¹ この病気がもたらす症状について知識を持っていた彼は、医師にも相談し、医学書を読み耽ったことであった。しかしこの病気の感染初期において、完治するまで隔離が義務づけられていたこともあって、容易に病状を打ち明けなかったので、ますます治療が困難となってしまった。罹病を悟った彼は、やがて梅毒がもたらす精神障害への恐怖に怯えたのであった。その怖れを彼の最初の作品となる『桶物語』に投影したのである。

スウィフトが肉体的には健全な男性であったことは、1835年、ダブリンで開催された英国科学振興協会 (British Association of the Advancement of Science) 学会で、ヒューストン博士 (Dr. John Houston) が、スウィフトの頭蓋骨の解剖結果を、発表したことで明らかとなった。解剖結果は、「頭骸骨には鼻の中隔に異常が見られ、機知と比喻を司る器官の発達は僅かであるが、生殖と性愛器官は異常に発達していた。」² と性欲の存在は認めて

¹ ケテル、クロード、『梅毒の歴史』寺田光徳訳、藤原書店、1996年。

² “We can draw few deductions of the nasal septum. Those parts of the skull marked out

おり、肉体的には健全であったことが証明された。スウィフトは梅毒に罹患したことで、愛する人との将来設計が無に帰してしまった。彼はその恨みを女性全般に向けたのであった。愛するエステル・ジョンソン (Esther Johnson, 以後ステラと表記)の死後、その梅毒罹患の当事者である売春婦に対して、醜悪詩と称する詩編で復讐したのであった。スウィフトは自分に対する不条理な扱いや、不当な行為に対する私憤を、諷刺で報復することが彼の習性ともなった。彼の諷刺の原点は、生来の粘液質な性格もあるが、この罹病を契機にますます増幅し、イングランドによるアイルランド差別的立法に対する公憤を、諷刺で記述したりするようになった。スウィフトの人格は、梅毒に罹患したことで大きく変わったのである。

彼の一族には高名な詩人ドライデン (John Dryden, 1631 - 1700) もおり、多くの聖職者も輩出している家柄であった。彼は文筆で身を立てようと当初は考えていたが、ドライデンにその愚をたしなめられ、政界に身をゆだねようとしたが、多くの貴顕の裏切りにあい、止むなくアイルランドの聖職録に縋らざるを得なくなった。彼の最初の挫折は、アイルランド生まれのイングランド人であるが、オックスフォード大学 (Oxford University) に入学できなかったことが、彼の劣等感の始まりであった。彼が人生に思い描いた夢は、次々に破綻してしまっていたのであった。

梅毒罹患以前の彼は、弱者に同情の眼を注ぎ、弱者の立場に同情する善良な魂の持主であった。梅毒罹患の事実を社会から隠すため、様々なペルソナで身を包み隠して、社会批判を行ったのであった。諷刺は社会の欠陥や人物をそれとなく諷刺、当てこするのが主目的であり、それを仄めかす。あることを話題にしながら、それとなく別のことを論じる風喩の様な働きがある。諷刺の性格は遠回しに、意地悪く相手を非難するので、筆者の人格を顕わにってしまう危険性があった。顕わになることで、梅毒罹患の事実が世間に知れ渡るのを防ぐため、彼は多くのペルソナに身を任せて、その危険を避けたのである。ペルソナはその点で、存在を隠す効果的な手段であり、自己欺瞞にとっては都合のよい便法であった。彼は様々なペルソナで身を包んで、自己の存在を薄め、自己の存在を社会から隔離して批判したのであった。この様な手法は、梅毒罹患という事実を抱えているスウィフトにとって、この上ない存在を透過させる手法であり、彼自身の作品を生み出すエネルギー源となっていた。

ジョン・アンソニー・クッドン(John Anthony Cuddon)は諷刺の語源を次の様に規定している。

Satire It may be a cooking term in origin or, as Juvenal called it, *ollapodrian* 'mish-mash' 'farrago'. Quintillian used to refer to the kind of poem written

as accommodating the organs of wit and comparison were scarcely developed at all, while the portions assigned to philp-progenitiveness and amativeness appeared excessive." (*The Irish journal of Medical Science Sixth Series No.162 June, 1939 Swift's Deafness: and His Last Illness by T. G. Wilson, p.254.*)

by Lucilius- a poem in hexameters (q.v.) on various themes;a poem with the tone of the work of Lucilius and Horace. Later the term widened its meaning to include works that were satirical in tone but not in form.³

諷刺とは、ユウェナリス (Decimus Junius Juvenalis c.60 - 128.)が言ったように土鍋で香辛料を利かせて煮込んだ、スペインやラテンアメリカの伝統的な煮込み料理ともいうべき、料理用語が起源である。いろいろなテーマについて六歩格で書かれたルキリウスの詩やルキリウスやホライスの作品の口調で書かれた詩を引きあいに出すときにクインティリアヌスが諷刺という語を使った。後に、語の意味は拡大して、形態的でなく口調が諷刺的な作品を含むようになった。⁴

ロナルド・A・ノックス (Ronald A Knox) は著書『諷刺における雑録』(*Essays in Satire*)で、ポープの詩編を持ち出して、諷刺家は、世の中の基準や理念、真実や美の価値の私的保護者を演じているのであると語っている。諷刺は個人的な好悪に基づいての評価であると語っている。

O sacred Weapon ! left for Truth's defence,
Sole dread of Folly, Vice, and Insolence !
To all but Heav'n-directed hands deny'd,
The Muse may give thee, but the Gods must guide.
Rev'rent I touch thee !⁵

ああ、神聖な武器よ！真実の守護神としてこの世に残されたものよ。
愚行、悪徳、傲慢が唯一恐れるものよ！
女神がお前をすべてのものに与えるだろうが、天に導かれた手だけは受け取らなかつた。だが神がお前を導かねばならぬ。
私は敬意を持ってお前に触れよう！

スウィフトは『桶物語』の冒頭で、「諷刺は見る者の姿を映し出す鏡の様なものである、しかし、本人の姿は映さない。」と、第3者的評価であることを告白している。

スウィフトの実体を解明するキーワードは、アイルランド生まれのイングランド人、肉親に捨てられた孤児根性、乏しい経済援助で培われた金銭に対する執着心である。彼の人

³ J. A. Cuddon, *A Dictionary of Literary Terms*, Blackwell Publishers, 1998. p.585. ll. 28-33.

⁴ 日本語訳は拙訳。以後論文中の日本語訳はすべて拙訳。

⁵ Ronald.Knox, *Essays in Satire*, p.584.

格形成の上で欠かすことのできない要因は、梅毒罹患による精神障害の恐怖であり、怒りであった。梅毒罹患の結果の彼自身で結婚不適応と判断を下した。死後の頭蓋骨の診断によれば、性的能力は人並みでありながら、性的欲望は人並み以上だったと診断された。その彼が梅毒によって結婚不適応となったことで、培われた冷酷な性格で、彼の女性蔑視傾向を増大させたのである。スウィフトの活躍した時代、女性の社会的立場は低いものであった。女子教育は、せいぜいダンスや、編み物程度に限定されていた。男性と肩を並べる教養は、恥ずかしいものと軽蔑の対象ですらあった。スウィフトは表面的には、男性並みの教養を持つ女性の存在を称賛していたが、実際には、求めているふりをしていただけなのである。梅毒罹患の事実が彼を女性蔑視者にしたのであり、彼はフェミニストの仮面を装った女性蔑視主義者であった。彼が求めた女性像は、知力は男性並みであるが、心は幼児のままの従順な女性である。ステラをアイルランドに呼び寄せたのは、孤児の彼女を傍に控えさせて、自分を家父長に据えた仮想家族を演じたかったのである。彼は長年、家庭生活という団欒を求めているが、彼が実生活は団欒とはほど遠いものであった。スウィフトは、自分を取り巻くステラたちとの仮想家族の団欒という、幻影を求めたのである。柔軟な若いスウィフトの心を、将来に希望を見出すことが出来ない頑ななものにしたのは、全てが梅毒に起因すると考えられる。

当時、ヨーロッパでは、梅毒治療の手法として、道徳的社会的構築が効果的と考えられていた。そのためスウィフトは、道徳に反する社会の存在に声高く異を唱えたのであった。1723年の『ドレイピア書簡』(*The Drappier's Letters*)は、ウッド貨 (Wood's Halfpence) に抗議する姿勢を示しながら、イングランドとアイルランド両国の不公正な状況が、道徳的でないと異を唱えたのである。条約上の共同国家の存在を否定し、アイルランドを従属国家としてしか見なしていない、イングランドの非道徳的処遇に抗議したのである。『謙虚な提案』(*A Modest Proposal*)は、イングランドの不道徳的なアイルランド蔑視政策に異を唱えたのである。共にスウィフトを慕ってアイルランドにしてきたヴァネッサは、彼女が成熟した肉体を振りかざして結婚を迫ったので、仮想家族の団欒には受け入れられなかったのである。無残に彼女を拒絶し、彼女に孤独な死を選ばせてしまった。彼は梅毒罹患のため、性愛に進むことが出来ないのも、肉体的結合を求めない友愛を説いたのであった。彼は友愛を、『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver's Travels*)でも賢馬(Houyhnhnms) に語らせ、ステラの誕生日祝詩でも、友愛の重要性を説いている。スウィフトは友愛の名に隠れて、性愛から逃避したのである。全ては自身の梅毒罹患の事実を、公表できないことから起こったのである。

テンプル卿を理想の師と崇め、卿の理念を理想国家の姿として『ガリヴァー旅行記』に映し、記述したのである。彼の詩作は、叙景詩から人物礼賛詩へと移り変わり、権力に抗する人物に光を当て、恣意に権力をふるう人物には鋭い諷刺の矢を射かけたのである。いずれも道徳的社会的実現を求めていることであつた。

本論考は、1「スウィフトの病気罹患」で、彼の著作の傾向を大きく変えた梅毒罹患をとらあげて、その可能性について検証した。彼の死直後の解剖所見から、頭蓋骨の形状診断、

19世紀初頭の臨床診断や、20世紀になって論議されたメニエール症候が、難聴とめまいを同時に発症しないことから、彼を終生苦しめたこれらの宿病の原因が、メニエール症候以外にあるとの可能性に迫った。20世紀後半における臨床診断の数々より、梅毒性内耳炎の可能性にたどり着いたのである。眼科医ワイルド博士(Dr. William Wilde) や、耳鼻科医ウィリアム・マッケンジー博士(Dr. William Mackenzie)による、難聴、めまいの病因が同時に発症し得る病名として、梅毒性内耳炎が浮かび上がったのである。18世紀にはすでに、彼のこの病名はアイルランドの著名な精神内科医であるトーマス・ベッドス博士(Dr. Thomas Beddoes)が、スウィフトの病名として示していた。21世紀になると、イングランドの生理学者も同様に病名を挙げてその可能性を示した。この梅毒性内耳炎の病名をスウィフトに当てはめるならば、彼の性格がどのように変化したか、執筆傾向の変化などが十分理解できるのである。

本論考では、スウィフトの病気を梅毒性内耳炎とし、梅毒性内耳炎の影響が、いかに彼の性格を変化させ、作品に投影されたかを論じるものである。2「スウィフトの女性観」では、梅毒罹患によって結婚の能力も可能性すら失ってしまい、結婚不適格者の烙印をおされてしまったスウィフトが、彼を取り巻く女性たちに、どのように接し、どのような女性観を持つにいたったか、どのように女性を遇したかを論じた。3「社会改革者としてのスウィフト」では、恣意的不法行為を非道徳と認め、道徳的社会の構築が損なわれていることが、梅毒治癒の障害となっているとの怒りが、公憤の姿をとって語られたのである。完成目前の『ガリヴァー旅行記』の執筆を中断してまで臨んだ『ドレイピア書簡』で、イングランド政府に道徳的社会の構築を訴え、『謙虚な提案』で抑圧されているアイルランド国民に対する、イングランド政府の非道徳的な差別の不公平を訴えたのである。4「作家としてのスウィフト」では、評論『桶物語』をとり上げ、スウィフトが聖職者のペルソナで、テンプル卿援護に走り、評論家と称する銜学者たちに立ち向かった姿を論じた。そして『桶物語』が宗教諷刺の作品なのか、卿擁護のために投げ込んだ「空の桶」であったのかを論じた。また、『ガリヴァー旅行記』では、どのようなペルソナに身を隠して、理想の国家像を語ったかを論じ、理想的国家が何処にも見られぬばかりか、理想と感じた理性によって統治する国家すら彼を受け入れてくれない現実に、人間であることすら嫌になってしまった姿を描いた。スウィフトが人間嫌いになったことも、自分の梅毒罹患が大いなる影を落としていたのである。彼はこの作品で、日ごろの彼の梅毒罹患の怖れを余すところなく描写している。5「詩人としてのスウィフト」では、叙景詩人として出発した筈の彼の詩風を諷刺的詩風に偏ってしまった原因が、彼の梅毒罹患にあることを論じた。情景詩で出発したにもかかわらず、諷刺詩人となってしまったのも、梅毒罹患に原因があるのであった。初期の叙景詩でも、叙景詩人のペルソナの陰から諷刺詩人が姿を覗かせている。1709年、彼がロンドンに「初穂料減免」請願に出かけた折の情景詩であるが、純粋な聖職者のための請願すら、党利党略に傾く現実に怒りを隠せなかった。既に、この頃の詩作姿勢にも、諷刺に走る傾向がみられるのである。

スウィフトを取り巻く環境には、謎が渦巻いていて、その解明に役立つ資料が殆どないのが実情である。彼の病名も、近代医学が到達した時点での病名を、300年前の症状に当てはめているのであった。本論はその病名に、梅毒性内耳炎という合理的解答を与えて、スウィフトの人格や作品に与えた影響を考察し、最終的に彼の諷刺との関わりを解明するものである。

本論考の論述に当たって、資料として、ハロルド・ウィリアム(Harold William)編集の、『スウィフト書簡集 I-V』(*The Correspondence I-V*)を用いた。また、スコットランドの作家ウォルター・スコット(Sir. Walter Scott)の著作『伝記』(*Memoirs*)を参照し、スウィフト死去直後の1751年に出版された、第5代オレリー卿(Sir, Orrery)の著書『評論』(*Remarks*)とアメリカの碩学、アーヴィン・エーレンプライス(Irvin Ehrenpreis)の著作『スウィフト、人物、作品と時代 I-III』(*Swift, The Man, his Works and The Age I-III*)を主として用いた。これらの資料と、スウィフトの作品から、梅毒と彼の人格形成および、諷刺精神とのかかわり合いを明らかにした。彼の病因解明には、多くの医学者の著作や、学会発表の論文や、学会誌を用いている。

1 スウィフトの病気罹患

第1章 スウィフトの生い立ち

多くの偉人—賢人同様に、ジョナサン・スウィフトの生涯も謎に満ちたものであった。彼をとりまく疑問の大半が、立証資料に乏しく、何れが真実か否かの判断がつかないものであった。とりわけ、彼に関する最大の疑問は、終生治癒しなかった悪疾、難聴とめまいであろう。本論は、彼の人生に大きく影響した悪疾こそが、全ての疑問解明の鍵であるとして論述を展開する。スウィフトの出生自体が疑問に包まれているが、彼の出生に遡って、彼の人格形成に影響を与えた悪疾が、どのように人格を変え、作品の傾向を定めたかを論じる。

彼自身、終生イングランドに拘っていたが、その原点は父祖トーマス・スウィフト(Thomas Swift)にまで遡る。彼はイングランドのヨークシャー(Yorkshire)州の旧家の出で、ピューリタン革命当時、ヘレフォードシャー(Herefordshire)のグッドリッチ(Goodric)の牧師であった。彼は熱心な王党派であったため、革命時は不遇であった。しかし、スチュワート王朝に忠実であったことが、子孫の、とりわけ、ジョナサン・スウィフト一家に有利に働いた。父ジョナサンの、キングス・イン(King's Inns)就職も、スウィフト家が常に国王に忠実であったことから、1665年1月25日の請願は受理され、めでたく職を得ることが出来たのであった。その就職請願の書類には次のように記されている。

“At a Council holden at the King's Inns, Dublin, the 25th day of January, 1665-6, Ordered that Jonathan Swift, upon his petition, be admitted Stewardship of this house.[Signed]Michl. Dublin, Can.”⁶

ダブリンのキングス・インの1665 - 6年1月25日からの開廷期に、ジョナサン・スウィフトの管財人としての請願届(会計係の職)が受理された。署名ミヒル、ダブリン、大主教。

キングス・インには更に、1667年4月15日、夫ジョナサンの死去により未亡人となったアビゲイルから、葬儀費用の援助の申請が出されていたことも記録されている。申請人は、義兄ドライデン・ウィリアム・スウィフト(Dryden William Swift)の名前で出されていた。就職間もなくしての死であり、キングス・インにこれといって貢献もしていなかったにも拘らず、この様な恩恵にあずかれるには、単に父祖トーマス・スウィフトが王党派で、スチュワート王朝に忠誠を誓っていただけとは考え難く、何か特別の事情があったのではと考えられる。

⁶ Scott, *Memoirs*, p.6.

スウィフトがイングランドに拘っていたことが、彼の性格にも影響を与え、聖職就任もイングランドに拘っていたばかりに、容易に叶えられなかった。貴顕の約束の当てにならない姿を見せられたことも、人間不信を募らせた原因でもあった。彼が1歳の誕生日を迎えるころ、乳母 (Wet Nurse) にイングランドに連れ去られる出来事も、彼の人格形成に大いに関わりがある。彼を非常に可愛がった乳母が、3歳になるまでアイルランドに連れ戻らなかったことも、母親アビゲイルの命であったとはいえ、スウィフトのイングランドに拘る気持ちの底辺に、原体験として存在するのである。この肉親に見捨てられたような体験も、彼の女性観に大いに関わっているのである。⁷

1682年4月24日、スウィフトはアイルランドにおける初等教育の最高峰、キルケニー校に6歳で入学した。1684年の同校の定款によると、フォスター・ワトソン (Foster Watson) の『17世紀前半における教育計画と教材』(*The Curriculum and Textbooks of English Schools in the First Half of the Seventeenth Century*, 1902)によれば、「新約聖書が英語で読めない生徒は入学すべきでは無かった。」⁸ 幸いスウィフトは厳しい乳母のお陰で、新約聖書の全ての章句を読むことが出来ていた。キルケニー校の教育水準は高く、イングランド貴族を祖先に持つスウィフト一族の一員として、当然彼もこの学校に入学したのであった。この乳母によって、イングランド滞在中、聖書の全ての章句の読み書きが出来るようになっていたことが、入学にも役立った。キルケニー校の指導方針は、1685年には、リチャード・オーレストリー(Richard Allestree)の著書で、ヘンリー・ハモンド牧師 (Rev. Dr Henry Hammond)⁹ の序文が付されている『紳士の責務』(*The Whole Duty of Man*, 1658)に則ったものであった。この著作は、「敬虔な英国国教会主義者にして、熱心な王制主義者の養成を目指すもので、教典ともいべきこの書籍の教えに従って生徒達は指導された。無作法な態度や行儀の悪さ、暴力や賭博、汚い言葉使いや安息日違反、だらしのない恰好などを注意され、目に余る違反者は罰せられた」¹⁰ とスウィフトは記述している。

1682年4月24日、スウィフトは自費による学部学生としてT.C.D.に入学した。彼自身としてはオックスフォード入学を望んでいたのであるが、一族の経済的食客の身ではそのような自由は許されなかったのである。スウィフトの縁者たちは彼を禁欲的宗教心と、厳しい道徳心の許に教育することを望んでいたのである。この環境の中にあって、社会的に成功したいという大望を抱く彼の心中は、満たされない想いがあったのである。その想いを後年、「子供の頃、釣り竿に大魚の姿を感じたが、釣り上げるばかりのところ逃してしまったことがあった。当時この様な失望は日常的であった」¹¹ と記述している。多感なス

⁷ Ehrenpreis, *Swift The Man, His Writings, and The Age*, Volume I. Harvard University Press, 1983. p.30.

⁸ “no child should enter until he could read *the New Testament* in English” (Ehrenpreis, *Swift I*, p.24.)

⁹ Henry Hammond. (1605 - 1660). Church of England clergyman and theologian. (*D. N. B.*)

¹⁰ Ehrenpreis, *Swift I*, pp. 38 - 39.

¹¹ “When I was a little boy, I felt a great fish at the end of my line which I drew up

ウィフト少年が感じていたこの挫折感は、その後の彼の人生に付き纏い、深い影を残したのである。スウィフトの学業成績に関して、「叔父グッドウインが経済的に破綻したこともあって、満足な給付が得られなくなり、経済力の無さが勉学の意欲を殺いだ」とウォルター・スコット卿は述べている。

Born under circumstances of the most pressing calamity, educated by the cold and careless charity of relations, denied the usual honours attached to academical study, and spending years of dependence upon the inefficient patronage of Sir William Temple, the earlier part of his history may be considered as a continued tale of depressed genius and disappointed hopes.¹²

非常に抑圧された環境の下に生を受け、身内の冷たい、心配りの欠片もない元で教育を受けたので教養科目の受講を拒否し、さほど恩恵を被れなかったウィリアム・テンプル卿の保護の下、寄食生活を過ごした。彼の初期の生活は、才能を低下させ、希望を阻害する話の連続と考えられる。

スウィフトは、T.C.D.での主要科目、自然科学には目もくれず、ギリシャの詭弁術には熱中したようであった。身内の援助が少ないため、将来に希望が見出せぬことから、日々自堕落に過した。1681年頃より、叔父ウィリアムによってその後の生活は賄われ、資産家の叔父の余裕のある援助が始まった。この時期のスウィフトの生活から推測すると、叔父ウィリアム一族の彼に対する援助は続いていたが、その叔父の援助すら充分とはいえなかったようで、その原因は彼の生活に大きな変化が生じていたからであった。1685年頃より、スウィフトの生活に乱れが生じ始めたことは、T.C.D.の記録簿に残されている彼の不行跡の記録から分かる。1685年11月14日から1687年10月8日までの2年間に、教会での礼拝不参加、授業不出席、夜間点呼に欠席、許可なくしての市中徘徊などの廉で、70回以上罰を与えられたと雑記簿に記述されている。1686-7年3月18日に、従兄弟のトーマスやその仲間のウォーレン達4名と共に、公衆の面前で訓戒という屈辱的な罰を与えられた。1688年11月20日には、副学寮長ロイドと上級評議員に対する傲慢な態度と、学生寮の壁に書き連ねた罪により、学生監に跪いての謝罪を申し渡されていた。これらの行為が、スウィフトに不行跡の刻印を押すこととなった。彼が単位取得の主要科目のひとつである自然科学に力を注がず、関心すら示さなかったことは、T.C.D.の学業成績が明らかにしている。スウィフトの学業成績が芳しくなく、学位は「特別の恩寵」で授与されたといわれている。当時T.C.D.の副学寮長であったバレット博士の『スウィフトの人生初期の抄伝』(*Essay on*

almost on the ground, but it dropped in, and the disappointment vexes me to this very day.” (Ehrenpreis, *Swift I*, p.40.)

¹² Ehrenpreis, *Swift I*, pp.1-2.

the Earlier Part of the Life of Swift, 1808) によれば、「そのような語句の記録は、残されている学業成績書の中には記載されていない。」ということであった。バレット博士は T.C.D. の登録簿 (Book of Registry) 、及び成績簿を丹念に調べたが、スウィフトの学業成績はおおむね良好で、彼の怠慢は学業より T.C.D. の学則に関してであった。

His negligence did therefore principally consist, 1st. In the neglecting to attend with Divine service in the college chapel; concerning which I observe that there are very few weeks in which he is not fined for a partial and remiss attendance. Although there appears scarce any in which he was totally and completely idle. 2^{dly}. In the frequent missing of nightrolls or halls, and also the missing of tickets. ¹³

彼の投げやりな態度は主として、第 1 に大学構内における礼拝に関してであった、私が気にして観察して見るところだらけた態度や遅刻したことでほとんど毎週罰金を課せられている。であるが、完全に怠けていたとは言い難く見える。第 2 に夜間の見回りや点呼の際にいなかったり、外出許可証を持たないで外出したりしたことは、しばしばある。

T.C.D. の忘備録の記述によれば、スウィフトは罰金支払いの、第 1 番の貢献者ではあったが、学業不振ではなかった。バレット博士によれば、学位は正当に与えられたものであり、強いて スペシャル・グラティア (*Special Gratia*) を判断すれば、「優秀なる成績による学位取得である。」¹⁴ と語っている。

1688 年、スウィフトは名誉革命の混乱を避けるため、母の故郷、レスターシャー (Leicestershire) に旅立った。母アビゲイルは、遠い縁者テンプル卿夫人ドロシー (Dorothy) を頼って、息子スウィフトの就職相談に赴いたのであった。ドロシー夫人の口利きで、彼は食事付き年収 20 ポンドの報酬で、卿の食客となった。これがサリー (Surrey) 州ファーナム (Farnham) にある、テンプル卿の邸宅、ムーアパークに滞在を始めた最初であった。この地には、テンプル卿と共に、卿の妹ジファール (Lady Giffard) も住んでいた。

スウィフトの人格形成に大いに影響を与えた人物は、テンプル卿であった。僅か 10 年にすぎない交流であったが、テンプル邸での生活は、スウィフトの人格形成上からも、得難いものであった。後年の彼の知力の礎を築いたのも、この時期の研鑽であった。古今東西の書籍に囲まれ、卿の警咳にふれ、余暇の時間はこれらの書籍を読み耽ったことであった。父親の顔も知らず育ったスウィフトは、初めて家父長の存在を知ったのであった。卿の死後、彼がアイルランドに呼び寄せたステラや、強引に移住してきたヴァネッサたちとの間

¹³ John Barrett, D.D., *An Essay on the earlier part of The Life of Swift*, p.12.

¹⁴ “it appears that he graduated above a year *before* the usual time, which in Trinity College, Dublin, is four years and a half, therefore *specials gratia* must mean that he got it by interest or merit;” (Scott, *Memoirs*, p.17.)

柄も、彼には彼女たちとの結婚の意思は微塵もなく、自分を家父長の地位に据えての団欒を楽しんだものにすぎなかった。

スウィフトがアイルランドでの聖職者取得を願うようになったのは、イングランドでの聖職就任の可能性が低くなっていたことも、その一因であった。スウィフトの学んだT. C. D. は、聖職者養成を設立の理念としていたので、必然的に、とるべき道は聖職となったのである。在学中の学寮長が宗教教育に熱心であったことも、彼に聖職での立身の道を選ばせる後押しをした。文筆によって名をなして収入を得るか、聖職にその身を捧げるか、いずれの道をとるか躊躇している複雑な彼の心境を、エーレンプライスは語っている。¹⁵ アイルランドの聖職就任を果たしたスウィフトは、教会の命により、1707年11月「初穂料減免請願」(Petition of First Fruits)のため、ロンドンに派遣された。この請願は、聖職者の生活向上のため寄与するものであった。請願が容易に採可されなかったため、暇の出来た1708-9年の間、3篇の政治に関わる宗教観を表した論文を上梓した。ここにも彼が、政界に身を投じたいと言う願望が現れていると考えられる。『ある英国国教徒の政治及び宗教観』(*Sentiments of a Church of England Man, with respect to Religion and Government*, 1708)で、審査法(Test Act)撤廃の有無に、初穂料減免請願の成否が絡んでいるため、その判定を党利党略に従って決定しようとしている現状を諷刺した。スウィフトは英国国教会聖職者でありながら、「審査法」に賛意を表さなければ、初穂料減免請願の使命を達成することは叶わず、賛意を表すれば、英国国教会にとって反逆的行為となるという自己撞着に陥った。初穂料減免請願の成否は「審査法」にかかっており、「審査法」上程を認めれば使命は達成されるという、二律背反のジレンマにとらわれているのであった。そのため、「イングランドにおけるキリスト教廃止論に抗す」(“An Argument against Abolishing Christianity in England”, 1708)は、逆説的論法に終始した論文となっていたのであった。このスウィフトの主張に関してサミュエル・ジョンソン博士(Dr. Samuel Johnson)も、「キリスト教が廃止されたならば、我々の才知は何に対して向かわなければならぬか。」と同様の疑問を投げかけ、彼の主張に同意を与えている。「宗教の改善と風儀刷新への試案」(“A Project for the Advancement of Religion and the Reformation of Manners”, 1709)と題する社会批判的色彩の強い論文では、ウィリアム・ペティ卿(Sir. William Petty)の著書『政治算術』(“*Political Arithmetics*”, 1889)をまねた手法の、数字による比較を用いて、新興宗教による冒流的刊行物に批判の矢を向けた。彼の使命には、アイルランドの国教会の存続をも脅かしかねない「審査法」¹⁶撤廃に対する合意という、越えなくてはならない命題があった。「審査法」を撤廃することが、教会や国家の根幹を揺るがせかねないと考え、その信念を、『ある英国国教徒の政治及び宗教観』で、「教会にとって過激なホイッグ(Whig)

¹⁵ Ehrenpreis, *Swift I*, p.250.

¹⁶ Test Act「審査法」全ての官吏就任に際して、国教信奉の宣誓をさせた条例(1673-1828)：カトリック教徒が公職に就くのを妨げる為の措置。(Readers)

党もいないが、政府にとっての過激なトーリー(Tory)党も不要である」¹⁷ と記述している。

請願手続きをホイッグ党の貴頭に依頼していたが、彼らの不誠実な対応に憤懣を語っていた。「復讐の計画まで練り上げた」¹⁸ と記述しているほど彼の怒りは壮絶であった。予てからスウィフトの文筆の鋭さを伝え聞いていたオックスフォード(Oxford)伯は、翌11月に、トーリー党機関紙『エクザミナー』(Examiner)誌の編集執筆を、彼に依頼した。以後、オックスフォード伯とスウィフトの仲は次第に親密度を増していった。オックスフォード伯のスウィフトの文筆力に対する期待は「初穂料免除請願」活動にも反映して、1711年2月17日、早くも請願は認可された。

1726年、『ガリヴァー旅行記』を、アレキサンダー・ポープ(Alexander Pope)やジョン・ゲイ(John Gay)などの友人たちの協力を得て、無事上梓を果たした。しかし、この最中にスウィフトの心を動かす、アイルランドの国家財政を更に危うくする、イングランドの策謀が起こった。イングランドの鉄鋼商ウィリアム・ウッド(William Wood)による小額貨幣の鑄造事件である。108,000ポンドに及ぶ半ペニーと4分の1ペニーの鑄造であった。108,000ポンドに及ぶ鑄造は、アイルランドの流通市場の5倍にも及ぶ高額で、この悪質な小額貨幣の大量な流通で、アイルランドの国家財政は破たんすることを怖れた。この不公正な政策の実施は、スウィフトの活躍していた時代にはすでに広く流布されていた梅毒の治癒は、『梅毒の歴史』に掲載されている18世紀の銅版画にも見られる、梅毒治療のために病院の門をたたき梅毒患者に象徴されている。病院にかかることで自分の罹病の事実を世間に公表し、患者が病氣治癒に際して、自分病氣の不道德性を認識するような社会が到来すれば、梅毒治癒の道が開けると信じていたスウィフトにとって、このドレイピアの行為は許しがたかった。そのため彼は、架空の布地商、M. B. ドレイピアの名前の下で、この小額貨幣のボイコット運動を展開したのである。全7部に及ぶ『ドレイピア書簡』がこれである。彼は元来人間が好きであったが、度重なる裏切りや詐術にあつて、次第に人間に好意を抱かなくなってきた。しかし、アイルランドの国民の悲惨な生活を見るにつけ、怠惰な彼らに対する軽蔑の眼が、次第に愛情あふれる眼差しに変わっていった。スウィフトの忠告にも従わないアイルランド国民の頑迷さに、嫌悪感を示して記述したのであったが、それ以上に両国関係の不平等に対しての怒りが、不道德であると感じた故であった。この頃彼は、従兄のジョン・ドライデン(John Dryden)¹⁹ に書簡を送り、スウィフトの詩境について意見を求めたが、彼の回答は、「従兄弟スウィフトよ、貴方は決して詩人にはなれない」²⁰ であった。この回答に怒りを感じたスウィフトは、生涯ドライデンを恨み、事あるごとに彼に諷刺の矢を浴びせた。彼の執念深さは、「書物戦争」の至る所でドライデ

¹⁷ Swift, *Bickerstaff Papers*, p. 25.

¹⁸ “And I am come home rolling resentments in my mind, and framing schemes of revenge.” (Swift, *Journal to Stella*, p.13.)

¹⁹ John Dryden. (1631-1700). An English poet.

²⁰ “Cousin Swift, you will never be a poet” (Samuel Johnson, *The English*, p.248.)

ンを非難し、諷刺していることでも分かるほど執念深いものであった。

第2章 スウィフトの病気

スウィフトの人格の基礎を形成したのは、テンプル邸での研贖であったが、彼の性格を大きく歪めたのは梅毒罹患であった。彼は生来良家の子弟としての素直な性格の持ち主であったが、貧しい経済環境が加わり、卑屈な心情を抱くに至っていた。一時的な経済環境の豊かさが奔放になりがちな時期に起こったため、野放図な行動となって、取り返しのつかない結果を生んでしまったのだ。その結果の梅毒罹患が人生に暗い影を落とし、女性を肉体的に愛せない体にしてしまったのである。

16世紀末に突如として発生した梅毒は、またたく間にヨーロッパを席卷し、その病状は万人の知るところとなっていた。人一倍自尊心の高い彼は、病名が知れ渡るのを恐れ、秘匿したため、治療が遅れ、病状は回復不能のまま放置されてしまった。

彼が初めて悪疾の発作に襲われたのは、1689年、テンプル卿の下で秘書兼食客として住み始めたころのことであった。原因を、100個余りのリンゴを食べたことによる消化不良が原因と、本人が記述しているが、この悪疾が、彼の人生や人格まで変えてしまった。最初の発作は、難聴であり、次いでめまいが発生し、以後、めまいと難聴には終生苦しめられた。多くの研究者がこの悪疾を、メニエール症候として片付けているが、その病因が、梅毒性内耳炎であることを、折々の医学者や関係する人物の記述を取り上げ、解説を加えて論述する。

1998年イギリスのフランソア・ボラー(Francois Boller)とマーガレット・M・フォーブス(Margaret M Forbes)は学会誌『ランセット』(*Lancet*)に論文を発表した。その中で、『ガリヴァー旅行記』第3部の第3章ストラルドブラグ(Straldburgs)の記述は、19世紀の事であったならば、これは明らかに精神障害者の麻痺状態か、神経性梅毒の症状であるとの見解を示している。これがスウィフトの病因を梅毒と仮定した初めての記述である。²¹ この論文で彼らは、スウィフトの疾病の一つに神経性梅毒の疑いのある事を提示した。後天性の痴呆の歴史を辿った時、15-16世紀の神経性梅毒の出現が大いに関わりがあり、その後、長年に涉って回復不能な知的障害の主因であり続けた事から、梅毒による精神障害の疑いも捨てきれずにいた結果である。ボラーたちは、神経性梅毒の症状が進行したスウィフトが、自分の姿をストラルドブラグに託して記述したと考えたのであった。15-16世紀に出現した梅毒が、その後、数世紀に涉って世界の疾病の一翼を担い続け、跋扈した事実を挙げて実証しようとした。

An important event in the history of dementia is the ‘appearance’ in the 15th-16th

²¹ “the Struldbrugs might have been thought to have General Paresis Insane” (GPI or Neurosyphilis). (*Journal of the Neurological Science* 158(1998) pp.124-133. *History of dementia and dementia in history; An Overview*. Francois Boller and Margaret M Forbes p.128.

century of Syphilis which remained for a very long time a major cause of 'insanity'.²²

精神異常の歴史における重要な出来事に、15-6世紀に出現した梅毒の存在がある。梅毒はその後長い間、狂気的主要原因であり続けた。

神経性梅毒に関して、オーストリーの医学者トーマス・ウイルソン(T. G. Wilson)博士が、アン(Anne)女王の出産した17人の子供の内1人を残して全てが生後数週間のうちに死去し、残った1人も13歳で死亡してしまった事実を挙げている。これは全て、彼女が先天的な梅毒(父ウイリアム3世からのもの)に罹患していた上、過食による通風の故であったと伝えている。²³ 先天性であるがゆえに病状が顕在化しないが、その影響が子供に現れたのである。これら医学者たちは、当時はスピロヘータが発見されていたが、存在確認が出来なかったもので、顕在化しない梅毒として神経性梅毒を取り上げ、難聴やめまいの症状の両者に関わる、梅毒性内耳炎の可能性を示唆したのである。スウィフトが精神病の発症を恐れていた事はよく知られているが、最晩年の5年を除けば、精神障害を患ったという記録はない。しかもこの5年の症状は加齢によるもので、狂気に陥ったという記録ではない。オーストリアのウイルソン博士は、梅毒性内耳炎(Syphilitic Labyrinthitis)の疑いのある事を『アイルランド医科学雑誌』1939年7月号(*The Irish Journal of Medical Science*, July, 1939)に「スウィフトの難聴と病氣」(*Swift's Deafness: and His Last Illness*)に掲載記述している。医学者が、この様に大胆に病名を掲示したのは、スウィフトの病状に、明らかに梅毒性内耳炎の兆候を、見たからである。彼は、著書においてその観察結果を、次のように記述している。

In its congenital form syphilis of Labyrinth causes great destruction of the delicate perceptive mechanism of the ear, and most patients are very deaf when first seen, usually in infancy. But if Swift's ear troubles were due to the spirochaete, the infection was almost certainly acquired. Here we are still in difficulties, for it is very hard to get a clear clinical picture of acquired syphilitic internal otitis. Syphilis manifests itself in a no less protean fashion in the ear than elsewhere. ²⁴

内部の腫瘍によって形成されたのか、眼球の全面に発症した内部の炎症によって引き起こされた左眼球突出症は滲出液が彼の記憶力を破壊し時には、無気力にさせたり、

²² *Journal of the Neurological Science* Vol 158. p.128.

²³ T. G. Wilson, "Swift's Deafness and His Last Illness", *The Journal of Medical Science*, Vol 162. p.203.

²⁴ T. G. Wilson, "Swift's Deafness and His Last Illness", *The Journal of Medical Science*, Vol 162. p. 246.

怒りの感情を制御出来なくさせ、彼の人格を内耳迷宮の梅毒による病状は、耳の繊細な知覚機能の破壊を引き起こし、殆どの患者は初見では同時に聴力障害を引き起こす。スウィフトの聴力の問題がスピロヘータによるとしたなら、梅毒感染の結果に違いはない。しかし、問題はまだある。内耳の梅毒を認定するには、臨床的状況が分からなくてはならないが、それを知るのは困難である。内耳の梅毒の様相は変幻自在なので、様々な場所で起きるので明確に認定するのは困難なのである。

内耳性梅毒は、梅毒性難聴は進行するが、急に悪化し、その速度は変幻する上、治療の原因が確定できないと不可能である事は、スティーヴンス(Steeven's)病院の性病科でも認めていた。スウィフトが長年に涉り難聴、めまいに悩まされていたことは、多くの書簡からも知る事が出来るが、彼が狂気となったと言う記述は、何処からも得られないことは明白である。1737年にシェリダン(Sheridan)師宛の書簡にも、難聴とめまいに関する悩み事が見られるが、精神異常の兆候は見られない。彼は精神病の発症を恐れていた。しかし、この書簡には狂人(Insane)といった精神に異常をきたしたことを表す極端な表現はなく、狂気(madness)、激怒(Rage)、愚鈍(Fatuity)、癲癪もち(Fits of Passion)という、感情の激化を表現する語句だけである。これらの語句やそれらを連想される記載がなく、もし病んでいたのなら精神の異常を暗示するこれらの語句がより多く用いられたはずである。彼は精神に異常をきたすことを怖れていた。1735年7月17日付のオレリー卿宛の書簡で、狂人病院設立の為全財産を投じる覚悟を認めている。²⁵彼の精神病院設立意志は、この事が直接の引き金となったのではない。スウィフトが精神異常者や痴呆の病院建設に思いついたのは、遺産相続に関するトラブルの解決の為、便宜的に当事者を狂人として貧民院に送り込むことが多かった。この傾向を是正する目的で、当時これらの施設を捨て児専用として用いてしまって、精神病院がダブリンには無くなってしまっていた。そのため、真正の精神異常者収容施設の必要に迫られたのであった。元ダブリン市長ウィリアム・ファンズ(William Fownes)が、スウィフトに相談の便りを送った事が、きっかけと考えられる。

Sir William Fownes to Swift

Island Bridge, 9 September, 1732

I saw some miserable Lunaticks Exposed to hazard of others, as well as Them selves. I had six strong Cells made at the work house for the most outrageous which were soon filled & by degrees in a short time those Few drew upon us the Sollicitations of many, till by the time the old Corporation ceas'd we had in that house 40 and upward the door being opened Intrest soon made way to let in Foolish & such Like, as mad Folks; there grew a needless Charge upon us & had

²⁵ Swift, *The Correspondence IV*, pp.366-7.

that Course gon on by this Time the house had bin filled with such. ²⁶

ウィリアム・ファンズ卿からスウィフトへ

アイランドブリッジ、1732年9月9日

私は他人を危険に晒す人達だけでなく、自分自身に起こりうる悲惨な心神喪失患者を幾人も見た。私は丈夫な貧窮院にびったりの一人住まいの小屋を6軒持っていますが、それらは直ぐに一杯になり、次第にその空き室の間隔は短くなっています。これらは大勢の強い要望は多いのに供給はごく僅かです。古い自治体では、この様な家を40軒以上用意したが、要望が多く、供給が追い付かないので、それっきりになってしまいました。患者や狂気の輩達に対して門戸を開けてあるのですが、不必要な経費が増え、今やこれからの家はそのような連中で一杯になっています。

スウィフトは既に1731年、『スウィフト博士の死に際して』(*On the Death of Dr. Swift*)で精神病院建設の意志を詠っていた。では、何故彼は病院の建設を願ったのだろうか、当時の社会情勢を考えると精神病院以外に外にすべき事があつたはずだが、彼はあえてこの建設を強く願っていた。これは推測の域を出ないが自身の梅毒感染を確信し、それによる精神障害の恐怖に苛まれてきたので、この種の病院の建設が急がれたのであつた。自分が狂気になった時、受け入れてくれる病院の建設は、焦眉の急の問題であつた。この詩編からも、彼の精神病院建設の強い意志が感じられる。

He gave the little wealth he had,
To built a House for Fools and Mad:
And show'd by one satyric Touch,
No Nation wanted it so much:
That Kingdom he hath left his Debtor,
I wish it soon may have a Better. ²⁷

彼は僅かな遺産を、
愚者と狂者の為の収容施設建築にささげた。
この国ほど、かかる施設が必要な国が、
何処にあるであろうかを、
諷刺の筆致で指し示し、負い目持つ者を見棄てているこの王国を、
よりよき国にと望むものだから。

²⁶ Swift, *The Correspondence IV*, p.366.

²⁷ Swift, *The Poems of Jonathan Swift, D.D.*, Volume II Edited by Harold Williams Oxford At the Clarendon Press, p.572. ll.479-485. Indy Publish.com, Boston, Massachusetts 2007. p.340.

スウィフトはこの頃すでに、自分の病状の行く末を、狂気と痴呆の果てと感じていたのである。1714年に、ロチェスター(Rochester)司祭、フランシス・アッタベリー(Francis Atterbury, 1662-1732)と共に、ロンドンにある英国最古の精神病院ベッドラム(Bedlam, The Hospital of St. Mary of Bethlehem)の理事に選任され、その任に就いたのも、全ては彼自身の精神障害の発症を怖れていたからであった。彼のこの種の病院に対する関心は、この時よりあった。1716年には、教区の貧者の子女を対象とした慈善学校の設立に尽力し、ダブリンの貧救院や捨て子病院の理事にも名を連ねたのも、全てが自分の発症の恐れからであった。1725年、慈善学校(The Blue Coats)の理事に指名され、1733年には、スティーヴンス病院の理事にも名を連ねていることが、彼の精神病院への関心の高かったことを示している。²⁸彼の死後の1757年に開設され、スウィフトの名前が冠されている聖パトリックス(St. Patricks)病院設立までは、アイルランドの精神病患者は監獄に押し込められ、藁を敷いただけの牢獄で裸同然で過し、治療法としても、瀉血か吐剤を飲ますだけであった。このような精神病院の現状に痛く心を悩ませていたのは、自分の将来の精神障害の発症に、不安を抱いていたからであろう。しかし、彼が狂気になったという記録はどこにも見当たらない。僅かにオレリー卿からポープにあてた書簡に、激しい怒りが狂気のごとき様相を呈しているとの記述が見られるだけである。この時期スウィフトは日常的に襲いくるめまいと難聴に苛まれ、意思の伝達も、言動活動も思うように行かないことで苛立っていた。その苛立ちが身近にいる親密に面倒をみてくれていた人々に曝け出されたのであった。スウィフトの病因に最初に論及したのは、スチーブンスン病院の、ジョン・ホワイトウェー医師(Dr. John Whiteway, 1723-1798)であった。彼はスウィフトの晩年期に身近くあって、身の回りの世話をしていたホワイトウェー夫人の甥で、スウィフトの死後解剖を行ったスチーブンスン病院の外科医学博士である。彼は解剖に際して、大量の水がスウィフトの頭蓋骨に充満していたことから、彼の言語活動の乱れは、水頭症か、脳出血によるものであり、大量の水分は、出血の結果であろうとの診断を下している。この事実はスウィフトの後見人の一人リヨン医師(Dr. Lyon)も「脳の祠は水で溢れていた。」²⁹と証言、終末期のスウィフトの近くに仕えたブレナン老人(Old Brennan)も同様な証言をしている。梅毒が直接の死因になることはあり得ないので、死因は脳出血であるかもしれないが、長い間のスウィフトの身体の変調と精神状態を考察すると精神障害の発症までには至らなかったが、難聴やめまいが治癒しなかった事は、彼の梅毒性内耳炎の診断は間違いないといえる。

There was brain mixed with water to such an amount as to fill the basin, And by

²⁸ 三浦謙、「スウィフトの生涯」、『中京大学教養論叢』、844頁。

²⁹ the Sinus of his brain being loaded with water. *Irish Journal of Medical Science*, 6 series No.162. June 1939, p.251.

their quantity to call forth expression of astonishment from the Medical gentlemen engaged in the examination.³⁰

洗面器に溢れるばかりの量の水分が脳の中に見られた。その大量の水に解剖に従事した医師は、驚きの声を上げた。

解剖時の大量の水分の貯留は、脳内出血が原因であるとする診断が、スウィフトが老衰で、脳に萎縮があったことを否定する証拠となったが、これは同時に、彼の梅毒性内耳炎を否定するものでないと考えられる。

1827年には、クラターバック（Clutterbuch）博士が、英国医学専門誌に、スウィフトの症例を、めまいの典型的なものとして取り上げ、めまいは再発しがちで、習慣的に頻発し、知力が減退し、やがて痴呆となるとの診断をしていた。脳障害が進行すると、卒中や麻痺は致命的ともなる病気であると、診断したのであるが、病因については明確にしなかった。クラターバック博士はめまいの症状には論及しているが、同時に発生する難聴に関しては論及していない。その点で博士の論述は若干弱いものであるといえる。スウィフトの病状診断には、難聴とめまいの同時発生するメカニズムについての論述が求められ、それが欠ける点で、彼の診断には賛同できない。

Vertigo is apt to recur, and thus often becomes frequent and habitual. Often follows, as was the case in cerebrated Dean Swift. It frequently terminates in apoplexy or palsy, from the extension of disease in the brain.³¹

めまいは、再発しがちで、それが頻繁に起こると習慣的になる。やがて精神力が弱体化し、完全な白痴となるのは、スウィフトの場合と同様である。やがて、大脳疾患が拡大して卒中や麻痺状態になる。

1835年夏、ダブリンで開催された英国科学振興協会（British Association for the Advancement of Science）会議に於いて、スウィフトの頭蓋骨の調査結果がジョン・ヒューストン（John Houston）医師により発表された。この調査は、ポードロ（Poddle）河の地下水路が度々氾濫し、聖パトリック教会（St Patrick's Church）の床が水没し、破損したのを修理した際、ステラとスウィフトの墓が掘り起こされ、遺体の移動埋葬を行った折の調査結果である。それによると、頭骸骨には鼻の中隔に異常が見られ、機知と比喻を司る器官の発達は僅かであるが、生殖と性愛器官は異常に発達しており、頭骸骨には明らかに精

³⁰ *Irish Journal of Medical Science*, 6 series No.162. June 1939, p.251.

³¹ Marjorie, Lorch. "Language and Memory disorder in the case of Jonathan Swift; consideration on retrospective diagnosis." *Brain*, Occasional paper edited, Vol. 129, 27, 2006, pp. 3127-3137.

神障害の痕跡が認められたというものであった。頭骸骨の異常は彼の死去10～12年前の病変であると診断され、終末期には明らかに精神障害をきたしていたとするものであった。この報告は、『骨相学誌』(*Phrenological Journal*, 1834/6; 9:558-60)に掲載された。頭蓋骨の診断においても、精神障害の痕跡が論じられているが、彼の死の10～12年前、1733年頃には「軍団クラブ」(“Legion Club”)を上梓しており、作品には精神障害の兆候は見られない。多くの人々がスウィフトの精神異常を論じているが、これは彼が精神障害を怖れていたに過ぎず、大方の人が、スウィフトが梅毒であったと確信に近い信念を持っていたからに過ぎない。当時の社会状況から考えると聖職者であるスウィフトが自分は梅毒であるということを告げる事は全てを捨てるに等しい、また現代のように医学が進んでいない時代、病に対する偏見、差別も激しかったであろう。日々スウィフトは混沌とした気持ちを拭き去るため執を取ったのだろう。スウィフトの梅毒罹患は、精神障害をもたらすまでには至らなかった。

It would appear from the depression on the anterior part of the head that the man must have been apparently idiot. The bones must have undergone considerable change during the 10 or 12 last years of his life, while in a state of lunacy.³²

前頭葉に陥没が見られ、これは明らかにこの人物が白痴だということを表している。骨は明らかに彼の人生の最後の10～12年間にかなり変化しており、この間彼は精神障害であったことを物語っている。

スウィフトの精神障害説は生前から囁かれていたもので、聖パトリック(St. Patrick)の参事会会員であったデイビッド・スティーヴンス(David Stevens)は、幾度もスウィフトの頭蓋骨の窄穴を求めていた。彼はスウィフトの振る舞いを狂気であると感じ、その狂気の原因は、頭蓋内に含まれた水分によると考えたのであった。スウィフトが死後解剖され、水分貯留の存在が精神障害をもたらすと考えられた結果であった。スウィフト設立の精神病院の患者には、窄穴が施されたのも、彼の狂気の原因が、大脳内の分泌物が大脳を肥大させ、狂気を引き起こしたと考えた結果であった。この段階で、大勢はスウィフトの狂気説を信じていた。全ては『ガリヴァー旅行記』の、常人の想像力を超えた彼の作品構成にあるのである。

1846年になると、ダブリンの著名な眼科医で、劇作家のオスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)の父、ウィリアム・ワイルド博士(Sir. William Robert Wills Wilde, 1815-1876)³³が、スウィフトのデスマスク(Death Mask)から、活力不足と、慢性眼疾患の兆候を

³² *Irish Journal of Medical Science*, 6 series No.162. June 1939, p. 3132.

³³ Sir. William, Wills, Wilde. An Irish eye and ear surgeon and an author of significant work on medicine, archeology and folklore. (*O.B.D.*)

読み取ったと報告している。左の口片が引き攣れ、右の顔面に麻痺の痕跡が見られ、相対的に眼窩が沈下しているというものであった。

このようにスウィフト晩年期の諸症状を、この病因によるものであると博士は診断した。ワイルド博士はスコットがT.C.D.のスウィフトの胸像を見て、「はっきりと狂気の痕が見られ、左口片は苦痛に歪んでいる」³⁴と記述したことから、スウィフトの精神障害を唱えたが、その原因の病名までは論及しなかった。顔の表情には狂気の兆しがみられると言ったのを聞いて、少々過剰表現であろうとしながらも、「右側の引き攣れは卒中が原因だ」³⁵と博士は診断した。スウィフトの狂気に関する記述は、ジョンソン博士(Dr. Samuel Johnson)とスコット卿(Sir. Walter Scott)によるところが大きいのである。彼らの『スウィフト伝』に狂気(madness)、逆上(frantic)、愚鈍(fatuity)、激怒(rage)などの語句が用いられて以来のことで、医学的にもこれらの表現は狂気を表す表現ではなく、感情の激した状況を表現した語句に過ぎないのである。スウィフトの常軌を逸した晩年期の行動が、彼が狂気となったとの風評を齎したものに過ぎないのである。顔面の麻痺とされている痕は、失語症に加えて、予め切り分けられた食事を提供された結果、左側の半麻痺が促進されたものであり、「言語障害は加齢の結果」³⁶と証明できると、トーマス・ウィルソン医師(Dr. Thomas George Wilson)は診断し、最晩年期に発現した腕や体の腫物と左目の腫れに起因する痛みを耐えかねての表現に過ぎないとしている。

1942年11月22日のオレリー卿宛の、ホワイトウェー夫人の便りで、食事が予め切りそろえてあった事が綴られ、左目が卵のように膨れ、全身に腫れ物が出来たことが記述されている。³⁷この左目の腫れは、眼窩の蜂巣炎によるものと推定される。この年ワイルド博士が編集責任者であったアイルランド王立医科学アカデミー(The Irish Academy of Medical Science)のもとに、グラスゴー(Glasgow)の眼科医マッケンジー医師(Dr. William Mackenzie)がスウィフトの終末期の病状に関する耳鼻科的質問が出された。耳科学の分野に於ける権威でもあったワイルド博士は、スウィフトの頭蓋骨から診断した病名を、1849年出版の論文「ディーン・スウィフトの人生の最後」(“The Closing Years of Dean Swift's Life”)で発表し、その病名の解明とその結果を記述している。博士はスウィフトの初期の病気、難聴(Deafness)、めまい(Giddiness)、嘔吐(Vomiting)を、それぞれ異なる病因と考え、一時は癲癇(Epilepsy)との診断を下したほどであった。ワイルド博士は、スウィフトのデス

³⁴ The expression of countenance is most unequivocally maniacal, and one side of the mouth (the left) horribly contorted downwards, as if convulsed with pain. (*Irish Journal of Medical Science*, 6 Series, No.162. June, 1939, p.252)

³⁵ “there is an evident drag in the left side of the mouth, exhibiting a paralysis of the facial muscles of the right side”. (*Irish Journal of Medical Science*, No.162. p.252)

³⁶ It is perhaps more plausible simply to regard it as an unfortunate result of mental deterioration due to ageing, a view which is confirmed by the inaccuracy of his memory in his later years. (T.G.Wilson, Swift's Deafness and His Last Illness. *The Irish Journal of Medical Science*, 6 Series, No. 62. p.202)

³⁷ Swift, *The Correspondence V*, p.207.

マスクから、右眼窩に何等かの障害のある事を示し、「左眼が右眼に較べて沈みこんでいる、これは眼窩に何等かの崩壊が存在する証左だ」³⁸と診断した。何れの診断も、スウィフトの病名に迫るものではなく、単に症状の解説に過ぎないものであった。

1882年、『精神学会誌』(*Asylum Journal of Mental*)の創設者で、現在は『ブレイン』(*Brain*)となっている学会のバックニール博士(Dr. John Charles Buchnill, 1817-1897)³⁹が、頭蓋骨内の大量の水は、蜘蛛膜下の出血によるもので、それが痴呆の原因であると診断した。右顔面の麻痺の重要性については、右側面の半身不随に結びつくもので、それが言語障害の引き金になったと診断した。これに対して、1940年、アイルランドの医学者トーマス・ウイルソンは、スウィフトの終末期に於ける行動を再検討した結果、彼はスウィフトのデスマスクの計量から、顔面のゆがみは生来のもので、それがめまいや失語症を引き起こしたと診断した。しかし、半身不随や吐き気の原因とはならないという見解を『医学の歴史』(*Annals Med History* 3:291-305)で発表している。ウイルソン博士は1964年『医学の歴史』(4; 109-216)に、「スウィフトと医師たち」(“Swift and the Doctors”)を執筆しているが、その中で、スウィフトの病状をメニエール症(Meniere’s disease)と診断している。同時に、「精神病理学的興味が存在が、スウィフトに偉大な業績を齎したもので、精神異常や狂気に関する論議がそれを証明している」として、同書の第9章の「英連邦における狂気の改良と利用の原型に関する脱線」(“A Digression Concerning the Original, the Use and Improvement of Madness in Commonwealth”)⁴⁰を取り上げて論じた。ウイルソン博士は、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』の構想は狂気に起因すると考え、不死人の描写などは狂気の人でなくてはなしえないと確信したので、この様な記述をしたのであろう。博士は、『桶物語』の狂気の章にも言及して、狂気に関する論述は、精神障害者なくてはなしえない技であるとして、彼の狂気を事実と認定したに違いない。しかしながら、ウイルソン博士も、病因についての確実な診断は出来なかった。

パリ王立聾啞者研究所の医師であったメニエール博士(Prosper Meniere, 1799-1862)が、1861年『パリ医学会誌』(*Gazette Medicale de Paris*)に、フローレンス(Florence)やその他の医学者による半規管(Semicircular Canal)の機能の知識が、臨床治療に適応されたことからヒントを得て、半規管の果たす役割に関する論文「大脳の鬱血症状にかかわる眼病の観察」(“Observations des Maladies de l’Oreille caracteriseses par des Symptonmes de Congestion Cerebrale Apoplectiform”)を出版して半規管の役割を論じた。それまでこの半規管の役割は誰にも知られなかった。当時めまいは卒中を伴うと考えられていたので、この観察の結果、内耳の迷路が何等かの疾患で攪乱されることまではこの論文で判明した。しかし、内耳の変化は解剖するまでは分からなかった。この証明は近年に至って、ハルパ

³⁸ “the *left* eye is much less full and prominent than the right; in fact it is comparatively sunken and collapsed within the orbit.” (*Swift Deafness and his last Illness*, p.253)

³⁹ Buchnill, John Charles (1817-1897). English Physician.

⁴⁰ T. G. Wilson, Swift’s Deafness and His Last Illness, *The Irish Journal of Medical Science Sixth series*. p.199.

イク(Charles. Skinner. Hallpike)医師 とカイルス(Hugh. Cairus)医師による 2 体の解剖によって解明された。

Recently C.S.Hallpike and H.Cairus have described the post – mortem findings in two patients. In each of these cases there was gross distension of the endolymph system with degenerative changes in the sensory elements.⁴¹

近年、ハルパイク医師とカイルス医師は 2 人の患者の死後解剖を説明した。これらの 2 体の遺体は内耳の膜迷路を満たす液体が、聴覚器官が退行的変化に伴い膨張していた。

内リンパに拡大の跡が見られ、退行性変化が感覚器官に見られ、内耳の膜迷路を満たす内リンパ液が内耳迷路の球状囊の周辺で無くなっているか、減少しているかが分かり、相互に理論的関係の成立することが判明した。この解剖の結果、スウィフトの難聴とめまいを起こすメカニズムは解明されたが、この病変の原因となる病名には触れなかった。

1848 年メニエール博士は、ドイツの医学者クラマー医師(Dr. Kramer)の耳に関する論文の翻訳中に、同様の症例を読んでいたため、これをヒントに視神経の変化を研究し、メニエール病の理論を完成させた。この患者は寒い夜、運転中に耳が聞こえなくなり、間もなく死去したが、解剖すると内耳の迷路に赤い可塑性のリンパ液が見られたとのことであった。ワイルド博士も同様な病因を解明し、大脳の鬱血を唱えていたが、そのことに触発されたバックヒル博士は、1882 年にめまいの原因は、内耳の迷路が疾患によって攪乱され、めまいを引き起こすというものであった。しかし、症状の説明は分かるが、その原因となっている病因については論じられていない。

解剖学的所見による診断は、一応脳出血による言語障害や歩行困難、加えてめまいや吐き気と言った症状を説明している。スウィフトのめまいの原因が内耳の疾患にあることは分かったが、その病因は何であったかの言及はされていない。同時に難聴を引き起こす病因は論ずるまでには至らなかった。晩年期の彼の言語障害は、決して顕著な脳疾患による障害の証明にはならない。最晩年の 1740 年以降の事ならば、脳疾患は納得されるが、若年よりのめまいや難聴の原因ともなりえない。この難聴とめまいを同時に引き起こす病因こそが、梅毒性内耳炎と考えられるのである。このような解剖学的病因や、臨床学的病因を当時の社会情勢から熟慮し推測すると、彼の病因は神経性梅毒内耳炎とすること妥当な結論となる。

In view of the malignant way in which water and “Water-logging” pursued the Dean, even after his death and burial, it is with regret that one is compelled to Discount

⁴¹ *The Irish Journal of Medical Science*, 6 Series No162. June, 1939.

the possibility that he might have suffered from Barany's syndrome. This condition causes intense vertigo, deafness, and severe headache, and is due to a collection of fluid in the posterior fossa between the cerebellum and the petrous. ⁴²

スウィフトの死、それに続く埋葬の後まで、彼に付きまとう頭蓋内に貯留していた水に関わる悪意に満ちた見解では、バラニー症候群に感染していたのではないかという可能性を無視したことに若干後悔したことであった。この状態では激しいめまいや難聴、猛烈な頭痛を引きおこし、やがて小脳と側頭骨の錐体部の間の後ろの窪みに液が溜まることになる。

更にこの判断にロバート・バラニー (Robert Barany, 1876-1936) 医師が提唱した、バラニー(Barany)症候群の診断が加わった。小脳の側頭骨の垂体内窩にたまった水がめまい、難聴や頭痛を引き起こすというもので、スウィフトの症状もこれに類似していることが、書簡や『ステラへの消息』(*Journal to Stella*) の記述からも窺える。1808年、当時著名な精神生理医学者トーマス・ベドッス (Dr. Thomas Beddoes, 1760-1808) ⁴³ が、彼の著書『生活習慣病と早期道徳の乱れを防止するための随想』(*Essays on The Means of Avoiding Habitual Sickness and Premature Morality*) の第9章で、スウィフトの病状を取り上げて論じている。「彼の難聴、眩暈、胃腸の活力不足、気力減退は、やがて狂乱状態から愚鈍に至る病気の初期症状で、適正な処置が行われていれば、あのように悲惨な結末には至らなかった」。博士のこの曖昧な表現は、確実な病名を世間に晒すことで、スウィフトの人格に傷をつけない配慮であったと考えられる。その病名を明らかにすることで、スウィフトの名誉を傷つけることを恐れ、博士は曖昧な表現にとどめたのである。

That intense application should confirm the mischief, when the organs of Thought and digestion were radically vitiated, is just what ought to be expected: and that Swift imputed his complaints to a surfeit of fruit, is of small account. ⁴⁴

思考能力と消化器官が活性化している時、悪さの直接の結果が判明していたにも拘わらず、スウィフトは果物の食べ過ぎの故にするとは、上手いやり方ではない。

「身体機能が活性化している時期の悪行によるものである」と博士は曖昧な表現で記述しているが、この時点での彼の病名は、神経性梅毒であったと考えられる。同章で同時に取り扱っている17歳の若い女性の同様の症状に対する治療法として、当時精神病院で行っ

⁴² T.G.Wilson, *The Irish Journal of Medical*, 6 Series No.162.June.1938. p.248.

⁴³ Thomas, Beddoes (1760-1808).English physician and scientific writer.

⁴⁴ Thomas, Beddoes,M.D. *Essays on The Means of Avoiding Habitual Sickness and Premature Morality, Essays Nineth*, Bristol, St.Auggustines's. 1803. p.189.

ていた吐剤の処方と、瀉血を施している事から、彼女は梅毒に罹患していた精神病患者であったと推定できる。スウィフトも、同様な処置が必要であったと考えられていることから、同じ病名と推定できる。これらの曖昧な表現から、スウィフトが罹患した病気は、やがて精神に異状をもたらす梅毒性疾患であった。ベッドゥス博士は、彼の罹病を「不品行な行為の結末である。」として、やがては齎す結果にまで論及して、罹病初期における徹底した検査や、治療が必要であったことを記述している。⁴⁵ 博士は明らかにスウィフトが梅毒に罹患し、その治療法を誤った結果と診断していたのであった。

晩年のスウィフトの病状から、しばしば起こる発作は、その行く末に対する警告に過ぎないのであるから、治療法を誤ったことが彼から幸せを奪ったのだと誤った治療の末死に至った少女の例を挙げている。彼女に対する治療法は、当時精神異常者に対してしばしば行った、瀉血による心気亢進を防ぐ処方であった。ベッドゥス博士は明らかに、スウィフトの病気を、現代医学が解明した神経梅毒の疑いありと診断していた。その上で、「病因を明らかにする事は、彼にぬぐう事の出来ない汚名を着せる事となるであろうが、彼は病理学上の推論に対する疑惑から、無辜の姿で現れるであろう」⁴⁶ と、スウィフトに対する世の評価が、彼の名誉を守るであろうと記述している。スコットも、「若さゆえの放蕩の結果である」と、ベッドゥス博士の説を支持し、「若年の放蕩で消耗し尽くした肉体が、失ってしまった快楽を追い求めているに過ぎない」⁴⁷と、ステラやバヴァネッサに対する態度、(彼女たちが求めている結婚願望を適えさせない)、が如実にその事実を語っていると論じている。スコットはスウィフトが彼女たちの結婚願望に添えなかったのは、若年の放蕩の結果の罹病が、彼を結婚に踏み切らせられなかったと、彼の行動が暗黙のうちに、事実を示唆していると考えていた。

2006年、医学雑誌『ブレイン』(*Brain*)に投稿されたロンドンのバークベック大学(Birkbeck Collage University)の医学博士マジョリー・ローチ(Dr. Marjorie Lorch)の論文「言語能力と記憶の混乱、スウィフトの過去の病歴からの考察」(“Language and Memory Disorder in the Case of Jonathan Swift, Considerations on Retrospective Diagnosis”)で、博士はスウィフトの病状を、次のように記述している。「スウィフトの最晩年に見られた認識の変化、記憶障害、人格の変化、言語の混乱、無気力などは、疾病症状に由来するものであるが、失語症や痴呆、憂鬱等は老齡の故である」とその症状を断定した。これ等の症状は同時に、神経梅毒の症状にも共通するものであった。

医学雑誌『ランセット』(*Lancet*)の編集者クライトン(Crichton)は1993年の論文において、『ガリヴァー旅行記』のスロラルドブラグ(Strudburggs)の記述は明らかにアルツハ

⁴⁵ Beddoes, *Essays, on The Means of Avoiding Habitual Sickness and Premature Morality*, p.196.

⁴⁶ Swift therefore will emerge pure from the suspicious of the dispassionat pathological reasoner, though they be ever so justly founded. Beddoes, *Essays, on The Means of Avoiding Habitual Sickness and Premature Morality*, p.195)

⁴⁷ “as indicating the inflamed imagination, and the exhausted frame of a premature voluptuary,”(Scott, *Memoirs*, p.21)

イマー (Alzheimer) の症状を示しており、行動不能や空間識視力不全などに関しては、ピック(Pick)症も考えられると論じている。同時に博士は、スウィフトのめまいは、再発しがちで、時として習慣的に頻発する。知力が減退すると痴呆となり、脳障害が進行し、卒中や麻痺が致命的ともなる病因であるとの見解を示した。この退行性疾患の病因が何であるかは明らかにされていないが、同様の精神障害による痴呆の例として、フリードリッヒ・ニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900)、アンリ・ルネ・モーパッサン(Henri-Rene Albert Guy de Maupassant, 1850-1893)、を挙げ、明らかに神経梅毒に罹患していた例として、オーストリアの画家グスタフ・クリムト(Gustva Klimt, 1862-1918)と、1929年ノーベル文学賞に輝いたドイツの文学者トーマス・マン(Thomas Mann, 1875-1955)の名前を挙げている。梅毒の確認は15世紀後半であるが、梅毒菌の最初の発見は1683年であり、病原性のスピロヘータとして同定されたのは1873年である。DNA鑑定では当時の遺体保存状態では病原体までの確認は出来ないが、当時の知識を考慮し、博士はスウィフトも彼ら同様、神経性梅毒に罹患していたと考えていたのであろう。彼は「神経梅毒の患者は、ともすれば常人と異なった感覚を持っているので、すばらしい作品を生み出すのだ」と、彼らの傑作の根源に、精神性梅毒のあることを認めている。博士は、『ガリヴァー旅行記』もこれらの鬼才による想像力の産物であると考えていた。

神経梅毒はスピロヘータの梅毒トレポネーマ (*Treponema pallidum*) 感染後に生じる神経系疾患の総称で、脳髄膜型と無症候性神経梅毒があり、後者は髄液・血清梅毒反応が陽性になるだけで、症状は何も無いのが特徴である。⁴⁸その臨床的特徴は、「神経梅毒に特異な臨床症状が無い事から診断が困難で、痴呆、脳梗塞、多発性脳神経障害、髄膜炎、視神経萎縮などが、神経梅毒を疑うに足る症状である。脳髄膜型は比較的初期感染から一年以内に発症する事が多く、頭蓋内圧亢進症候、髄膜刺激症状、意識障害を主体とし、髄膜炎、脳炎に類似するが、発熱が見られない。急性の水頭症や多発性脳神経麻痺、(顔面神経、内耳神経、視神経、動眼神経、外転神経)などを併発する」神経系に起こる為、罹患者は気付かないまま放置するので5%の人に発現する。これ等の症状の幾つかは、メニエールやアルツハイマーに共通するもので、その診断は当時では困難であり、ましてや医学の進歩がさほど進んでいなかった18世紀においては尚の事であろう。

これまでの論議で、スウィフトの病名を無症候性神経梅毒による内耳炎とする見解の妥当性が、認識されたと考える。内耳の炎症が難聴を引き起こし、内耳の可塑性物質による眩暈を発生させたとするならば、彼の梅毒性内耳炎は断定できる。梅毒性内耳炎ならば、罹患したのが1686-7年で、発病が1689年であることも、当時の梅毒罹患の発病に至る時間的経過の通例とも、合致していることから納得できる。彼の罹患は経済的保護者が、叔父グッドウィン・スウィフトから、次兄ウィリアム・スウィフトに代わった、1686年頃以降と推定されるからである。経済的に貧困を訴え続けていた彼が、この庇護者の変更のこ

⁴⁸ *Modern Physician*, Vol.19 No.11, 1999. 岡山大学医学部神経内科、割田仁。東北大学医学部神経内科、阿部康二。

ろより、T.C.D.への罰金支払いが増加したことで、経済的に余裕が出来たことが分かる。T.C.D.では校則違反者が、それ相応の罰金を支払えば、罪一等減じられることになっていた。当時の彼は、学内一罰金支払いが多く、その罪状も、無許可外出、夜間外出、夜間礼拝不参加、飲み屋の勘定不払い等であった。⁴⁹ この間、彼が遊興の巷に出入りしていたとするならば、梅毒罹患は容易であった。当時のダブリンの風紀は乱れ、梅毒の蔓延は眼をそむけるほどであった。当時ヨーロッパの10大都市に名を連ねたダブリンは、梅毒猖獗都市としても著名であった。売春婦の大半が梅毒に罹患していたダブリンの、歓楽街に出入りした世間知らずのスウィフトが、売春婦の相手となって、その結果の梅毒に罹患してしまった。一時の過ちとはいえ、ヴァネッサやステラの婚姻願望に添えない体になってしまったことは、容易に考えられる。罹患した病気の重大性に気付いた彼は、医学書を読み耽り、やがて来るその結末が狂気となり、精神異常をもたらすことに怯えたのである。その怯えが『ガリヴァー旅行記』第3話「ラピュータ」の不死人の項に、来るべき姿として投影されたのである。やがて知れ渡るであろう梅毒罹患の事実が、社会に晒されることを恐れ、社会批判は諷刺に隠れて行い、実体をペルソナの陰に隠したのも、梅毒罹患の事実が公になることを怖れた故である。彼はペルソナに身を隠して風刺を用いることで、梅毒罹患の自分の存在を社会から隠ぺいしようとしたのである。狂気になることを怖れた末、その強迫観念から逃れるため、精神異常の状況を描くことで心の平和を得ようと考えていた。フロイドの精神分析によれば、精神過程は、意識、前意識、深層にある縫意識の3層に分けられ、抑圧された願望は無意識層に押し込められると考えられている。無意識層に押し込められた願望を、対話や夢、連想から発見して、意識化することで治療することが、フロイドの精神分析の手法であった。フロイドに、ドイツの精神科医ヨーゼフ・ブロイアー(Josef Breuer, 1842-1925)との共著『ヒステリーの研究』(*Studien über Hysterie*, 1895)がある。ここに記述されている事例は、ブロイアーの患者(仮称)アンナ(O・Anna)の治療の記述であるが、フロイドはこの強度のヒステリーの強迫観念に苛まれていたアンナの治療に彼女が言うまいと決心したことを言わないでいると、精神的に抑圧状態となり、治療の効果が得られないことから、この強迫観念を取り払い、心の平安を得させることで、治療の効果を挙げられることに気付いた。その結果、彼女の心を捉えて離さない強迫観念を彼女に語らせることで解放して、彼女を治療出来たのであった。

スウィフトは絶えず梅毒の恐怖に苛まれていたので、この恐怖を口に出すことで恐怖が顕在化して、やがてその不安が解消できると考えたのである。梅毒の恐怖を口に出すことで、梅毒の不安を解消しようとしたのである。そのため不安感が大きければ大きいほど、諷刺表現は強烈なものとなり、諷刺が強烈であればあるほど、心の平安が得られると考えたのである。それゆえこの時期の彼の諷刺は強烈なものとなり、諷刺表現は容赦のない、

⁴⁹ Between the periods of 14th November, 1685, and 8th October, 1687, he incurred no less than seventy penalties for non-attendance at chapel, for neglecting lectures, for being absent from the evening roll-call, and for town-haunting, which is the academical phrase for absence from college without license. (Scott, *Memoirs*, p.16)

救いやユーモアというより容赦のない皮肉になっていったのである。元来アイルランド人は、ユーモアの才にあふれた国民性である。しかし、スウィフトの心底には、イングランド人の末裔という出自が、強固に存在していた。アイルランド生まれのイングランド人という認識が、ユーモアだけに走ることを妨げたのである。彼の皮肉に走る性向は、イギリス人の特性でもあるので、ユーモアの存在は、希薄となるのも仕方がない。元来アイルランド人は、民族的には陽気で開放的な性格であったが、プランタジネット朝の侵攻以来続く侵略の歴史の間に、次第に無表情となり、感情を込めない態度(**deadpan**)をとるようになっていったのである。そのようなアイルランドの団結心と、共同作業に適合しない性格が、スウィフトの個性となっていった。

ステラやヴァネッサが死去してしまった 1730 年になって、彼女たちへの鎮魂歌として、醜悪詩とよばれる詩編を上梓して、スウィフトの人生に大きな影を落とした梅毒罹患の加害者となった売春婦たちに報復し、乱れた世の風潮に一石を投じたのである。彼のこの女性に対する失望観が、その後の言動の基本姿勢を醸成したと考えられる。女性観はもちろん、彼が阻害され差別されたと感じれば、たちどころに諷刺という手段を講じて、攻撃する性格となって現れた。彼は女性に対して、世間の男性並みの評価しかしていなかったのも、全ては売春婦たちに対する恨みからであり、スウィフトの女性観は、大きく傾いていたのである。従来女性を男性より劣る資質の持ち主としてしか見ていなかったが、彼の梅毒罹患を機に、女性に対する蔑視傾向は更に強まっていったのである。

第3章 醜悪詩

1730年に、スウィフトは一連の醜悪詩と称せられる、スカトロロジーを取り込んだ詩編を発表した。1495年、突如として大流行をきたした梅毒（初期においては梅毒瘡と称していた）の症状は、激痛を伴う臭い膿胞が全身に広まることが、スペインの24歳の青年の例として記述されている。猖獗を極めた梅毒が、多くの医学者の努力にもかかわらず、病因も分からないまま治療薬も、治療法も発見されずに経過した。『愚神礼賛』(Encomium Moriae)の著者として知られている、オランダの人文学者デジデリウス・エラスムス(Desiderius Erasmus, 1466-1536)は人間を大量に死に至らしめる病気はと問われて、「数年前から思うさま猛威をふるっている病気である」と答えて梅毒を挙げた。⁵⁰1495年には、罹病者は隔離されるほど伝播力が強く、恐れられていた梅毒も、スウィフトの時代になると、症状も軽く穏やかなものとなっていた。しかし、治療法は民間伝承の範疇を過ぎなかったが、多くの類例からその概要は分かっていた。一時の急激な症状から、体中に広まった薔薇疹が膿を持ち、この膿胞がつぶれると結節を生じると記述されている。その膿胞がつぶれると、臭気は耐えがたいほどであった。⁵¹骨まで腐る病根は、子孫にまで遺伝すると伝えられていた。梅毒罹患を悟ったスウィフトは、多くの医学書を読み、後年多くの医学者との交流で、知識を充分得ていたことが考えられる。彼が難聴とめまいを訴え、医師の治療を得ていたことが、『ステラへの消息』の1712年3月31日のXLIVに記述されている。彼は4月に入っても体調が悪いと訴え、「激しい痛みが左肩から襟にかけてある」⁵²と記述し、この痛みは痛風であると言っている。⁵³しかし、この診断は彼の間違いで、当時彼が病んでいたのは、梅毒による結節の痛みか、粟粒疱疹であったと推定される。診断結果は、1782年イングランドの医学者ウィリアム・ヘバーデン(William Herberden, 1710-1801)が、痛風を分別するまで待たなくてはならなかった。この様な知識を彼が得ていたのは、主として書籍からであった。この折の彼の痛みはその後数日続いて、治療として当時流行していたブランデーを塗布する方法をとっていた。⁵⁴このブランデー塗布は、当時ジャン・フルネル(Jean Fernel, 1497-1558)や、ガブリエ・ファロッピオ(Gabriele Falloppio, 1523-1562)が唱えた梅毒の治療法であった。スウィフトの梅毒罹患の事実は、この描写からも明らかであり、彼が心中深く梅毒症状の顕在化を怖れていたことが、これからも見てとれる。梅毒罹患に伴う苦痛と臭気が、梅毒罹患を思い起こさせたため、臭気からの梅毒罹患の事実

⁵⁰ クロード・ケテル、『梅毒の歴史』寺田光徳訳、藤原書店、56頁。

⁵¹ ケテル、『梅毒の歴史』、34頁。

⁵² “The Pain increased with mighty Violence in my left Shoulder & Collar bone & that side my Neck.” (Swift, *Journal to Stella*, p.528)

⁵³ “The Disease is the Shingles.” (Swift, *Journal to Stella*, p.528)

⁵⁴ “My Pain continues Still in my Shoulldr and Collar I keep Flannel on it, and rubit with Brandy; and take a nasty dyet Drink. (Swift, *Jouranal to Stella*, p.531)

の連想を断ち切るため、殊更糞尿の描写をして、醜いものを転化してあたかも梅毒に無関心を装ったので、執拗なその表現が、彼に糞尿嗜好者の烙印を押してしまったのである。それはきっと、スウィフトが梅毒の症状よりももっと醜いけれど身近なもので汚い物で嫌悪を感じるので、その表現を使った理由と考えられる。彼は梅毒末期の発疹を想像させる臭気を嫌い、その臭気から梅毒嫌悪の感情が増幅されていったのである。

西山徹の論文「女体解体カリキュラム」『傷つけられた女の話』と『新婚の若い婦人への手紙』を結ぶ線⁵⁵で、スウィフトの女性軽視傾向を余すことなく開陳している。スウィフトは『麗しき美女寝室に行く』(*A beautiful young Nymph going to bed*)で、売春婦の解体作業を詳らかにしたのは、彼の心底にある女性は男性より劣った存在なのであるという観点から、女性を眺めた。どのような美しい女性であっても、外皮を剥いてしまえば唯の肉片であると『桶物語』で女性を解体して、その実像を晒した。女性は理性的な存在であるとは信じていなかったのだから、生理的要求を持つ女性を解剖解体してみせて、制御しがたい女性を、制御しやすくしようとしたのである。『新婚の若い婦人への手紙』(*A Letter to a Young Lady, on Her Marriage*)は、男性の価値観を理解させるための指導書であり、女性を男性並みの理解力の持ち主であることを否定し、男性に服従する女性の養成を図った指南書である。それ故スウィフトの解体作業は女性の肉体だけにとどまらず、生理的反応まで及んでいるのである。糞尿譚にまで踏み込んだのは、彼の女性蔑視の表れである。彼はこの作品の中で女性の男性に劣っている資質を列挙して、女性に見られるという美德の存在を否定している。彼は糞尿嗜好の描写をすることで、梅毒に対する恐れを軽減できるとも考えたのである。度の過ぎたスカトロロジーの多用で、醜いものへの恐怖心を軽減し、その事に対して、自分抱える秘かな悩みである、梅毒への恐怖心を軽減させようとした筈が、却って彼にスカトロロジー嗜好者の烙印を押してしまった。

スウィフトの糞尿嗜好の傾向は、『ガリヴァー旅行記』の随所に見られる。彼には生来的に糞尿嗜好の傾向があったのでは無く、梅毒罹患を機に、梅毒を怖れるあまり、その糞尿嗜好の性癖が顕著になったのである。その性癖が作品に投影されて、彼が生来的な糞尿嗜好者と誤解されるようになったのである。『ガリヴァー旅行記』第1話「小人国」では、女王の居室の火災を小便で消したのが、糞尿に関する描写の最初で、恐る恐る第2話でのグルムダリッチ(*Glumdalclitch*)の洪水の様な放尿シーンへと発展したものと理解できる。この第2話「巨人国」では、「いやな臭気が、彼女の肌から臭ってくる」⁵⁶と臭気に及び、第3話「ラピュータ」になると、臭気紛々とした描写は続いて、レガード(*Ragard*)大研究所のシーンでは、糞尿にまみれた研究室では、臭気に加えて色彩にまでもおよび、糞尿描写は加速されている。⁵⁷ 第4話『賢馬の国』フエイナム (*Houyhnhnms*)では、ヤフーが

⁵⁵ 西山徹、「女体解体カリキュラム『傷つけられた女の話』と『新婚の若い女性への手紙』を結ぶ線」『岡山商科大学論叢』、第32巻、第3号、1997年1月、86頁。

⁵⁶ “A very offensive smell came from their skins”(Swift, *Gulliver's Travels*, p.102)

⁵⁷ “His Face and Beard were of a pale Yellow; his Hands and Clothes dawbed over with Filth.” (Swift, *Gulliver's Travels*, p.163)

樹上から糞尿を撒き散らす情景描写となって、表現はますます露骨となっている。⁵⁸ 更に臭気論争は進み、ヤフーの子供に頭から臭いを伴った黄色い糞尿を浴びせかけられる記述となった。表現範疇を拡大するにつれて、描写は露骨に生々しい表現となっている。彼のスカトロロジー嗜好は増幅し、梅毒への恐怖心を糊塗するように、スカトロロジー表現は露骨さを増していったのであった。

このスカトロロジー嗜好表現に満ちた詩編は、彼に梅毒を罹患させた売春婦たちに対する復讐の詩編である。自尊心の人一倍高い彼は、最愛のステラと、ヴァネッサの生存中は自分を抑制していたが、二人を送った今、報復の刃を梅毒罹患の当事者である売春婦に向けたのである。ステラとヴァネッサという愛しい女性は、すでにこの世を去ってしまった。梅毒罹患によって、結婚への道も閉ざされ、結婚不適應の精神的不具に陥った彼は、売春婦たちへの復讐心を募らせていたのであった。外見は女神と紛う美しい乙女たちは、梅毒で崩れた容貌を人工的に修復していた。この詩編は、登場する売春婦たちと、対極にあるステラやヴァネッサに捧げる鎮魂歌である。彼が売春婦の実情を熟知していたことは、『ガリヴァー旅行記』の第4話「賢馬の国」の第6章の記述でも明らかである。この第4話では、明らかに梅毒の骨にまで異常をもたらす症状にまで描写は及んでいる。スウィフトはやがて陥るであろう最悪の状態まで、熟知していたのであった。彼が一番憂慮していたのは、「賢馬」の結婚に対する理念（種の保全）が、梅毒罹患によって失われてしまうことであつた。そのため彼は、結婚をあきらめざるを得なくなったと考えられる。この「賢馬の国」にも、売春婦の存在があると語っているほど、彼は梅毒に関する知識もあり、関心も深かった。梅毒罹患の初期において、彼はその痛みを痛風(Gout)が起源であると考えて、医学書で調べていたようであつた。

彼が糞尿に関するスカトロジカル詩篇を表したのは、1720年、『移り行く美』(*The Progress of the Beauty*) が最初であつた。月の女神ダイアナに擬した麗しい乙女セリア(Celia)の容貌を、月の満ち欠けに比して、女性の美は移ろいやすく、儂いものと戒めている。この比喩は同時に、美しい容貌も、梅毒によって崩れ果ててしまうことも含喩している。外に現れた容貌だけに囚われて、内面に隠されたおぞましきや醜さに留意し、心を真性なものに向けなくてはいけないとも、忠告している詩篇である。この頃は未だステラもヴァネッサも生存していたので、売春婦に対する憎悪の念はさほど深くはなかつたのである。しかし、すでにスウィフトは、肉体的に女性を愛せない体となつていたことは悟つていた。僅かに残った結婚への願望を断ち切るようにこの詩篇は、セリアの寝起きの姿から始まる。

To see her from her Pillow rise
All reeking to a cloudy Steam,

⁵⁸ “from whence they began to discharge their Excrements on my Head.”(Swift. *Gulliver's Travels*, p. 208)

Crackt Lips, foul Teeth, and gummy Eyes,
Poor Strephon, how would he blasphene!

The Soot or Powder which was wont
To make her Hair look black as Jet,
Falls from her Tresses on her Front
A mingled Mass of Dirt and Sweat.

Three Colours, Black, and Red, and White,
So gracefull in their proper Place,
Remove them to a diff'rent Light
They form a frightfull hideous Face..⁵⁹

寝起き姿の乙女は、
薄ぼんやりとした臭気の中から現れる、
ひび割れた唇、抜け落ちた歯並び、眼やにだらけの瞳、
これを見た哀れなストレフォンはどんなに神を呪ったことか、

ばい煙や土埃は
髪の毛をまっ黒にし、
髪の毛のひと房から落ち
顔は汗と埃にまみれている。

黒、赤、白、三色の、それぞれの色彩が
相応しい場所があれば、素敵なのだが。
朝に光を受けて
ぞっとする、恐ろしい姿に見える。

寝乱れて、唇の赤ははみ出し、黒く染めた髪の毛は白髪まじりとなっていると、化粧によって作り出された美女の、おぞましい姿を晒し出して、その実態を暴いた。叶わぬ願望を、美女の実態を暴くことで晴らしたのである。詩編の描写は崩れた化粧に進み、悪意に満ちた描写が延々と続く。彼の怨念は、詩編が進むにつれて深く、更に大きくなっていったのである。

The Black, which would not be confin'd

⁵⁹ Swift, *The Poems I*, p.226. ll.13-24.

A more interior Station seeks
Leaving the fiery red behind,
And mingles in her muddy Cheeks.

The Paint by Perspiration cracks,
And falls in Rivulets of Sweat,
On either Side you see the Tracks,
While at her Chin the Conflu'ents met.

A Skillfull Houswife thus her Thumb
With Spittle while she spins, anoints,
And thus the brown Meanders come
In trickling Streams betwixt her Joynts.

But Celia can with ease reduce
By help of Pencil, Paint and Brush
Each Colour to it's Place and Use,
And teach her Cheeks again to blush. ⁶⁰

髪を彩った墨はどこにも滲んでいないが、
下地のほうを探してみると
燃え立つ赤を残したままになって
薄汚れた頬を赤黒くそめている。

白粉の剥がれた汗まみれの頬は、
汗の流れに沿って
両頬に痕を残して流れ下り、
顎のあたりで合流している。

主婦が上手くするように、
親指に唾をつけて、ひきのぼし、油をつける
やがて褐色の草地が緩やかな流れに現れる。

セリアは簡単に化粧の乱れを修復する。
化粧ペンと白粉と刷毛の力を借りて。

⁶⁰ Swift, *The Poems I*, p.227, ll.33-48.

それぞれの色彩を、相応しい場所にすえ、
彼女の頬は刷毛で基の姿に戻った。

外見の美しい美女であっても、その実態はかくの如くであると繰り返して、美しさの本質を求めることの重要性を訴えている。この詩編では、女性に対してあるべき姿を示している体裁をとりながら、実態は、女性の真の姿をさらけ出して、女性を軽蔑しているのである。スウィフトは売春婦の化粧の乱れと、修復の姿を語りながら、中世の人々が思い描いていた色彩に対する感覚から、色彩の表す意味を用いて貶めてもいるのである。アラゴン王アルフォンソ 5 世の紋章官シシル(Sicille)の著した『色彩の紋章』(*Blason des Coulerus*)によれば、中世の色彩体系の両端に白と黒があると言い、その中間に赤がある。⁶¹ それぞれの色彩が象徴するものをシシルは次のように規定している。白は純潔、黒は率直、赤は威光であるが、スウィフトは詩編「移り行く美」の中で、この 3 色を持ち出して、本来の色彩が象徴する意味とは異なる象徴として用いて、売春婦を諷刺している。⁶² 12~3 世紀から、キリスト教の信仰を広げるため、聖書に描かれている奇跡や秘儀を、文字の読めない信者たちに知らせるため、ステンドグラスで色彩豊かに描き出して伝えていた。この煌びやかな光の降り注ぐ教会で、神の啓示に浸っていた人々は、やがて写本の世界の光景に酔いしれる。古くはアイルランドの至宝『ケルズの書』(*Book of Kells*) や、『パンタグリユエル』(*Pantagruel*)と『ガルガンチュワ』(*Gargantua*)、『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)などの登場人物の性格描写に用いられた色彩から、色彩が与える概念を受け止めていたのであった。とりわけ、ピューリタン革命以後、彼らの着衣には敬虔を表す黒が多く用いられるようになった。それぞれの色彩が与える共通の概念は、中世では艶やかで明るい色彩であったものを、スウィフトは邪悪でよこしまな認識の色相に置き換えて、見にくく不潔な売春婦に、清純で清潔な白い色彩で印象付けることで、その落差を読者に感じさせようとしたのであった。悪徳に満ちた悪行の彼女を、清純で清潔な白で表わしたのだ。徳井淑子の『色で読む中世ヨーロッパ』による中世の人々が色彩に抱いたイメージによれば、すべての色彩の体系の両端は白と黒であった。全ての色彩の組み合わせは 12,000 あるということである。これは中世の戦闘における武将の家紋を集大成した、『色彩の紋章』から導き出した結果である。アーサー王と円卓の騎士たちの戦闘場面で用いられる国王に忠誠を誓う正義の士の用いた白は、スウィフトの筆にかかって、悪行の果ての色彩へと墮落してしまったのである。色彩による感覚の違いは、我々と中世人とは異なるが、白は純潔や清潔を表し、絵画においても白は神の啓示を表している。黒は不潔や死といった負のイメージが強い色彩なのである。12~3 世紀になると文学作品が多く慈愛に満ちたものとなり、書籍は絢爛たる色彩に満ちたものとなり、これらの概念が定着していった。スウィフトはこの概念を逆手にとって、売春婦たちを誹謗したのである。色彩表現による

⁶¹ 徳井淑子、『色で読む中世ヨーロッパ』、講談社、2006 年、32 頁。

⁶² シシル、『色彩の紋章』伊藤亜紀、徳井淑子訳、悠書館、2009 年、45 頁。

人格否定は、続く放尿シーンを導き出すことで更に効果を高めたのである。美女といえども並の人間、生理的であるのは当然だと実感させている。放尿シーンの描写は、臭気を感じさせるほど生々しくなっている。主人公セリアは売春婦、夜半に帰って化粧を落とし、寝床に潜り込んだまま朝を迎えたのである。崩れた前夜の化粧の修復が終わると、瞬く間に美貌の姿が蘇るが、その修復作業は見るものを唾然とさせ、美貌の陰に秘められた秘密を知るに及んで、仰天する構成となっている。清純で高貴な色彩による称賛の形をとりながら、表現とは反する効果で、誹謗している諷刺の手法はスウィフト独特の表現方法なのである。彼はこうして、人工的に造形された美女に、恋心を抱く虚しさを訴え警告している。

When Mercury her Tresses mows
To think of Oyl and Soot, is vain,
No Painting can restore a Nose,
Nor will her Teeth return again.

Two Balls of Glas may serve for Eyes,
White Lead can plaster up a Cleft,
But these alas, are poor Supplyes
If neither Cheeks, nor Lips be left. ⁶³

水銀で髪の毛が抜け落ち、
いくら毛染めを使っても無駄なことだ
いくら化粧を施しても、欠けた鼻は戻らない。
欠けた歯並びも同じこと。

2個のガラス玉は目の代わり、
白粉が頬の裂け目を隠して呉れる。
おお神様、埋め合わせするには貧弱に過ぎる。
頬も唇も欠け過ぎているのだから。

スウィフトは、梅毒の症状を読書から学んだのであろう。この詩編で描写されている情景は、梅毒罹患の第3期以後の姿である。この後起るのが精神異常なのである。セシルの症状は未だ、肉体的損壊までである。セシルの梅毒は進行して、やがて彼女は見る影もない姿となっていくのだが、化粧と薄暗い夜の照明で、美貌であると勘違いされている。「移りゆく美」(“The Progress of Beauty”) に似た内容を持つ詩篇が、続々と上梓された。その

⁶³ Swift, *The Poems II*, p.229. ll.109-112.

第1弾は、「淑女の化粧室」(“The Lady’s Dressing Room”)である。化粧室の主セシルが、5時間かけて見違えるほど美しい姿で外出した留守に、ストレフォン (Strephon) が侵入して、部屋の様子をつぶさに観察する筋立てとなっている。

The various Combs for various Uses,
Fill’d up with Dirt so closely fixt,
No Brush could force a way betwixt.
A Paste of Composition rare,
Sweat, Dandriff, Powder, Lead and Hair;
A Forehead Cloth with Oyl upon’t
To smooth the Wrinkles on her Front;
Here Allum Flower to stop the Steams,
Exhal’d from sour unsavoury Streams,⁶⁴

様々に用いられる多くの櫛
汚物がぎっしりこび付いて
櫛の目には何も通らない。
髪油などは、少しも見られず、
汗と、雲脂、白粉、白鉛と髪の毛
額にあてた脂じみた布の切れはし
額の皺を伸ばすためのも
此処には、汗の流れを止めるためのミョウバン
酸っぱい不快な匂いを蒸発させるためのもの、・・・・

美女の化粧室の有様を、ストレフォンの眼を通して描写されている。悪意に満ちた描写は、化粧室の乱雑な有様から始まって、さらに延々と続き、覗き見したストレフォンは、セリアの本当の姿をすべて見てしまった。臭気芬芬とする脱ぎ捨てた下着、女神とも見紛う美しいセリアが、醜い造り物であった現実に、女性に限りない美を求めている、男性の目を覚ます効果を期待した詩編である。スウィフト自身も、この様な実態の美女に心を動かされる筈がないのだと、慰めているような詩編である。

The Bason takes whatever comes
The Scraping of her Teeth and Gumes,
A nasty Compound of all Hues,
For, here she spits, and here she spues.

⁶⁴ Swift, *The Poems II*, p.526. ll.20-28.

But oh! it turn'd poor *Strephone's* Bowels,
When he beheld and smelt the Towels,
Begumm'd, bematter'd, and beslim'd
With Dirt, and Sweat, and Ear-Wax grim'd.
No Object *Strephon's* Eye escapes,
Here Pettycoats in frowzy Heaps ;
Nor be the Handkerchiefs forgot
An varnish'd O'er with Snuff and Snot.
The Stockings, why shou'd I expose,
Stain'd with the Marks of stinking Toes;
Or greasy Coifs and Pinner's reeking,
Which *Celia* slept at least a Week in? ⁶⁵

どこから持ってきたか分からない水桶に、
彼女の歯や歯茎の糟や
気持ちの悪くなる色取りのものを
セリアは唾を吐き、こちらではもどしている。
憐れなストレフォンの腸がひっくり返った。
それをストレフォンが見、タオルの臭いを嗅いだとき
ぐったり、げっそりし始めた。
塵と汗、不快な耳垢で、
どんなものでもストレフォンは見逃さない。
ムットするような下着の山、
忘れてしまったハンカチも、
すべて鼻水にまみれている
踵の汚れがくっきりとしている、
臭い匂いの靴下を取り出し、
脂で汚れたベールと悪臭放つ飾り襟、
セリアが1週間以上そのままにして寝たものか？

臭気を放つ数々を列挙して、女性の見せかけの美しさに、迷う男心に警鐘を鳴らしたの
である。臭気に対する、スウィフトの執着が窺がえる詩句である。彼がこの時期、女性
の実像を露わにして、臭気に満ちた雌の姿を示したのは、この詩篇を通して、女性の実態を
曝け出し、この醜悪な売春婦たちとその対極にあったステラやヴァネッサたちを、望まし
い姿として写し出して、真の女性のあるべき美しさを訴えたのである。この様な売春婦に

⁶⁵ Swift, *The Poems II*, p.527. ll.39-54.

心を惑わされないと、後悔を深くにじませた描写で、自分自身を慰めているのである。

He soon would learn to think like me,
And bless his ravisht Sight to see
Such Order from Confusion sprung,
Such gaudy Tulips rais'd from Dung.⁶⁶

彼等は私同様に、考え始めるだろう。
うっとりとする光景を希求するだろう。
混乱の中から秩序が生じ、
糞尿から輝くばかりのチューリップを。

スウィフトは秩序がその対極にある混乱から生じているように、美しいチューリップも糞尿の中から生じると、外面に現れた美しさの陰にある、裏面の汚さやおぞましさに目を向けている。彼の諷刺は常に、内面と外面という対極軸の上で表現しているのであり、余人の視線の及ばぬ角度に目を向けているのである。然し、余人はストレフオンの様に、表面的にしかとらえていないので、彼はそのような人たちを諷刺の陰で嘲笑っているのである。

悪臭に満ちた光景が、この世のものと気付いていない男性達に、美しいチューリップでさえ汚物の中から生じていると、見せかけの美に惑わされることの愚かさを、警告したのである。臭いに敏感で、清潔好きであったスウィフトは、装身具の汚れや臭いにも、鋭い観察の目を向けている。この詩篇はいたるところに、臭気紛々たる情景に満ち、立ち上る悪臭に辟易させられる。想像力は限りなく広がり、外面から見えるものが、幻影であったことに気づかされる。日ごろから、男性の目から免れている、隠された女性の影の実態が、眼前に映し出される詩篇である。1730年に集中して糞尿譚を扱った詩篇を4編、矢継ぎ早に上梓した。これらの詩編は、男性に対する警告でも、女性に対する自戒の詩編でもなく、これらはスウィフトに梅毒を罹患させ、人生の方向すら見失わせた売春婦たちに対する、復讐の詩編である。これら醜悪詩は「淑女の化粧室」(“The lady’s Dressing Room”)を含めて、以下の通りである。

“The Lady’s Dressing Room”	(144 行)
“A Beautiful Young Nymph Going to Bed”	(74 行)
“Strephon and Chloe”	(314 行)
“Cassinus and Peter”	(118 行)

⁶⁶ Swift, *The Poems II*, p.530. ll.141-144.

「淑女の化粧室」に続く「若く美しきニンフのお床入り」(“A Beautiful Young Nymph Going to Bed”)は「美の発展」(“The Progress of Beauty”)とは逆の構成で、前夜疲れて帰ってきた美女が、外した整形部品を拾い集め、失われた部品を探し当て、容造られた美女が、次第におぞましい姿から、美女に変貌する姿を描写して、女性に偶像を求めている男性に警鐘を鳴らしている詩篇である。もちろん主人公コリーナ(Corinna)は売春婦である。

Takes off her artificial Hair:
Now, picking out a Crystal Eye,
She wipes it clean, and lays it by.
Her Eye-Brows from a Mouse's Hyde,
Stuck on with Art on either Side,
Pulls off with Care, and first displays 'em,
Then in a Play-Book smoothly lays 'em.
Now dexterously her Plumpers draws,
That serve to fill her hollow Jaws.
Untwists a Wire; and from her Gums
A Set of Teeth completely comes.
Pulls out the Rags contriv'd to prop
Her flabby Dugs and down they drop.⁶⁷

鬘を取り外し
クリスタルの義眼を取り出し、
彼女はそれを綺麗に拭って脇に置く、
鼠の毛製のまゆ毛も取り去り、
両端をそっと抑えて、
まずは丁寧に広げる。
それからそれを、脚本の間に置く。
器用に、頬を膨らませていた含み綿を
こけ落ちた顎から取り出す。
バネを緩めて歯茎から、
入れ歯を取り出す。
工夫して作ったたるんだ乳房を誤魔化す、
支柱となっているボロ切れを引きずり出す。

前夜、美女から取り外した成型部品の捜査から始めて、部品を組み立て、次第に美女の

⁶⁷ Swift, *The Poems II*, pp.581-582. ll.10-22.

姿を取り戻す構成となっている。美女が目覚めるさまは、更に壮絶で、取り外しておいた細工ものは、ネズミに引かれ、鬢はノミだらけとなっている。彼女達の見せかけの美しさに惑わされ、本質を見失う危険を警告している。美女の実態を全て晒して、うわべの美しさに惑わされる愚かさを警告した。この警告は、スウィフト自身の深い反省も含まれている。

120行と比較的短い「カシウスとピーターの悲哀歌」(“Cassinus and Peter:A Tragical Elegy”)は、ケンブリッジ(Cambridge)大学の2年生、純情な友人同士のカシウス(Cassinus)とピーター(Peter)が、夜の巷に、恋の探訪に出かけた。カシナスが、女神とも見違ふ絶世の美女、セリアの寝室に潜り込む。美女の寝室の寝乱れた様を列挙し、想像を逞しくするのである。清純な乙女と見間違ったのは若気の至りで、彼女は売春婦であった。随所に生理的嫌悪感を催す描写が続き、「淑女の化粧室」と同じ言葉で、若者は絶望の叫びをあげるのであった。⁶⁸

「ストレフォンとクロエ」(“Strephon and Cloe”)は、新婚初夜の二人の姿を描写しているが、美女と野獣の対決は、床入りを前にして、飲み過ぎた紅茶が尿意を誘い、食べ過ぎた豆の効果が現れ、おなら合戦となった。全編がおならと糞便で、芬々たる臭気に溢れている。5行目から8行にかけての清純な乙女の描写と、16行から20行の排泄場面の対比が絶妙である。「髪の毛一筋にも欠点のない、女神とも見紛う乙女、肉体のなだらかな曲線と、うるわしの容貌、神の作り給うた比類なき最高傑作」と、誉めそやした乙女の実態を知るや、幻滅を感じるのはストレフォン達だけではないであろう。女神と紛う美女と、生理的要求に耐えられない情景との対比が、大きければそれだけ大きな落差で、美女を貶めているのである。

By Nature form'd with nicest Care,
And, faultless to a single Hair.
Her graceful Mein, her Shape, and Face,
Confest her of no mortal Race:
And then, so nice, and so genteel:
Such Cleanliness from Head to Heel:
No Humours gross, or frowzy Steams,
No noison Whiffs, or sweaty Streams,
Before, behind, above, below,
Could from her taintless Body flow,
Would so discreetly Things dispose,
None ever saw her pluck a Rose.
Her dearest Comrades never caught her

⁶⁸ “Oh ! Celia, Celia, Celia, Sh”.(Swift, *T&he Poems II*, p.597.ll. 1-118.)

Squat on her Hams, to make Maid's Water.
You'd swear, that so divine a Creature
Felt no Necessities of Nature....⁶⁹

神が造り給う最高傑作、
髪の一筋の欠点もなく。
たおやかな姿態とその顔、
類なきその美しさよ、
とても定めある身とは考えられぬ、
生まれの良さと淑やかさを兼ね備えている。
頭先から足元までの輝く清潔さよ。
前や後、上、下に、
汗まみれの流れや、大量の水を
人に曝すはずがない。
そのような彼女がバラを摘む姿を、
誰も見たことがない筈だ。
太ももあらわに、うずくまり、
神とも見違ふ創造物が人並みにおしっこをする
いくら生理的現象だとしても……

美わしの乙女に、生理的要求がある筈がないとの考えも、微塵に砕け散り、太股も露わにしゃがみ込む姿が眼前に迫り、臭気すら感ぜられる。さらに場面は進行して、おならが頻発する光景が続く。124行では、「おならの効果を試しては駄目」⁷⁰136行では「一発が恋の炎も吹き消す」⁷¹と、臭気紛々たる情景が続いて、ストレフォンもピーターも幻滅する。詩の後半では、随所に尿の匂いや尿の流れるありさま、その音量まで詳細に描写されている。「音は聞こえなかったが、臭いは強く鼻をうった」⁷²などは聞くものを幻滅させる描写である。この様な情景を描写することで、女性に対する憧れを吹き消しているのは、スウィフトとて同じなのである。次の詩は結婚を建築に譬えて、あるべき結婚の形を提言しているのである。彼の提言や忠告は、思いがけない角度から、意表を突く表現でなされるのである。

A prudent Builder should forecast
How long the Stuff is like to last;

⁶⁹ Swift, *The Poems II*, p.584. ll.5-20.

⁷⁰ "Nor let them taste what causes Wind" (Swift, *The Poems II*, p.587.ll. 1-124)

⁷¹ "One Blast will put out all his Fires" (Swift, *The Poems II*, p.588. l.136)

⁷² "To slip his Ears, yet struck his Nose" (Swift, *The Poems II*, p.589. l.184)

And, carefully observe the Ground,
To built on some Foundation sound;
What House, when its Materials crumble,
Must not inevitably tumble?
What Edifice can long endure,
Rais'd on a Basis unsecure?
Rash Mortals, e'er you take a Wife,
Contrive your Pile to last for Life;⁷³

用心深い建築主なら予想する、
建材がいつまで保ってられるのかと。
注意深く基礎を確かめる、
しっかりとした基礎の上に立てるだろう。
その建築材料が崩れ落ちたなら、
その建物は崩壊するだろうか。
不完全な基礎の上に立てたなら、
どんな殿堂でも持ち応えることが出来ようか。
無分別な若者でも妻を得たならば、
その結婚が永続するよう工夫するであろう....

スウィフト流の諷刺に満ちた詩編である。結婚を建築に見立てて、基礎が確実でない建造物はすぐ倒壊してしまうから、基礎の見極めが大切である。それと同様に、女性の容色に溺れた末の結婚は、砂上に楼閣を建築するようなもので、すぐに倒壊してしまう。結婚は生涯を共に出来る相手を選んで、早くせよと教訓を垂れ、糞尿に塗れた本詩篇を終っている。これら一連の醜悪詩で、売春婦に対する恨みを晴らしたスウィフトであったが、結婚への願望と、叶えられない肉体的欠陥から、次第に結婚不適應の道へ進んだのである。彼はこの詩編上梓以後、急激に女性蔑視を明らかにした。彼はこれまで、フェミニストの仮面を被って、表面的には女性を尊敬し、尊重する態度であったが、女性に対する諷刺表現は、これを機に一段と厳しさを増していった。彼本来の女性蔑視の性向は、更に増幅してきたのであった。幼くして身の回りの女性は、彼を見捨てるようにして去ってしまったことが、幼少時の彼の心に大きく影を落としていたのである。

⁷³ Swift, *The Poems II*, pp.592-593. ll.293-302.

第4章 スウィフトに結婚に対する適応性はあったのか

スウィフトは彼の人生に影響を与えた女性たちとも、結ばれることがなかった。彼を取り巻く3人の女性たちに共通しているのは、何れも父親を失っている孤児同然の身の上であった。彼は彼女たちに家父長として君臨し、父親や恋人の役割を演じていたのであった。彼は梅毒罹患によって、結婚をあきらめざるを得なくなった肉体的不具の身で、夫の役割を演じることは出来なかった。そのため彼女たちに、結婚の対象としての認識すら持てなかった。彼は家父長として彼女たちを教え導くことに、喜びを感じていただけなのである。スウィフトは梅毒罹患の事実を抱えたまま、これら類い稀な資質の女性たちに接しながら、彼女たちに性的魅力を感じることは出来なかったのである。それ故、テンプル卿にイングランドに戻ることを要請されたのを口実に、ワリーナには無理難題で迫ったのだった。ヴァネッサには、彼女が性愛をもって迫ったので、感情を後退させたのである。ステラは8歳から教え導き、20歳で母親や弟妹を捨て、単身スウィフトの住むアイルランドに移住までして来たにも拘らず、30年近くも結婚の公告をしなかった。全ては彼に、結婚を阻害する梅毒という宿痼があったからであり、彼自身の心情に結婚に対する適性が失われていた結果と考えられる。

1726年から1727年にかけて、スウィフトのイングランド滞在中ステラが司祭館に滞在していた折、彼女が病気になったことがあった。その事実を聞いた彼は、ステラが司祭館で死去するような事態が起きたら噂の種になり、余計な波風の立つのを恐れ、そのような事態を回避するため、ステラに司祭館から移動してくれるようウォラル (Worrall) 師に依頼している書簡がある。そこにも結婚を忌避している彼の心情が窺える。

Swift to the Rev. John Worrall

Twickenham, Jul. 16th 1726

In case the Matter should be desparate I would have you advise if they come to Town, that they should be lodged in some Airy healthy Part, and not in the Deanery, which besides you cannot but be a very improper thing for that House to breath her last in. This I leave to your Discretion, and I conjure you to burn this Lettr immediately without telling the Contents of it to any Person alive.⁷⁴

スウィフトからジョン・ウォラル師へ

トゥイケンナム、1726年7月16日

希望が見いだせない事態となったなら、どうか貴方から、ステラ達が街に来たなら、司祭館では無い、何処か健康的で空気のきれいな場所に宿をとって貰ってほしい。司祭館は息を引き取る場所としては相応しくないなので、思慮深い貴方におまかせします。

⁷⁴ Swift, *The Correspondence III*, p.141.

どうかこの手紙も読み終わったなら、焼却してください。

もしスウィフトとステラが結婚していたならば、夫として妻を思いやる気持ちがこの書簡には見られず、愛する者に対する思いやりの気持が微塵も無いことが見られる。そこには唯、保身に汲々としている姿だけである。その姿を他人に見られ、非難されることを恐れて、書簡の焼却まで依頼している姿だけである。ロンドンにステラの死期の近いことを察知していたにも拘わらず、早急に彼女の許に帰ることを考えず、滞在許可の延長さえ依頼しているのは、彼女との関わりを憶測される煩わしさを避けたい一心からなのであった。彼女との間に存在しているのは、友愛の情だけを強調しているのも、梅毒罹患によって、性愛に応じられない肉体になってしまったので、性愛に代わる友愛を強調することで、肉体的関係を否認し、婚姻関係の存在を否定したのである。彼女には病状改善のための宿替えを薦め、司祭館で息を引き取ることを避けるよう懇願している姿には、保身に汲々としている男の身勝手さだけが目に付くのである。この書簡の 5 日後、前便を追いかけるように、ウォラル師の同僚のストップフォード (Stopford) 師⁷⁵宛にも、同様の書簡が出されている。ストップフォード師には、ステラは子供時代から教えてきた教え子なのだと弁解して、親密な間柄なら結婚などというのは、愚かなことで友愛に勝るものは無いと、友愛を強調して、結婚による性愛を否定している。結婚は残されたものを悲惨にするだけであると弁解している。⁷⁶この書簡の焼却までも依頼している姿には、長年にわたって、彼女に愛情を注いできたはずの年月は少しも感じられない。この第 2 信では、ウォラル師からの情報にも触れ、自分の信念に近い決意を改めて開陳して、「友愛」に勝るものはないと重ねて強調して、梅毒罹患の事実から自分を遠ざけたのである。

1726 年 7 月 27 日のシェリダン師宛の書簡でも、幼少期からステラとは友愛で結ばれており、彼女は誰よりも友愛の恩恵を受けていたのだと、友愛を強調している。⁷⁷スウィフトにとって友愛とは、叶えられない性愛にとって代わる、異性間の友情の証なのであった。彼の結婚を否定する言動について、1713 年クロガー(Clogher)の神父アシュ (Ashe) 師の司祭で結婚したと記述しているスコットすら、「ステラへの詩」(“To Stella visiting me in my Sickness”) を取り上げて、スウィフトのこのような表現は、妻となった女性に対する描写としては相応しくないと、彼らの結婚に消極的ではあるが、否定する感慨を洩らしている。スコットもステラに対するスウィフトの処遇から、両者の間に結婚を阻害する、何らかの

⁷⁵ James Stopford. (c.1697-1759). Church of Ireland bishop of Cloyne, was born in London, 5 March 1717 he was elected a fellow of Trinity, and proceeded MA in the following year.

⁷⁶ “and I think there is not a greater folly than that of entering into too Strict and Particular a friendshop, with the loss of which a man must be absolutely miserable” (Swift, *The Correspondence III*, p.145)

⁷⁷ “There hath been the most intimate Friendship between us from her Childhood, and the greatest Merit on her Side that ever was in one human Creature towards another.” (Swift, *The Correspondence III*, p.147)

事情の存在を感じていたのであろう。

Then *Stella* ran to my Relief
With cheerful Face, and inward Grief;
And, though by Heaven's severe Decree
She suffers hourly more than me,
No cruel Master could require
From Slaves employ'd for daily Hire
What *Stella* by her Friendship warm'd,
With Vigour and Delight perform'd.⁷⁸

ステラは私に心配させまいと、
陽気な顔を見せてはいるが、
神のご意思なので、深い悲しみを押し隠している。
ステラは私以上に絶え間なく苦しんでいる。
残酷な運命の命じるままに
毎日が奴隷のように。
だがステラは私に対する友愛の想いやりで、
元気よく、生き生きと演技しているのだ。

この詩篇をスコットは、スウィフトの病気の看病に献身しているステラを、冷徹な眼差しで見つめている姿に、夫としての愛情が感じられないと述懐している。1720年の「私の詩篇を集めて書き写してくれた、ステラへ」(“To Stella, who Collected and Transcribed his Poems”)も、「馬鹿にしたような、嘲っているとも受け取れる句で終始している」ともスコットは言っている。スウィフトは初めて彼女に会った時から、彼女は恋の対象ではなく、友情と尊敬の念だけであったと言い切っていることから、ステラの愛情を受け入れるつもりはなかったのである。最初から彼女を結婚の対象には考えていなかった。彼が求めていたのは、常に周囲にあって安らぎと温もりを与えてくれる、女性の存在だけなのであった。この詩篇はステラを称賛している詩句では無く、長年の歳月が彼女から若さを奪い、頬に皺を刻んだだけだと、冷やかしているととれる詩句である。スコットはこの詩こそ、彼女を侮辱する以外の何ものでもないと主張している。ここに見られる友情は、利害を離れてかきずいてくれる、プラトニックな友情を指しているのである。ステラに対する誕生日の祝詩を、鈍感さを装った誠実さの証明であると、スコットも断言している。1726年の「1726～27年3月13日ステラの誕生日」(“Stella's Birthday March 13, 1726-27”)は、日頃ステラが仄めかしていた、スウィフトの態度に対する非難を表現した詩と考えられる。

⁷⁸ Swift, *The Poems II*, p.726. ll.101-108.

O then, whatever Heav'n intends,
Take Pity on your pitying Friends;
Nor let your Ills affect your Mind,
To fancy they can be unkind.
Me, surely me, you ought to spare,
Who gladly would your Suff'rings share ⁷⁹

神のなされる業ならば、
哀れみを取り除きたまえ、
病が心まで病みさせることのないように。
思いやりのない友を、
思い描かせなくてはならないように。
貴女の苦しみを分かち合うべきなのは私だから。

恨みごとを打ち明けたようなこの詩は、ステラの求めに添えぬスウィフトの弁解なのである。このような心の動きは、情情的にも結婚不適合な彼の資質に由来しているのである。彼には女性を妻に迎え生活を共にする意欲は、微塵もなかったのだ。身近にあつて精神的な愛情を注ぐことは出来ても、肉体的に愛することは出来ない彼の、初期の書簡「結婚に臨む若き女性への書簡」(“A Letter to a Young Lady on her Marriage”, 1723)で触れている、愛の官能的側面について見てみよう。彼は「馬鹿げた情熱で、小説や芝居にあるようなもので、人間のする行為ではない。」⁸⁰ と性愛の存在を完全否定している。スウィフトは肉体的に結婚生活が不能であったばかりではなく、体質的に結婚に適していないか、精神的不能であったのであろう。彼の心の奥底には、神経性梅毒に罹患した事実が、深い傷跡を残していたのである。

アドルフ・スターン (Adolph Stern) ⁸¹は、彼の著作『スウィフト伝』⁸²で、スウィフトの性格を、愛の性的要因の理解に欠けている ⁸³としている。彼はスウィフトの歯に衣着せぬ皮肉癖が、結婚の性的要因を否定していることに起因していると、解説している。スターンの『スウィフト伝』を読んだ、ドイツの神経学者で精神医学者の、リチャード・エ

⁷⁹ Swift, *The Poems II*, p.766. ll.79-84.

⁸⁰ “yours was a Match of Prudence, and common Good-liking, without any Mixture of that ridiculous Passion which hath no Being, but in Play-Books and Romances.” (Swift, *Irish Tracts and Sermons 1720-1723*, p.89)

⁸¹ Adolf Stern. (1835-1907). was a German literary historian and poet.

⁸² Adolph Stern, *Aus dem 18 Jahrhundert Biographische; Bilder und Skizzen*, Leipzig, 1874.

⁸³ Adolph Stern, p.128

ービング(Dr. Richard Von Krafft-Ebing)⁸⁴ は、スウィフトがステラとの同居を避け、常に一緒にいたことが無かった事実から、彼を「性的不適合」(Sexually Anaesthesia) と診断した。このジャンル設定のため、エービングは10例の成人男女のサンプルを用意していた。その類例を綿密に精査し、スウィフトの性格を比べた結果から、彼の性格を性的不適合と診断したのである。この10例の症例を、スウィフトの性格や行動と詳細に比較検討した結果、共通因子として見られるのは、本能に根ざした性欲は存在するが、性的行為に対しては何の感慨もなく、人間的感情に乏しく、冷淡な性格であることであった。エービングは「スウィフトは結婚不適合の要因をすべて備えている」と結論付け、診断を下している。このタイプの人物は、健康ではあるが人付き合いが悪く、性格は頑固で妥協しない者が多いというものであった。この点でも彼の厳しい社会批判や、個人に向けられた諷刺が、時として良好な関係を損なうこともあり、結婚願望はあっても希薄であると、根拠を次のように記述している。

Only those cases can be regarded as unquestionable examples of absence of Sexual instinct dependent on cerebral causes, in which, in spite of generative organs normally developed and the performance of the functions (secretion of semen, menstruation), the corresponding emotions of sexual life are absolutely wanting.⁸⁵

これらの場合こそ疑いもなく、大脳に起因する性本能に欠けている証拠と考えられる。生殖能力は正常に発達しており、機能は正常だが(精液分泌も、生理も順調)性生活に対する対応感情が著しく欠けている。

エービング博士の診断は、「肉体的には成熟しているが、大脳が指令する性的本能が欠落、感情伝達がままならない」と言うものであった。大脳の異常については、ワイルド博士がスウィフトのデスマスクの計量の結果を、彼の著書『晩年のスウィフト』(*The Closing Years of Dean Swift's Life*, 1849)の中で、次のように伝えている。スウィフトは生来のものではないが、「友情以上に強力な情熱の存在は許さなかった」と言って、「大脳の一部に異常に発達した知力と性欲の痕を見た」⁸⁶と診断していることでも、明らかである。トーマス・ウイilson (Sir. Thomas George Wilson) 博士⁸⁷も『アイルランド医科学誌』(*The Irish Journal of Medical Science*)に掲載した「スウィフトの難聴と最後の疾病」("Swift's

⁸⁴ Richard von Kraft-Ebing.(1840-1902). An Austro-German sexologist and psychiatrist. He published *Psychopathia Sexualis; eine Klinisch-Forensische Studie* (1886).

⁸⁵ Richard, Von Kraftt-Ebing, *Psychopathia Sexualis*, p.40.

⁸⁶ Swift was not susceptible (as we firmly believe he was not by nature) of any passion stronger than friendship. (William Wilde, *The Closing Years of Dean Swift's Life*, p.122)

⁸⁷ Thomas George Willson, Sir. (1876-1958). Obstetrician and gynaecologist. (*Australian Dictionary of Biography*)

Deafness and his Last Illness”, 1939) の中で、彼には「性欲亢進の痕は見られる」⁸⁸と記述し、性欲の存在を認めている。頭蓋骨は機知と比喩の分野を司る部位は、殆んど発達していなかったが、性欲と愛欲の分野は、異常に発達していたとウイルソン博士も診断し、ワイルド博士や世間の評価とは異なる判断を示しているオレリー卿も、「スウィフトには本質的な冷淡さと懐疑心がある」⁸⁹ と言い、シェリダン師も、抑圧された生活に由来する「冷淡な仕打ち」(Cold Habit) の存在を認めている。⁹⁰この抑圧された生活による冷たい仕打ちとは、母親に見捨てられるような状態で放置され、姉すら彼の周りから去ってしまっていた事実を挙げている。このように家族から見放された孤独な境遇の中で、身に付いた習性であったと言っている事でも、彼に自覚があったことが分かる。1876年5月号の『ブラックウッドマガジン』(*Blackwood's Magazine*)にも、「愛の情熱に欠けている」⁹¹ との記事が見られることから、彼の結婚不適應症は、拭いがたい習性と考えることが出来る。

This theory of Krafft-Ebing's that Swift was not impotent, but sexually anaesthetic, depends on a maintenance of celibacy, or at least of the desire for celibacy, throughout his life, although this is not necessarily a prime requisite. Anaesthesia sexualis merely means the absence of sexual desire; it does not preclude the sexual act, so long as the desire is absent. This absence of desire, of course, usually makes the sexual life so sterile as to be almost nonexistent. In Swift's case it seems to have gone even beyond this, and exhibited no manifestations whatsoever.⁹²

クラフト・エービングの理論によれば、スウィフトは性的不能者ではなく、独身生活によって、性感欠如かまたは、必然性はないが生涯に涉った独身願望が原因と考えられる。性的無感覚は単に性欲が無いという訳ではなく、性的行動を排除するものでもなく、単に慾望が無いだけである。勿論、この性欲の欠除は性欲が殆どない限りは性生活を営むことはできない。スウィフトの場合は、それを逸脱しており、何であれ彼はそれを明らかにはしていないのである。

エービング博士のスウィフトに対する診断は、性的不能者ではないが、長年の独身生活

⁸⁸ While the portions assigned to *Philo-progenitiveness* and *amativeness* appeared excessive.(William Wilde, *The Closing Years*,p122)

⁸⁹ Orrery, (*Remarks*, p.113) mentions Swift's constitutional coldness and suspects "defects in nature."(Maxwell Gold, *Swift's Marriage to Stella*, p.127.)

⁹⁰ ...,and suggests that Swift "having lived to such an advanced time of life in a state of continence, and a constant habit of suppressing his duties, at last lost the power of gratifying them." (Sheridan, *Life*, pp.333-334)

⁹¹ ...,where the writer states that Swift was "insensible to the passion of love."(*Blackwood's Magazine*, May, 1876, p.530)

⁹² Maxwell Gold, *Swift's Marriage to Stella*, p.133.

の結果、性的欲望が欠落しただけで、性行動を排除するものではないが、欲望の欠如は、性的生活を不毛なものにしてしまうと断じている。博士はスウィフトの梅毒罹患の事実を知らぬまま、この様な診断を行ったのであるが、梅毒罹患による性愛拒否の心情を知ったなら、自分の診断の正当性を強調したことであろう。明白な原因は見当たらない上での診断である。この段階で博士には、スウィフトが梅毒罹患によって結婚不適應と、自身に烙印を押してしまったことは分かってはいなかった。肉親に対する親密感の欠如、とりわけ親密な交遊関係にある異性に対してすら、心を開かない性向や、経済的自立を重要視する点など、第三者的に見て、彼の青春時代の軌跡が、結婚不適應を色濃く物語っていると診断している。彼が性衝動の欠如者の分類の同人たる資格は、結婚したとされている1716年以後、ステラとは共に住まない点からも明白といえる。彼がステラに見ていたものは、読書によって知的に高められ、品位ある会話と社交に勝れ、軽薄を嫌い、質素な生活を甘受する女性の姿であった。しかし、スウィフトは彼女を性的欲望の対象として、結婚して妻にし、子供を儲けて家庭を築くなどとは考えていなかった。彼は結婚したかったのではなく、友達が欲しかったに過ぎない。彼が望んだのは友愛という結合であった。友愛と博愛こそが究極の目的であり、それは特定の個人に対してではなく、全人類的なものなのであった。彼が結婚を否定していることを、立証する覚書がある。

1779年、ニコルス(Nichols)が出版した、ジョン・ホークワース(John Hawkesworth)の「スウィフト博士の生涯の出来事」(“An Account of the Life of Dr. Swift”)に挿入されていた覚書が世に出た。この覚書は従来の結婚説を否定する内容を含んでおり、この覚書の署名人ジョン・レオン(John Lyon)が問題を複雑なものとしている。この覚書には、1736年以來スウィフトと親密な間柄といわれているレオンが、スウィフトから聞いたとされる話が記録されていた。しかしその覚書の真偽については、出版業者のニコルスも、著者のホークワースも言及を避けている。レオンはリッジウェー(Ridgegeway)夫人の遺言執行人で、ブレント(Brent)夫人とも知己であった。彼はスウィフトの最晩年期にあつて、彼の人格崩壊時に委員会に指名された後見人でもあった。そのような経歴が、この覚書の内容と登場人物特定に、都合の良い人物像であったのであろう。しかしながら、スウィフトとレオンが知己になったとされる1736年には、レオンは若干30歳、スウィフトとの年齢差は30歳であった。頑固で容易に他人に心を開かないスウィフトが知己となって、彼に個人の重要な秘密を打ち明けたとは考え難い。ここに両者の関係を証明する書簡がある。この書簡は、1736年10月22日付けで、ディレニー(Delany)宛に送られたものである。そこには「持参人」(the bearer)とあることでも分かるように、スウィフトにとってレオンは、単なる使用人の一人に過ぎなかった。ステラとの結婚に関する情報を伝えることなどあり得ないのである。⁹³彼は当時まだ修士号取得まで数年を控えた若者で、首席司祭となっているスウィフトの配下の、ウォラル師の助手に過ぎないことが分かる。彼がスウィフトの後見人に指名されたとしても、それは、スウィフトが精神に異常を来したと診断されたため、

⁹³ Swift, *The Correspondence IV*, p.534.

古くからの友人たちが請願した折、彼がジョン・グラタン(John Grattan) やジョン・キング(John King)師近くに仕えていたことからの、政治的判断に過ぎないものと考えられる。この覚書の情報の出所は、ブレント夫人、リッジウェー夫人やディングレー(Dingley)夫人からの、伝聞情報や噂話が元となっている。ニコラスも、この覚書の人物は情報をよく知っているが、スウィフトの知己の話ではないと結論付けている。1778年4月25日のニコラス宛のディーン・スウィフトの書簡にも、この話は人を混乱させる嘘話に過ぎず、レオンなどにスウィフトが、たとえ作品の一部たりとも与えることはない、と断言している。結婚説を否定する所謂「結婚覚書」(“Marriage Note”)には、どのような記述がなされているのであろうか。

the Dean told one of his friends whom he advised to marry, ‘that he never wished to marry at the time that he ought to have entered into that state; for he counted upon it as the happiest condition, especially towards the decline of life, when a faithful and tender friend is most wanted.’ While he was talking to this effect, his friend expressed his wishes to have seen him married. The Dean asked, Why? ‘Because,’ replied the other, ‘I should have had the pleasure of seeing your offspring. All the world would have been pleased to have seen the issue of such a genius.’ The Dean smiled, and denied his being married, in the same manner as before; and said, ‘he never saw the woman he wished to be married to.’⁹⁴

スウィフトは結婚を勧める友人の一人に言った。「自分は人生の終末期には忠実で優しい友達が欲しくなり、結婚は最高の状態だと思っているが そのようなときになったとしても結婚したいとは思わない」。この話をしている間、友人は彼が結婚しているのを見たかったと言った。スウィフトがその理由を聞くと、友人は「君の子供を見たかったんだよ。世界中が君の子供の天才ぶりを見たかっただろう」と話したところ、スウィフトは笑って結婚を否定し、以前と変わらぬ調子で、「結婚したいと思う女性に会ったことがないんだ」と言った。

この覚書には、結婚を勧める友人に向かって、スウィフトは結婚を否定し、スウィフトが結婚している姿が見たかったという望みに対しても、「結婚したいと思う女性に会ったことがない」と答えている。この覚書の注釈者は、手書きの覚書の信憑性を担保するため、ディングレー夫人とは彼女の死の10年以上前から、1743年まで親密であった間柄を強調していた。ディングレー夫人が、スウィフトとステラの結婚話は「疑惑に根ざした根拠の無い話」として一笑に付したと付け加えて、自分の伝聞情報の真正さを担保していた。

スウィフトは女性に対して、誠実な男らしい男女同権主義者の男性として行動していた

⁹⁴ Maxwell Gold, *Swift's Marriage to Stella*, p.47.

が、その心底にあるものは、女性に対する嫌悪感であり、女性に対する憎しみにも似た差別感であった。愛しい存在としてのステラや、ヴァネッサに対しても、彼女たちが幼児のままである限りは、愛しい愛すべき存在であったが、肉欲を前面に押し出した、成人女性となるに及んでは嫌悪した。1730年、幼児のままの心情で接して呉れたステラの死が、スウィフトの心の平衡を奪い、一連の醜悪詩の上梓に駆り立てたのである。彼はフェミニストのペルソナを被った、女性差別主義者であった。彼は、アイルランドの国家財政が破綻の淵にあるのを救う手立てとして、アイルランド全女性に国産品愛用の訴えを幾度となくしたが、受け入れられず、国家財政はますます悪化していった。このような忠告に従わず、気ままに奢侈に耽り、トランプ遊びに旬日のない婦人たちに対する軽蔑の詩を上梓したほどである。「近代女性日誌」(“The Journal Of A ModernTheLady”, 1728)は、これらの女性に向けての、女性差別の姿勢が読み取れ、彼の女性蔑視の原点の一つでもある詩である。

この時代、カドリール(Quadrill)と呼ばれるトランプ遊びが流行していた。スウィフトは、家庭も顧みず、この遊びに熱中する女性の姿を諷刺した詩篇、「近代女性日誌」を上梓して、この風潮を批判したのである。トランプ遊びを批判した体裁をとりながら、彼の諷刺の真の対象は、国家財政の危機にも拘らず、奢侈品の輸入に寧日ない、愚かな女性たちに対する批判であった。4人で遊ぶこのゲームに熱中するあまり、日頃の思慮深さも、謙虚さも見失い、口汚く罵りあい、大口を開けて大笑いするさまを詳細に描写して諷刺したのである。彼は彼女たちの偽善的態度に眉をひそめ、遮るものもない醜態を軽蔑し憤慨したのであった。表面的にはこれらの女性たちに忠告しているが、内実は軽蔑しているのである。

Surrounded with her Noisy Clans
Of Prudes, Coquets, and Harridans;
When frighted at the clam'rous Crew,
Away the God of *Silence* flew,
And fair *Discretion* left the Place,
And *Modesty* with blushing Face;
Now enters over-weening *Pride*,
And *Scandal*, ever gaping wide,
Hypocrisy with Frown severe,
Scurrility with gibing Air;⁹⁵

淑女ぶり、媚を振りまく、意地悪婆たち、
騒がしい仲間たちに囲まれて、
騒がしい連中に怯えた、

⁹⁵ Swift, *The Poems II*. P.448. ll.118-127.

静寂の神は飛び去ってしまった。
思慮分別は遠くに離れ、
謙虚さは頬を赤らめて出て行ってしまった。
自尊心が傲慢なそぶりで、
大口を開けた破廉恥を引き連れ、
偽善が眉を顰めた素振りで侵入し、
下品さが咎め立てするふりして入ってきた。

世間的な常識に欠けた行為であると、トランプ遊びに興じている女性たちに、年相応の良識ある行為を求めているが、女性にたしてスウィフトは、そのような期待すら持っていないのである。彼はアイルランドの女性たち、とりわけ富裕層の婦人たちには、失望し、何の期待もしていないのであった。カード遊びに現を抜かしている夫人達に非難の眼を注いでいる。彼の女性蔑視の姿勢が明らかとなった詩編である。

Say, foolish Females, Old and Blind,
Say, by what fatal Turn of Mind,
Are you on Vices most severe
Wherein yourselves have greatest Share ?⁹⁶

年老いた世間知らずの愚かな女性たちよ、
いかなる心の迷いからか、
自堕落で過ごすのか、恥を知れ、
すべての責は、汝自身にあるのではないのか。

国家財政が破綻の淵にあることなどおかまいなしに、遊楽に耽り、虚飾に身を任せて、輸入した奢侈品を身にまとう婦人たちに対する、増幅された怒りが見られる。1730年1月には、ダブリン市長はじめ市議会一致で、スウィフトに名誉市民の称号を与えることを決定した。この決定に際して、枢密顧問のアレン(Allen)卿は、貧しい財政の中から、国王を尊重しない者に経費をかけると反対した。我が身に寄せられた榮譽に、一片の反対を投げられたスウィフトは、名誉を傷つけられた怒りから、どもる癖のあるアレン卿を、「舌のもつれ」(“Traulus”)と題する詩で攻撃した。このようにスウィフトは、自身に加えられた屈辱に対して敏感の反応し、強烈に復讐のパンチを繰り出すのであった。彼の諷刺は、被害者意識が強いこともあって、僅かな軽口でも身に覚えがあれば敏感に反応して、強烈に報いる性質のもので、国家間の問題でも、当事者としての認識が無い限りは反応しないのであった。アイルランドの女性たちを対象とした警告も、無視されるや、これら近代の女性達

⁹⁶ Swift, *The Poems II*, p.449. ll.150-153.

の放縦な生活ぶりに対して、批判の刃を諷刺で繰り出したのである。国家財政を危うくしている元凶である輸入奢侈品の購入を糾弾する目的で、「近代女性日誌」批判を繰り出して、これら女性を痛烈に諷刺した。彼はこの詩で、女性の実態を暴露して、アイルランド経済を危うくする奢侈品購入にうつつを抜かす愚かさを告発したのである。しかし、彼の警告が受け入れられぬと悟ったので、女性蔑視の姿勢を明らかにして、彼女たちを糾弾したのであった。これはそのようなスウィフトの姿が、ありありと見られる詩である。

2 スウィフトの女性観

第1章 スウィフトは女性に何を求めたのか

スウィフトの女性観に影響を与えた最初の女性は、母親アビゲイルであった。幼くして母親に見捨てられ、1689年、名誉革命の混乱を避けるためイングランドに行くまで、母親と会うことはなかった。幼少より母親の愛情に縁の薄いスウィフトではあったが、この母親に対する憧憬の想いは捨てがたかったようで、生涯彼の居間に、母親の故郷レスターシャー(Leicestershire)の地図が張られていたことから、充分推察できる。1710年5月26日、ララコール(Laracor)にいたスウィフトの元に、姉ジェーン(Jane)から、母の死の知らせが届いた時、母に対する積年の思いを次のように記している。

I have now lost my barrier between me and death; God grant I may live to be as well prepared for it, as I confidently believe her(Abigail) to have been ! If the way to Heaven be through piety, truth, justice, and charity, she is there. ⁹⁷

私と死の間にある障壁を失ってしまった。母がずっと無事に生きていること確信しているが故に、神よ、どうか私が死に対する心の準備ができると同様に生きることができるようお守りください。天国に至る道が敬神、真実、正義、慈悲心を通して導いていくものなら、母はきっとそこにいます。

スウィフトは幼くして自分だけをアイルランドに残して、姉ジェーンと共にイングランドに去ってしまった母親に対して、恨みがましい想いをもち続けてはいたが、母の死に際して積年の思いを捨て去ったことが、この書簡から読み取れる。それに反して姉ジェーンは、フェントン(Fenton)なる皮革業者と、スウィフトの反対を押し切って結婚し、その挙句、12年後には離婚の憂き目をみたこともあって、傍に近付けず、一定の距離を置いていた。しかし、愛情のかけらもない間柄ではなかったことは、1736年姉が死去するまで、寡婦となった姉に、定期的に手当てを送り続けていたことでも分かる。姉の手元に送金が届いていないことを聞いて、早速、姉の元への送金をし、出版業者のモット(Motte)に手配している書簡からも、姉に対する愛情は推察出来る。自分の忠告を無視した姉ではあったが、冷たい姿勢を示しながらも、肉親としての情愛を捨てきれず、心にかけていたことが淡々とした書簡からも汲み取れる。このようなスウィフトの肉親に対する複雑な心情もまた、彼の女性観の判断を決めかねる要素である。肉親には、常に身近な存在であることを求めている。それ故、他の女性に対するのとは異なった心情で、肉親には接していたのである。女性全般を浅はかで、愚かな行為をする傾向が強く、内面の教養涵養に無頓着な存在である

⁹⁷ Swift, *Miscellaneous and Autobiographical Pieces*, p.196.

と考えていた。女性同士の取り止めのない会話に現を抜かし、衣装に対する情熱ばかりが際立っており、真の友愛関係の樹立が出来ない存在であると断じていた。そのようなスウィフトには、女性を妻として受け入れる感情の余地は見られない。彼は女性の、妻としてあるべき姿を、次のように決め付けている。彼は自分の肉体的欠陥からも、女性を妻としてみる視線から外していたのである。妻は夫たちと会話の席に同席しても、論議に加われないくせに、仲間の女性たちとは、他愛も無い会話に打ち興じている。彼女たちの話題は、常に他人に対する妬みに終始していると、軽蔑した視線で語って、「癩癩もちの癖に、衣装や流行を追いかけることに熱心で、芝居や教会のあり方にまで、不満をぶちまけている」と妻たちを非難している。彼が妻に望んでいる姿は、夫と会話を楽しめる教養であり、質素ながら清潔で美しい装いなのである。流行している華美な衣装に包まれていても、知識に欠けることは望んでいない。控え目で、キラリと輝く知性の持ち主であることを、望んでいた。彼の女性教育に対する考え方を、「女性の教育について」(“Of the Education of Ladies”, 1712) から、妻としての資質のありようを考察した。

whether it be prudent to chuse a wife, who hath good natural sense, some taste of wit and humour, sufficiently versed in her own natural language, able to read and to relish history, books of travels, moral or entertaining descourses, and be a tolerable judge of the beauties in poetry. ⁹⁸

妻を選ぶにあたって、気取らず、ウィットとユーモアがあり、自然な言葉で叙事詩をきちんと創るセンスをもっているか、読書を好み、歴史に関心を持ち、旅や道德についての本や娯楽について語れるか、あるいは詩の美しさをよく理解できるかなどの資質について慎重でなくてはならない。

彼が求めている妻のあり方は、知的感性の持ち主で、詩作に勝れ会話に秀でている女性であった。嫌悪するのは、愚かなくせに淑女ぶり、色目を使い、賭け事に熱中して、終日のらくら遊び回る女性で、お喋りに旬日のない癩癩もちで、他人の噂話に明け暮れる女性であった。彼女たちは、暇さえあればトランプ遊びに熱中していると、軽蔑した評価を下している。彼は自分を至高の存在として崇め、褒めそやしてくれる女性を求めていたのであった。彼は肉体的には、女性を結婚の対象として考えていなかった。むしろ結婚を求める女性に嫌悪感すら抱いていた。全ては彼の梅毒罹患に原因があるのである。結婚を迫るヴァネッサに対して冷たい視線で報い、単身アイルランド移住を果たしたステラへの処遇も、その原点は梅毒罹患が原因となって、醸成されていたことでも明らかである。彼は結婚して家庭を持つことを、理想の姿としていたのであった。彼は両親が果たせなかった幸せな家庭生活を、自分の手で達成しようと考えていた。若気の至りとはいえ、若さに任せ

⁹⁸ Swift, *A Proposal for Correcting the English Tongue Polite Conversation*, p.225.

での放埒な一時の生活の乱れが、幸せな家庭生活の可能性を、根底から覆してしまったのであった。それだけに、自分の梅毒罹患を後悔したのであるが、その怒りを自分に向けたのではなく、自分を不幸に陥れた女性に、その責任の全てをなすりつけて、女性蔑視へと走って行ったのであった。梅毒罹患が彼を結婚不適合にしたのであった。結婚不適合となった彼の結婚に対する考えを、『ガリヴァー旅行記』第3話ストラルドブルグから引用してみる。

If a *Struldburgg* happen to marry one of his own Kind, the Marriage is dissolved of Course by the courtesy of the Kingdom, as soon as the younger of the two comes to be Fourscore. For the Law thinks it a reasonable Indulgence, that those who are condemned without any Fault of their own to a perpetual Continuance in the World, should not have their Misery doubled by the Lord of a Wife. ⁹⁹

もし、ストラルドブルグが似通った人格・性格をもつ仲間と結婚するようなことがあれば、王国の儀礼は、若い2人のうちどちらか若い方が80歳になると、すぐに解消される。法律は何の罪悪もないのに非難されるのは理由が無いと考えられ、ストラルドブルグは不死という罪科を科せられているのであるから、結婚して、いまさら悲劇を重ねるべきではない。

彼はここで彼の潜在的結婚願望を一步先行して、結婚後にまで遡って論述したのである。ストラルドブルグでは、80歳に達したならば婚姻は解消される。それは、不死の宿命を背負った老人に、更に妻という重荷を背負わせることは過酷であるとの見解によるもので、スウィフトは、妻帯が人生の重荷であると考え、己の老齢期を想像して、結婚という頸木の無いことが、望ましいと考えていた。「賢馬の国」(Houyhnhnms)では、彼らの婚姻の風習に借りて、彼らの結婚観に賛意を表している。彼は肉体的結合よりも、血統による結合に重きを置いていたのである。梅毒罹患により結婚不適合となってしまった自分を顧みて、結婚生活に否定的見解を述べざるを得なくなったのであった。「賢馬の国」の住人が、肉体的結合に重きをおくことなどは考えられなかったのである。ガリヴァーが、肉体的結合に否定的見解を示すのは、当然の帰着であった

賢馬族は血統の乱れを嫌い、結婚に際してはそれぞれの特性を考慮していたのである。その点で賢馬族の見解は、ガリヴァー(スウィフト)の見解そのものであった。男性は力強く、女性は物静かであることが第一義で、両性の資質が劣っているならば、生まれてくる子孫の不幸は計り知れないと、生まれて来る子供の将来が、血統の正しさを第一義と心懸けた。結婚相手の性格や相性よりも、血統を何よりも重要視している姿勢が見られる。ここにスウィフトの結婚願望があり、果たせない肉体的欠陥に対する切ない心情が見られ

⁹⁹ Swift, *Gulliver's Travels*, p.196.

るのである。スウィフトは愛の存在をさほど重要視してはいないが、種の劣化には注意しなくてはならないという、「賢馬族」の種の保全に関する考えを、自身の想いとして語り、安易な婚姻に対して否定的な考えを披瀝したのであった。この感想こそスウィフト自身の思いであり、フェミニストを装ってはいるが、強烈な女性に対する差別の想いを、内に秘めているのであった。スウィフトは結婚に際しては友愛と博愛こそが重要で、理性に従って行動することが、あらゆる種にとっても同様な重みを持っていると、結婚における性愛的要素を否定している。彼は結婚には精神的結合こそ重要であると考えていたのではあるが、梅毒罹患によって性愛を伴う結婚が不可能となったので、肉体的結合の必要性には、否定的見解を示さざるを得なくなった。彼はこのような自分の性向を、梅毒罹患によって結婚不適応な肉体となった、自分を恨むのではなく、梅毒を罹患させた女性たちに恨みを向けたのであった。1723年、「結婚に臨む若き婦人に贈る書簡」(“Letter to a Young Lady on Her Marriage”) で結婚に際しての忠告という形をとって結婚観を述べ、男の本性についても論述している。そこには、スウィフトの結婚否定をせざるを得なくなった考えが述べられている。

....without which it is impossible to acquire or preserve the Friendship And Esteem of a wise Man, who soon grows weary of acting, the Lover, and treating his Wife like a Mistress, but wants a reasonable Companiom, and a true Friend rough every Stage of his Life. It must be therefore your Business to qualify your self for those Offices; wherein I will not fail to be your Director as long as I shall think you deserve it,by letting you know how you are to act, and what you ought to avoid. ¹⁰⁰.

....尊敬する賢い男性と友情を大切に持ち続けることは不可能です。男性は恋人を演じ、妻を愛人の様に扱うことにすぐに飽き飽きします。そうかと思うと、男性は道理の分かる相手を彼の人生の要所で求めます。彼が求める女性になるように努めるのが貴方の役目なのです。それゆえ、私は貴方の指導者になります。貴方がそれにふさわしいと私が思う限り、どう行動すべきが、何を避けるべきか、教えましょう。

妻としてどのような人たちとの交わりでも、謙虚な会話が楽しめるように勤めるべきである。男性は妻に礼儀正しさと、並み優れた気品を求めるものであると、思いを語ったスウィフトは、結婚に対する否定的な自分の考えを披瀝して、徒に綿々と結婚に幻影を求めないことが肝要だと、結婚に余計な期待を抱くことを戒めている。結婚は、冒険空想小説のように行かないのであると、現実的な判断を示して結婚に対する幻影を期待することを諫めた。彼が女性に求めていたのは、非性愛的友愛であり、尊敬に値する資質の涵養、優美な会話能力と礼儀正しい気品と慎みであった。彼も当時の男性と同じく、女性は男性

¹⁰⁰ Swift, *Irish Tracts 1720 1723*, pp.85-86.

より劣った存在であると考えていた。それ故女性は優れた男性の資質に学び、教養を高め、広い視野に立っての判断力をつけることが肝要だと考えていた。しかもその資質をひけらかすべきではなく、でしゃばりでお喋りの女性は信用を失うから、己の才知を隠し、あらゆることを学び、読書して知性を磨くことを推奨している。トランプ遊びに現を抜かし、華やかな衣装を競い合う愚かしさを指摘して、虚飾と虚栄を捨てることを勧めた。男性は愚かな女性に軽蔑こそ感じて、決して尊敬はしないのだと厳しく諫めている。これは終生変わらぬ彼の信条であった。

スウィフトは、堅固な封建制度の残っていた時代の、時流に流されない女性観の持ち主でもあった。従って彼は、女性は男性にとっては飾り物に過ぎず、女性に求められていた資質は、ダンス、音楽、絵画や、詩を読む程度であった。男性に伍して会話に参加するなど論外で、ひたすら聞き手に回ることを求めている。政治や社会情勢、哲学や文学という類の、男性にとっては当たり前の教養も、女性には無用のものと考えていたのであった。しかし、一旦梅毒罹患によって妻を迎える資格を失った今、彼が求めたのは、男性と伍して引けをとらない知性を、たおやかな姿態に包み、女性的な慎みを忘れない女性の姿となつたのであった。母の温もりを知らずに育った彼は、漠然とした女性に対する憧憬の念を、心奥に秘めて、表明するのを恐れていた。彼は自分の肉体的欠陥が、顕わになることを怖れ、結婚にも否定的見解を示すようになったのである。

スウィフトの人生にひと時、色彩りを与えた女性たちがいた。彼女たちの一人には結婚を申し込み、結婚をせがむ一人には、冷たい眼差しで拒み、残る一人は形式的な結婚をしたことが想定される。これらの女性たちとの間で交わされた書簡や、詩編から、スウィフトの女性観を探ってみよう。彼が求めていたのは、性愛を拒否する女性で、常に傍らにあって、辛く苦しい時には慰めてくれる女性の優しさであり、性愛を忌避している女性であった。この様な心情は幼いころに母親に見捨てられ、親しく交わった姉とも別れざるを得なかった彼の幼児体験が、醸成した感情であった。女性たちには性愛に代り、同性愛に近い友愛を説いたのであった。友愛を説くことで、性愛にふれることを避け、梅毒罹患による肉体的欠陥が、表面化することを怖れたのである。

第2章 スウィフトを取り巻く3人の女性たち

第1節 ジェーン・ワーリング

キルルート(Kilroot)教区の宗派の異なる住人の中にあつて、孤軍奮闘の布教活動の毎日であつたスウィフトの心に、潤いを齎す出会いがあつた。数か所の聖職禄の所有者であつたロジャー・ワーリング(Roger Waring)の長女ジェーン・ワーリング(Jane Waring)である。彼女の父親ロジャーは50歳になるやならずの、1692年死去していたが、1682年から1690年にかけて、ドロモア(Dromore)の助祭長を務めた人物であつた。この一家はキャリックファーガス(Carrickfergus)の南西30マイルの、ワーリング(Waring)村に住居を構えていた。このロジャーの長女に、スウィフトが知遇を得たのは、彼女が21歳になろうとしていた時であつた。

彼はジェーンが、孤児同然の身であることを知り、有頂天になつたのである。そのため自分の身が、梅毒罹患による結婚不適應であることを一時的に忘却してしまつた。スウィフトは自分を家父長とする、家庭生活を思い描いてしまつたのである。彼の想いは一途に、このジェーンとの結婚生活に向つてしまつた。

スウィフトの着任地キルルート教区に属する、ウルスター(Ulster)州のアントリウム(Antrim)は、スコットランド系移民の多い教区であつた。彼らの信仰は長老会派が多数を占めていて、英国国教会の信者は数えるほどであつた。連日のように続く布教活動と、孤軍奮闘の教会運営で疲れ、荒んでいたスウィフトの心に、潤いを与えてくれた若い女性の存在は、一途に彼を恋の虜にしてしまつた。この当時ワーリング一家は、未亡人となつた母親と、ベルファースト(Belfast)に居をかまえていた。スウィフトはジェーンにラテン語風に、ヴァリナ(Varina)と愛称をつけて呼ぶようになった。一家の住まいのあつたベルファーストは、この地方の中心都市でもあり、キルルートとベルファーストは僅か数マイルしか離れていなかったのも、馬に乗って1時間足らずの距離であつた。8人兄妹の長女のワリーナは、父を失つた孤児のような境遇に加えて、健康にも優れなかつた。スウィフトは彼女の体調不良に同情し、彼女の父親の役割を演じたいと思うようになっていた。1695年の終わりには、互いに書簡を交わす間柄となつた。¹⁰¹ 布教に疲れたスウィフトが求めたのは、乾ききつて荒んだ心に潤いを与えてくれる若い女性であり、彼に安らぎを与え、希望の炎を翳して呉れる女性であつた。中流以上の家系の女性で、彼が叱り、教え諭せる愛すべき女性の存在を求めていた。しかし彼の心の片隅には、結婚できない自分の肉体的欠陥の存在はあつたのであるが、乾いた心にしみこむような若い女性の存在が、梅毒罹患による結婚不適應の自分を一時的に忘れさせてしまつたのである。彼を取り巻く環境には、

¹⁰¹ “By the end of the year, Swift had enough assurance to be correspondending with Varina during a visit which he made to Dublin.”(Swift, *Irish Tracts 1720-1723*, p.166.)

そのような女性は存在しなかった。そのスウィフトに対するヴァリナの対応は、貧しい聖職者を見下すような態度であった。彼が生涯初めて口にした結婚申し込みも、経済的理由をもって拒否されてしまった。自尊心の人一倍強烈な彼は、ヴァリナに拒否されて、いまさら自分の梅毒罹患を思い出したのであった。スウィフトは以後、再び結婚を口にするとはなくなってしまった。彼が結婚を申し込んだのは、生涯を共にする伴侶を求めたのではなく、家父長として彼を敬う女性であった。布教活動の苦しみを、理解してくれる仲間が欲しかったに過ぎなかったのであった。ここに彼がヴァリナに書き送った最初の書簡がある。そこには一時の心の迷いから、恋を求める若者の想いが書き綴られている。彼を一途に結婚に走らせなかったのは、梅毒罹患という重荷を背負っていたからに他ならない。

Swift to Miss Jane Waring

29 April 1696

Oh, Varina, how imagination leads me beyond myself and all my sorrow ! Tis sunk, and a thousand graves lie open ! –No, Madam, I will give you no more of my unhappy temper, though I derive it all from you Farewell, Madam, and may love love make you a while forget your temper to do me justice. Only remember, that if you still refuse to be mine, you will quickly lose, for ever lose, him that is resolved to die as he has lived, All yours, Jon. Swift.¹⁰²

スウィフトからミス・ジェーン・ワーリングへ

1696年4月29日

ヴァリナよ、想像を絶するような己と全ての悲しみをどう表したら良いのでしょうか！幾百もの墓穴が口をあけて悲しみを待っている。お嬢さん、どうしたら私のこの不幸な心を伝えたらよいのでしょうか。この悲しみに耐えられません。貴方から別れを告げられたとしても。貴方は正しいことをしているのです。忘れないでください、貴方が私の妻となるのを断ったとしても、生きているよりも、死ぬ方がまだと私に思わせるのですから。ジョン・スウィフト。

この書簡は彼の一途な恋心を訴えるものであった。スウィフトの一途な想いに反してヴァリナの対応は異なったものであった。彼女は健康状態に加えて、経済的な局面にまで思いを馳せていた。彼女は生活水準を、現在以上であることを望んでいたため、スウィフトの収入には満足できないでいた。彼女の書簡には、様々な将来の不安や要望が書き綴られていた。スウィフトもまた躊躇するヴァリナの態度に梅毒罹患の事実を重ねて、態度を決めかねていた。そんな折、テンプル卿から誘いの書簡が、スウィフトの元に届いた。卿の要請に応えることで、イングランドに於ける聖職録取得の可能性を感じた彼は、梅毒罹患

¹⁰² Swift, *The Correspondence I*, p.23.

により生じた自分の肉体的欠陥を秘匿したまま、ヴァリナが拒絶するであろうことを予想した上で、期限を定めて結婚を迫ったのであった。両者の間で交わされた最後の書簡がある。そこには梅毒罹患を承知したうえで、結婚を求めた自分の姿勢に反省している気配が強く滲んでいた。彼は結婚の性愛的側面に思い至って、その資格の欠落者としての自分に思い至ったのであった。そのため、結婚への要求が後退していった。常にスウィフトには梅毒罹患が、根強く心奥を占めていたのであり、結婚不適応が不安感を煽っていたのである。この第 2 信は、結婚申し込みを冷たく拒絶したヴァリナに対する報復ともとれる、そっけないものであり、復讐の色彩の強い文面となっている。彼はもうヴァリナから承諾の返事を貰うつもりはなくなっており、テンプル卿の下で新しい未来の開けることを夢見ていたのである。

Swift to Miss Jane Waring

Dublin, May 4, 1700.

Now for what concerns my fortune, you have answered it. I desire, therefore, you will let me know if your health be otherwise than it was when you told me the doctors advised you against marriage, as what would certainly hazard your life. Are they or you grown of another opinion in this particular? Are you in a condition to manage domestic affairs, with an income of less (perhaps) than three hundred pounds a year? Have you such an inclination to my person and humour, as to comply with my desires and way of living, and endeavour to make us both as happy as you can? Will you be ready to engage in those methods I shall direct for the improvement of your mind, so as to make us entertaining company for each other, without being miserable when we are neither visiting nor visited?¹⁰³

スウィフトからミス・ジェーン・ワーリングへ

ダブリン、1700年5月4日

私の財産などに関して既に返事をくださった。だから私に教えてください。あなたの体調が、あなたの人生に確実に悪影響を与えかねないから、医者があなたに結婚を勧めなかったとあなたは言いましたね。このことに関して医者たちは、あるいはあなたは他に特に付け加える事がありましたか？貴方は年300ポンドで家事をこなす自信がありますか。貴方は私の人柄や気質に好感し、私の生活習慣に従い、共に幸せな生活を送る努力が出来ますか。そのために心の準備は出来ていますか。互いに尊敬し、生活を共に出来ますか。互いに離れ離れにいても惨めになることなしに。

スウィフトのこの書簡には、恋を求める口調ではなく、彼の妻としての覚悟があれば、

¹⁰³ Swift, *The Correspondence I*, pp.35-36.

結婚してやってもよいというような、高圧的口調に終始していて、彼の態度が後退していることが分かり語調が硬質なものとなっている。梅毒罹患による肉体的欠陥が、彼の結婚への意欲を殺いだのも、姿勢が後退している一因であった。結婚に対するヴァリナの回答は、経済上の理由に加えて、健康不安も否定の要因の一つであった。スウィフトは彼女の回答を逆手にとって、私と結婚して、生活を共にする覚悟があるなら結婚してやってもよいと、恋する若者のひたむきな愛の訴えではなく、勝ち誇った勝者の雄叫びにも似た口調が見られる。彼は彼女に、妻に相応しい素養の有無を問い正したのであった。このヴァリナとの結婚申し込みに対する最初の挫折は、若きスウィフトのプライドを傷つけ、女性の見方を頑なにしたと考えられる。後年、この折の屈辱を思い起こして記述したのであろう『結婚に際する若き女性に贈る書簡』(*A Letter to a Young Lady on her Marriage, 1723*)で、結婚観を次のように語っている。

I CAN give you no Advice upon the Article of Expence; only, I think, you ought to be well informed how much your Husband's Revenue amounts to, and be so good a Computer, as to keep within it, in that Part of the Management which falls to your Share; and not to put yourself in the Number of those politick Ladies,...¹⁰⁴

家計支出に関しては何も忠告は出来ませんが、貴方のご主人の収入がどのくらいか、はっきりしておくべきです。そしてその範囲内で切り盛りすべきです。貴方の責任の範囲でやりくりし、他の事柄に関わらないことです....。

ここにも、梅毒罹患により肉体的に結婚できないため、ひたすら家計のやり繰りのみを求めてスウィフトの姿が見られる。このように結婚の側面にのみ固執するな姿勢も、若年の困窮に倦み、ヴァリナに経済力のなさを理由に拒まれた結果であった。経済的弱者として彼女にすげなく想いを拒絶されたことが、スウィフトの心中に深い傷跡を残した結果でもあった。ヴァリナがスウィフトの想いに応えなかったのは、イングランドに戻る決意を定めた彼が、彼女に決断を急かしたことも一因であった。ヴァリナの決断が遅れたのは、彼女自身の健康不安と、スウィフトの低収入にあった。¹⁰⁵ 彼は生涯の伴侶が欲しかったのではなく、忙しく実り薄い布教活動で疲れ切った心を、温めてくれる友人が欲しかったのに過ぎなかった。彼は結婚の性愛的要因には無頓着なふりをしていたかったのである。そのため、何時も傍らにあつて寂しさを慰め、荒んだ心を温めてくれる友人が欲しかったに過ぎなかった。このスウィフトの想いに反して、ヴァリナの心中は結婚そのものにあつた。両者の思惑は、完全に齟齬していた。かくして彼の最初にして最後の求婚は不調に終

¹⁰⁴ Swift, *Irish Tracts 1720-1723*, p.94.

¹⁰⁵ for she had originally withheld her hand with the rather brittle arguments that her frail physique made marriage a risk for her health, and that Swift's low income made it a threat to her comfort. (Ehrenpreis, *Swift II*, p.20)

わったのであった。以後スウィフトは、結婚を再び口にはしなかった。この挫折は彼の自尊心を傷つけたのでは無く、彼を安堵させたのであった。彼は同時に、梅毒罹患による結婚不適應な我が身を、思い知らされたのもあった。彼の自尊心は、梅毒罹患という事実
にひどく傷ついたのであった。キルルートの聖職禄を、オックスフォード滞在時の友人ジョン・ウィンダー(John Winder, c.-d1717) に譲って、1696年5月、3度ムーアパーク(Moorpark)に戻った。この決断が後に、彼のイングランドでの聖職就任の妨げとなった。

第2節 エスター・ヴァイナミリー

スウィフトを取り巻くもう一人の女性が、彼と結ばれることを夢見てアイルランド移住を果たし、孤独の内に死去したエスター・ヴァイナミリー(Esther Vanhomrigh, 以後ヴァネッサと表記)である。聖バレンタインの日(St. Valentine's Day)生まれという、彼女の言葉によれば、1687年2月14日生まれということになる。父親バーソロミュー・ヴァイナミリー(Bartholomew Vanhomrigh)は、オランダ系の商人として財を築き、1697年にはダブリン市長(Commissary General)に選ばれたが、1703年1月29日死去している。母親ヘスター(Hester)は、アイルランド歳入長官(Commissioner of the Irish Revenue)を務めたジョン・ストーン(John Stone)の娘で、上流階級志向の強い夫人であった。この両親の間には、彼女を筆頭に次女メアリー(Mary)、長男バーソロミュー(Bartholomew)、夭折した次男ギンケル(Ginnkel)を含めて4人の子がいた。父親の死後の1707年、ヴァイナミリー一家はロンドンに移住を果たした。母親は派手好き社交好きな性格であったが、長女エスター(Vanessa)は、内向的で社交嫌い、自己の内面世界に閉じこもり、精神的な存在の追及を好む内省的な乙女であった。スウィフトがこの一家と誼を通じるようになったのは、10分の1税¹⁰⁶減免申請の際の、宮廷伺候の衣装替えの場所として、彼女たちの家を利用させて貰ったことから始まった。スウィフトがヴァネッサに初めて会った時、彼女は父親のない孤児状態の存在であった。彼はここでも自分を頂点とする家族の中に、ヴァネッサの立場を見出した。彼が心に思い描いていたのは、威厳に満ちたテンプル卿を家父長とする家族の姿であった。彼はテンプル卿を自分に置き換え、自分を家父長とする家族生活を思い描いていたのであった。そこには得られなかった家族と共にある自分の姿があったのである。

In his youth he sought female society merely as a relaxation from unpleasant thoughts, and from Stella and Vanessa he seems, at a later period, to have required no other proof of affection than the pleasures of intimate friendship, enlivened by female wit, and softened by female sensibility.¹⁰⁷

若いころは日常生活の不愉快な出来事から解放されようと、寛ぎのために、女性たちの集まりを求めていた。後になって、ステラやヴァネッサから、愛情の徴ではない親密な友情の喜びを見つけ、女性の知力で元気付けられ、女性の感受性で和まされたようだ。

若いころ女性と接触していたのは、女性の繊細さで、日常の布教活動の疲れをいやして

¹⁰⁶ 十分の1料。Tithe 収穫物収益の十分の1を教会に収める収益課税。

¹⁰⁷ Scott, *Memoirs*, p.218.

貰いたかったからで、愛情を求めたものではなかった。スウィフトの女性達を遇する方法は冷淡なもので、しばしば自分の冷淡な性格を自慢そうに話していたと、スコットは語っている。彼が女性に求めたのは、思い悩んだ折々、鬱積した心を解放してくれる、暖かく優しい存在であった。単にそのためだけに、女性と交際したのであると語っている。人生の後半生になって、女性との交遊も、親密な友情からの交流であって、愛情に基づいたものではなかった。そこには彼の梅毒罹患という影が付き纏い、結婚不適應の心理的圧力が加わっていた。彼は女性の才覚で陽気にさせられ、女性の細やかな感情で、心を和ませて貰いたかったに過ぎなかった。彼は梅毒罹患による肉体的欠陥ゆえ、肉体愛の存在を否定し、結婚の性愛的結合を拒否していたのであった。彼が女性に求めたものは、精神的な友愛だけであった。勇氣、率直さ、恒常性や誠実さ、といった男性的資質を、繊細さや感受性といった女性的な資質より高く評価していた。性愛的要因の存在する結婚を否定し、激しい愛情表現には嫌悪感すら抱いていた。彼の女性に対するこの想いに反して、ヴァネッサは、異性愛に根ざした、激しい愛情表現をする女性であった。このような性情の彼女は、1723年6月2日死去した。彼女の死をオレリー卿は、次のように述懐している。

Spleen and disappointment were the companions of her solitude. The narrowness of her income, the coldness of her lover, the loss of her reputation, all contributed to make her miserable, and to increase her frenzical disposition of her mind. ¹⁰⁸

不機嫌と失望が常に彼女の孤独とともにあった。収入の心細さと恋人の冷たさ、信望の喪失、あらゆるものが彼女を惨めにさせた。そしてあらゆるものが、心の高ぶりを増大させた。

ヴァネッサは、心細い収入と冷たい恋人に加えて、世評からも忘れ去られたような自分の姿を思いやって、みじめな心境になっていた。彼女は不機嫌と失望に後押しされて、激情に駆りたてられた挙句、死を選んでしまったと語っている。彼女の死の真相は謎のままであるが、梅毒罹患により肉体的に彼女を愛することが出来なくなっていたスウィフトにも、責任の一端はあると考える。1723年7月23日付のミース(Meath)の司教ジョン・エヴァンス(John Evans)が、「彼女は人格も感情も破綻し、宗教心さえも失ってしまった。」と語って、彼女が人間的感情を失い、宗教心も失った挙句の自死であったと感じていたことを、オレリー卿は記述している。

Tis generally believed she lived without God in the world. When Dean Price offered her his services in her last minutes: she sent him word no Price no prayers with a

¹⁰⁸ Orrery, *Remarks*, p.158.

scrap out of the *Tale of a Tub*--- and so she died. ¹⁰⁹

彼女はこの世の中で神の存在が無く生きていたと信じられていた。プライス司祭が彼女に最後の祈りをささげようとしたが、彼女は言葉や祈りは価値が無いと『桶物語』の一編を伝え、やがて死んだ。

ヴァネッサは教区の司祭プライス(Price)師の「終油」¹¹⁰も断り、祈りも聞かず死を迎えたと、ジョンソン先生(Dr. Johnson)は彼女の死を同情して語っている。信頼できる友人もなく、怒りをぶち明ける相手もいなかったこともあって、彼女は疎外されたと感じて絶望し、失意のうちに死去したのである。スコットの見解は若干異なっていて、スウィフトとの結婚の事実を、ヴァネッサが直接ステラに問い質した書簡を送ったことで、スウィフトの怒りをかっただけが引き金になったと語っている。¹¹¹ いずれにしてもヴァネッサの死は、スウィフトとの結婚の可能性を失い、全ての望みを失った絶望の果ての、孤独な死であった。ヴァネッサが、スウィフトの梅毒罹患による結婚不適應の事実を知らずに絶望し、挙句の果ての死であった。それだけに「やり場のない怒りが彼女に死を選ばせた。」と、死に臨んだヴァネッサの心境を語るスコットの言葉は無残に聞こえる。5月1日に作成されたとする遺言には、スウィフトの名前は取り消されて、6,000ポンドに及ぶ不動産の管理人として指名されたのは、民事訴訟の判事マーシャル(Marshal)と、哲学者で、後にクロイン(Cloine)の司祭となったバークレイ(Berkley)であった。どのような愛情表現を彼女が表明していたか、それに対するスウィフトの反応を、エーレンプライスの記述から検証した。

Sexuality and marriage were not elements in Swift's scheme. So long as Vanessa put up with his caprices, showered him with affection, copied his ideas, and took his advice seriously, he could indulge himself in the titillations of her seductiveness. Her bad health had a charm beyond that of a mirror-image; for it meant that death might cut their tie before it grew intolerable. 'I never knew a very deserving person of that sex', [ie., the female sex] he once told Bolingbroke, 'who had not too much reason to complain of ill health' ¹¹².

結婚と性生活はスウィフトの考えには無かった。ヴァネッサがスウィフトの気まぐれ

¹⁰⁹ Orrery, *Remarks*, p.163.

¹¹⁰ 終油：(Extreme Unction) カトリック教会の秘蹟のひとつで、本来は心身の健康のための病者への塗油、後に信者の臨終に際して行われた。『広辞苑』より。

¹¹¹ "As he entered the apartment, the sternness of his countenance, which was peculiarly formed to express the fiercer passions, struck the unfortunate Vanessa with such terror, that she could scarce ask whether he would not sit down." (Scott, *Memoirs*, p.225)

¹¹² Ehrenpreis, *Swift III*, p.391.

に耐え、もっと愛情を注ぎ、彼の助言を真剣に考える限りは、スウィフトも彼女の魅力に快い刺激を受けていたのである。彼女の不健康は合わせ鏡のようで、彼女の死は、耐えられなくなる前に 2 人の絆を断ち切ることを意味していたのだ。ボーリングブローク子爵にかつて「彼女の様な望ましい女性に会ったことが無い。不健康を悔やむ理由などはないのだ」と語った事があった。

梅毒罹患により性的な交わりや、結婚など思いもよらなかったスウィフトにとって、結婚を迫るヴァネッサは、煩わしい存在でしかなくなっていた。彼女が不健康を嘆けば、両者が取り返しのつかない状況になる前に、死別出来るであろうとさえ思うようになっていた。彼女に対する彼の感情の変化を、両者の間で交わされた書簡から見てみる。

スウィフトがヴァネッサに真情を持って接していたことは事実だが、彼が梅毒罹患によって結婚できない肉体であった事実を、彼女が知らなかったことは、結果的には彼女の心を弄んでいたことになり、その陰で、ステラへの愛情を温めていたスウィフトは許しがたいと考えられる。彼にとってステラは聖域であったが、その聖域にヴァネッサが踏み込んでしまったのが悲劇の始まりであった。彼とヴァネッサの間で交わされた書簡から、両者の間柄を見てみよう。両者の交流に関しては 1710 年 10 月 19 日のステラへの書簡第 7 書 (*Journal to Stella*, No.7. October 19, 1710) に、オックスフォード伯の知遇を得たことや、ヴァイナミリー家と交流していたことが記述されている。食事の際、傍らに仕えていた 2 名の女性¹¹³ とのみ記されているのが、彼女に関する最初の記述であった。スウィフトは、ヴァイナミリー家の事情を知る立場になったのを書き送っている。

LETTER VII

THURSDAY

London, Oct. 19, 1710.

I dined with Mrs. Vanhomrigh, and went to wait on the two lady Butlers; but the porter answered, They were not at home: the meaning was, the youngest, lady Mary, is to be married to-morrow to lord Ashburnham, the best match now in England, twelve thousand pounds a year, and abundance of money.¹¹⁴

書簡 7

木曜日

ロンドン、1710 年 10 月 19 日

私はヴァイナミリー婦人と食事をしました。そしてそばに仕えている二人の女執事の所へ行きましたが、ポーターが、彼女たちは家には居ないと答えました。それは、若い方の娘マリーは明日アッシュバーナム卿と結婚することを意味していました。彼

¹¹³ “I dined with Miss. Vanhomrigh, and went to wait on the two lady Butlers”(Swift, *Journal to Stella*, Vol.I, pp.64-65)

¹¹⁴ Swift, *Journal to Stella*, pp.64-65.

らはイギリスで最もふさわしい組み合わせで、年収 12,000 ポンドの財産をもち、お金は有り余るようです。

ヴァイナミリー家の情報を伝える『ステラへの消息』(*Journal to Stella*) の記述は、1713 年 6 月、スウィフトが聖パトリック教会の首席司祭補就任のため、アイルランドに帰国するまで続いた。ヴァイナミリー家との交流を明らかにする記述は少なく、食事に関する記述が主であった。その食事に関して詳細を伝えている記述は、5 月 7 日、6 月 3 日、7 月 3 日の 3 回に過ぎない。8 月 14 日にはヴァイナミリー夫人が、家主とのトラブルから、引越しをしてスウィフトの住居の近くにきたことが記されている。何故彼はこのような瑣末な事柄まで、ステラに知らせていたのであろうか。彼はステラでさえ、女性の愚かさを秘めていると認めていたのであった。彼はヴァネッサに対するステラの誤解が生じる煩雑さを怖れたのであり、自分の梅毒罹患の事実がステラに知られることを危惧した末のことであった。

ヴァネッサは家政運営に無関心で、無能力な母親に代わって、度重なる不動産トラブルを自分で解決しようと決心していた。彼女はアイルランドに所有する財産を、確実に自分たちのものにしようと考えていた。スウィフトは彼女のこの執念を知り、彼女に関心を抱くようになったのであった。父親が残したアイルランドの不動産は、法的処置が十分なされていない厄介な代物であった。加えて、遺言執行人の一人ピーター・パーティントン(*Peter Partington*)は強欲な法律家で、ヴァイナミリー家の人々を金使いの荒い無責任な人たちと見ていた。遺言執行人は何事にもルーズで、一家の要望を少しも考えてくれないため、一向に不動産の法的処理が進捗せず、そのことが一家を苛立たせてもいた。

スウィフトが帯状疱疹の痛みに耐えていた 1711~12 年 7 月頃、突如としてヴァイナミリー一家との食事の記述が絶えた。当時、彼は頻繁に痛みを訴えていたが、その症状から、彼の痛みは帯状疱疹によるものではなく、梅毒罹患の痛みであると考えられるのだが、スウィフトはステラにも自分の梅毒罹病を秘密にしていたので、あえて帯状疱疹という病名で告げたのである。その後表現が簡略化されたが、食事の機会を持ったことを想定させる記述が僅かながら残っていた。1711 年 11 月 19 日には、「ジェームズ教会(*St. James*)通りの友人と食事をした」¹¹⁵ 友人とのみ記述しただけであるが、この当時一家が再びジェームズ教会通りに戻ってきていたことから、ヴァイナミリー家の人々であることが分かる。この一家との交流を告げる記述が途絶えたのは、4 月 7 日にヴァイナミリー夫人と食事をした際、前日オックスフォード伯が大蔵卿に指名されたと語ったことが原因であろう。スウィフトが待ち望んでいたオックスフォード伯の顕職就任が決まったことで、彼にも将来の可能性が開けたと感じたのである。余計なトラブルを避ける必要性を感じたので、身辺整理の観点から一家との交流を秘匿する必要に駆られたのであった。1711 年 11 月 13 日には、

¹¹⁵ I dined with a friend in St. James's street. (Swift, *Journal to Stella*, Vol II, p.417)

「近隣の人との個人的な食事」¹¹⁶ と、俄かにヴァイナミリー夫人を推定することが困難な表現となっている。これら一連の不可解なスウィフトの行動について、エーレンプライスは、次のように語っている。

On 27 February, for example, he summarized for Mrs Johnson a day so crowded that he could hardly have gone to a place not mentioned, and he does not mention the Vanhomrighs; yet his accounts show that he gave Hussy fourpence that day. Since he also dined in the City with Barber, it is probable that she turned up there, for he could not possibly have met her at the other places. Although Swift often visited Barber, dined with him, and employed him as a financial agent, he usually suppresses his name, and calls him 'a friend in the City',...¹¹⁷

例えば、2月27日、スウィフトはジョンソン夫人を省略してその日は非常に混雑していたので、話に出た場所には行けなくて、ヴァイナミリー一家のことには触れなかった。彼の記述では、その日、夫人には、4ペンス与えたとある。その日彼は印刷業者のバーバーと食事をしていたので、彼女がそこに合流したので、出会うことが出来たのである。スウィフトはしばしばバーバーと会い食事をして、彼を財政顧問として依頼していたので、彼の名前を隠して、ロンドンの友人とだけ呼んでいた....。

スウィフトはヴァインナミリー一家のために、借財処理の相談をバーバーにしていたため、しばしば彼とも食事をし、その場に夫人を呼び出したのであろう。ヴァイナミリー夫人は派手好きなので、有名人のスウィフトを歓迎し、請願に宮廷へ伺候する際の衣装替えの場所の提供を聞き届けてくれただけで、その好意に報いるため、スウィフトは一家の財政立て直しに協力を惜しまなかったのである。ヴァンナミリー夫人は奇矯な性格の持ち主なので、彼の好意に報いるため、一家の女性のいずれかとの結婚まで申し出る有様であった。彼はこの一家との緊密な交遊が世間に誤解され、スキャンダルに発展することを恐れ、交遊を秘匿し始めたのであった。加えてこの時期、彼は梅毒罹患による激痛にも悩まされていたので、世間にヴァンナミリー夫人との関係を誤解され、梅毒罹患が公になることを恐れ、夫人との会合を秘匿したのである。

ヴァネッサが「あなたは正しい行動をするなら、世間の言うことは気に掛けないという信念をお持ちでしたね。」と語っていたが、「スウィフト自身の思慮深い分別と、物事を軽く考える、侮りの気持ちとの間を揺れ動く自己欺瞞の性格は、時と共に強められていった」と、スウィフトの複雑な心の揺らぎを、エーレンプライスは語っている。スウィフトがヴ

¹¹⁶ I dined privately with a friend to-day in the neighbourhood. (Swift, *Journal to Stella*, p.411)

¹¹⁷ Swift, *Journal to Stella*, p.643.

アンナミリー家の長女ヴァネッサと誼を通じ、彼女がスウィフトに関心を示すに至った事情は、1711年12月18日のスウィフトが、夫人の従姉妹アンナ・ロング(Anne Long)夫人へ宛てた書簡で判る。¹¹⁸ スウィフトが彼女に関心を示したのは、梅毒罹患による肉体的欠陥を持つ彼が、彼女との間に友愛の情の可能性だけは感じたからであった。

1711年、ヴァネッサは24歳、スウィフトは44歳であった。この年齢差には、性愛の関わる感情の立ち入る余地がないであろうと考えたスウィフトは、この年若い女性の才知を悟って、第2のステラを発見した想いであった。彼は自分の想いを、ロング夫人がヴァネッサに見せるであろうと念じて、彼女の関心を惹きつけようと、ロング夫人に書き送ったのである。スウィフトの理想とする女性像は、肉体的には女性でありながら、機知に溢れ、知性を兼ね備えた女性であった。彼は成熟した女性に異性を感じる事が少なかった。むしろ異性を感じさせる女性の存在は、性愛を思い出させ、改めて自分の梅毒罹患に発展することで忌避していた。ロング夫人宛の書簡で、彼が求めたのは、性愛を伴った異性愛ではなく、性愛に根ざさない友情に根ざした友愛であった。人生の先達として、彼女の暇僅を矯正する教師役を申し出たのであった。自らの内に知性や機知といった男性的資質を涵養し、知的にも男性に比肩し得る女性を求めたのであった。しかしながらヴァネッサはその男性的資質の故に、直情径行的で、肉体愛を肯定する成熟した女性であった。エーレンプライスによれば、彼女は近寄り難いほど父性思慕の情が厚い上、スウィフトからの書簡に執心する点においても、他に類を見ないほど強烈であった。

Meanwhile, Vanessa, on the edge of St. James's Park, longed for her inaccessible father-lover and copied out epistolary appeals from drafts which she carefully preserved beside the letters Swift sent to her.¹¹⁹

かたやヴァネッサは、セント・ジェームス公園近くに住んでいたが、父親思慕の念はおさえ難く、スウィフトが送った書簡を傍において、注意深く複写して大切にしてい

ヴァネッサの父性に対する懼れは抑えようも無く、スウィフトからの書簡に対する執心も、送られた書簡を写し書きして持っているほどであった。そのような彼女を、詩篇『カデナスとヴァネッサ』(Cadenus and Vanessa)では、どのように記述しているのか検証してみる。表題となっているカデナス(Cadenus)は首席司祭(Decanus)の「語句の綴り替え」(Anagram)であることから、スウィフトを指しており、この作品が書かれたのは、1713年、首席司祭就任の報に接した彼が、ウィンザーに滞在していた頃のことであろう。この詩編においても、性愛に関わる間柄を避けている表現が見られる。

¹¹⁸ Swift, *The Correspondence I*, p.278.

¹¹⁹ Ehrenpreis, *Swift II*, p.637.

第3節 詩篇『カデナスとヴァネッサ』にみるヴァネッサ像

本来この詩篇を出版する意図が、スウィフトには無かったのであるが、1723年7月、ヴァネッサ死去の折、出版の指示が遺言執行人に示された。彼女の遺言に従って、1726年に密かに出版されたその第2版には、副題として「美德の判定」(“The Judgment of Virtue”)とあった。第3版には「男性のような美德の持ち主」(“The Birth of Manly Virtue”)と記されていた。梅毒罹患により結婚の可能性を失っていたスウィフトが、彼女の内なる女性性が目覚めるのを嫌い、男性的性情の持ち主であることを望んでいたと窺わせる表現である。890行に及ぶこの長大な詩篇は、スウィフトとヴァネッサとの友愛の物語詩となっているが、詩中でどのようにして彼女を教え導き、その効果が思いもかけぬ結果を招いてしまったかが描かれている。純粋な友愛を教え導いた筈が、彼女の異性愛への衝動を抑えられず、彼女の心の変化に恐れ戦いているスウィフトの心境が随所に見られる。

この詩篇は神話仕立てで、男女の愛の墮落している姿を断じる裁判劇で構成されている。神聖であるべき結婚が、金銭で購われる昨今の風潮に対する抗議ともなっている。結婚を司る美の女神ヴィーナス(Venus)に、純粋な愛の結婚が失せてしまったのは、男の責任であるとの判定を下すことを依頼した構成で始まっている。この裁定に苦慮したヴィーナスは、男性並みの知性を持つ類まれな美貌の持ち主で、優しさと、淑やかさといった女性的資質を併せ持つ、理想的な女性を出現させ、彼女の魅力で、多くの男性に純粋な愛に目覚めさせようと画策したのである。目覚めた男性に彼女に求婚させ、結婚のあるべき姿を示して、美の女神としての面目を保とうと考えた。理想の結婚像を創造しようとしたのであった。この女性に選ばれたのがヴァネッサであった。彼女の教育係として、知の女神パラス(別名 Athena)が選ばれ、その教育助手として、カデナス(Cadenus)が任命された。神話仕立てではあるが、そこには、スウィフトのヴァネッサに対する感慨が色濃く反映されている。スウィフトが女性に求めたものは、永遠に成熟した女性とはならない、幼児の心情を持ち続け、正義と真実を追究し、名誉を重んじる女性の姿であった。その女性が異性愛に目覚めることを恐れ、永遠に成熟した女性とはならないことを願ったので、彼女の心情を幼子の心にとどめたのであった。スウィフト自身、梅毒罹患によって、肉体的結合を伴う結婚に不適合者であったからである。

Wisdom's above suspecting Wiles:
The Queen of Learning gravely smiles,
Down from *Olympus* comes with Joy,
Mistakes *Vanessa* a for a Boy;
Then sows within her tender Mind
Seeds long unknown to Womankind,
For manly Bosoms chiefly fit,

The Seeds of Knowledge, Judgment, Wit.
Her Soul was suddenly endu'd
With Justice, Truth and Fortitude;
With Honour, which no Breath can Stain,
Which Malice must attack in vain;
With open Heart and bounteous Hand: 120

密かな謀すら見抜く知恵を持つ
知の女神は、荘重な微笑を口唇に漂わせ、
喜び勇んで、オリンポスより降臨された。
女神はヴァネッサの性を取り違えて、
長らく女性に知られなかった、
やわらかな心根に知の種をまかれた。
男性の胸奥にこそ相応しい、
知識、判断、機知の芽生えを与えられた
突如として、彼女の魂に認められたのは
正義、真実、不屈の精神
何ものにも汚されぬ名誉で彩られ、
如何なる悪意に曝されても
耐える心であった。

この詩で、スウィフトが求めたものは、外見はたおやかな女性でありながら、男性性に内に秘めた女性であった。劇中アテナは、ヴァネッサの内なる男性的資質に幻惑されてしまった。彼女の魂の奥深くに沈潜している男性的な資質と、名誉を重んずる心を認めたからであった。ヴィーナスがヴァネッサに真実を追究する心と、邪悪な心を退け、正義を遂行する魂を認めた結果、彼女を男性と見誤ってしまったのであった。彼女は女性でありながら男性的資質である知性と、素早い判断力、機知に富んだ心情を持っていた。彼女は不撓不屈の精神で、正義と真実を追求する乙女であった。女性として、優しく淑やかで、優美なふるまいに加えて、男性的な決断力も併せ持つ、人並み以上の容姿の乙女であった。その理想の女性に求めたものは、肉体愛を否定し、精神的結びつきに価値を認める、友愛関係であった。教育の成果があがり、ヴァネッサの知力は向上し、人並み優れた容姿を、女性らしい衣装で包んでいても、男勝りな知識や判断力、機知を持つ彼女は、趣味の悪い人に対しては、見向きもしないようになってきた。この段階でスウィフトが気づいたのは、彼女が心をカデナスに近づけ過ぎてきたことであった。カデナスの一挙手一投足に関心を集め、彼を必要以上に高く評価し、彼のあらゆる言動を吸収しようとするようになって来

¹²⁰ Swift, *The Poems II*, pp.692-3. ll.198-210.

た。彼女はカデナスに異性を感じ、性愛を強く求めるようになってしまった。このまま進行すれば、彼女はカデナスに肉体愛を求め、取り返しのつかない事態を招いてしまうのは、火を見るより明らかであった。ヴァネッサがカデナスの才知に惚れ、その憧憬の念が尊敬に、異性としての愛の対象に、求めるようになってきたことに気付いた。詩と現実の様相が、同調し始めたのである。

*Cadenus many things had writ;
Vanessa much esteem'd his Wit,
And call'd for his Poetick Works;...*¹²¹

カデナスは多くを著し、
ヴァネッサはカデナスの知力を尊び、
カデナスの詩作を追い求めた。

梅毒罹患により、肉体愛の不適格者となってしまったカデナス（スウィフト）は、肉体愛を忌避するあまり、必要以上にヴァネッサを退けるようになった。彼女は退けられたことによって、なおさらカデナスに迫って行ったのである。現実には思っていたスウィフトは、互いの年齢差と、日ごと衰えてゆく己の肉体を思い、梅毒罹患の事実を認識するに至った。彼の想いは自分の肉体が梅毒罹患により、彼女の欲求に耐えられぬ現実に思い至ったのであった。詩篇と現実の姿が重なってしまった。これ以上両者の関係が進展することで、予想される結末に思い至った。この詩はカデナスとヴァネッサの、友愛を綴った叙事詩である筈であったが、次第に現実的な男女の愛の相克が、色濃く詩中に現れ、その対策に苦慮をし始めているスウィフトの姿が現れてきた。本来このヴァネッサの勝れた資質に、多くの男性が群がり集まり求婚する筈であったが、教育助手のカデナスに心を委ねてしまったのでは、アテナの教育計画が頓挫することになってしまう。キューピッドの射た矢は、全体的を外し、唯一カデナスに当たってしまった。現実の様相が、詩篇の行方を左右することとなってきた。

*Imaginary Charms can find,
In Eyes with Reading almost blind;
Cadenus now no more appears
Declin'd in Health, advanc'd in Years.*¹²²

空しい魅力を追い求め、

¹²¹ Swift, *The Poems II*, p.702. ll.510-513.

¹²² Swift, *The Poems II*, p.703. ll.526-529.

恋は判っていても盲目、
その瞳には司祭の姿は見られず
年とともに司祭は衰えてゆく。

年毎に衰えてゆく 44 歳のカデナスは、やがては 20 歳の瞳にその姿を映すこともなくなろうと慨嘆し、現実の両者の関係に思いを馳せた。この段階でスウィフトは、現実の関係にも終止符を打たなくてはならないと、強く認識したに違いない。しかし、時は既に遅かった。ヴァネッサの心中には、スウィフトの想いを遥かに超えた変化が生まれてしまっていた。もはや、彼女の情念を変えようとする術も無くなってしまったことを、詩は物語り始めている。現実の様相は更にすさまじく、異性愛を求める彼女に、詩が語れぬ梅毒罹患の事情を抱えたまま、苦しみに喘ぐスウィフトの苦しい胸の内が偲ばれるばかりである。

But now a sudden Change was wrought,
She minds no longer what he taught.
Cadenus was amaz'd to find
Such Marks of a distracted Mind;
For tho' she seem'd to listen more
To all he spoke, than e'er before;
He found her Thoughts would absent range,
Yet guess'd not whence could spring the Change.
And first he modestly conjectures
His Pupil might be tir'd with Lectures;... ¹²³

突然変化が起こった。
ヴァネッサはもはや教えを聞かなくなった。
カデナスは不思議に思ったが、
彼女の心変わりに気付かなかった。
もっと教えを受けたいと思っていたはずなのに、
以前に増して、カデナスの教えのすべてを。
ヴァネッサの心が、ここにはないことをきずかなかった。
この変化はどこから来たのか、
まずは推測してみるに、
ヴァネッサは、師の教えに飽きたのだ....。

性愛を求めるヴァネッサに、カデナスは友愛を求めたのである。彼女は教え導こうとし

¹²³ Swift, *The Poems II*, p.704. ll.560-569.

た教師に飽きて、師の教えを気かけなくなってしまう。彼女は教師を恋人に選んでしまい、彼に露骨に媚を示し始めた。カデナスの言うことを聞く振りをして、しかし彼女の心は虚ろであった。もはや教師の教訓に、耳を貸さなくなってしまう。ヴァネッサは成熟した男女の肉体愛を求めるようになってきた。現実のヴァネッサは、彼がウインザーで、この詩篇を書いているときを境に、急激に変化してきたことが、書簡の内容からも察知出来る。ヴァネッサの異性愛が増大して、友愛を気に掛けなくなった。この 570 行以降で、スウィフトは両者の関係に終止符を打たねばならないと、切実に思い始めたのであった。

That Scholars were like other Folks:
That when Platonick Flights were over,
The Tutor turn'd a mortal Lover.
So tender of the Young and Fair ?
It shew'd a true Paternal Care....
Five thousand Guineas in her Purse ?
The Doctor might have fancy'd worse.....¹²⁴

教師もほかの連中と同じ、
プラトニックな愛のときめきは過ぎ、
教師は生身の恋人と成り下がってしまった。
若くて美しい女性に優しくし過ぎてしまったのか、
財布の中の 5,000 ギニーこそ、
その父性愛の証拠なのだが、
彼女はそれを異性愛の証拠と受け止めてしまったようだ....。

ヴァネッサが母の借財を引き継ぎ、その借財に絡む問題処理に乗り出していたことを、スウィフトが熟知していたことは、詩篇からも容易に推察される。彼は彼女の借財問題の解決に尽力することで、彼女一家から寄せられた厚誼に報いようと考えていた。それで彼女の心を、引き離すことが出来ると考えていたのであった。しかしヴァネッサは、スウィフトの思惑に反した受け止め方をした。彼女は借財問題に尽力する好意を、彼の愛情表現として受け止めてしまったのである。借財返済に尽力することが、友愛の印とは思はず、愛の証ととったのであった。梅毒罹患により、結婚して、性愛に耽ることが不可能なスウィフトにとって、事情も分からず、只管、女性としての愛を求めるヴァネッサに、なす術もなくなっていた。両者の思惑は全く異なったものとなってしまった。スウィフトが何よりも恐れていたのは、世間の評判であった。折しも長年の望みが叶って、聖パトリック教会の首席司祭の地位が転がり込んできたのである。ヴァネッサに対する不手際が、これ以

¹²⁴ Swift, *The Poems II*, p.707. ll.649-655.

上拡大するのを恐れた。この大事な時期に、不名誉な事件を引き起こすことは、首席司祭就任の妨げになると、不手際を悔やみ、鎮静化を図ろうとしたことが、詩句からも読み取れる。成熟した女性の愛を受け止めるすべは、梅毒罹患のスイフトには無かったのである。

'Tis an old Maxim in the Schools,
That Vanity's the Food of Fools;
Yet now and then your Men of Wit
Will condescend to take a Bit.

So when *Cadenus* could not hide,
He chose to justify his Pride;
Constr'ing the Passion she had shown,
Much to her Praise, more to his Own.
Nature in him had Merit plac'd,
In her, a most judicious Taste.
Love, hitherto a transient Guest,
Ne'er held Possession of his Breast:... ¹²⁵

昔の教訓に、
うぬぼれは愚者のもの、
分別ある身なれど、
自惚れ心は誰にもあろう。

カデナスは隠すことなく
誇りだけは翳している。
彼女の情熱は、称賛にかえて、
ヴァネッサを称賛することで、自分は耐えよう
ヴァネッサの情熱は理解して、誉めそやせば、
思慮分別が彼女の内に生まれ、
愛がひと時のものであると、
心奥に留まるものではないことを悟るであろう....。

ヴァネッサの本心を見抜くことが出来なかった結果、思いもかけない彼女の変化に驚いたスイフトは、教えられることに喜びを感じる乙女が、その教師に恋するようになるの

¹²⁵ Swift, *The Poems II*, pp.710-711.ll,758-769.

は良くあることと言いつつしている。虚栄は愚者の食料であり、似非学者でもおこぼれに預かれると、自嘲気味に独白して、己の不手際を恥じている。スウィフトは、自分の梅毒罹患による肉体的欠陥を隠しながら、表面的には誇りだけは雄雄しく翳していると開きなおったのであった。力が足らず、彼女の情熱の炎を抑えきることが出来なかった自分に、恥じていたのであった。ヴァネッサへの賞賛が多ければ、それだけ、自分の功績との自負心は増していた。このような苦境にあっても、カデナスの徳性を彼女に植え付けられ、確かな判断基準が、彼女の心中に生まれてきたことを自慢している。この反面愛は一過性なので、決して胸奥に居座ってはいないことを期待している心があった。カデナスは肉欲愛には応えられないと、精神愛を求めることを彼女に告げて、この詩を終えている。

But Friendship in its greatest Height,
A constant, rational Delight,
On Virtue's Basis fix'd to last,
When Love's Allurements long are past;
Which gently warms, but cannot burn;
He gladly offers in return:
His Want of Passion will redeem,
With Gratitude, Respect, Esteem:
With that Devotion we bestow,
When Goddesses appear below. ¹²⁶

最高の友愛というものは、
変わることなき理性の喜びである。
美德に根差した喜びは、いつまでも変わらず、
恋の誘惑が過ぎ去れば、
恋の炎は燃え盛ることはない。
その時になって、カデナスはお返しをするだろう。
恋に報いる情熱の欠けていることは、
感謝、尊敬、尊重をもって償い、
女神がこの世に現れるとき、
我々が捧げる献身で贖うであろう。

教師としての矜持を取り戻して、友愛こそが最高の存在であり、その理性的な喜びは、美德を基盤にしているだけに普遍的であると、この長い詩編は終わっている。最後に至って、スウィフトが理想とする友愛関係の確立を求めた。梅毒罹患の事実に触れることが出

¹²⁶ Swift, *The Poems II*, pp.710-711. ll.758-769.

来ないので、肉体愛が受け入れられぬことと断じて、彼女の情熱的な愛に報いるのは、感謝の念と献身だけであると、二人の間柄を、友情の姿として納めて、恋の炎を鎮めようとした。しかしながら、ヴァネッサは性愛を肯定する成熟した女性であった。スウィフトは、女性を男の徳性で十分教導出来ると考えていたが、優れた資質の彼女ですら、愛欲に溺れ、精神的友愛を無視する存在なのであると、女性に対する軽蔑を深くする結果を招いただけとなった。この両者の間の想いの齟齬を、書簡からも論証してみよう。

第4節 書簡から読み解くスウィフトとヴァネッサ

1711年12月18日の、ヴァネッサ宛のとりとめのない書簡で、彼女の関心を惹きつけ、歓心を得ることに成功したスウィフトは、しばしば彼女と会い、会話を交わし、教え導こうとしたことが、1712年8月1日付の書簡から推察できる。スウィフトはステラに似た資質を持つ彼女に、第2のステラを見た思いであった。しかし、父性愛に飢えていたヴァネッサは、既に彼を異性として受け止め、彼の歓心を得ようと甘えからの諍いが始まっているのが、書簡からも読み取れる。

Swift to Miss Esther Vanhomrigh

[1 August 1712]

Mis Hussy is not to believe a Word Mr Lewis says in his Letter, I would have writt to you sooner, if I had not been busy, and idle, and out of humor, and did not know how to send to You without the Help of Mr Lewis my mortal Enemy. ¹²⁷

スウィフトからミス・エスター・ヴァイナミリーへ

[1712年8月1日]

ルイスの書簡によれば、ヴァネッサが彼の言葉を信じなくなっている、もし私が忙しくなく、気分もよければ、直ぐにも手紙を書くだらう。そうすれば、どうしたら我が友ルイスの助けを借りないで送れるか教えられるのに。

頻りに便りを求めている彼女の姿に、危険を予知したにも拘らず、危険な隠れ遊びを楽しんでいるかの返事を書き送っている。彼は増大する彼女の異性愛を知りながら、梅毒罹患の事実の公表が出来ないもどかしさを抱えたまま、彼女の異性愛を友愛にすり替えようとの努力を重ねたのであった。現存する両者の間に取り交わされた書簡は、1712年には6通、スウィフトからは4通、その大部分は、可愛い教え子からの便りをせがむ姿に喜びを感じて、願いを叶える内容になっている。「ヴァネッサやモルには、家でふさぎこんでいないで、出来るだけ公園を散歩しなさい」¹²⁸と、ヴァネッサを成人女性ではなく、幼女として取り扱って、不必要なほど懇切な指導に終始している。幼子として取り扱うことで、彼女の性愛的傾向に釘を刺そうとしたのであった。その姿に梅毒罹患の影が窺われる。

この書簡からわずか半月しか経過しない9月1日、便りの無さを恨み、甘えた書簡が、彼女から届き始めた。この時期、スウィフトはウィンザーに滞在して詩編『カデナスとヴァネッサ』を執筆していた。彼は理想とする女性像を、詩篇中のヴァネッサに映そうと考

¹²⁷ Swift, *The Correspondence I*, pp.304-5.

¹²⁸ “I desire you and Moll will walk as often as You can in the Park and do not sitt mopping at home” (Swift, *The Correspondence I*, pp.308)

えていた。しかし、そのスウィフトの思いとは裏腹に、彼の胸中には、ヴァネッサが理想像から逸脱し始めてきたのに気付いて、彼女からの便りを煩わしく思い始めている姿が散見される。賢明な彼女も又、スウィフトのその思いを推察していた節が見られる。矢継ぎ早に2通の書簡が、ウィンザー滞在中の彼の元に届いた。彼女はスウィフトの思惑には無関心を装って、態度を改めぬばかりか、恋情をあからさまにして迫ったことが、書簡からも察せられる。

Miss Esther Vanhomrigh to Swift

London, Sept. 1st 1712

Had I a Correspondant in China I might have had an answer by this time I never could think till now that London was so far off in your thoughts and that 20 miles were by your computation equall to some thousand---I thought it a piece of Charity to undeceive you in this point and so let you know if you 'I give your self the trouble to write I may probably receive you[r] letter in a day.¹²⁹

ミス・エスター・ヴァイナミリーからスウィフトへ

ロンドン、1712年9月1日

私は返事を既に受け取っている頃なのに、中国からの便りを私は待っているみたいです。今まで私はロンドンがそんなに、遠く離れていると考える貴方とは思ってもみなかった。20マイルしか離れていないのに貴方の計算では、数千マイルも離れているのと同じなのですか。貴方に騙されているのが思いやりなのでしょうか。もし貴方が手紙を書くのが大変なら、私は一日で貴方の手紙を受け取って見せます。

無性に便りを欲しがらるヴァネッサの姿に、やがて起こるべき危険の兆候を察知したが、切実に書簡を催促する彼女に魅了されてしまった。スウィフトのウィンザー滞在中、アン女王の寝室係りで、アビゲイル・ヒル(Abigail Hill) という女官の妹アリスが滞在していた。このアリスの存在が、ヴァネッサの嫉妬心を煽ったのであろう。追い討ちをかけるように、便りの無さも全てアリスの故と、エラスムス・ルイス(Erasmus Lewis)にまで訴え対策を依頼したことが記されている。彼女のスウィフトに対する恋情が、アリスへの嫉妬心を煽って、このような行為に駆らせたのであった。ヴァネッサの心中に異性愛が醸成され、異性であるスウィフトへ傾斜してゆき、彼の全ての行動を把握し支配したいと考えたのであった。スウィフトの些細な行動にまで、疑念を挟むようになってきたことが、書簡からも読み取れる。彼女の異性愛は、抑えることが出来なくなってきた。

ルイスまで巻き込んでしまっていることで、彼女の恋情の容易ならざるのに気付いたスウィフトは、折り返す書簡で、妹アンの病状の安否を問う書簡を送った。ヴァネッサの病

¹²⁹ Swift, *The Correspondence I*, p.309.

弱な妹を話題にすることで、ウィンザーに来たがっている彼女を牽制したのであった。9月3日の書簡では、温情溢れる教師としての立場を保ち、平静を装って、辛くも矜持を保とうとしている。スウィフトはヴァネッサの意外な変化に狼狽し、その対策を講じる必要に迫られたが、1713年6月、聖パトリック教会の首席司祭の就任の知らせが届いた。この好機に全てを清算し、出来るだけ早く任地に赴くことが好都合であると感じ、まず身辺整理を心がけたのだった。スウィフトの謎めいた行動は、梅毒罹患により性愛不適格者となってしまった事実を、覆い隠そうとしたためであった。これら一連の行動が、直情傾向のヴァネッサに誤解されたのは止むを得ない仕儀であった。スウィフトはこのままダブリンに帰って、ロンドンでは、何事もなかったことにしたかった。そのような彼の態度の変化を敏感に察知したヴァネッサは、言葉からだけではなく行動からも想像を逞しくする性情から、スウィフトの態度に新たな疑惑を感知した。このような彼女の性情を、エーレンプライスは次の様に伝えている。

I assume that Swift assiduously hinted he had no such intentions, I also Assume that a moderately shrewd woman would judge him rather by his conduct than his hints. Other bachelors hung about and enjoyed her hospitality.¹³⁰

スウィフトは根気よくそのような意図のないことを仄めかしたのではないだろうか。また、節度のある鋭い女性なら、彼のことを、仄めかしより行動で判断するだろう。他の独身たちは彼女にまとわりついて、おもてなしを楽しむのだろう。

当時のスウィフトの行動をエーレンプライスは理解を示して、洞察力のある女性なら、言葉より行動で判断するのだが、ヴァネッサにはスウィフトの行動を見ても理解出来なかった。彼女は言葉の表面的な意味から、判断をする傾向にあった。スキャンダルの発生を予想したスウィフトであったが、常に正しいことを行う筈が、時として世評に背を向けた行動もとる、彼の矛盾した性向を抑えることが出来なかった。そのため、彼女に対して、しばしの間でも迎合して、意を迎える素振りが必要であったが、その策を講じなかった。彼女の婚姻願望が増大しているのに気付きながら、それを抑制しようとしなくて、黙ってダブリンに戻ることで、両者の関係を終息させようとしたのであった。スウィフトの無言の意図が正しく伝わらず、曖昧な態度の示す意味を彼女は汲み取れず、大いなる誤解を生じる結果を生んだのであった。この誤解が、更なる誤解を生じさせ、悲劇を拡大してしまう結果を生むこととなった。曖昧なままの関係を継続することで誤解を生み、スキャンダルにまで発展するのを恐れたスウィフトは、健康回復のため旅に出るとのみ、彼女に告げて帰国の途に就いてしまった。すべては梅毒罹患の事実を秘匿したままで、事態を終結させようとした結果であった。やがて、ヴァネッサがスウィフトの帰国を知るにしても、そ

¹³⁰ Ehrenpreis, *Swift II*, p.640.

れまでは帰国を悟らせないで、彼女の過激な行動を牽制しようとしたのである。彼はヴァネッサには、世間が何をいっても信じてはならないと、念を押して、両者の関係を放置しようとした。彼女に慈愛に満ちた教訓を垂れている書簡を送ったことも、誤解を拡大する元となった。何か困った折は、ルイスに相談するようにと、5月31日の書簡で伝えているが、この温情もまた、問題を一時遠ざけただけで、事態を複雑なものとしてしまっていた。彼には、これら一連の男女の駆け引きや、心の起伏が判らないようである。

Swift to Miss Esther Vanhomrigh

[31 May 1713.]

I promised to write to you; and I have let you know that it is impossible for any body to have more acknowledgements at heart for all your kindness and generosity to me. I hope this Journey will restore my Health; I will ride but little every day; and I will write a common Letter to you all, from some of my Stages; but directed to you. I could not get here till ten this night. Pray be merry and eat and walk; and be good and send me your Commands whatever Mr L—shall think proper to advise you. I have hardly time to put my Pen to Paper; but I would make any promise. ¹³¹

スウィフトからミス・エスター・ヴァイナミリーへ

[1713年5月31日]

手紙を貴方に書くことを約束しました、私に対する貴方の寛大なことを知っているものは誰も居ません。この旅行が私の健康を回復してくれると期待しています。毎日すこし馬に乗り、そして貴方宛てに様々な行程から手紙を書きます。今夜10時までは戻りません。どうか楽しく過ごして、食べて歩いてください。お元気で、私にお命じください、ルイスが適切と思うことなら何でも。もう手紙を書く時間がありません。でも、どのような約束でもします。

事実上の決別ともいえるこの書簡の後、6月6日スウィフトは帰国の途に就いた。彼は旅先のチェスターから、孤児となったヴァネッサ姉妹の行く末を案じた書簡を送っている。ヴァネッサには、滞在中のもてなしに感謝を表明して、師父としての最後の教を説いていた。この書簡はともすれば荒ぶる彼女の気持ちを宥めようと、慰留した内容となっている。スウィフトの優柔な別れの書簡が、彼女に誤解され、さらに問題を複雑にしてしまった。成人女性として性愛を求める彼女には別れを告げたいが、幼子のままの彼女とは別れがたかったのである。そのため要らざる誤解を招き、更に自身を窮地に陥れることとなった。かくして虎口を逃れた思いのスウィフトと、大魚を逸したヴァネッサ、両者の思惑は

¹³¹ Swift, *The Correspondence I*, p.360.

大いに異なったものとなった。

帰国の途に就いたスウィフトのステラへの書簡は、留守中の苦勞をねぎらう気持ちの溢れたものであったが、成人女性を強く押し出してきたヴァネッサへの書簡は、全てを清算してしまったかの、思いやりの欠片も見られない書簡となった。彼はこの帰国で、ヴァネッサとの間柄も無事解決したと考えていた。物理的隔たりが、両者の関係を遠ざけると考えていたが、心理的距離を、近づける結果となろうとは考えもしなかった。残存する書簡は1713年としては7通あるが、スウィフトからのものは3通、ヴァネッサからは6月に4通集中している。スウィフトの想いとは裏腹に、彼女の恋情は燃え盛ってしまった。危険から逃れた想いのスウィフトと、いや増す恋情を胸に抱いたヴァネッサと、離ればなれとなった両者の感慨は全く異なったものとなった。彼女には母親の派手な社交の借財が残され、その処理が彼女を更に苦しめることとなった。これ以後、スウィフトの元に、書簡を待ち侘びる彼女の便りが波状的に届くこととなった。

Miss Esther Vanhomrigh to Swift

London, June 23^d 1713

Here is now three Long, long weeks passed since you wrote to me, Oh happy Dublin that can imploy all your thoughts and happy Mrs Emerson that could hear from you the moment you landed. Had it not been for her I should be yet more uneasy than I am, I really believe before you leave Ireland I shall give you just reason to wish I did not kno(w) my letters, or at least that I could not write, and I had rather you should wish (so) than intirely forgett me. ¹³²

ミス・エスター・ヴァイナミリーからスウィフトへ

ロンドン、1713年6月23日

貴方の手紙からもう3週間、長い長い時間が過ぎました。ダブリンは楽しいでしょう。貴方が上陸を果たしたことは、エマーソン夫人から聞きました。私は貴方から直接お聞きしたかった。もし彼女から聞いたのでなかったなら、今よりはずっと安らかでいられたのに。貴方がアイルランドに行かれる前なら、私に手紙を書くことなど忘れてしまうなんて信じられなかったでしょうが、貴方は私の事など忘れてしまわれたのでしょう。

チェスターに居を定めたスウィフトの許に送られた、ヴァネッサからの書簡には、便りの無さを恨み、昔日の思い出に耽けり書簡を待ちわびて、切実な思いに苛なめられている姿があった。ルイスから、スウィフトの病状について知らされた筈の彼女ではあったが、6月30日の便りは、ひたすらスウィフトの病状を心配し、緊迫した感情に終始した書簡であ

¹³² Swift, *The Correspondence I*, p.367.

った。この書簡にスウィフトは違和感を覚え、事態が容易ならざる方向に進んでいるのを予感した。物理的距離が、反って、彼女を追い詰めてしまい、便りの無さがそれに拍車をかけてしまったのである。

ララカーに居を移したスウィフトは、最早再びイングランドには戻らぬと、絶縁を宣告するような便りをヴァネッサに書き送った。そこにはイングランドでの出来事は全て忘却の淵に投げ込み、書簡すら出さぬと宣言している姿があった。スウィフトはこの書簡で、彼女との関係終焉を宣言したのであったが、彼女はこの宣言を理解できず、悲劇に向って進んでしまった。すべてはスウィフトの曖昧な態度に、その責任はある。その根底には、世間から秘匿しておかなくてはならない、彼の梅毒罹患の事実が横たわっていたのであった。彼が曖昧な状態のままヴァネッサを放置したことで、彼女の性愛願望は増大し、今や理性の力だけでは抑えきれなくなっていたのである。残された手段は、書簡に執心する彼女に便りを送って、高ぶる彼女の感情を抑制する以外に方法が無くなった。梅毒罹患の事実さえなければ、彼女の慾望に答える術も残されていたのだが、梅毒罹患で性愛に臨む能力を失っているのだから、宥める方法もなかった。

Swift to Miss Esther Vanhomrigh

Laracor. Jul. 8th. 1713

I had your last spleenatick Letter: I told you when I left England, I Would endeavor to forget every thing there, and would write as seldom as I could. I did indeed design one generall Round of Letters to my Friends, but my Health has not yet suffered me...I design to pass the greatest part of the time I stay in Ireland here in the Cabin where I am now writing, neither will I leave the Kingdom till I am sent for, and if they have no further service for me, I will never see England again:...¹³³

スウィフトからミス・エスター・ヴァイナミリーへ

ララコー、1713年7月8日

貴方の不機嫌な便りを頂きました。私はイングランドを離れるときに言いましたよね。私はそこでの出来事を全て、出来るだけ忘れようと努めると。手紙も稀にしか書きませんし、友人たちにも一連の手紙を書いただけです。健康もいまだ回復しません。私はアイルランドでは、この手紙を書いている家に籠って、大部分の時間を過ごす計画です。王国を離れる気持ちもありませんし、もしこれ以上の奉仕を命ぜられたとしても、私は再び、イングランドには戻りません....

スウィフトはこの書簡で、ヴァネッサとの決別を果たしたつもりであったが、事情は若干変わった。崩壊寸前のトーリー党政権の再構築のための調停依頼が、オックスフォード

¹³³ Swift, *The Correspondence I*, p.373.

伯から齎された。二度と戻らぬ決意で、ロンドンを後にしたスウィフトであったが、この年9月、再びロンドンに旅立った。政敵を恐れ、バークシャー(Berkshire)のレットコム(Letcomb)に隠れ住んで調停に当たったが、ボーリングブローク(Bolingbroke)卿とオックスフォード伯との、政策上の差異を縮めることが出来なかった。彼の仲介が失敗し、政策合意が出来なかった結果、トーリー党政権は崩壊した。オックスフォード伯はアン女王によって解任され、その5日後、女王は崩御した。スウィフトは直ちにアイルランドに帰国することとなり、以後『ガリヴァー旅行記』出版準備のため、ロンドンに行く1725年まで、ダブリンを離れなかった。

スウィフトのロンドン再訪は、平穩理にヴァネッサとの関係を終焉させることが出来たと思っていたが、新たな問題の種を蒔くこととなった。この度のロンドン再訪は、ヴァネッサにとっては千載一遇の、関係修復の好機となったのである。これがその後の両者の関係を、更に複雑なものとした。彼女は常日頃、政治情勢について聞かされていたので、政治情勢への理解は出来ていた。よもや、彼がロンドンに戻ってくるとは考えられなかったもので、この好機を逃せば永遠に再会の時は無いと見え、滞在中の隠れ家にまで押し付けてきたのであった。スウィフトは彼女の訪問に驚き、その無謀さを叱責した。彼女の訪問は、心の距離を詰めようとしたばかりではなかった。母親の死去に伴い発生した負債処理が、彼女の双肩に重くのしかかってきたので、その処理に思い余って、制止されたにも拘らずの訪問であった。彼女の追い詰められた心情からの訪問であった。しかし、スウィフトの対応は長年愛情を注いだ、可愛い教え子に対する姿勢が微塵も窺えなかった。彼にとってはアイルランド帰国を果たした時、ロンドンでの出来事は、全て清算した積りであった。梅毒罹患で、彼女の欲望に答えられないスウィフトの、取り付く島も無い態度はやむを得ないことであった。しかし、彼のこの変化が、彼女の胸奥に沈潜していた男性性を目覚めさせる結果となった。更に8月12日のスウィフトの書簡が、彼女に重大な決心をさせる引き金となったのであった。

Swift to Miss Esther Vanhomrigh

Aug. 12th 1714

You should not have come by Wantage for a thousand Pound. You used to brag you were very discreet; where is it gone? It is probable I may not stay in Ireland long; but be back by the beginning of Winter. When I am there I will write to you as soon as I can conveniently, but it shall be allways under a Cover; and if you write to me, let some other direct it, and I beg you will write nothing that is particular, but what may be seen, for I apprehend letters will be opened and inconveniences will happen. ¹³⁴

¹³⁴ Swift, *The Correspondence II*, p.123.

スウィフトからミス・エスター・ヴァイナミリーへ

1714 年 8 月 12 日

千ポンドを与えられても、貴方はウォンテイジに来るべきではありませんでした。貴方はよく分別があると自慢していましたね。その分別は何処に行ってしまったのですか。多分私はアイルランドには長くは居ません。冬のはじめには戻ります。都合がつき次第手紙を書きます。手紙は常に架空名義で出されます。もし貴方が手紙を書いたとしても、他の誰かの名前を出してください。特別な事柄は書かないでください。というのも、誰かが開封して読んだら、不都合なことが起こるといけませんから。

この書簡はヴァネッサに対する叱責で始まり、慎みが無くなっていることを難詰する口調で終わっていた。書簡を送る場合も、スウィフトの在所を隠蔽する必要もあって、他人名で出さねばならないとまで指示していた。¹³⁵ この思いやりの微塵も見られない書簡に、心の絆まで断ち切られてしまったと感じたヴァネッサは、アイルランド移住を匂わせたのである。それに対しても、「もしアイルランドに来たとしても、稀にしか逢えない。」と牽制し、両者の関係を秘密裏に処理しようとするかの返答で、書簡すら書くことを禁じていた。しかし長年の交遊もあり、彼女の双肩に掛かる借財処理の助力は申し出ている。この書簡が、彼女に新たな希望を抱かせてしまった。彼にとって、この申し出は、積年の厚情に対するせめてもの返礼の印であったが、彼女は愛情表現と受け止めてしまった。いずれもスウィフトの梅毒罹患の事実を打ち明けられぬことから起こったのである。

スウィフトは、彼女の借財返済に尽力することで、全てを終わらせようとした。彼は借財処理の方法を示して、温情ある指示をした。¹³⁶ この思いやりを、愛情表現ととった彼女は、妹マリーと連れ立って、アイルランドに移住して来てしまった。彼女たちは遺産として残された、セルブリッジの家に移り住んだのである。ヴァネッサがステラのいる、ダブリン近郊に住みつくことになった。彼女のアイルランド移住を契機に、ヴァネッサとスウィフトとの関係は明らかに変化した。これ以後スウィフトは、ヴァネッサの書簡に心を乱されることになった。債権者や遺言執行人の追及が執拗になされても、誰の助言も忠告も得られず、嘗ての師父にも見放された彼女は、異郷にある不安と心細さを、以前にも増して頻繁に訴え、援助を求める便りが、波状的に彼の下に届くようになった。

1714 年には 10 通の書簡が交わされるが、大半が 6 月以降に集中しており、その中ヴァネッサからの書簡は 2 通しか残されていない。スウィフトからの書簡はいずれも短く、そっけない忠告に終始しているものばかりで、彼女に対する気持ちが後退しているのが分かる。そのようなスウィフトの書簡に対して、彼女からの書簡は、か弱い女性を前面に押し

¹³⁵ “but it shall be always under a Cover; and if you write to me, let some other direct it, and I beg beg you will write nothing that is particular”(Swift, *The Correspondence II*, p.123)

¹³⁶ “if it were not to tell you want to borrow any money, I would have you send to Mr. Barber or Ben Took, which you please”(Swift, *The Correspondence II*, p.56)

だして救いを求め、白馬の騎士の便りを待ち侘びる姿が色濃く滲み出ているものであった。ヴァネッサは切ない心情を訴え、せめて便りだけは欲しいと綿々と訴えている。この書簡への返事も、彼女が肉体愛を前面に押し出し、結婚を迫ったためであろう、冷淡で、冷たいものであった。梅毒罹患で肉体的結合が得られないスウィフトが、理想としている愛の姿は、男女の精神的結びつきを重要とする、友愛なのであったからである。

Swift to Miss Esther Vanhomrigh

[27 December 1714]

.... and that was the Reason why I said to you long ago that I would see you seldom when you were in Ireld. and I must be easy if for some time I visit you seldomer, and not in so particular a manner. I will see you at the latter end of the week if possible. These are Accidents in Life that are necessary and must be submitted to---and Tattle by the help of Discretion will wear off. ¹³⁷

スウィフトからミス・エスター・ヴァイナミリーへ

[1714年12月27日]

....それで、もし貴方がアイルランドに来たとしても、めったに会えないとお伝えした理由です。何時か暫く振りに、可能であれば何時ものように寛いだ気分で、貴方にお目にかかれるでしょう。出来れば週末にお目にかかれるでしょう。人生何事も無く受け入れられれば、喜んで日ごろの思慮深さ無く、お喋りしましょう。

この書簡には自己防衛にかたまって、身構えている冷淡なスウィフトの姿が見える。ヴァネッサがアイルランド移住を果たすとは、想像外の彼女の行動であった。彼女がアイルランド移住を果たしても、書簡はおろか面会もままならないと伝えておいた筈であったが、それにも拘らずのアイルランド移住であった。長年の親密な交遊でも、察知し得なかった彼女の一面であった。ダブリンには10年来のステラの存在があり、手に入れたばかりの首席司祭の地位を揺るがせかねない、彼女の行動であった。手に入れた地位を、不動のものにしておくためにも、彼は彼女に関わっている訳にはいかなかった。既に終わった事と断じているスウィフトの返信は、彼女の心を奈落の底につき落とすこととなった。彼女との関わりを絶とうとしているスウィフトに対して、アイルランドで開ける将来図を夢見ている、彼女との感情の落差は大きかった。すべてを受け入れることが人生の定めであると、切り捨てるような書簡がどれほど彼女の感情を傷つけたことであつたらうか。

ヴァネッサの恨み言の書簡は、残酷な扱いが続く限り耐えられず、忍耐も限界を超してしまい、死を選ぶこともあると匂わせていた。事態の容易ならざる進展に狼狽したスウィフトは、すばやく弁解とも取れる書簡を送った。師父としての責任と自己防衛から、彼女

¹³⁷ Swift, *The Correspondence II*, p.150.

に分別ある行動を取るよう戒めている。この書簡以後、両者の間で頻繁に交わされていた書簡が極端に少なくなっている。明らかになっている書簡は、1716年12月と1719年6月の2通、1720年になるとヴァネッサからは7通、それに対するスウィフトの返信は4通に止まっている。彼女のアイルランド移住はスウィフトにとって大きな誤算であった。スウィフトが自分の誤りに気付く、彼女との関係に終止符を打つべくとった行動が、すべてスウィフトの想いとは裏腹な行動を彼女にとらせてしまった。彼女の胸中には異性愛が根強く存在し、異常なほどスウィフトに父性を求める姿に気付かなかった。彼女が彼に見ていた父性愛が、次第に異性愛に変わり、やがては抑えきれないほど力を増してしまった。

スウィフトが理想としたのは、精神的関係を大切にす友愛であり、そこには成熟した女性の入り込む余地は残されていなかった。彼はヴァネッサを、ステラのように教え導こうとしたが、彼女の内なる異性愛の力に打ち負かされてしまい、スウィフトを異性として愛し始めてしまったのである。そのような彼女をスコットは、「ヴァネッサのスウィフトに対する黙想の不幸な愛が始まったのは、病弱で面倒を看ていた妹マリーが1720年に亡くなり、天涯孤独となったことが原因であった」¹³⁸と論じている。ヴァネッサのステラに対する嫉妬心の萌芽は、1713年7月30日の、彼女からスウィフトへの書簡で知ることが出来る。彼女の恨みごとの書簡は、スウィフトが初めて聞く彼女の恋情の吐露であった。そこにはステラに対する嫉妬心も、あからさまに述べられていた。彼女が嫉妬心を、10年以上もの歳月の間顕わにしなかったのは、ステラを健康を気遣ったことだと、スコットは興味深い逸話を示している。

ヴァネッサはダブリンにいて、スウィフトと親密な間柄を保っているステラに引き換え、孤独に耐えて生きている自分の姿を考えると、辛抱しきれなくなってしまったので、彼らの結婚に関する数々の疑問を、ステラに書き送ったと言うのである。疑問に対するステラの返答は、「私は結婚している。」というものであった。スコットはさらに、「ヴァネッサのごとき女性に、秘密にしておいた結婚について質問させるとは」と、ステラは怒りを顕わにして、ステラに宛てたヴァネッサの書簡を投げつけ、フォード(Ford)の家に引き籠もってしまったとのことであった。スウィフトはすぐさま馬に乗り、マリー・アビー(Marley Abbey)に住むヴァネッサの所に行き、彼女が出したという書簡を投げつけて立ち去った。逸話はこの様に終わっていた。この出来事の数週間後ヴァネッサは死去した。この一連の事件を証明する資料は、彼女が出したとする書簡を含めて何もない。

ヴァネッサの遺言状執行人に指名された、最高裁判事となったマーシャル(Marshall)と、クローン(Cloyne)教区の司祭となったバークレー(Dr. Berkley)の2名は、彼女の意に従い、従来はスウィフトに送られる筈であったかなりな額(5,000ポンド)に上る遺産の受取人名義を、すべて書き換える指示に従った。さらに、彼女はスウィフトと交わした書簡

¹³⁸ “Vanessa, besides musing over her unhappy attachment, had, during her residence in this solitude, the care of nursing the declining health of her younger sister, who at length died about 1720.”(Scott, *Memoirs*, p.224)

と、詩篇カデナスとヴァネッサの印刷発行を命じた。スウィフトと交流のあったパークレー司祭は、スウィフトの立場と社会的影響を考え、遺言に逆らって、その発行を数年遅らせたほどであった。彼女の死によって公表された詩編カデナスとヴァネッサを、「哀れなヴァネッサが抑制できなかつた情熱を、宥めようとしている作者の意図が窺える詩篇である。」¹³⁹ とスコットは感慨を述べている。詩編は意性愛に燃えるヴァネッサに対して、呆然とするカデナスの姿で終わるが、スウィフトの性愛拒否の想いは、梅毒罹患の事実を抱えている彼には、カデナス以上に深刻であった。詩編はこの想いを、ヴァネッサが異性愛に目覚め、カデナスに想いを打ち明ける姿に困惑している有様を、深い悔悟の念と失望の内に陳述している。

1720年7月ころ、スウィフトとヴァネッサの間で交わされた書簡の一部として、スコットによって出版されたスウィフトの詩篇がある。

Nymph, would you learn the only Art
To keep a worthy Lover's Heart
First, to adorn your Person well,
In utmost Cleanliness excel:
And tho you must the fashions, take,
Observe them, but for Fashion sake.
The strongest Reason will submit
To Virtue,---Honor, Sense, and Wit.
To such a Nymph the Wise and Good
Cannot be Faithless in they Wou'd.
For Vices all have different Ends,
But Virtue still Virtue tends. ¹⁴⁰

乙女よ、あなたに相応しい恋人の心をつなぎとめる技を学びなさい。
まず、自分の人柄を相応しいように、ぬきんでた清潔感をもって引き立てなさい。
流行りに従ってあなた自身も飾りなさい、しかし、流行りのためだけに飾るのはやめなさい。
理性だけが美德や名誉、知性を育み、甘受することが出来るのだ。

¹³⁹ “it seems to have been the intention of the author to soothe the passion which the unfortunate Miss Vanhomrigh was unable to subdue.” (Scott, *Memoirs*, p.228)

¹⁴⁰ Sir Walter Scott, *The Works of Jonathan Swift*, Vol.IX. p.732.

賢く、善良な乙女だけがそれを叶えられるのだ。

行動は誠実でありなさい。

悪徳の結末はいつも違っているのだから。

しかし、美徳は美徳のままなのだ。

情熱の赴くままに流されてゆく、ヴァネッサに対するスウィフトの警告が見られる詩編である。スウィフトの梅毒罹患という窮状も察知しないで、ひたすら自分の想いのみを打ち撒ける、彼女に対する警告である。ヴァネッサは決して過ちを犯すこともなく、約束を守っている。そのような女性を見捨てるものは、「愚か者か放蕩者である」と、自身も戒め、自分は決してそのような仲間の一員では無いのだと弁解しているのがであった。機知や美徳が失われてしまっは、どうしてこの想いを彼女の胸に届けようかと、思い悩むスウィフトの姿があった。スウィフトがヴァネッサに求めたものは、ステラと同じ資質、つまり、友愛 (Friendship)、美徳 (Virtue)、判断力 (Judgement)、知性 (Wit)、公正 (Justice)、名誉 (Honour) を守り、それらの資質を涵養する心であり、男性並みの知性を備え、永遠に変わる事のない乙女の姿であった。彼女に求めたのは、永遠に変わらぬ乙女の心と、たおやかな成人女性の、性愛拒否の姿なのであった。

第5節 エスター・ジョンソン

孤独なスウィフトの人生に、彩りを与えたもう一人の女性は、彼がムーアパークのテンプル邸で、テンプル卿の雑事を受け持つ傍ら、その幼児教育の一端を任されていた、幼名 ヘティ (Hetty) こと、エスター・ジョンソン (Esther Johnson, 以後ステラと表記) である。彼女も他の2人の女性と同じようにスウィフトにステラ (Stella) という呼び名を付けられ呼ばれていた。彼女に関する詳細な情報は、スウィフトの『自伝的雑録、断片及び、付帯的記述』 (*Miscellaneous and Autobiographical Pieces, Fragments and Marginalia*, 1962) から得られる。

She was born at Richmond in Surrey on the thirteenth day of March, in the year 1681. Her father was a younger brother of a good family in Nottinghamshire, her mother of a lower degree; and indeed she had little to boast of her birth.¹⁴¹

彼女はサリー州のリッチモンドで、1681年3月13日に誕生した。父親はノッティンガム州の良家の末子であった。母親はあまり身分の良くない家の出なので、あまり自慢は出来なかった。

ステラの父親は、ノッティンガムシャー (Nottinghamshire) 州出身のエドワード・ジョンソン (Edward Johnson) で、母親ブリッジ・ジョンソン (Bridge Johnson) は、身分の卑しい家の出であると言われている。ステラにスウィフトが初めて出会ったのは、1689年、彼がテンプル卿の食客となった時であった。当時スウィフト 22歳、ステラは8歳であった。ステラの母親は、卿の妹でテンプル邸を取り仕切っている、ジファール (Giffard) 夫人の召使い頭として、テンプル邸の外周に住まいを与えられ、家政に従事していた。彼女の夫はすでに死去していたが、夫との間にステラを頭に3人の子供がいた。そこには終生ステラと生活を共にするリベッカ・ディングレー (Rebecca Dingley) も同居していた。スウィフトは食客とはいいながら、テンプル卿の身近にあって雑用に終始していた。この雑用の中に、幼子の家庭教師の役割も含まれていた。ステラにせがまれて、本を読み聞かせこともあった。彼女はその聡明さと可憐さゆえに、テンプル邸の人気者であった。この8歳の幼子の、初期教育を担う青年スウィフトにとって、師の教えに従い、知識を吸収してゆく彼女を見ることは、大いなる喜びであった。その喜びが、更なる知識の教授を誘い、師弟は貪欲に知識を吸収していった。ステラも又、ワリーナやヴァネッサ同様に、父親のいない孤児同然の身の上であった。

ステラの幼少の頃、幼児語を交えた師弟間の会話は、『ステラへの消息』 (*Journal to Stella*,

¹⁴¹ Swift, *Miscellaneous and Autobiographical pieces, Fragments and Marginalia*, p.227.

1710) の記述でも判るように、彼女が 15 歳になった以後も、この師弟の間での共通語ともなっていた。ステラにとってスウィフトは、時には父親であり、時には教師でもあった。彼女が成長するにつれ、彼を異性として見る目が育ってくるのは当然のことであった。しかしスウィフトは、異性として彼女を見る視線の矛先を幼児語を用いることで巧みに逸らすことが出来たばかりでなく、ステラに梅毒罹患の事実を悟られない効果もあったのである。そのため 30 年もの長きに涉った交流においてさえ、スウィフトは梅毒罹患により性的交流の出来ない事実を、彼女に知られずに過ごすことが出来たのである。聡明なステラもまた、努めて異性愛の感情を表に現さなかった。スウィフトは理想とする女性像を、世間を知らない 8 歳の幼児の内から、彼女の中に形作り始めていたのであった。彼はあらゆる手段を尽くして、理想とする姿に彼女を近づけようと努めたのであった。青春時代は貧しさで心細さで過ぎた彼は、成熟した女性ではない、幼女のままでの女性、しかも男性並みの知性と教養のある女性としての彼女に、理想の姿を求め続けたのである。心情は無垢な幼児のままでありながら、成熟した女性の姿態を持つ、そのようなステラにスウィフトは持てる限りの知力を注ぎ込んだのであった。彼は自分の梅毒罹患が、何を将来もたらすかを熟知していたので、彼女に成人女性としての眼が育つことを怖れたのである。そのため彼は、彼女に幼子の心情のままであることを求めたのであった。姿態は女性でありながら、男性的な思考をするステラこそ、彼にとって理想の姿であった。スウィフトは、彼女が可愛くて仕方がなく、幾ら愛情を注いでも足りないと感じていた。彼は梅毒に罹患していたため、性愛は避けなくてはならなかったため、性愛を伴わない愛を彼女に注いだのであった。彼の愛情は異性愛でなく、師弟愛とも父娘愛とも異なる兄妹愛に近い友愛であった。

1699 年 1 月 27 日テンブル卿が亡くなったのを機に、スウィフトが家父長の座を占める家族関係を構築しようと着手した。卿の著書の整理や残務を済ませたスウィフトは、その年の夏ダブリンに渡り、まずはララカーの聖職に就任した。

1700 年 7 月 14 日付ジフェール夫人の書簡によると、このころステラの妹アンがフィビー(Filby)なる人物と結婚したと伝えている。この妹の結婚が、ステラの 아일랜드 移住を決意する引き金となったようである。スウィフト同様に、ステラも幼くして父親に死別し、働く母親の手で養育され、家父長はテンブル卿に依存していた。異郷の地 Ireland の辺境で、布教活動に明け暮れて、孤独な毎日を送っていたスウィフトは、同じ境遇にあるステラに、Ireland 移住を勧告したのである。今こそ長年の希望がかなえられる時が来たのであった。庇護者を失った彼女の経済的事情も、彼の誘いに拍車をかける要因となった。このような事情から、ステラがスウィフトの勧めに従って、Ireland 移住を果たすのは、1701 年頃と考えられる。

Her fortune, at that time, was in all not above fifteen hundred pounds, the interest of which was but a scanty maintenance, in so dear a country, for one of her spirit. Upon this consideration, and indeed very much for my own satisfaction, who had

few friends or acquaintance in Ireland, I prevailed with her and her dear friend and companion, the other lady, to draw what money they had into Ireland, a great part of their fortune being in annuities upon friends. ¹⁴²

当時の彼女の財産は、全部で 1,500 ポンド余りであった。そこから上がる利息は生活を維持するには足りないほどの僅かなものであった。一人で生活するにはアイルランドは物価も高く、友人も殆ど居ないので、私は友人として彼女を説き伏せました。ディングレー夫人にアイルランドに幾ら持ってきたか尋ねました。彼女の財産は友人の年金に頼っているとのことでした。

アイルランド移住当時のステラの全財産について、「ステラの死に際して」(“On the Death of Mrs. Johnson”, [Stella], 1727) の中で、当時の彼女の財産は、すべてテンプル卿一家から遺贈されたものであったと伝えている。愛娘ダイアナを天然痘で先立たれた卿にとって、ステラは、娘の生まれ変わりとして写っていたようであった。卿は彼女に、遺産として 1,000 ポンドの価値のあるアイルランドの土地を残し、彼女の母親ジョンソン夫人から、140 ポンドを借りた形をとって、その利息 6~7 ポンドを渡す約束までしていた。卿の妹ジファール夫人も、400 ポンドの預金から上がる利息の受領証を、ステラに贈っていた。更に、100 ポンドの基金も遺して呉れていた。これ等の基金の有効利用の点で、アイルランド移住は当を得た決心であった。しかし、スウィフトはステラのアイルランド移住を機に、彼女と結婚する意志は微塵もなかったのである。彼は梅毒の進行を恐れ、やがては精神に異常をきたすことを覚悟していたからに他ならない。彼は彼女には、そば近くにいてほしかったので、その点でも彼女の移住は、当を得た決断であった。この間の事情をエーレンプライスに次の様に伝えている。

In Ireland, however, not only were some living expenses as low as half the cost in England, but the interest rates stayed high. ‘Money was then at ten *per cent.* In Ireland’, says Swift, ‘besides the advantage of turning it, and all the necessaries of life at half the price.’ Land was cheap, money dear.¹⁴³

アイルランドでは、生活費のいくらかはイングランドの半分だけだけでなく、利まわりは 10%と高かった。生活必需品の価格は半分で、土地は安く、金利は高かったとスウィフト言っている。

アイルランドで生活する上での利点の数かずを挙げた上で、「スウィフト自身も、彼女に

¹⁴² Swift, *Miscellaneous and Autobiographical pieces, Fragments and Marginalis*, p.228.

¹⁴³ Ehrenpreis, *Swift II*, p.68.

年間 50 ポンドを、生活費の支えに提供 する。」¹⁴⁴ と申し出ている。この移住時点での彼女の財産は、およそ 1,500 ポンド足らずであったようである。ステラ 20 歳、当然の如く、このスウィフトの申し出を求婚と受け止めたに違いない。今や彼女の行く末に助言を行い得るのは、家父長としてのスウィフト以外になかった。この時の彼の役割を、エーレンプライスは次のように伝えている。

By accepting in this manner a remarkably full responsibility for both his young pupil and her older companion, Swift was doing more than establishing for himself a fantasy family in which he might act father, brother, lover, or husband as he chose.¹⁴⁵

驚くべき事に、若い教え子ステラとディングレー夫人両者に、全ての責任を持つ条件で、スウィフトは自分の生活設計も図り、父親、兄妹、恋人、夫との役割を、好みに任せて演じる奇妙な家族関係を打ち立てたのであった。

1701 年 5 月、ステラは果敢にも 15 歳年長のディングレー夫人を伴って、アイルランド移住を果たした。彼女のアイルランド移住を得て、スウィフトは、自身の生活の確立を図るばかりではなく、若い教え子と、彼女の年長の女性を含む奇妙な家族関係の中で、ステラの好むに任せて、父親、兄弟、恋人、夫役を、演じることとなった。スウィフトの幼少期の生活環境、生育環境を推し測ってみても、この様な疑似家族を楽しむことは、彼の孤独であった幼少時からの望みであったことは間違いない。彼は遂に理想の生活を手に入れたのであった。

ディングレー夫人は良家の子女を住み込みで指導し、話し相手となっていた職責の婦人であった。彼女は独身で係累も無く、将来について不安があったので、生活の安定と将来の保障の点でも、この移住は渡りに船であった。スウィフトと、ステラとディングレー夫人は、それぞれ別々に住むこととなった。司祭館に来客の際には、ステラが司祭館に出向き、女主人として来客をもてなしていた。

1727 年 1 月 28 日、ステラの死去の知らせを受けたスウィフトは、死の床の見える部屋から移動して、彼女との思い出を書き始めたが、悲しみのあまり葬儀にも参列出来なかった。彼はステラに対する悲しみを、「死が彼女を我等から引き離した」¹⁴⁶ とだけ短く記述している。彼はステラの亡骸の見える部屋には居たくなかったのである。それだけ、スウィフトの悲しみの深かったことが窺える。心根もやさしく生まれ、読書によって会話は磨き上げられ、人柄を判断する時でも、誤った判断は決してしなかった。彼女の判断は常に

¹⁴⁴ “Furthermore, Swift himself would contribute fifty pounds a year to her support.” (Ehrenpreis, *Swift II*, p.69)

¹⁴⁵ Ehrenpreis, *Swift II*, p.69.

¹⁴⁶ “when death removed her from us.” (Swift, *Miscellaneous*, p.228)

正しく、趣味の良い読書が、判断を誤らせることがなかった。忠告する折も、常に正しく、正鵠を得た判断をした。あらゆる物腰や言動は、この世のものとも思えないほど優美であったと、生前の彼女を思い出して、彼女の美德を数え上げ賞賛した。

But I cannot call to mind that I ever once heard her make a wrong Judgment of persons, books, or affairs. Her advice was always the best, and with the greatest freedom, mixt with the greatest decency. She had a gracefulness somewhat more than human in every motion, word, and action. ¹⁴⁷

しかし、私はステラが人や、本の評価や、出来事に対して間違った判断することは無かった。彼女の忠告は常に相応していて、自由闊達で良識に適ったものであった。彼女の立ち居振る舞い、言動、行動は優雅で人間離れしていた。

時には男性のような大胆な行動もすると言って、強盗をピストルで射殺した逸話も語った。彼女は会話に際して、「心ここに無きが如き態度をとることも、説明を加えたりすることもなく、ほかの人が語っている最中、辛抱し切れなくて言葉を差し挟むようなことも決してしなかった。彼女は耳当たりの良い音声で語り、はっきりと要旨を掴んでためらい無く語ったが、見知らぬ人の前では遠慮もした」¹⁴⁸ と、彼女の話し振りを賞賛している。その上、女性同士の他愛ないお喋りや、噂話や悪口等には決して参加をしない慎ましさも兼ね備えていた。「彼女は友愛を重んじ、快樂主義に対しては、批判的であった」¹⁴⁹ この点でも、スウィフトの強い願望である、肉体愛ではなく、精神的な交わりが彼女に備わっていたことを誇っている。女性としての彼女に婚姻願望が無い筈がないのであるが、スウィフトは、自分の梅毒罹患による精神障害の可能性や、性愛を伴う結婚に対して恐れを抱いていた。スウィフトが梅毒に罹患しているのではないかとの疑いを、『ステラへの消息』の記述からも推測していたステラは、梅毒ゆえの結婚忌避と察知して、そのような彼の意を迎えるため、恰も結婚に関心のない素振りで振る舞っていたのであった。スウィフトは「彼女の詩や散文は、彼女の好ましい感覚や趣味が滲んでいるので、その文体は批評に十分耐えられるものとなっている」¹⁵⁰ と、最大級の褒め言葉で彼女の文章力を賞賛している。

¹⁴⁷ Swift, *Miscellaneous*, pp.228-229.

¹⁴⁸ “She never had the least absence of mind in conversation, nor given to interruption, or appeared eager to put in her word by waiting impatiently until another had done. She spoke in a most agreeable voice, in the plainest words never hesitating, except out of modesty before new faces where she was somewhat reserved”(Swift, *Miscellaneous*, p.230)

¹⁴⁹ “She understood the Platonic and Epicurean philosophy, and judged very well of the defects of the latter.” (Swift, *Miscellaneous*, p.231)

¹⁵⁰ “She had a true taste of wit and good sense, both in poetry and prose, and was a perfect good critic of style”(Swift, *Miscellaneous*, p.231)

「判断力、快活さを最後まで保持していたが、記憶力の減退している点についてはよくこぼしていた。」、と思い出を語っていた。「女性に特有の鈍磨した感情や愚かさ、厚かましきや粗野な振る舞いはなく、ましてや、慎ましさを脅かす態度を見せることも無かった。彼女の読書や、仲間たちから得た知識は、他の同性を遥かに超えるものであった」¹⁵¹と日常会話に臨むステラの態度を誇らしげに語っている。スウィフトが彼女に求めたのは、女性的な美質、慎ましき、優しさ、優美さ、美德、に加えて、立ち居振る舞いの優美さと会話の作法であった。彼女は世間が誤解するのを恐れて、スウィフトに会いたい時でも、「常に第3者の存在が無い限り、会わなかった」¹⁵²のであった。ステラは成人女性でありながら、肉体愛を忌避し、精神的な結びつきを堅持し続けることで、スウィフトの願望に沿っていた。それ故に尚更彼女が愛おしく、悲しみのあまり葬儀すら認めることが出来なかったのである。ステラを失ってから、スウィフトの怒りを宥められる人はいなくなってしまった。彼女は陰に日向になって、スウィフトの怒りから、周囲の人々を庇っていたのである。彼のこの頃の怒りは、梅毒罹患により、思うに任せぬ思いのはげどころを、あらゆるものを見境なく対象としていたのであった。そのため、時には理不尽な怒りを浴びせられる人もいたのであった。ステラはそのような人物を庇ったりもした。そのような彼女のスウィフトに対する想いは、どのようであったか。ワイルド博士は、1727年12月30日付けのアイランド大主教特権裁判所に提出された、ステラの遺言状を提示して、この遺言状が彼女のスウィフトに対する答えだとしている。

In the name of God, Amen. I, Esther Johnson, of the City of Dublin, spinste, being of tolerable health in body, and perfectly sound in mind, do here make my last will and testament, revoking all former wills whatsoever. First, I bequeath my soul to the infinite mercy of God, with a most humble hope of everlasting salvation, and my body to the earth, to be buried in the Great Isle of the Cathedral Church of St. Patreick's, Dublin, and I desire that a decent monument of plain white marble may be fixed in the wall, over the place of my burial, not exceeding the value of twenty pounds sterling, and that the charges of my funeral may not exceed the said sum. ¹⁵³

神の御名において、ダブリンに居住する私エスター・ジョンソン（独身女性）は申し分ない健康と健全な精神で、遺言書を作成いたしました。従前の遺言書は破棄いたします。第1、私の魂は神の恩寵に、不朽の救済を求めて捧げます。肉体は地に帰り、ダ

¹⁵¹ “Although her knowledge, from books and company, was much more extensive than usually falls to the share of her sex”(Swift, *Miscellaneous*, p.236)

¹⁵² “No one has disproved the tradition that a third person invariably witnessed any meeting between Mrs Johnson and Swift”(Ehrenpreis, *Swift II*, p.73)

¹⁵³ William Wilde, *The Closing Years of Dean Swift's Life*, p.97.

ブリンのセント・パトリック教会の大地に埋葬され、きちんとした白大理石で墓所の壁はおおわれ、20ポンドを超さない限度の金額で葬儀一式を執り行って貰いたい。

1728年5月4日、遺言状として正式に検証されたこの遺言状で、ステラは聖パトリック教会埋葬されることを望み、墓所の位置や形式や、その費用に至るまでを指示してステラの切ない心情を窺わせるものである。彼女の遺言状の体裁は、世間の非難を避けるためにも必要だとして、1727年遺言状執筆の指示を示すよう、ロンドンからダブリン在住のウォーレル(Worrell)師に依頼して、ステラに伝えられていた。¹⁵⁴ 承認された遺言状は、スウィフトの指示に従って、1,000ポンドで土地を購入して、その地代をステラの母親及び妹に遺贈するとあった。もし両者が死去した際には、その地代相当額は、リチャード・スチーブソン(Richard Steevens)病院に遺贈されるとしてあり、スウィフトに残されたものは、金庫(Strong Box)と、中に収納されている紙のみであった。¹⁵⁵ この金庫にステラの、スウィフトに対する想いが込められていたのであろう。スウィフトは、この最愛のステラにさえ、結婚への道を踏ませなかったのは、それだけ自分の梅毒罹患が、彼女に影響することを怖れていた結果である。妻にしたい女性すら、妻に出来ない苦しみが、スウィフトにどのような評価をさせたのか、彼女に捧げた誕生日祝詩から見てみよう。

¹⁵⁴ I wish it could be brought about that she make her Will, her Intentions are to leave
Correspondence III, p141)

¹⁵⁵ and that my strong box and all the papers I have in it or elsewhere, may be given to
The Rev. Dr. Jonathan Swift Dean of St. Patrick's.(Wild, *The Closing Years of Dean Swift's Life*,p.100)

第6節 誕生日祝詩にみるステラ像

『ガリヴァー旅行記』の出版をひかえた1726年8月23日、ダブリンに戻ったスウィフトを迎えたのは、国民的英雄を迎える市民の盛大な歓迎の声であった。花火が打ち上げられ、「ドレイピア万歳」、「ガリヴァー万歳」の声の渦巻く中、司祭館に戻った。この歓迎の渦をよそ眼に見て、スウィフトの関心事はステラの容態であった。1727年4月8日、彼は聖パトリック教会でスウィフトの支配下のウォーリス(Wallis)師宛の書簡に、「ロンドンに行っている留守中、ステラたちが司祭館に移り住む」¹⁵⁶ことを告げている。5月13日のシェリダン師への書簡で、ステラが「風邪が元で病状が悪化している。」¹⁵⁷ことを知り、驚いていることが記されている。スウィフトとしては、彼女の健康が回復したので、安心してロンドンへ出発したのであった。ロンドン滞在中、しばしばシェリダン師と文通していたが、彼からの書簡で、ステラの病状の悪化を聞くのが恐ろしかった。『ガリヴァー旅行記』の修正作業が中々進まないのも、司祭の有給休暇である、「不在許可証」の期限が切れるのを心配して、ウォーレル師に延長申請の依頼¹⁵⁸まで伝えていた。9月18日、ロンドンを出立して帰国した。天候の悪化もあって、ダブリンに帰国したのは10月4日のことで、ロンドン滞在中、9週間も持病に悩まされ、眩暈と難聴は、その後12月から3月まで続いた。帰国したスウィフトは、ステラが司祭館で死ぬことを恐れ、ゴシップを避けるためにも、彼女の住居を司祭館から移したのであった。

1728年1月28日午後6時、スウィフトが恒例となっている賓客を司祭館に迎えて夕食会の最中に、ステラの死の知らせが届いた。彼女は死に先立つ1727年12月30日、新しく作り直していた遺言状によると、遺産管理人はトーマス・シェリダン(Thomas Sheridan)、ジョン・グラタン(John Grattan)、フランシス・コルベット(Francis Corbet)、ジョン・ローチフォート(John Rochfort)たちで、全てスウィフトの友人知己であった。病院への寄付は、彼女の友人で著名な外科医トーマス・プロビー(Thomas Proby)夫妻宛であった。スウィフトは司祭として彼女の病床を訪れ、彼女を励まし、痛みをやわらげ、神に救いを求めたが甲斐なかった。ステラを失ったスウィフトの想いは、いかばかりであったろうか。彼は彼女が病床にある時、彼女への思いを、ポープへの書簡で書き綴っている。

It would be a mistake to suppose that religion went far to console Swift for his loss
Whatever the immortality of the soul meant to the Dean of St Patrick's, it did not

¹⁵⁶ “The ladies are with me, being now come to live at the deanry for this summer”
(Swift, *The Correspondence III*, p.205)

¹⁵⁷ “I hardly thought our Friend would be in danger by a Cold”
(Swift, *The Correspondence III*, p.207)

¹⁵⁸ “If my Disorder should keep me longer than my Licence of Absence lasts, I would have you get Mr. Worrall to renew it”(Swift, *The Correspondence III*, p.229)

guarantee a reunion with those whom one desperately missed.¹⁵⁹

宗教が慰めとして崩れると勘違いしていました。スウィフトにとって、魂の不滅が彼の喪失感に何の役にも立ちませんでした。恋い焦がれた人を失った者が、再び会える保証はどこにもありません。

ステラの死の8週前に、スウィフトは娘を見送ったばかりのムーア(Moore)夫人に、お悔みの書簡を送っている。「注いだ愛情が深ければ深いほど、悲しみは深く、何時の日か我々が死を迎えた時、愛してくれた人々の嘆き悲しみは深いものとなろう」¹⁶⁰と、やがて来る最愛のステラとの別れを、スウィフトも覚悟している様子が窺える。この頃、スウィフトの友人知己の死が相次いでいた。1724年、『ドレイピア書簡』騒動のさなか、オックスフォード伯爵の死の報が伝えられた。1729年5月8日には、彼と対立することが多かったダブリン大主教キング(King)師の訃報が報ぜられ、1732年になると、ジョン・ゲイ(John Gay)が死去した。親しい人々の訃報が、スウィフトの心に重くのしかかり、己の老いを感じたことであった。

スウィフトが理想とする女性を具現化したステラを、彼は詩の中でどのように表現していたのであろうか。彼が生涯でただ一人、結婚したいと望んでいた女性がステラであったろう。彼は理想の姿に彼女を教育したのであったが、梅毒という悪疾に罹患したことで、その望みを断ち切らざるを得なくなった。彼は幾夜となく後悔し、掌中の珠玉の様な彼女を想って涙した。彼女が理想像に近ずけば近づく程、手放したくなくなったのであった。彼女に求婚する人が現れても、容易にその願いを許さなかったこともその表れである。それ故になおさら、求めるものが手元にありながら、それに触れることのできないわが身が、恨めしく感じられたことであった。そのような彼の理想とする女性像を、ステラの誕生日を祝して贈った詩篇より探してみよう。

1719年より、1727年までの間11篇の『ステラの誕生日を祝う詩』を、彼女の誕生日を中心に書き送っている。

- (1) On Stella's Birth-day (18行)
- (2) TO STELLA Visiting me in my Sickness. (124行)
- (3) TO STELLA, Who collected and Transcribed his Poems (144行)
- (4) Stella on her Birth-day (58行)
- (5) To Stella's Birth-day (20行)
- (6) STELLA'S BIRTH-DAY (80行)

¹⁵⁹ Ehrenpreis, *Swift III*, p.549.

¹⁶⁰ "These are the necessary Consequences of too strong Attachments, by which we are grieving ourselves with the Death of those we love, as we must one day grieve those who love us, with the Death of ourselves." (Swift, *The Correspondence III*, p.254)

- (7) *STELLA AT WOOD-PARK* (92 行)
 (8) *To STELLA MARCH 13. MDCCXXIII-IV* (38 行)
 (9) *STELLA'S BIRTH-DAY* (54 行)
 (10) *A PECEPT TO PESTORE STELLA'S YOUTH* (56 行)
 (11) *STELLA'S BIRTH-DAY* (88 行)

- (1) ステラの誕生に際して
 (2) 病床に訪ねてくれたステラに
 (3) 清書してくれたステラに
 (4) ステラ、彼女の誕生日に
 (5) ステラの誕生日に
 (6) ステラの誕生日
 (7) ウッド - パークのステラ
 (8) 3 月 13 日ステラに
 (9) ステラの誕生日
 (10) ステラの若さを取り戻す処方箋
 (11) ステラの誕生日

これらの詩編を通して、スウィフトのステラに対する想いを考察して見る。年齢に関しては若干曖昧なところも多々あるが、それすら彼女が永遠に若さを保ったままでいて欲しいという、願望の賜物と考えられる。最初の詩は 1718~9 年 3 月 14 日の筈であるが、その当時ステラは 38 歳、若干年月による衰えが目立ち始めていたのだが、彼には永遠に若さを保ったままの彼女の姿が写っていた。まず 1718-19 年作詩された「ステラの誕生日に際して」(“On Stella's Birth-day”)から見てみる。

Since first I saw Thee at Sixteen
 The brightest Virgin of the Green,
 So little is thy Form declin'd
 Made up so largely in thy Mind.
 Oh, would it please the Gods to split
 Thy Beauty, Size, and Years, and Wit,
 No Age could furnish out a Pair
 Of Nymphs so gracefull, Wise and fair
 With half the Lustre of Your Eyes,
 With half thy Wit, thy Years and Size: ¹⁶¹

¹⁶¹ Swift, *The Poems II*, pp.721-722. ll.5-14.

始めてまみえしは、16歳のあなた
草原に輝く、麗しき乙女であった。
姿かたちは聊か小さくはなったが、
精神は、大きく成長した。
神よ、もし二分するのが定めなら、
その美と体型を、年齢と機知を二分して欲しい。
如何なる世となったなら、
このような一組が創造されるのであろうか。
たおやかで、優しく、賢い乙女が目の輝きは衰えはいるが、
機知や年齢、体型が半分に成らないままに。

スウィフトは、(詩中では34歳)になっていたステラを、その優美な姿態に包んだ、機知に溢れた賢さゆえに愛していたのである。知性は、決して肉体と共に衰えないことを信じていた。それを証明するに格好な詩が、次の1720～21年の「ステラの誕生日」(“Stella’s Birth-day”)である。スウィフトは彼女の内に輝く、知性のきらめきが輝き続けていることを願っていた。

The Angel-Inn to ev’ry Friend:
And though the Painting grows decayed
The House will never loose it’s Trade;
Nay, though the treach’rous Rascal Thomas
Hangs a new Angel Two doors from us
As fine as Dawbers hands can make it
In hopes that Strangers may mistake it,
They think it both a Shame and Sin
To quit the true old Angel-Inn. ¹⁶²

たとえ塗料の色は褪せてしまっても、
エンジェル・インは皆に親しまれているので、
宿は商いを止めはしない
たとえ阿漕なト・マスが2軒隣に
エンジェル・インの新しい看板を掲げようとも
不案内な旅人が間違えて宿泊するほど
上手に真似てこしらえても、

¹⁶² Swift, *The Poems II*, p.734. ll.6-14.

彼らが恥と罪を感じるだけで、
昔ながらのエンジェル・インは商い続けるのだ。

ステラを宿屋のエンジェル・イン(Angel-Inn)に擬えて、その美しさ、賢さを謳っている。彼女の本質の優れていることは、年老いても変わらず輝いていることでも判ると、褒め称えている。スウィフトの理想とする女性像は、たおやかな姿態の内に、知性と機知、美德と高雅な趣味を秘めた、男性的心情の持ち主である。この詩編でスウィフトは、手に触れることさえ叶わない身で、彼女の美しさを褒めそやさなければならない、自身の梅毒罹患を恨んだのである。それだけに彼女に対する称賛の詩編には、スウィフトの切実な思いが滲み出ている。彼は詩篇の中に、彼女の美の要素を、ユーモア(Humour)、機知(Wit)、感覚(Sense)と繰り返している。彼はステラの会話能力の優れた資質を、人の気を逸らせない、品位のある勝れた話術を切り取って称賛しているのである。(9)の詩中ではユーモア(Honour)、美德(Virture)、機知、(Wit)と彼女の美德をとりあげ、カデナスとヴァネッサの中では、判断(Judgement)、知識(Knowledge)、機知(Wit)、趣味(Taste)とあるべき美德の数々を列挙して称賛している。情感豊かな心情、知的な受け答え、そして並外れた判断力と知識の持ち主で、高雅な趣味を持ち合わせていると、彼が女性に求めている資質を、ステラが全て兼ね備えていると誉め称えた。彼女が示している美的要因を、具体的に表現している詩句が、(2)「病床に訪ねてくれたステラへ」(“To Stella, Visiting me in my Sickness”)の詩中に見られる。

PALLAS observing *Stella's* Wit
Was more than for her Sex was fit;
And that her Beauty, soon or late,
Might breed Confusion in the State,
In high Concern for human Kind,
Fixt *Honour* in her Infant Mind.¹⁶³

知の女神パラスは、
ステラの知力が
女性をはるかに上回っているので、
その美貌に相応しく
人の世に混乱を巻き起こすのを恐れ
栄誉を幼心に留められた。

スウィフトはステラの内に育まれた、人並み優れた知力が、その類まれな美貌のゆえに、

¹⁶³ Swift, *The Poems II*, p.723. ll.1-6.

人々の目に留まるのを恐れたので、男性の姿態の内に知性の輝きを秘匿したのである。永遠に成熟しない乙女の姿に、美貌を留めて置いて欲しいとの願望を、詩編に託したのである。知力は男性をも凌ぐ上、美しさにおいては並み居る女性も顔色のない、成人女性であっても幼少の頃と変わらぬ師弟関係を維持する感情の持ち主であって欲しいとの願望が見られる。梅毒という悪疾に罹患してしまったので、肉体的に彼女を愛することが出来ないから、せめて性愛を伴わない間柄を維持したいと、スウィフトは望んでいたのである。それ故、永遠に乙女の姿態のままで、肉体愛を忌避し、精神愛に専念する姿を希求したのであった。成人女性の衣をまとった男性像を理想としたのである。この詩篇の 85 行から 92 行に、理想的な男性性を秘めた、理想の女性の姿が詠われている。

Say, *Stella*, was *Prometheus* blind,
And forming you, mistook your Kind?
No: 'Twas for you alone he stole
The Fire that forms a manly Soul;
Then compleat it ev'ry way,
He molded it with Female Clay;
To that you owe the nobler Flame.
To this, the Beauty of your Frame. ¹⁶⁴

ステラよ、プロメテウスは盲しいていたのか、
汝をかたどるに、性を取り違えたのか、
汝だけのために、天空より劫火を盗み、
男の魂を吹き込んだのか、
様々に工夫して、男らしさを造り上げ、
女性の粘土で造型したのか。
気高い精神は男性の魂の故、
美しい立ち居振る舞いは、女性の故。

男性にくらべても、引けを取らぬ知性を備えながら、女性としての優美な姿態に包まれているステラであった。永遠に成人女性としての欲望を持たない彼女を憧憬していたのである。肉体愛を否定し得ないほど、美しく輝いている彼女に、男性として彼女を愛することが出来ない彼の、苦渋の想いが読み取れる。世の常の女性並みに、愛欲に対する欲望がステラに生じるのを恐れている彼の姿が映し出されている。肉体愛の対象としての女性像を、彼女に見ることを忌避している姿が同じ詩篇に見られる。

¹⁶⁴ Swift, *The Poems II*, p.726. ll.85-92.

The World shall in its Atoms end,
E'er *Stella* can deceive a Friend.
By Honour seated in her Breast,
She still determines what is best:
What Indignation in her Mind
Against Enslavers of Mankind! ¹⁶⁵

ステラは決して友を裏切らなかつた。
それこそが究極の目的なのだ。
胸奥に沈潜している名誉にかけて、
何が最善か常に考え、
心にあるのは正義の怒り、
人間の心に潜む悪徳に対して。

ステラの心の奥に深く根ざしている、自尊心や道義心からも、決して友人を偽らないばかりか、何事にも最善の判断を下し、胸に秘めたる異性愛を押さえ込んでいる。梅毒罹患により、性愛に耽ることのできないスウィフトにとってステラが友愛を重んじ、友人としての異性スウィフトに、胸の中に肉体愛を秘めたまま接し、振る舞ってくれるよう望み、教導してきたのである。3度同じ詩篇から、彼の望みを我々に伝えている。梅毒罹患という悪疾が異性愛の可能性を奪ってしまったので、友愛に全てを委ねて欲しいとの想いが綴られている。

In Points of Honour to be try'd,
All Passions must be laid aside:
Ask no Advice, but think alone,
Suppose the Question not your own:
How shall I act? is not the Case,
But how would *Brutus* in my Place? ¹⁶⁶

彼女の自尊心は、
あらゆる肉欲を退け、
決して他人の助言に頼らず、
自らで考え、何事にも疑問を持たず、
己の心に従って行動して、

¹⁶⁵ Swift, *The Poems II*, p.725. ll.57-62.

¹⁶⁶ Swift, *The Poems II*, p.724. ll.35-40.

誤ることはない。

肉体愛を避けて、精神的結合に価値を見出す友愛を重んじて、行動するよう祈っている彼の姿が見える。スウィフトは日ごろから、梅毒罹患の事実がステラに知られることを恐れ、彼の悪疾を知らずに乗り越えてくれることを、願っていたのである。ステラが世俗の慣習に流され、肉体的結合に重きを置くことを恐れ、日頃の教えに従って行動することを求めていた。彼女も自分の欲望を押し隠して、スウィフトの願望に添うよう振舞うことを選んだ。彼女は彼の期待に充分応え続けてくれていた存在であった。スウィフトは、初めて彼女に会ったとき、既に梅毒に罹患していたので、彼女と結婚して妻に迎える感情は無く、ましてや、異性としての恋愛感情はなかった。しかし、ステラは成長するに従って、スウィフトを異性として見る目が育ってくるのは、当然のことであったが、彼女はそのような感情を理性の力で押し隠して、努めて悟らせないように努めていた。そのように振る舞っていたステラの心情を、(3)「清書してくれたステラに」(“To Stella, who collected and transcribed his poems”)から探ってみた。

Thou *Stella*, wert no longer young,
When first for thee my Harp I strung:
Without one Word of *Cupid's* Darts,
Of killing Eyes, or bleeding Hearts:
With Friendship and Esteem possesst,
I ne'er admitted Love a Guest.¹⁶⁷

ステラよ、汝は決して若くはないが、
初めて汝に見えし頃、私の琴線は強くかき鳴らされた。
愛の言葉を交わすことはなかったが、
貴方の瞳に射竦まれて私の心は震えた。
友愛と尊崇の念はあれども、
肉愛の存在を私は認められない。

初めてスウィフトがステラに出会った時、そこには愛を訴える瞳はなかったが、心は強く揺すられ、愛の言葉こそ交わさなかったが、彼女の内から滲み出る知性に心を奪われた。しかし最初から、スウィフトには彼女を異性として愛する感情はなく、あったのは友愛の情と尊敬の念だけで、異性愛の入り込む隙間はなかった。この様に言い訳をしなくてはならない、切ないスウィフトの想いが滲み出ている詩編である。彼の心を色濃く染めあげていたものは、梅毒罹患という悪疾だけであった。スウィフトはこの詩編中で、あからさま

¹⁶⁷ Swift, *The Poems II*, p.728. ll. 9-14.

に自分の結婚忌避の心情を打ち明けているが、彼女の感情には少しの配慮も見せていない。その原因は、彼の梅毒罹患という事実であり、梅毒ゆえに一步踏み込めない事情が、女性に冷たい気質と映ったのである。相手に自身の梅毒罹患が、冷たい気質の原因であることを悟られなかったと、誇ってもいたのである。

Love, hitherto a transient Guest,
Ne'er held Possession of his Breast;
So, long attending at the Gate,
Disdain'd to enter in so late.
Love, why do we one Passion call?
When 'tis a Compound of them all;
Where hot and cold, where sharp and sweet,
In all their Equipages meet;
Where Pleasures mix'd with Pains appear,
Sorrow with joy, and Hope with Fear.
Wherein his Dignity and Age
Forbid *Cadenus* to engage. ¹⁶⁸

愛は東の間の旅人、
心中に深く根ざすことはない。
愛は入り口で戸惑い、入ることを蔑み、
躊躇して入ってきた。
何故に我等は、情熱を愛と呼ぶのか。
愛の添え物の情熱が、愛と一緒にになると、
あらゆる要素が凝結して、愛は熱く、冷たく、
厳しく甘くなるのだ。
悲しみが喜びを伴って、
希望が恐れを伴って現れる。
それ故に、年老いても厳しいカデナスが、
愛に関することを禁じているのだ。

一時の熱情は「喜びを伴った悲しみ」と、「恐れを伴った希望」となって立ち現れると、説き論している年老いたスウィフトの姿が見える。ここに彼の本心が現れている詩句である。肉体愛は時と共に色あせ、愛の喜びは苦しみをも呼び覚ます存在であると、言い訳をしている。この弁明は、変幻自在に実体を変える愛を、永遠不変の存在だとして追い求め

¹⁶⁸ Swift, *The Poems II*, p.711. ll.768-779.

ることは、短い人生の儚い所業であると、苦しい言い訳なのである。全ては彼の梅毒に起因して、異性愛の可能性のない自分の境遇への弁解なのである。ステラが肉体愛に溺れることを恐れ、永遠の輝きを放つ友愛が、一番重要な存在であると主張したのである。異性に対する友情を、友愛と考えたスウィフトにとって、友愛とはどのような存在なのか探ってみる。

But Friendship in its greatest Height,
A constant, rational Delight,
On Vertue's Basis fix'd to last,
When Love's Allurements long past;
Which gentry warms, but cannot burn;
He gladly offers in return:
His Want of Passion will redeem,
With Gratitude, Respect, Esteem :
With that Devotion we bestow,
When Goddesses appear below.¹⁶⁹

だが、友愛こそは、至上の高みにあって、
変わらぬ理性の喜びに輝き、
美德に根ざした永遠の歓喜である。
肉欲の誘惑は束の間のこと、
愛は穏やかに暖めるが決して燃え盛らない。
彼は喜んでお返しするだろう。
情熱不足は、
謝意と尊敬、尊重で償うつもりだ。
愛の神々がこの世に姿を表されたとき、
献身を持って応えるであろう。

ステラが成人女性として、異性愛を希求しているのは当然のことであった。しかし、彼女は、その欲求を強靱な理性の力で押さえつけ、乙女の清純な姿態の内に覆い隠していることを、スウィフトは熟知していた。肉体愛を忌避している彼は、彼女の欲求を知りながら、友愛の名で情熱に押し流されるのを避けたのであった。彼にとって友愛こそが不変の存在であり、精神的な愛なのであった。そこには性愛を一時のものとして退けている彼の、愛の矛盾に苦しみ、葛藤している姿が見られるのである。結婚は、女性を男性の支配下に置くものであり、安楽な妻の座を得るため、女性は男性に媚び、へつらい、男性の愛玩物の

¹⁶⁹ Swift, *The Poems II*, p.711. ll.780-789.

地位に甘んじてしまうと説いて、結婚を忌避している自分を正当化している。スウィフトは、結婚という頸木のない自由で平等な間柄を保つことの出来る友愛を、第一義と考え、それを尊ぶ女性の誕生を希求したのであった。この論法は彼が自分の梅毒という悪疾を隠蔽し、異性愛に踏み切れない肉体的欠陥を隠ぺいするための、自己防衛の手段にすぎないのである。1721年の作と推定される「清書してくれたステラに」で、長年の希求の末、至高の存在に辿り着いたと、性愛を求めないステラを詩篇で称えた。

In all the Habitudes of Life,
The Friend, the Mistress, and the Wife,
Variety we still Pursue,
In Pleasure seek for something new:
Or else, comparing with the rest,
Take Comfort, that our own is best:
(The best we value by the worst,
As Tradesmen shew their Trash at first:)
But his Pursuits are at an End,
Whom *Stella* chuses for a *Friend*.¹⁷⁰

人生のあらゆる親密な交わりの中で、
友と、恋人、妻、様々に追い求めるが、
快樂の中にも
何か新鮮さを求める。
さなくば、他のものと較べ、
自分のものが一番だと慰める。
(あたかも商人がはじめ、最悪なものを見せて、
最善なものを値踏みさせるように)、
しかし、このような追求はステラに友と選ばれて
この望みは完結するのだ。

スウィフトが理想とするのは、女性らしい美しさと才知を兼ね備え、精神の美しさを有する女性であり、男性の愛玩物の地位に甘んじて、男性に媚を売るような女性を忌避していた。それゆえ、ステラの死去に際しても、「彼女は人間離れした優雅さで、相手に対して誠実で自由闊達に振る舞った」¹⁷¹「彼女は詩作にも散文にも実に良い趣味と、良識を兼ね

¹⁷⁰ Swift, *The Poems II*, p.728. ll.15-25.

¹⁷¹ “She had a gracefulness somewhat more than human in every motion, word, and action. Never was so happy a conjunction of civility, freedom, easiness and sincerity.” (Swift, *Miscellaneous*, pp.228-229)

備え、批判精神は完璧であった」¹⁷²と彼女の才色兼備の姿をほめそやし、「スウィフトに対する愛の表現を、純粋な子供のままの心に秘めている」と詩篇で賞賛した。スウィフトがステラに求め、与え続けたのは、他人から受ける評価 (Honor) であり、判断力 (Judgment)、決断力 (Determined) であった。これらの資質は、本来男性の特質であるが、これに加えて、女性らしい優美な振る舞いと、座を引き立てられる知性によるのである。これらの特質を、女性の美德 (Virtue) として重用したのである。この特質を、美しく成熟した肉体を持ち、肉欲愛の願望を持たない、永遠の乙女の内に求め続けたのであった。ステラはスウィフトの理想像であった。

スウィフトは梅毒罹患で、女性を肉体的に愛することが出来なくなっていたので、世間に背を向け、自分の実体が世間に知られるのを怖れていた。自分を晒すことを怖れるあまり、様々なペルソナに身を包んで実態を隠して、見解も身元を隠せるように諷刺で陳述するのが習いとなったのである。女性を至高の存在と、表面的には称賛しながら、反面、心底では愚かな行為をする弱者であると、蔑んでいたのであった。彼はフェミニストのペルソナを冠った女性蔑視、女性差別主義者であったが、梅毒を相手に罹患させることを怖れて、性愛を拒否したのであった。その性愛拒否のペルソナが、何時しか実体と同化してしまったのである。そのため彼は、結婚不適應者に名前を連ねることとなった。全ての根源にあるのは、T.C.D.在学中の放蕩が、梅毒罹患と言う結末を招いたのであり、その結末が、粘液質な彼の性格を更にゆがめていった。自己表現を諷刺に頼り、誰もがもちうる実像を様々なペルソナを巧みに使い分け、諷刺を用いて表現することで幻惑し、女性讚美の言葉の数々の陰に隠れて、女性を軽蔑したのであった。

¹⁷² “She had a true taste of wit and good sense, both in poetry and prose, and was a perfect good critic of style.”(Swift, *Miscellaneous*, p.231)

3 社会改革者としてのスウィフト

第1章 スウィフトの諷刺表現

修辞法(rhetoric)は元來說得の技術であるが、古来より、効果的な言語表現のための技術でもある。「独特な、ちょっと変わった言葉使いによって、興味を喚起され、一種の挑発を受けるような場合、修辞法は効果的である。即ち、言語表現に特異な効力を発揮させる技巧ともいえる。」¹⁷³と、佐藤信夫は著書、『レトリック感覚』で規定している。スウィフトはこの諷刺表現を、修辞法の一様式と認識していたのである。彼にとって諷刺表現は、単なる便利な自己表現に過ぎなかった。そのため、スウィフトは、対象人物や、社会を遠回しに批判するのではなく、直接的に、的確で厳しい範疇の語彙を厳密に用いて批判するので、諷刺の対象は、直接批判を身に受けることになる。権威者の愚行や悪徳を、機知を用いて嘲笑するだけではなく、諷刺の対象に向ける視点をも、重要な要素としているのである。パトリック・マレー(Patrick Murray)は著書『文学の批評』(*Literary Criticism*)で、諷刺の目的を次のように語っている。

Its chief aim is to diminish the status of its subject in the eyes of its readers. The satirists does this by arousing ridicule, amusement, contempt, hatred, anger, scorn, disgust or other hostile emotions.¹⁷⁴

諷刺の主目的は、読者の目の前で対象の威信を傷つけることにある。諷刺家は嘲笑を引き起こしたり、喜ばせたり慰めたり侮辱や嫌悪感、怒りや軽蔑、嫌悪感や悪意ある感情を引き起こさせて対象の威信を傷つけるのである。

スウィフトは『樽物語』の冒頭で「諷刺は鏡のようなもので、多くの他人の姿は映すが、自分だけは映らない」¹⁷⁵と語っているのでも分かるように、他人の悪行にのみ視点を当てて批判しているので、心理的圧迫感はその作者の諷刺とは異なり、強烈に迫ってくる。対象に充てる視線が直接的でかつ攻撃的であるから、遠回しな当てこすりとは異なる効果を生む。スウィフトの諷刺は直截な表現によるので、表現者の存在を隠ぺいするためには不都合であるが、鏡の裏から此方を窺うような諷刺を心がけたのである。著者の実在解明が容易になるのを防ぐため、用いる語彙に変化を持たせ、殊更、特異な発想をしたのであった。彼が諷刺手法を選んでいる目的は、自己韜晦にあるのではなく、結果的に自分の存在

¹⁷³ 佐藤信夫、『レトリック感覚』、講談社。

¹⁷⁴ Murray, Patrick, *Literary Criticism*, p.138. Cahill printers limited, Dublin 1935. Printed in the Republic of Ireland.

¹⁷⁵ "SATYR is a sort of Glass, wherein Beholders do generally discover every body's face but their Own;"(Swift, *A Tale of a Tub*, p.1)

を社会から隠ぺいすることにあつたのである。ヒエラルキーの倒置という視点こそ、彼の諷刺手法の本質といえよう。実体の存在が巧みに隠されれば隠されるほど、諷刺の効果が上がり、著者が曖昧な存在となるのを狙つたのである。彼にとって効果的に見解を伝える手段として、諷刺は有用であり、自分の実体を社会から隠ぺいしながら、思想や感情を、効果的に伝達する手段として諷刺を用いたのであつた。他の作家とは異なつて、彼の諷刺は鋭い表現と、特異な色彩を帯びたものとなっているのは、巧まざる効果を狙つたからなのである。スウィフトの諷刺には、ユーモアや可笑しさといった、表現に彩りを与える要素が殆ど感じられない。修辞法で求められている語句の明確な分類と、正確な表現の把握が厳密に規定していながら、本来の語彙の範疇からはみ出した効果を狙っているからである。そのため、彼の諷刺は、語句の規定の言外の意味にまで及ぶことが出来ないのも、余裕のないものとなっている。古来、修辞は言葉の文化の要として、雄弁術の中心に位置していた。理想な修辞法は、「至高の英知と理念が不可欠である」とプラトンは唱え、アリストテレスはこれに説得の技という実践的役割を与えたのであつた。スウィフトは、この修辞法の求める至高の理念を、実践的な説得の技に限定して、諷刺表現として用いたのである。諷刺は社会の善導を主目的としている。即ち、どのようにして世界の人々を道徳的行動に走らせられるか、言いかえれば、時代の悪徳や愚かさに背を向けた生活が送れるかを、指導することを目的としている。

ジェーン・オギボーン(Jane Ogborn)は、諷刺の役割について語つたスウィフトの言葉を引用して、「個人的悪行を改善し、社会を改善する目的で諷刺は用いられる」と記述している。¹⁷⁶ スウィフトは社会の秩序を整える一手法として、当時盛んに喧伝されていた「道徳的社会の構築が効果的である。」と言う論説を彼は信じていた。梅毒患者としての彼の、直接的治療法として、道徳的社会の構築が急務となつていたのである。その目的遂行のためには諷刺による、道徳的社会の実現に適う表現方法が諷刺であつた。梅毒がヨーロッパ大陸に発現した初期、患者は社会的に指弾され、隔離されたため、スウィフトにとつても自分の梅毒罹患は、知られてはならない秘匿事項の最重要課題であつた。自己の梅毒罹患の事実を、社会から隠ぺいするためにも、諷刺による社会改善策は、不可欠な作業であつた。そのため、諷刺が鋭ければ鋭いほど、道徳的社会の到来は近いと信じていた。スウィフトは道徳的社会の到来を待ち望んでいたのである。

彼は折に触れて道徳の必要性を論じており、「信仰の改善と、風儀の向上計画」(“A Project of Advancement of Religion, and the Reformation of Manners”) という論文で、パークレー伯爵夫人の優れた資質を取り上げ、彼女のすぐれた資質が社会に広まることで、道徳的社会の到来を待とうと働きかけたこともある。スウィフトは、彼女こそが道徳的社会の推進者であると、彼女の類まれな信仰心、誠実性、良識、優しさを称えたいたのでもある。

スウィフトはこのパークレー伯爵夫人が、社交的会話に優れ、真の信仰心をあわせ持つていらつしゃると称賛して、いかなる状況に置かれても、思慮深さと家政の才能で切り開

¹⁷⁶ John Ogborn & Peter Buckroyd, *Satire*, Cambridge University Press 1773. p.12.

き、御令嬢の教育も完ぺきにされている点を称賛している。とりわけ貧者に等しく慈悲を施される点などは、国家の見本となると、このご婦人の存在を世間に広めることで、宗教心の向上と、風儀の刷新に大いに役立ち、その結果、道徳的社会が到来すると信じたのである。この様なご婦人の存在が、梅毒治癒に道を開くのであると、期待していることがよく分かる。彼は折に触れて、道徳社会の到来を祈念していたのである。彼は夫人が、生涯において、信仰と道徳の範を垂れ、その向上に大いに寄与すると語っている。

To avoid so *usual* a Reproach declare this to be no Dedication; but merely an Introduction to a Proposal for the Advancement of Religion and Morals; by tracing, however imperfectly, some few Lineaments in the Character of a Lady who hath spent all her Life in the Practic and Promotion of both. ¹⁷⁷

これは献身ではなく、単に信仰と道徳を促進するための提案に過ぎないと、言われないうように、信仰の振興と道徳の向上に生涯をささげた夫人の特徴を不完全ではあるが記録した。

スウィフトは彼女の姿かたちからも、彼女の特性を称賛し、説教壇に立つ時も、「ガラテア人への手紙」(Galatians)第5章10節を引用して、「全ての人に善行を施せ」(As we have therefore opportunity, let us do Good unto all men) と、他人のために善行を行うことがいかに重要か例を挙げて説いているほどである。

Thus, if any matter equally concern the life, the reputation, the Profit of my neighbor, and my own; the law of nature, which is the law of God, obligeth me to take care of myself first, and afterwards of him. And this I need not be at much pains in persuading you to; for the want of self-love, with regard to things of this world, is not among the faults of mankind. But then, on the other side, if ,by a small hurt and loss to myself, I can preserve him from being undone, without ruining myself, or recover his reputation without blasting mine; all this I am bliged to do: And, if I sincerely perform it, I do then obey the command of God, in loving my neighbour as myself. ¹⁷⁸

生活や評判、隣人の利益、自分自身の利益などにどんなことも平等に関わっているならば、自然の法則つまり、神の法則では、他人より自分のことが大切で、他人のためにせよと説得するつもりはありません。自分を愛し、現世の事だけを考えるの

¹⁷⁷ Swift, *Bickerstaff Papers*, p.44.

¹⁷⁸ Swift, *Irish Tracts and Sermons*, p.233.

は人間の落ち度ではありません。自分の傷つきや、損失がわずかならいいが、自分が破滅してまで他人のために尽くしたり、自分の評判を危うくしてまで、その人の評価を取り戻すなどはするべきではありません。本当に隣人のためにするなら、神の思し召しに従って、自分同様に、隣人を愛して行いなさい。

彼は自己愛を認めて、他人に対する愛の存在も大切であると説いている。他人に対する愛の存在が、社会全体の善行につながり、道徳的社会の到来が可能になると信じている。この彼の主張は、ドレイピア事件の落着後に上梓された「物乞いに記章を付けよとする提案」に逆説的諷刺の表現で提案されている。ダブリンの貧者たちの所属教区ごとに、出自が分る記章を付けさせれば、援助が受けやすく、管理が容易であるとの趣旨であるが、この制度によって、自分の教区の生活困窮者の数の減少に、地区の資産家が努力すれば、その数は減少する筈で、そうなれば、その教区の困窮者対策費も減少し、教区全体が栄えるとの狙いも込めて提案したのである。困窮者を記章で区別するのは、人間の自尊心に訴えて、自身の環境から抜けださせる狙いもある。彼は一般の市民を、困窮者と区別して軽蔑したのではなく、関心を困窮者に引きつけ、善行を呼び掛け、道徳的社会の一日も早い達成を願ったからである。それによって、社会秩序の向上を促し、病院などの公共設備を整えることによって、梅毒の治療法の日も早いことを願い、道徳社会が構築できるなら、困窮者の力まで借りたいと願っていたのである。

...I mean, that of badging the Original Poor of every Parish, who begged in Street; that, the said Beggars should be confined to their own Parishes; that, they should wear their badges well sown upon one of their Shoulders, always visible, on Pain of being whipt and turned out of Town; or whatever legal Punishment may be thought proper and effectual. ¹⁷⁹

各教区の生え抜きの、物乞いをしている貧者は、自分自身の教区に制限されるべきであり、肩に何時でも見えるように自分の記章を付けなければならない。記章を付けない者は、鞭打たれた痛みで街を出るか、適切で正当な罰を与られるべきだ。

このように乞食に記章を付けてまで、一般人と差別化を進めたのは、依然として生活困窮者に満ち溢れているダブリンの街から、彼等を一掃し、平和で安全で道徳の行き渡る都市が、一日も早く実現することを願ったのであった。

To discuss satire a reader needs a wide vocabulary of descriptive words for the

¹⁷⁹ Swift, *Directions to Servants and Miscellaneous Pieces 1733-1742*, p.132.

different ways in which criticism of human behavior can be expressed: comic, humorous, sarcastic, sardonic, witty, unbane, caustic, vituperative, savage. As part of the context within which the discussion of a satire takes place, some appreciation of the different forms or styles which a satirist may choose to employ is useful, since writers often makes use of different literary forms to create a comic or satirical effect through **Parody** (an imitation of an original text) or **Pastiche** (writing in the style of another author).¹⁸⁰

諷刺を討論する読者は色々な方法で人間の行動を非難するために、広い語彙知識を必要とする。例えば喜劇的で、ユーモアがあり、皮肉的で、嘲笑的で、機知に富み、物おじしない、毒舌的で、残虐的な言葉が必要である。諷刺について討論する際には、諷刺家が用いる様々な形式や文体を理解することは役に立つ。何故なら作家は原文の模倣であるパロディや別の作家の文体で書くパステイシュを用いて滑稽で諷刺的効果を生み出すためにいろいろな文体を使用することがしばしばあるからである。

スウィフトの用いた用語は厳密な形容句だけではなく、満遍なく敷き広げられた語句で、諷刺の対象を覆い尽くし、蟻一匹逃がさない布陣となっている。そのため、対象とされた人物でさえ、自分は例外だと思いついてしまう類いのものであった。例外を許さない論述は、「謙虚な提案」の冒頭にもよく表れている。提案の理由と、話者の語調が伝わり、対象人物が網羅され、その一人ひとりの置かれた状況まで、余すことなく伝え切っている構成となっている。

It is a melancholy Object to those, who walk through this great Town, or travel in the Country; when they see the *Streets*, the *Roads*, and *Cabbin-doors* crowded with *Beggars* of the Female Sex, followed by three, four, or six Children, *all in Rags*, and importuning every Passenger for an Alms. These *Mothers*, instead of being able to work for their honest Livelyhood, are forced to employ all their Time in strolling to beg Sustenance for their *helpless Infants*; who, as they grow up, either turn *Thieves* for want of Work; or leave their *dear Native Country*, to fight for the Pretender in Spain, or sell themselves to the *Barbadoes*.¹⁸¹

この大きな街を歩いたり国を旅をする人にとって、大通りや小道や粗末な小屋の扉の影に女の乞食が3人、4人、時には6人もの襤褸を着た子供たちを連れて、道行く人に施しを求めている姿を眺めるのは、憂鬱なものである。日常の生活費を稼ぐことが出

¹⁸⁰ Jane Ogborn & Peter Buckroyd, *Satire*, p.17.

¹⁸¹ Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.109.

来るのに、彼等の母親は、子供たちの食料を求めて物乞いに一日中を費やしているのである。子供たちにした所で、大きくなったら、仕事も無いので、泥棒になるか、愛する祖国を捨て、王位僭称者の為に、スペインで戦うか、バルバドスに身売りするしかないのである。

ダブリンを訪れた人や、通りをさまよっている乞食や盗人に至るまで、貧困の原因や貧困脱却の対策までを隈なく表現している。彼の視線を逃れるものは、何一つ存在しない布陣での描写である。この調子で諷刺表現がなされるので、余裕がないとの評価をうけるのも理解できる。語感の良い語句を重ねることで、その効果は増している上、学識や敬虔な信仰心といった聖職者に不可欠な資質や、廉直さが求められる裁判官、愛国心豊かな上院議員、知識が求められる顧問と言った語句の羅列や、当然とされる形容詞に彩られた語句で、論述の正当性を担保している。逃れる隙間の一分もない論述を展開している。『ガリヴァー旅行記』第2話「巨人国」第6章の記述などはその好例である。

That Laws are best explained, interpreted, and applied by those whose Interest and Abilities lie in perverting, confounding, and eluding them. I observe among you some Lines of an Institution, which in its Original might have been tolerable; but these half erased, and the rest wholly blurred and blotted by Corruptions. It doth not appear from all you have said, how any one Perfection is required towards the Procurement of any one Station among you; much less than Men are ennobled on Account of their Virtue, that Priests are advanced for their Piety or Learning, Soldiers for their Conduct or Valour, Judge for their Integrity, Senator for the Love of their Country, or Counsellor for their Wisdom. ¹⁸²

法律を解釈し、解説するのに最も相応しい人は、法律を勝手に理解し、ゆがめ、あいまいにする事に興味を持ち、そのような能力長けている人間だと証明された。私の見るところ、条文のある部分は元来よくかんがえられていたが、その半分は消滅し、残りの殆どが変造によって曖昧になり消えてしまっている。なんらかの地位を獲得するのに完璧さは要求されない。つまり、身についた美德によっては貴族に列せられたり、敬虔な振興や学識故に聖職任じられたりすることもなく、兵士は武勇な行動を必要としないし、裁判官は高潔である必要も無く、議員は祖国愛に富んでいなくてもよく、又カウンセラーは深遠なる知識を求められている訳でもない。

スウィフトが常に自分の実体を隠ぺいしようとしていたことは、彼の友人たちの間でも良く知られていた。「ラプソディ」を密かに上梓したことを知ったポープからの1733年12

¹⁸² Swift, *Gulliver's Travels*, p.116.

月6日の書簡でも、「いつもの様に身元を隠していますが、私は貴方が著者であることは、インドの鳥の様に分かっています」と、身元を隠して上梓するスウィフトの常套手段は、インドのクジャクが羽を広げているように、はっきり分かると、彼の個性的な諷刺が、実態を余すことなく曝け出していると語っている。これはスウィフトの諷刺表現の素晴らしさの賛辞でもあり、ある意味でスウィフトがどこか自分しかできない表現方法を誇示している様でもある。スウィフトの独特で強烈な諷刺が、彼が著者であることを物語っていると、記述しているのである。自分の実態を隠すことが、諷刺表現を用いた重要な要因であった。

スウィフトが表現法として諷刺を用いたのは、怒りの表現手段として諷刺表現をすることが、自分の実体を世間に曝さない都合のよい手段であり、実体を隠ぺいする効果的手段でもあったからである。彼の熾烈な表現は、必要以上に相手を刺激してしまい、実体が世間の眼に曝されてしまうので、諷刺表現に隠れて、言いたいことや批判の矛先を隠ぺい出来ると考えたが、彼は彼の表現の場を借りて立場上普段では言えない、世間へのメッセージを伝えたのであっただけで、実際、読み手が作者を判ってしまう等ということは取るに足らない事であったし、また、判ってしまうように書いたのかもしれないがそれは本人しか判りえない事である。

彼の言語感覚が優れていたことは、スウィフト在学中の1688年のタラエ・フリエス・トリポス(Terrae Filius, Toripos)が、彼の筆になる原稿を用いたと言われている事からも明らかである。この年のトリポスの諷刺が、あまりにも激しいものであったので、その年の演者ジョン・ジョーンズ(John Jones)は学位を剥奪されたと言われている。トリポスとはその年の学位取得者から選ばれた者が、3本足の椅子に腰かけて、崩れたラテン語や、下品な英語で、諷刺の効いた演説をするT. C. D. 伝統の行事であった。この当時のアイルランドでは、政治や宗教に関わる表現は、当局の取り締まりの対象となっていた。その訴追を避けるためにも、ペルソナにより人物確定を避け、曖昧にして実像を不明瞭にすることで、諷刺表現を使うことは相応しい表現手段であった。古代ギリシャにおいて演じられた仮面劇では、登場人物の性格描写は、仮面によってあらわされ、その作品の著者は、仮面の下で自分の見解を代弁させたのであった。スウィフトも過激な社会諷刺を、都合のよい人物や事象の仮面(ペルソナ)に隠れて行い、自分の実像を大衆に曝すことを避けたのである。T. C. D. 在学中、梅毒に罹患してしまったスウィフトは、人生の出発点で、早くも挫折を味わってしまったことで、人生計画が大きく齟齬してしまったことへの、鬱積した怒りを諷刺表現で実体を隠ぺいして、発散しようとした。彼の諷刺表現の原点は、怒りに起因していたのであった。人生全てに対するやり場のない怒りを、諷刺表現で打ち付けたのであった。19世紀になるまで、梅毒治療法は確立しなかったが、汚染の蔓延を防ぐ特例として、道徳が叫ばれていた。フランス国立図書館の版画部に収蔵されている、ランベールの版画が当時の風潮を物語っている。当時の治療薬とされていた水銀の小瓶を持った梅毒患者が、身体の瘰癧をさらした姿で色慾に背を向けて病院に入ろうとして、足元にいる梅毒罹患の

我が子を眺めている姿は、道徳順守によって救われることを示唆している。当時梅毒患者を啓蒙する手段としては、このような版画による警告が効果的であった。これ等の書画を見ていたスウィフトは、梅毒治療に効果的とされる、道徳的社会的構築と、全社会的道徳の遵守を心がけたのである。そのため、反道徳的な社会に、諷刺という形で警告を發したのである。

スウィフトの怒りの發露は主として、個人に向けられた謂れのない差別や、裏切りに対してであった。梅毒罹患というやり場のない怒りを、最初に向けた先は、国民を搾取している宗教者に対してであった。当時英国国教会の腐敗は、目を覆うばかりであった。高位聖職者は高給を貪り、低位聖職者は、2~3所の教区を掛け持ちし、受給聖職碌所有者に追従することにのみ専念していて、教区信者の祈りは届かない有様であった。『桶物語』を上梓して、最初に、墮落の極にある宗教界に改善を提案したのであった。信仰に改善を提案するには諷刺が相応しいと、序文で宣言した如く、『桶物語』は諷刺に満ちている。しかし、諷刺の対象としては、信仰は相応しくなかったことは、『桶物語』は読者に誤解され、著者の品性を疑われ、身元や宗教心まで疑惑の的となってしまった。この初期の社会諷刺の論述は、梅毒罹患と言う肉体的損傷により、人生計画が齟齬をきたしたことに起因する怨念が主要な部分を占めていたことも、読者の共感が得られなかった一因であった。

このような論述は、彼の梅毒罹患にその主因があるからであった。それを論証するに好古な例は、『桶物語』の狂気の章の記述である。スウィフトは、梅毒が原因でやがては狂気に陥るとの、強迫観念に絶えず苛まれていた。

この強迫観念をジークムント・フロイド (Sigmund Freud, 1856-1939)は、ヒステリー症に分類される強迫観念のことと規定して、次の様に記述している。フロイドは、「強迫観念とはそれ自体が馬鹿ばかしいものであり、当人にとってどうでも良いことでもあり、全く児戯に類したものであることも、しばしばある。いずれの場合でも、それが端緒となって骨の折れる思考活動が始まり、患者は疲労困憊して、嫌々ながらその虜になってしまう。患者はそれが恰も自分の人生において、最も大事な課題でもあるかのように、自分の意思に反して、くよくよ考え、思い煩わずにはいられない」¹⁸³、と分析している。

この強迫観念は、自分の意思に反して何回も強い圧力をかけられている衝動にかられてしまい、時には重大な犯罪を侵すよう誘惑する内容を持っていて、患者はそのような衝動から逃れたり、自分に関係ないことと否認したり、自分の自由を禁止、放棄、束縛することによって衝動を抑え込む。この強迫観念による衝動が、実行されることもなく、逃避と用心が勝利を収めるのであると語っている。¹⁸⁴ 強迫観念に陥りやすい類型的人物は、フロイトと共同研究をしたカール・ユング (Carl Gustav Jung, 1875-1961) が参照した、フルノー・ジョーダン (Fureaux Jordan)の著作『血筋と肉体に見られる特性』(*Character As Seen in Body And Perentage*, 1896) に記述してある人物像である。

¹⁸³ Sigmund Freud、『精神分析学入門』懸田克躬訳、中央公論社、1973年、329頁。

¹⁸⁴ Carl Gustav Jung、『心理学的類型』吉村博次訳、中央公論社、2012年、101頁。

ジョーダンが男女それぞれに外向型と、内向型に分類して、外交型の性格の男性が、強迫観念に陥りやすいと規定している。外交型の男性は情熱が少なく、「この型の人物の心的態度は予測しがたく、不確定であり、気まぐれで、上ずった大袈裟な物腰を見せる傾向にあり、不平家で、何事につけても一家言を持ち、全ての事に一々難癖をつける様な判定を下すが、自分自身には常に満足している。彼の判断は間違っていることも多く、彼の立てる計画は挫折するが、それでもそれらに無際限の自信をもっている。」と判定している。スウィフトがこの外交型性格の持ち主であることは、彼の数多く出された初期の論文の多くが、物議を醸しただけですぐに忘れ去られる割には、次から次へと問題を提起し、彼の提案が受け入れられれば有頂天となり、否定されれば恨みに思い、更に攻撃を強め執念深く追及する姿勢からも容易に推測できる。

フロイドは『精神分析学入門』の第 25 講「不安」で、強迫観念から逃れる手段を、「現実不安は、或る外界からの危険、言い換えれば、予期され、予見された障害を認知した時の反応は、逃避反応と結び付いている」と、知識を持ちすぎることが不安を助長するが、その知識のために、危険を早期に認めることが出来るとも論じている。強迫観念の原因を克明に記述することで、強迫観念をやわらげる効果もあると論じている。スウィフトは、梅毒の恐怖を記述することで、心からその恐怖を除去しようとしたのである。彼はあえて狂気にふれる論述を重ねることで、強迫観念から解放されるだろうと信じていただろう。没頭することで、雑念を捨て執筆活動に専念をして、雑念を抱く時間を無くした。恐怖感から自分を忘れるため表現が大袈裟になり、強い圧力的な表現になっていった。彼の梅毒罹患は、『桶物語』執筆と時を同じくしていたのであった。

スウィフトは『桶物語』で、狂気の発現は胆汁の変化による、とした説を唱えている。人間の知性を創意工夫で豊かにするには、「下部機構から上昇する、一種の蒸気のようなものによって、攪乱されなくてはならない」¹⁸⁵ と、この攪乱作用が狂気であると言っている。彼はこの論議をさらに敷衍して、「狂気が下部機構から供給された、一種の蒸気の力によって脳髓が転倒し、攪乱されたのである」と近代派の作家が主張するのであれば、哲学や信仰に支えられた帝国を創造したのは、他ならぬこの狂気となると述べている。アレキサンダー大王 (Alexander the Great) の世界帝国建設も、大王の狂気の故であると考えたのである。想像力と実感との闘いで、常識や分別といったものが否定されてしまうことがよくあるが、「これが果たして狂気のなせる技なのであろうか」と言う疑問を投げかけている。「決まり文句を耳に、幻影は目に」¹⁸⁶。この感覚は、擦ることが触覚に快感を与えるのと、同じ効果をもっているのであり、何れも感覚を騙している行為なのである。狂気があるゆえに感覚を騙しているならば、幸福という概念を、この感覚との差異を定義すればどの

¹⁸⁵ “that if the *Moderns* mean by *Madness*, only a Disturbance or Transportation of the Brain, by Force of certain *Vapours* issuing up from the lower *Faculties*”(Swift, *A Tale of a Tub*, pp.107-8)

¹⁸⁶ “For, Cant and Vision are to the Ear and the Eye, the same that Tickling is to the Touch.” (Swift, *A Tale of a Tub*, p.108)

ようになるのかと問いかけた。この逆転する思考について論及することで、通常理念の不安定さを諷刺しているのである。この様な逆転する概念について論述することで、彼の不安感を表明し、表明することで安心感を得ようとしたのである。彼は絶えず梅毒の後遺症に怯えていたので、フロイトの分析した不安という強迫観念を表現することで払しょくしようとしたのである。彼は自分の奇異に映る表現すら、梅毒による神経障害の表れではあるまいかと怯えていた反面、天才的な煌めきでもあると誇ってもいたのである。

1708-9年の間に上梓した論文「国教会人の政治および宗教観」(“Sentiments of a Church of England Man, with respect to Religion and Government”)「イングランドにおけるキリスト教廃止論に抗す」(“An argument against Abolishing Christianity in England”)、「宗教の改善と風儀改善への試案」(“A Project for the Advancement of Religion and Reformation of Manners”)は、何れもスウィフトの思うにならない状況への怒りの表れであり、私憤であり、八つ当たりであった。1714年の論文「ホイッグ党の公共精神」(“The Publick Spirit of the Whigs”)も、「初穂料減免請願」の成否が、政党に利害に左右されている現状に立腹し、怒りを諷刺で訴えた。ホイッグ党が「審査法」の受諾を、取引にしたのを取り上げ非難したのであり、そのような不義の横行する社会は、道徳的社会で無いという観点から、風刺したのであった。彼の諷刺は何時も個人に向けられた不条理や、いわれのない非難に対する憤慨が根底にあった。しかし、『ドレイピア書簡』は、アイルランドの国家的危機に際して、国民が何も出来ず、何もしないことから、スウィフトが諷刺を用いて代弁した公憤なのである。彼はその想いを、『ガリヴァー旅行記』にまで持ち込んでいる。

1720年の『アイルランド産品汎用の提案』(*A Proposal for the Universal Use of Irish Manufacture, &c.*)このパンフレットの発行が、彼の諷刺が私憤から、公憤に変わった転換点であった。この論文でスウィフトは、所謂「羊毛産品輸出禁止法」(An Act to prevent the exportation of wool out of the Kingdoms of Ireland and England into foreign parts, and for the encouragement of the woolen manufactures in the Kingdom of England)¹⁸⁷の制定により、羊毛及び羊産品の輸出が、全面的に禁止されたことで、アイルランド経済が破綻の淵に追いやられてしまっていた。元来、アイルランドの地味は、牧畜に適しており、そこから生産される羊毛の品質が高かった。優良なアイルランド産羊毛に、市場を奪われることを危惧したイングランド毛織物業者の圧力で、この法案が成立したのであった。輸出先を失ったアイルランドの牧畜業者や毛織物業者は、離散し、廃業に追いやられてしまった。この法案成立に加えて、不在地主が借地料を上げたため、耕作者も、農地を手放して逃散し、国土は荒れ果ててしまっていた。アイルランドは食糧不足に陥り、穀物をイン

¹⁸⁷ 「羊毛産品輸出禁止法」：アイルランドを的に定めた輸出禁止法で、アイルランドの良質な羊毛産品がイングランドの毛織物業を圧迫し、大規模な飼育により農地が失われ地価が下落することを憂いたイングランドの地主の利益を守ることを目的としている重商業主義的対策である。角山栄、『アイルランド羊毛工業の抑圧』、212-254頁。

グランドから輸入しなくてはならなくなっていた。穀物の輸入が、更にアイルランドの歳出を増加させ、財政収支は赤字に陥るようになってきた。巷には子供を抱えて、食を求めてさまよう乞食が満ち溢れ、その日常茶飯事の光景は、枚挙に暇ない有様であった。このような状況下のアイルランドを改善し、国民生活を安定化させる目的で、数々の社会改造の提案をしたのであった。『アイルランド産品汎用の提案』で、彼が主張したのは、「アイルランド産品を、アイルランド国民が愛用することで、国内生産は振興し、国際収支は改善される」ということであった。この主張が受け容れ易いように、日常の出来事から説き起こして説得に努めたのであった。

It is peculiar Felicity and Prudence of the People in this Kingdom, that Whatever Commodities, or Productions, lie under the greatest Discouragements from *England*, those are what they are sure to be most industrious in cultivating and spreading. *Agriculture*, which hath been the principal Care of all wise Nations, and for the Encouragement whereof there are so many Statute-Laws in *England*, we countenance so well, that the Landlords are every where, by *penal Clauses*, absolutely prohibiting their Tenants from Plowing; not satisfied to confine them within certain Limitations, as it is the Practice of the *English*;....¹⁸⁸

農産物は国民が種をまき、畑を耕しているのに、日用品であれ農業産品であれ、この王国のものは全て、イングランドの統制下にあるのは国民にとっての奇妙でばかげている。賢い国民ならだれでも、農業に心を注ぐのは当然のことであるが、イングランドの制定法の制約を受けているため、耕作人たちは刑罰法に依って、耕作をある限界まで制限されている。イングランドの策謀で、この王国の農民を制約するのは、なんとも納得がいかない.....

この論述でスウィフトは、イングランド政府の政策を諷刺したのであった。彼はイングランド政府の政策を、ギリシャ神話のアラクネ (*Arachne*) の物語に題材を求めて、「並ぶべくもない織物の名手との評判高いアラクネと、織物の技比べの勝負に負けた女神アテナイは、アラクネを蜘蛛の姿に変え、終生腹中から糸を紡ぎ出して織り続けることを命じた」。¹⁸⁹ その身を蜘蛛に変えられたアラクネに、アイルランドを擬して、身を引き裂いて織り続けさせられた姿で、イングランドを非道徳的国家と諷刺したのである。耕作地を放

¹⁸⁸ Swift, *Irish Tracts 1720-1723*, p.15.

¹⁸⁹ “The Goddess had heard of one *Arachne* a young Virgin, very famous for *Spinning* and *Weaving*: They both met upon a Tryal of Skill; and *Pallas* finding herself almost equalled in her own Art, stung with Rage and Envy, knockt her *Rival* down, turned her into a *Spyder*, enjoining her to *spin* and *weave* for ever, *out of her own Bowels*,” Swift, *Irish Tracts 1720-1723*, p.15.

牧地に代え、牧羊で利益を得ようとしていたアイルランドに、その製品の輸出先を制限した上、土地の賃貸料を値上げした不在地主の苛斂誅求ぶりが、イングランド政府の要求と等しいものであると訴えた。この論文でスウィフトは、輸出先を失った歳入不足を補うためには、国内産品の愛用による歳出抑制以外にないと主張した。

彼は国内産品振興策提案に名を借りて、イングランド政府のアイルランドに対する、不平等政策を追及する点にあった。しかしながら、アイルランド国民の合意は得られず、国内産業は疲弊していった。1728年頃よりスウィフトは、貧しい商人や職人に、5~10ポンドのお金を貸し始めた。聖パトリックス教会の周辺には、羊毛産業の機械工や、織工が多く生活しており、彼らは仕事を失い、商売の不振に喘いでいたのであるばかりでなく、日常生活もままならなくなり、生活に困窮していった。この法律の目的と効果を、スコットは端的に評している。

The statutes of 10th and 11th William III. prohibited the exportation of all Irish woollen goods, excepting into England and Wales, and thus, at once, ruined the woollen manufactories of Ireland,...¹⁹⁰

ウィリアム3世の制定法10条及び11条は、アイルランド産羊毛製品の輸出をウェールズ及びイングランドを除いて禁止した。その結果、アイルランド羊毛産業は直ちに破滅した。

「この立法の結果、アイルランドの羊毛産業は壊滅した。」スウィフトの論述は事実を正確に記述したに過ぎないのだが、国王制定法にまで触れたので、王権批判と受け取られ、危険人物との批判が彼一身に寄せられてしまった。その批判に反発するかのようになり、彼の諷刺の語調はますます厳しさを増していった。このような国家的強権の行使は、道徳的でないとの考えから反発して、より強固な諷刺傾向へと進んでいった。その強固な諷刺が如実に見られるのは、一連の『ドレイピア書簡』である。『ガリヴァー旅行記』執筆中に発生したウッドの少額貨幣鑄造事件が、彼の怒りを増大させ、スウィフトに『ドレイピア書簡』執筆を決心させたのである。『ドレイピア書簡』第4信で、国王大権に言及した際には、革命的表現は比較的穏健であった。

Secondly, they *dispute the King's Prerogative*. Thirdly, they are ripe for *Rebellion*. And Fourthly, they are going to *shake off their Dependance upon the Crown of England*; that is to say, *they are going to chuse another King*:¹⁹¹

¹⁹⁰ Scott, *Memoirs*, p.247.

¹⁹¹ Swift, *The Drapier's Letters*, p.61.

第2に、彼等は国王大権を論議し、第3に、彼等は反乱を企て、遂に、彼等はイングランド国王の許での従属関係にまで揺さぶりをかけ、国王の交代にまで及んだ。

ドレイピア事件が終局を迎えた後、書き続けられた『ガリヴァー旅行記』第3話「ラピュータ」第3章の同様の革命的状況に陥った際には、対応処置は、更に過激さを増した表現となっている。ドレイピア事件が最終局面に至ると、諷刺表現は強められていたので、反乱にまで及びそうな過激な言動に恐れを抱き、反乱の首謀者の存在を確定する余裕を失ってしまい、著者の存在が曖昧になるという次第に陥った。その結果、政策にたいする提言は、実効に乏しい単なる批判に過ぎなくなったのである。梅毒罹患による狂気への怖れもあったので、彼の執筆に際しての臆した心が、強硬な効果を生まなかったのである。彼の論述は、ただ事実を諷刺表現で訴えたに過ぎないものとなってしまった。

彼がイングランドのアイランドに対する政策の苛斂誅求ぶりを、現実の事実に従って論じたならば、イングランド政府にも考慮を促す見解が生じたのであろうが、古代ギリシャの寓話に題材を求めて、腹中から糸を紡ぎ出すアラクネの行為に、輸出産業の術を失ったアイランドの苦しい状況を重ねたので、理解が得られなかったものと考えられる。イングランドに智の女神アテナイを当て、愚かだよこしまな心情の持主として擬したことが、イングランドの怒りを買ってしまった。筆者の身元追求を怖れたことも裏目に出てしまったのである。

諷刺手法について考察するならば、機知の存在は諷刺の要素として欠くべからざる要因の一つである。機知は言葉の能力に負うところが大きいのが、ユーモアは時代の風潮には関係が無い。「機知は単に言葉の力に頼るのではなく、笑いに深く根ざしている思想なのである」。¹⁹² ユーモアは仏頂面をした人を、笑い転げさせる力を持っている。我々が笑う時には、幾分猥褻な事柄を思い浮かべているのである。諷刺はユーモアと密接な関係を持っており、ユーモアの欠落している諷刺と区別されている。諷刺には何らかのユーモアの存在が必要なのである。なぜならば、諷刺は自分自身の愚かさや欠点を曝しものにはしないからである。

It is high time, obviously, that we attempted some definition of what 'satire is, or at least of marks by which it can be distinguished from non-satirical humour. It is clear from the outset that the author who laughs at himself, unless the self is a deliberately assumed one, is not writing satire. ¹⁹³

我々は諷刺の明確な定義付けをしなければならないか、少なくとも諷刺のないユーモ

¹⁹² "But humour can be wordless; there are thoughts that lie deep for laughter itself."
(Ronald. Knox, *Essays in Satire*, pp.18-9)

¹⁹³ Ronald Knox, *Essays in Satire*, p.30.

アと諷刺とを区別しなくてはならない時に来ていることは明らかである。自分自身を笑っているよう著者は、自分は対象に入れていないとしても、諷刺作品を書いたことにはならないのは明白だ。

この諷刺が抱えているユーモアには、何らかの悪意が見られるのである。¹⁹⁴ 諷刺はユーモアを武器にして、出来そうにない冒険を、有り得ない状況で行うのに最適な手法なのである。その好例としてノックス(Knox)は、『ガリヴァー旅行記』をとりあげ、想像上の国々への旅行記を記述しているが、読み続けるにつれて、イギリスを離れて、突序として遙かな地の想像上の「小人国」と「巨人国」を描き出しているとする。ここで描かれている諷刺の精神は、美味しい飲み物をかき回して、酸っぱいものに変えてしまう悪意の妖精の様な役割を演じている。そこには笑いを誘うユーモアの姿は見られず、ただあるのは悪意に満ちた諷刺だけであった。諷刺に必要なユーモアがあまり見られないのである。このようにスウィフトの諷刺は、ユーモアの要素の欠けた高度な表現となっているため、読んだ人は皆、自分以外の人物に向けられていると考えてしまい、諷刺の効果は上がっていないのである。ただ、スウィフトは一般的に諷刺していたのではなくメッセージ性を持っていたので万人が理解しなくてもよかったのである。ユーモアの必要性について、ノックスは次の様に規定している。

Humour is of an age, satire of all ages; humour is of one particular civilization, Satire of all countries. It is not, then, more reasonable to suppose that satire is a normal function of the human genius, and humour that has no satire in it a perversion of function, a growth away from the normal.¹⁹⁵

ユーモアはある一つの時代をあらわしており、風刺はいつの時代にもあてはまる。ユーモアはそれ自体ある特定の文化であり、諷刺はすべての国に通じるものである。だからといって諷刺は人間の才能の普通の機能であるが、諷刺のないユーモアはその機能を誤用して、正常な言語使用の発達を妨げるということにはならない。

ユーモアは一時のものであるが、諷刺は時代を超越して存続するし、ユーモアは一地域にしか通用しないが、諷刺はあらゆる地域で通用すると、諷刺の汎用性を語って、諷刺は人類が繰り返し続けている愚行を鞭打つためにあり、その対象としているのは自分以外の人々で、その人々の治療効果を高めることを目指しているのである。ユーモアが欠けている諷刺は、ぱっと閃いた考えに過ぎないと語っている。諷刺に用いられるユーモアは十分

¹⁹⁴ “Yet the laughter which satire provokes has malice in it always;”(Ronald A. Knox, *Essays in Satire*, p.31)

¹⁹⁵ Roland A. Knox, *Essays in Satire*, p.35.

に熟慮し、言葉を選んだ末の発想であるため、聞いた人は、その絶妙な組み合わせに感嘆し、諷刺の効果をより一層深く認識するのである。その点でユーモアは諷刺の実相を認識させる力を持っていると考えられる。それ故、諷刺の欠けるユーモアは、聞く人に深く考えさせることが出来ないので、その点で教育効果は薄いと考えられる。

In a word, humour without Satire is, strictly speaking, a perversion, the misuse, of a sense. Laughter is a deadly explosive which was meant to be wrapped up in the cartridge of satire, and so, aimed unerringly at its appointed target, deal its salutary wound; humour without satire is a flash in the pan; it may be pretty to look at, but it is, in truth, a waste of ammunition.¹⁹⁶

諷刺の欠けているユーモアは、厳密に言えば、こじつけ、又は感覚の誤用である。本来笑いとは、諷刺という容器に包み込まれた致死の爆発であり、生命に害を及ぼさない程度の傷口を持った的に、射ぬこうとしている様なものである。だから諷刺のないユーモアは、氷片の中でキラキラ光るものの様に、ちょっぴり可愛いが、単なる無駄に過ぎない。

ユーモアは言葉の持つ力だけで論じているから、その効果の永続性は無く、その時々状況によって、意味するものが変わり易い欠点をもっている、ときには聞いた人をヒヤリとさせることもある。諷刺という観点から作品を見た場合、諷刺に欠ける純粋なユーモアは、読者を考えさせることがないので、文章理解能力を高める教育手段としての学習価値は無い。読者はユーモアに惹かれてしばし考えさせられ、その間に諷刺の意味することに思い至るため、諷刺の効果は上がり、その一助として、ユーモアは重要なのである。

第4話「賢馬の国」では、「友人の裏切りや心変わりに会う事も無く、公然でも密かにも、論敵の攻撃に曝される必要がない」¹⁹⁷ と言い、スウィフトはこの様にあるがままの事実を述べて、論述しているだけで、矛盾する概念の語彙を結合させて、組み合わせの意外性で諷刺しているだけである。彼はユーモアのつけ入る余地のない具体的な表現で、諷刺の効果を高めようとしているのである。そのため、諷刺の効果は、スウィフトが期待しているほど、効果を齎してはいないのである。「治療すべき医師が体を壊す」(Physician to destroy my body) や、「法律家が資産を食いつぶす」(Lawyer to ruin my Fortune) など治療すべき医師が反って患者を重病にし、財産保全をその職業としている法律家が、財産を篡奪するなどは、世間によくある事例だが、スウィフトは、この世間常識を逆手にとって、反する概念の語彙の組み合わせの意外性で逆説の効果を高め、諷刺の効果を確かめた

¹⁹⁶ Ronald A. Knox, *Essays in Satire*, p.37.

¹⁹⁷ "I did not feel the Treachery or Inconstancy of a Friend, nor the Injuries of a secret or open Enemy." (Swift, *Gulliver's Travels*, p.260)

だけなのである。

第9章「一国における狂気の起源と改善利用に関する脱線」で、スウィフトが唱えたのは、ベッドラム(Bedlum)の患者でも、見方によれば社会に有用な人物ともなりえると言うことであり、視点と時期が変われば、問題は違った様相を示すのであるから、時が変わり、有用な人物が社会を改善する可能性もあり、現在認められていない人物や、その人物の業績も、やがては認められることもあるのだ。現在の視点で道徳的か否かの判断は、早急に過ぎず、道徳的社会の構築は、いか様にも達成できると論じているのである。

政党や派閥も追従者の集まりであるという、社会通念に反する表現での暗喩が至るところに鑿められている。イングランドはまさしく、悪行に満ちた者たちで充満しているところであった。この世に蔓延る悪業悪徳を告発し、改善への途を追い求めることを期待して、『ガリヴァー旅行記』が書かれたのである。

スウィフトの諷刺的性向を夏目漱石は、「彼の諷刺的態度は天性である」¹⁹⁸と語り、「スウィフトの諷刺的態度は、彼自身の生来の資質なので、『ガリヴァー旅行記』や『桶物語』に存するのでは無い」と断じている。¹⁹⁹ スウィフトは世の中を見ても、誰を見ても皆諷刺的に見てしまう人であった。夏目漱石は『ガリヴァー旅行記』を評して、「唯不愉快を与えるもののみを余して、それを根気よく書き連ねた」²⁰⁰と評している。夏目漱石は、スウィフトが生まれつきの諷刺表現を用いる人物とみているが、彼が諷刺表現を用いるに至った原因の存在について、考察していない。本論では、スウィフトが諷刺表現を用いるようになった原因は、彼が人生の出発点で梅毒に罹患したため、人生に希望が見いだせなくなった上、当時の梅毒罹患者が、都市から追放され、辺境の地に流されたことから、人間社会に居残るためには、社会から身を隠した存在として過ごさなくてはならなかった。生来さびしがり屋であったスウィフトは、人間と共に居たいが、人付き合いの上手くない狷介な人柄のため、容易に友人を作ることや、ましてや仲良しになることなど出来なかった。その癖、敏感にあらゆる不義に反応する性格であるので、批判は匿名か、著者の存在が見透かし難い諷刺で行ったのであった。身元が知られ、梅毒罹患が世間に明らかとなることを怖れたのである。

貧しい経済援助で学んだ T.C.D.での日々は、彼に人生を斜めに眺めさせてしまっていた。諷刺は眺める位置を少し変えることで、新しい観点からの描写に、面白みを見出すこともあり、諷刺の効果も増すと、ノックスは語っている。

All these things are funny, of course, only from a certain angle; not, for example, from the angle of ninety degrees, which is described by the man who falls down. But

¹⁹⁸ 夏目漱石、『文芸評論』、第15巻、267頁。

¹⁹⁹ 夏目漱石、『文芸評論』、第15巻、266頁。

²⁰⁰ 夏目漱石、『文芸評論』、第15巻、307-8頁。

amusement is habitually derived from such situations.²⁰¹

物事をある一定の方からだけ見ると滑稽である。例えば角度を 90 度変えて転落する男性によって書き表されると、話は違ってくる。娯楽はそのような状況から引き起こされたものである。

角度を変えた視点での記述は、新鮮な感覚を与え、諷刺の効果は増大するので、スウィフトは斜めに観察することで、ユーモアも生まれるのであろうと考えたのである。加えて諷刺の効果も増すので、彼は視点を変える諷刺表現に走ったのである。その姿をラガード (Lagado) の大研究所での無意味な研究に没頭している、愚かな科学者の姿に、自分を重ね合わせたのであった。スウィフトが、その愚かな科学者のような自分の姿に、理性のないヤブーの姿を見たのである。政治を志すも、縁故と賄賂の横行する時代にあってその何れもなく、僅かな縁の糸も悪意の中傷と背信で無に帰してしまった青春時代であった。彼の世間に向けた視線は、諷刺の眼を通してであった。それ故、彼の諷刺には具体的過ぎてユーモアの要素が欠けているのである。そのため、あまりにも過激な諷刺が、その過激さ故に、読者の誤解を招いた。そのようなスウィフトの諷刺手法を夏目漱石は、「スウィフトの筆は詩的な所がない。頓才も有り諷刺的でもある。又非常な達筆である。然しながら、遂に詩的な所がない。否極めて少ない。従って感情的に人の心を動かす点が少ない」²⁰²と評して、その実例として「ラピュータ」を取り上げた。

The wives and daughters lament their confinement to the island, although I think it the most delicious spot of ground in the world; and although they live here in the greatest plenty and magnificence, are allowed to do whatever they please, they long to see the world, and take the diversions of the metropolis, which they are not allowed to do without particular licence from the king;...²⁰³

妻や娘たちは、この島に監禁状態にいるのを嘆き悲しんでいるが、私はこの島が地上で最も楽しい場所だと思っている。彼等は壮麗で広大な場所に住んで、何でも好きなことをすることが出来、どこにでも行けるし、首都のどの様な娯楽も楽しめるが、何をするにも国王の特別許可証がいるのだ.....

スウィフトの書き方を、「何時でも着実で、明瞭で、落ち着いて、感想で、平面的で、よそ

²⁰¹ Ronald A. Knox, *Essays in Satire*, p.18.

²⁰² 夏目漱石、『文芸評論』、第 15 卷、321-2 頁。

²⁰³ Swift, *Gulliver's Travels*, p.149.

よそしくて、高みの見物的である」と漱石は批評している。²⁰⁴ スウィフトの文体について、「比較的微細な事柄を写すにも拘らず艶気がない。むしろドライと言ってよい。従って、濃厚な滋味の無い代わりに、決して無意味な形容詞や、不適當な主観的言語を弄しないから、読んでいて舌触りがよい」と論じている。²⁰⁵ この様な傾向は、アイルランド特有のものであり、気候に恵まれなく痩せた土地柄、自給自足がままならなく、常に隣国の支配下にあり、世話になってゆかなければならない事に不平を持っているアイルランド人は、他人行動に無関心で協調性が無く、共同作業を嫌う傾向がある。

スウィフトは梅毒罹患を機に、人生のあらゆる出来事に不満を感じていたもので、あらゆる機会に不満を表明し、あらゆる社会現象に満足することがなかった。その不満足の原因として、諷刺表現は適した手法であり、彼の天性の才能の諷刺能力が開花し、結実したのである。彼の不満足の原因は、人生におけるあらゆる希望の灯を、梅毒が吹き消してしまったからである。

²⁰⁴ 夏目漱石、『文芸評論』、第15巻、323-324頁。

²⁰⁵ 夏目漱石、『文芸評論』、第15巻、326頁。

第2章 『ドレイピア書簡』

1597年、突如として発生した梅毒は、伝染能力が強く、しかも原因が不明であったので、誰からも忌み嫌われていた。感染者は市街地から隔離されるのが必然であった。そのため感染者は、感染の事実を秘匿するのが当然の行為となっていた。熾烈な諷刺表現を行うスウィフトは、人々の耳目を集め易いため、梅毒感染の事実を秘匿することが誰よりも求められた。この状況を熟知していた彼は、用心に用心を重ねて、梅毒罹患の事実を身边から追い払ったのであった。初期の猖獗を極めた梅毒流行も、僅か十数年で感染力が弱体化し、次第に人の口から噂しか聞こえなくなってしまうが、決して消滅したわけではなかった。都市の大人口の陰に潜んでしまったのであった。医学者や研究者の地道な調査研究がなされ、その成果が上梓され、書籍が出版されていたのであった。スウィフトが『桶物語』狂気の章で論述した「下部機構から供給された一種の蒸気の力によって脳髄が転倒し、攪乱された。」という説は、フランスのジャク・デ・ベタンクール(Jacques de Bethencour)や、イタリアのジャン・フェルネル(Jean Fernel)などが梅毒の仕組みについて論じたものであった。スウィフトはこれらの梅毒に関する医学書を読んでいたのであった。彼は梅毒の治療に関しても、『ガリヴァー旅行記』の記述でも分かるように、その症状や治療法などを、当時の書籍から知識を得ていたのである。

200年近い年月、表面的には平穏な時代を経て、梅毒は徐々に解明の道を進み始めたが、病原が発見できず、治療法も不明のまま梅毒流行はやがて収まって行った。当時の医学者たちは梅毒に関する症例を集め、社会的道徳の欠如が梅毒の流行を助長しているとして、道徳の順守が叫ぶようになって来ていた。もはや伝染病治療は道徳に頼らざるを得ない状況となっていたのである。この傾向を知ったスウィフトは、『ガリヴァー旅行記』第4話の第6章で、この事実を論じている。

That, our young *Noblemen* are bred from their Childhood in Idleness and Luxury; that, as soon as Years will permit, they consume their Vigor, and codious Diseases among lewd Females; and when their Fortunes are almost ruined, they marry some Woman of mean Birth, disagreeable Person, and unsound Consitution, merely for the sake of Money, whom they hate and despise. ²⁰⁶

我が国の貴族の若者たちは、子供のころから怠惰に育てられ、贅沢な生活をしたので、年頃になると、色好みの女性達からいまわしい病気をうつされて、活力を失ってしまう。財産を使い尽くしてしまうと、生まれが卑しく、愛想が悪く、不健康な肉体の持ち主で、彼らが憎み軽蔑視しているのだが、単に金持ちである女と結婚するのである。

²⁰⁶ Swift, *Gulliver's Travels*, p.240.

この論述は、1542年既にフランシス・ラブレー(Francois Rabelais, 1494-1553)が『パンタグリユエル占い』(*Pantagrueline Prognostican*)の中で、永遠の責め苦に苛まれている有名人たちを、地獄帰りのエピスモンテが、列挙する姿で描いている話と、軌を一にする体裁の話である。この世で梅毒を病まなかった人間は、「あの世へ行くと罹るもので、一億人もいるでしょう」とエピスモンテに語らせている。²⁰⁷この時代の潮流に沿う形で、スウィフトは社会改革こそ梅毒治癒への近道と認識したので、あらゆる社会悪を是正するため、諷刺を用いて道徳社会の構築に努めたのである。彼は諷刺の陰に隠れて、不合理な政策に異を唱え、道徳の必要性を声高に唱えたのであった。従来はその折々のペルソナに身を包んで、個人的感慨を諷刺表現で行うことが多かったが、イングランドによる差別的アイルランド政策の批判を、一連の『ドレイピア書簡』で行ったのであった。『ドレイピア書簡』でスウィフトが抗議したのは、制定法でイングランド国王を共に戴く共同王国と定められているにも拘らず、従属国家としてしか扱われていないアイルランドの現状に対する是正要求であった。この要求が受け入れられることで、道徳的社会が実現し、その実現が梅毒治癒に道を開くと言う風説を信じていたからであった。彼は理性が全てを律して、決して途を誤らない「賢馬の国」に、道徳的社会構築の可能性を見出したのである。この国に永住することで、梅毒の治癒が可能となり、長年苦しめられていた悪疾から解放されると感じたのである。その思いが、もう2度とイングランドには戻りたくない、ガリヴァーに叫ばせているのである。

『ドレイピア書簡』の諷刺表現は直截的で、誰でもこの要求の正当性が理解できるものとなっている。そのため、ピティヤ(Pitty)の『政治算術』に用いられている手法を用いて、ウッド(Wood)の鑄造の非常識な金額や、品質を合理的に、実数を挙げて追求したのであった。この論議を補完するため、過去の法令まで動員して、その不合理を追求して、道徳的社会の招来を求めたのである。全ては道徳的社会の実現に努めることで、梅毒を治癒できると考えていたからであった。

1721年頃、スウィフトはジョン・ロック(John Locke, 1632-1704)の社会契約説に近い考えを持っていた。1721年1月10日のポープ宛のスウィフトの書簡には、個人の自由に関わる法律の中止は考えるべきであると、法律の廃止は可能であるが、人間感情は変えることが出来ないと論じていた。²⁰⁸トマス・ホブズ(Thomas Hobbes, 1588-1679)は、社会は個人と政治の要因によって治められており、共に権力への欲望と恐怖に左右されると語って、「社会改革には二つの手法があり、何れも道徳的規範に基づいている」と改革の手法をオグボーンは語っている。

Both believed in the need for a 'social contract' and responsible government, but whereas Hobbes thought that it was necessary to prevent war and violence, Locke

²⁰⁷ クロード・ケテル、『梅毒の歴史』寺田光徳訳、藤原書店、101頁。

²⁰⁸ Swift, *The Correspondence II*, p.373.

thought that human being were predominantly reasoning creatures, and that society would therefore spontaneously be governed by civilized rules and would naturally seek order and harmony. ²⁰⁹

両者ともに社会契約と、責任ある政府の必要性は信じていた。ホブズは戦争と暴力を防ぐには政府は必要だと考えていた。しかし、ロックは、人間は本来理性的存在であるから、社会は組織化されたルールで自然に統治される筈であり、当然のように、秩序と調和を追い求めると考えていた。

スウィフトは国家における政治的不安定は、国家の存続にも関わる上、恣意に法律を変更して、国民の安寧を揺るがす方策は行うべきでないと考えていた。彼は羊毛業者や、職人たちの救済のため貸し与えた金を、毎週 2~4 シリング宛返済させた。返済期限には厳しく対処したため、ジョンソンは、「返済期日の厳守は、かえって彼らを苦しめる」²¹⁰ と批判的な記述をしている。当事者たちは、非常な感謝と共にこの方法を支持していたのであった。窮乏している織物業者への融資は、感謝の念を持って迎えられ、織物の値段や職人の給与の相談まで、スウィフトにするようになっていた。農耕地は牧羊地に変えられ、羊毛市場は、イングランドからの輸入に脅かされ、穀物は不足し、失業者は巷にあふれていた。為政者の恣意的政策変更は、するべきでないと考えからも執筆をした『ガリヴァー旅行記』であったが、執筆を中断せざるを得ない事態が勃発した。当時アイルランドでは、少額貨幣が不足し、商取引に不便が生じていた。これに便乗するように、1722年7月、ウィリアム・ウッド(William Wood)²¹¹なる鑄造商人が、ジョージ1世の愛人ケンダル夫人(Duchess of Kendal, 1667-1743)に、10,000ポンドの賄賂を献じて、10万8千ポンドに及ぶ半ペニーと、4分の1ペニー貨の鑄造許可を取得したのであった。10万8千ポンドに及ぶ少額貨幣の鑄造は、流通市場の5倍の貨幣量であり、重量と品質が正しくとも、アイルランド経済に与える影響は甚大であった。議会は国王に、その特許の取り消しを請願したが、ウォールポール(Walpole)政権の抵抗にあつて果たせず、アイルランド議会の議決はイングランド政府に何ら影響力を持たなかった。この両者の関係を、スコットは次のように伝えている。

²⁰⁹ Jane Ogburn & Peter Buckroyd, *Satire*, p.15.

²¹⁰ “but he required that the day of promised payment should be exactly kept. A Severe and punctilious temper is ill qualified for transactions with the poor”(Samuel Johnson, *The live of English Poem Swift*, p.264)

²¹¹ William Wood (1671-1730) English Ironmaster, obtained (1722) patent to coin halfpence and farthings for circulation in Ireland (Wood's halfpence), sharing difference between bullion value and nominal value with George I's mistress, the Duchess of Kendal. Also granted patent (1722) to strike halfpence, pence, and twopences for the American colonies. Forced to surrender both patents before popular indignation, which was increased by *The Drapier's Letters* (1724) of Jonathan Swift. (*M. W. B. D.*)

Ireland was subjected to a commercial slavery, which left neither her credit, Her commodities, nor her havens, at her own disposal; and how long the civil and domestic freedom of her people might be spared, was a question which seemed to depend on the moderation of those who usurped the right of being her legislators.²¹²

アイルランドは通商に関して奴隷的な国家である。信用も商品も無く、港もなければ、自由の裁量権も無い。自国民の自由、それは立法者の権利を奪ってきた人々の穩健に頼っているように思われるのだが、その自由はどのくらいの間奪われているのかわからない。

この国家的危難に際してスウィフトは、架空の布地商マーカス・ブルータス・ドレイピア(Marcus Brutus Drapier)の名の許に、『ドレイピア書簡』を発行して、事態に無関心な国民の覚醒を図った。1724年2月に発行された、その「第1書簡」は、零細商人達を対象にして、ウッドによる鑄造貨幣の受領によって生じる損害を論じていた。続く「第2書簡・第3書簡」で、王立検査院による、ウッド貨の品質調査の欺瞞性と、受益者に関わる賄賂の存在について論じた。この12分の1の価値しかない、悪質な貨幣のウッドによる鑄造と、その流通が、アイルランドを破滅させる道筋を明らかにして論じたのであった。

「第4書簡」は、「全アイルランド国民への書簡」(“A Letter to the Whole People of Ireland”)と題して、1724年10月21日発行された。この「第4書簡」の主張の趣旨は、両国の従属関係にあった。とりわけ、「法の下での平等が損なわれているから、その回復を求める。」との訴えが、イングランド政府に危険思想だととらえられ、『ドレイピア書簡』の第4信を、悪意に満ちたパンフレットと決めつけられ、その著者に300ポンドの懸賞金が懸けられた。

If, then, oppression has not quite subdued,
At once, your prudence and your gratitude;
If you yourselves conspire not your undoing,
And don't deserve, and won't draw down your ruin,
If yet to virtue you have some pretence;
If yet you are not lost to common sense,
Assist your patriot in your own defence.
That stupid cant, 'He went too far,' despise,
And know, that to be brave, is to be wise:
Think how he struggled for your liberty,

²¹² Scott, *Memoirs*, p.255.

And give him freedom, whilst yourselves are free.²¹³

圧政がこのまま続くならば、
慎重であることも、感謝の念も不必要だ。
もしボイコットを企てるなら、
破滅を招く行為は望まぬことだ。
見せかけの善行は偽りの行為だ。
もしお前に良識あるならば、
愛国者に援助の手を差し伸べよ。
失望して逃散を図ったならば、それは愚かなことだ。
勇敢である事こそ、何にも増して賢い行為なのだ。
彼はどのくらい汝の自由のために戦っているかを考えてみよ、
汝が自由である限り、彼に自由を与えよ。

スウィフトの作と推定されるこの詩が、当時の人々に、常日頃口ずさまれていた。ドレイピアは、アイルランドの国民的英雄と祭り挙げられ、上掲の詩と共に、聖書から引用した詩句を、それぞれに口ずさんでいた。

And the people said unto Saul, Shall Jonathan die, who hath wrought this great salvation in Israel? God forbid: as the Lord liveth, there shall not one hair of his head fall to the ground: for he hath wrought with God this day. So the people rescued Jonathan, that he died not.²¹⁴

人々は、サウル王に言った。もしジョナサンが死んだなら、イスラエルの偉大な救済は誰が行なうのか。神はジョナサンの髪の毛一筋たりとも失わせてはならない。彼は神と共に働いているからである。人々よ、ジョナサンが死ぬことのないよう守れ。

ジョンソンは、『ドレイピア書簡』の結末を「大衆の常軌を逸した憤激が、提案の形をとり、結果、著者は人気者となった。」²¹⁵と簡潔に語っている。梅毒罹患の事実を隠ぺいするためもあって、正体を明かさず諷刺で揶揄する体裁のものが、従来は多かったが、この「第4書簡」は、アイルランドの怒りを自分の怒りとして、ドレイピアの名のもとに姿は隠して

²¹³ Scott, *Memoirs*, p.166.

²¹⁴ *The Holy Bible*. American Bible Society instituted in the year 1816. New York. p.284. *The Book of Samuel I*, Chapter 14-45.

²¹⁵ “the attention of the public being by this outrageous resentment turned upon the proposal, the author was by consequence made popular” (Samuel Johnson, p.258)

いるが、実在を曝して抗議したのであった。そこにはスウィフトの私憤のない、純粋な公憤の訴えがあった。このまま傍観していると、アイルランド経済が破たんし、国民が塗炭の苦しみの淵に追いやられることを危惧したので、彼はアイルランドを救済するため立ち上がった。怠惰なアイルランド国民のために、一助の手を差し伸べたのであった。

度重なる抗議にもかかわらず、国民も、議会も、イングランド政府も、何の変化の姿勢を見せなかった。スウィフトの怒りは頂点に達し、究極の抵抗運動を『ドレイピア書簡』で開始した。それがウッド貨受領拒否のボイコット運動であった。彼が中心に据えたのは、イングランド及び、アイルランド両国政府の、共同王国としての平等性を求める訴えであった。

ウッドは 1723 年早くもダブリンに向け、鑄造した少額貨幣を出荷し始めた。同年 8 月 13 日、アイルランド総督としてグラフトン卿が任命され、1723 年 9 月 9 日にはアイルランド議会が開催された。議会は直ちに輸入された貨幣の品質調査を命じた。この命令に先立つ 1722 年 8 月 1 日、歳入委員会による公式な鑄造反対の抗議が行われていた。1723 年 12 月 12 日、調査結果の公式レポートが到着した。報告書の内容は、ウッドを擁護し、その弁解に終始したものであった。議会でその調査結果が朗読されたが、翌年 3 月まで、総督はその調査結果を国民には知らせなかった。国民の鑄造反対の声にも拘らず、鑄造は継続された。ウッドの特許取得後 18 ヶ月を経た 1724 年初頭になっても、公式な鑄造停止命令は出されなかった。

1724 年 2 月、総督に対する弱腰なアイルランド議会指導者たちに代わって、『全アイルランド国民への書簡』と題する「第 4 書簡」を発行して、ウッド貨ボイコットにむけ、国民の総意を結集する キャンペンを展開した。「第 1 書簡」で大量のウッド貨の受領による不便さと、損失の莫大となることを、計算式によって強調したが、ウッドは国民を惑わす妥協案で対抗した。8 月 18 日になると、ニュートン による分析結果が到着したが、その分析結果は、ごく少量の鑄造貨幣の分析で信頼出来ないという、ドレイピアの指摘をうけて、議会は大量の鑄造貨幣の重量調査を求めた。その結果は、ウッドを利するように捏造されたものであるとして、「英国枢密院による委員会報告書に関する観測書」(“Some Observasion upon a Paper called The Report of The Committee of The Most Honourable the Privy-Council in England”)なりうる、「ドレイピア第 3 書簡」を発行して論及した。難解なその分析内容から、対象読者を一部資産家と、土地所有の貴族に限定して論を展開した。この「第 3 書簡」でスウィフトは、「第 1 書簡」で例示した計算式を更に綿密に、さらに拡大して、アイルランドに及ぼす損失の莫大なことを示して警告した。鑄造から得られる利益の全てがイングランドに齎され、アイルランドには、国家経済破滅だけを齎すことを示した。その損害が、地主階級や資産家階級にまで及ぶ道筋を、明確に示して警告し、その事実を例証するため、過去においてアイルランドで鑄造された 1680 年の支配者ダートマス(Lord Dartmouth)卿及び、1685 年のノックスによる鑄造の実態を示したのであった。このいずれの鑄造も金・銀貨での交換義務が謳われている上、1689 年-1692 年間に 47 トン

しか鑄造されていないのであった。それにひきかえ、ウッドは 360 トンも鑄造し、金銀貨での支払いの保証がないという粗悪なものであった。分析結果もウッド貨の全量分析ではなく、その一部を取り出して分析したに過ぎず、その結果で、全量の正当性を論じているとして、その不合理性を追求したのであった。「アイルランド国民の、利便性のための少額貨幣鑄造にも拘らず、アイルランドに何の利得も齎さない」²¹⁶ 利益を得るのはウッドのみであると主張した。経済破綻の危機を警告したが、十分な理解が得られず、ボイコット運動が頓挫しかねないことを危惧したので、ボイコット運動を補強する目的で、発行したのがドレイピア「第 4 書簡」であった。

1724 年 5 月に任命されたカートレット (Carteret) 卿が、10 月に至るも任地に赴かないことから、様々な流言蜚語が飛び交った。やっと 10 月 22 日着任、正にその日に的を合わせるように、この「第 4 書簡」は発行されたのであった。総督としての主たる任務は、最低数量のウッド貨の導入を準備することであった。カートレット卿が着任して最初に出した布告は、『ドレイピア書簡』の著者に対する懸賞金 300 ポンドの提供であった。イングランドは、著者がスウィフトであることは自明の事実であった事を判っていたが、誰一人として密告するものはいなかった。この懸賞金に関して、ハーバート・デイビス (Herbert Davis) は、「第 4 書簡」にはイングランド政府が危険と感じた記述があったからと、次のように語っている。

But the most dangerous part of the Fourth Letter was the reply to the slander, which Swift attributes to Wood, that Ireland desired to shake off its dependence on the crown of England. Swift repeats the arguments of Molineauz that the people of Ireland have equal rights with the people of England under the same King but itsits that Ireland is in no sense a depending kingdom....²¹⁷

第 4 書簡で最も危険な個所は、スウィフトがウッドの所為にした中傷の部分である。そこには、アイルランドはイングランド国王の統治する従属関係を振り捨てたいと望んでいると言う点であった。スウィフトはモリノーの主張、つまりアイルランドの国民は、同じ国王の許でイングランドの国民と同等の権利を持っているということを繰り返している。アイルランドはイギリスの従属国家であるという感覚は持っていないと主張している。

「第 4 書簡」で最も危険視されたのは、ウッドにかこつけて、「アイルランドは、イングランドとの従属関係を振り払いたいと望んでいる。」という条項であると、彼は記述してい

²¹⁶ All Things are lawful, but all Things are not expedient. We Are answered, that this Patent is lawful; is it expedient?(Swift, *The Drapier'S Letters*, p.41)

²¹⁷ Swift, *The Drapier's Letters*, p.xviii.

る。アイルランドは、イングランドと同等の権利を獲得したいと望んでおり、それが聞き入れられなければ、従属関係を振り払い、主権者に反抗すると繰り返し陳述したことにもあった。イングランド政府は、アイルランドが、王権に叛き、プリテンダー（Pretender）に道を開く危険を感じたのである。危険分子に対する懸賞なれば、この布告は容易に理解できる。以下に示したのは、この懸賞金布告文の一部である。

PROCLAMTION AGAINST THE DRAPIER
BY The Lord Lieutenant and Council Of Ireland,
A PROCLAMATION. CARTERET.

We the Lord Lieutenant and Council do hereby Publish and Declare, That in order to Discover the Author of the said Seditious Pamphlet, We will give the necessary Orders for the Payment of Three Hundred Pounds Sterling to such Person or Persons as shall within the Space of Six Months from the Date here of Discover the Author of the said Pamphlet, so as he be Apprehended and Convicted there of Given at the Council-Chamber in Dublin this Twenty Seventh Day of October, 1724. ²¹⁸

ドレイピアに対する布告

アイルランド総督およびアイルランド評議会布告

カートレットアイルランド総督及び評議会はここに布告する。

所謂扇動パンフレットの著者の発見を命じる。命令に応じたものには金貨 300 ポンドを、当該パンフレットの著者発見の日より 6 ヶ月以内にその者が逮捕され、有罪と決定してからダブリン評議会によって授与されるものなり。1724 年 10 月 27 日

期間を限定したこの懸賞金布告は、効果がないとも受け取れるものであった。この懸賞金提供の布告には、旧知のスウィフトの姿が色濃く滲んでおり、国家の基盤を揺るがせ兼ねない危険思想の持ち主に対する布告だけに、カートレット総督の苦しい胸の内が推察される。イングランドとアイルランド 2 ヶ国が共同国家を構成しているのではなく、アイルランドがイングランドに従属しているのが現状であった。アイルランドの従属関係が鮮明となったのは、ウォールポール(Walpole)政権の「重商主義」政策 によるところが大であった。ウォールポール ²¹⁹ 政権下のホイッグ党は、政策遂行にあたって、アイルランドに一切利益を供与することを禁止した政策を執り続けていた。ウッド貨の流通が思うに任せぬこともあって、徹底的な締め付けを行うため、総督交代の時期を早めてまで、新総督を派遣した

²¹⁸ Swift, *The Drapier's Letters*, p.205.

²¹⁹ Sir Robert Walpole, first earl of Orford (1676-1745). the leader of the Whig party. (M.W.B.D.)

のである。それ故なおさら、ボイコット運動の首謀者ドレイピアに対する対策は、更に強固な意志を示して実行しなければならなかった。カーターレット卿としては、著者がスウィフトであることは、様々な情報源から得ていた上、旧知のスウィフト自身からも貴重な情報を与えられていたので、度重なるウッド貨鑄造計画の廃止に寄せる催促と、懸賞金提示との狭間で対応に窮したのであった。

『ドレイピア書簡』でスウィフトが一貫して主張しているのは、一時の困窮から独立国家としての自負心を見失って、国家の主権を放棄することの愚かさを、旧約聖書のエサウの故事を取り上げて諫め、与えられた報告書を鵜呑みしている、アイルランド国民を欺瞞するウッドの提案に、唯唯諾諾と従っている議会の愚かさだった。長年に渉る困窮生活に疲れ果てたアイルランドを、エサウに擬して、独立自尊の精神を失い権力のなすままに身を委ねている、アイルランドの愚かしさに警告を発した。彼はアイルランド国民に、独立国家としての誇り失わず、主権の尊重を堅持することを求めたのであった。同じ国王を戴く共同王国でありながら、イングランドの従属的国家としてしか扱われていない、現状の改善を要求したのであった。国王大権と、アイルランドの国家基盤への論述は、日頃のアイルランド政策の不公平性に及び、その元凶たる宰相ウォーポールへの批判であった。「新総督は、ウッド貨の早急な流通を命じられて着任した」²²⁰ という虚偽の宣伝に対しては、書簡でその虚偽性を明らかにし、「ウッド貨反対組織は全てカトリック教徒である」²²¹ などという、事実無根の言い分は、「末期の犬の遠吠えに過ぎない」と切り捨て、国民に勇気を呼びかけ、安堵を与えようとした。

ウッド貨がアイルランド経済に及ぼす損失を明らかにして、全体像を浮き彫りにしたが、アイルランドに残された手段は、ウッド貨受け取り拒否という消極的手段しか残されていない。これはイングランドとアイルランド両国の、力関係が大いに与かってのことであった。両国の力関係を、ウッド一味に対する反論中に言及したことが、イングランド政府当局者に危険な兆しと受け取られたのであった。

This Imposter and his Crew, do likewise give out, that, by refusing to receive his Dross for Sterling, we dispute the King's Prerogative; are grown ripe for Rebellion, and ready to shake off the Dependency of Ireland upon the Crown of England. ²²²

課税者とその仲間たちは、正貨でない無価値のものを受領するのを拒否ことでウッド貨幣はアイルランド経済に損失を与えるということを知らせている。我々は国王の大権に抗議しており、反乱にまで及び、イングランド国王との従属関係を何時でも振り

²²⁰ ...,that the Lord Lieutenant is ordered to come over immediately to settle his Half-pence. (Swift, *The Drapier's Letters*, p.54)

²²¹ ...,He says directly, That all those who opposed the Half-pence, were Papists, and Enemies to King George. (Swift, *The Drapier's Letters*, p.65)

²²² Swift, *The Drapier's Letters*, p.54.

払う用意がある。

この一文が反乱扇動と受け止められたのである。国王大権に関して言及していることも問題視されたのであった。しかしスウィフトにとって、不公正の解消こそが道徳的社会への第1歩であり、梅毒治癒の近道であるので、譲れぬ条項なのであった。

The Kings of these Realms enjoy several Powers, wherein the Laws have Not interposed: So, they can make War and Peace without the Consent of Parliament; and this is a very great *Prerogative*. But if the Parliament doth not approve of the War, the King must bear the Charge of it out of his own Purse; and this is as great a Check on the Crown. So the King hath a *Prerogative* to coin Money, without consent of Parliament:...²²³

これらの王国の王たちは、いくらかの権力を行使しているが、法律には介入しないので、議会の承認なしで、戦争を字眼られ、平和条約を締結できる、これこそ偉大なる国王大権である。しかし、もし議会在認可しなかった場合は、国王は戦争経費を自分の家政から支払わなければならない。これこそが国王に対する大いなる制限である。それ故国王は、議会の承認なしで、硬貨の鑄造が行なえる国王大権を持っているのである....。

国王大権は、何人も犯すべからざる国王の専権事項であり、戦争や平和条約締結などの国家的事件に際しては、議会の承認なしに国王大権を行使できるが、承認なしに行われた行為は、その費用の国庫負担が及ばない規定を挙げて、ウッドによる少額貨幣の鑄造の、非合法性について論述した。これは卑金属の通貨の鑄造が国王大権でないこと、議会の承認を得ていないことに対する諷刺であった。厳しい制限に反して、ウッドに下された鑄造特許が非合法であることをほのめかしたのである。ウッド貨鑄造許可は、恣意に振るわれた国王大権の濫用であることを訴えたのであった。議会の承認なしで行われた今回のウッドによる鑄造、それ自体は違法ではないが、「金・銀貨でない貨幣の鑄造は、国王大権といえども国民にその受け取りを強制できない」と論議の正当性を補強し、ボイコット運動の合法性を主張した。「卑金属で鑄造された貨幣の受け取りを強要する行為は、国王大権にはない」と、国王大権に関わる法案を示して、ボイコットの合法性の確認を行った。更に「何人も受領を強制されない」²²⁴と、簡潔に主張を繰り返し、ウッド貨受領拒否が合法的手段であることを確認した。「純正でない貨幣を臣民に強制する権限が、立法上国王に与えられ

²²³ Swift, *The Drapier's Letters*, p.54.

²²⁴ “that no body alive is obliged to take them”(Swift, *The Drapier's Letters*, p.56)

ていない」²²⁵ と、国民の不安を払拭するように力強く宣言して、ベーコン (Bacon) の言葉を引用してこれを補強した。

*...,as God governs the World by the settled Laws of Nature, which he hath made, and never transcends those Laws, but upon high important Occasions: So, among earthly Princes, those are the Wisest and the Best, who govern by the known Laws of the Country, and seldomest make Use of their Prerogative.*²²⁶

神はこの世を自然の法則で支配し、自分で法律を作ることをせず、重要な場面に直面しても法を曲げるようなことはしなかった。だから、初期のもっとも賢くて最良の女王たちはこの国を国の法律によって支配して、彼女らの特権を振りかざしたりはしない。

動揺しがちの国民に安堵を与え、アイルランドのカトリック教徒が、反乱を企てようとしているというウッド一味の中傷を好機と捉え、アイルランドとイングランドの関係が、従属関係にあると考えている国民が存在するというというだけで、決して反乱を企てようとしているのではないと、従属関係の存在に光を当て、不公正な対アイルランド政策を明らかにした。論議しているのは従属関係の是正であり、要求しているのは自由 (Liberty) と、貿易の自由を含む国家としての自由裁量であり、所有権(Property)であった。貿易によって得られた資産の、配分の自由を求めているアイルランドに対する、イングランドによる、アイルランドの対外貿易の制限と、不均衡の是正を求める要求であった。力を増してきたアイルランドの家畜産業、とりわけ羊毛産業の力を殺ぐ目的で制定された「禁圧法」が、アイルランド経済を追い詰めたばかりか、近隣諸国への羊毛製品の輸出によってイングランド経済まで圧迫し、アイルランドが羊毛の需要増大に備えて、農地を牧用地に変換した結果、大規模な土地価格の下落を招いてしまっていた。この大規模な農地の牧草地への転換の結果、借地料の下落を招いていた。損失を蒙ったのはイングランドの地主階級だけではなく、羊毛産業以外他に主たる産業を持たないアイルランドにとっても、国家財政を著しく圧迫したため、国民生活を塗炭の苦しみの淵に落した。結果的に、アイルランドは、イングランドの属領としての地位に甘んじることとなってしまった。この一方的な法律が、アイルランドがイングランドの属領とみなされているためとの視点から、抗議を重ねたのであった。

...,that Ireland is a depending Kingdom; as if they would seem, by this Phrase, to

²²⁵ “the Law hath not left a Power in the Crown to force any Money, except Sterling, upon the Subject” (Swift, *The Drapier’s Letters*, p.59)

²²⁶ Swift, *The Drapier’s Letters*, p.55.

intend, that the People of *Ireland* is in some State of Slavery or Dependance, different from those of *England*: Whereas, a *Depending Kingdom* is a *modern Term of Art*; unknown, as I have heard, to all antient Civilians, and *Writers upon Government*; and *Ireland* is, on the contrary, Called in some Statutes an *Imperial Crown*, as held only from God;... ²²⁷

アイルランドは見る通りの従属国家である。この一句でアイルランド国民はある種の奴隷状態か、イングランド国民とは違った付随的状态にあることを彼らは表そうとしているように思われる。従属国家という言葉は私が知る限り古代の民法学者や、政府の御用学者には知られていない近代的な専門用語である。アイルランドは法令には神が司る英帝国と呼ばれている。

アイルランドの自治独立に論及したのも、不公正の是正も、道徳社会への第 1 歩であったからである。イングランドからの移住者や一部のアイルランド人としての強固な自意識を持たない人々は、アイルランドを従属国家と考え、自らをある種の奴隷、又は隷従関係の状態にあると認識している人々であると切り捨てていたスウィフトであったが、これを機会に、これらの人々にも同情の眼を注ぐようになった。これらの人々に対して、ヘンリー 8 世の制定法を持ち出して、アイルランド国民に、独立国家の国民としての自覚を促したのであった。両国関係が平等であることを、法律を持ち出して説得し、イングランドがアイルランドを統治しているなどとは考えられないと断言した。この様に劣等感を払しょくしたのであるが、この劣等感は、不平等な貿易禁止令にあり、この両国を分断しているのは、イングランド政府の政策であることを明らかにして、共同王国の一員であることに誇りを持たせようとしたのである。この論述をイングランド政府は、国民に不要な認識を植え付け、イングランドのアイルランド統治に支障を生じさせかねない主張だと、危惧したのである。アイルランド国民は、トーリー党とホイッグ党は勿論、文官は申すに及ばず、教会組織に至るまで一致団結してウッド貨に反対しているだけなのであった。アイルランドでのこの奇妙な革命は、ウッド貨に対する反対運動であって、決して国王に対する反乱ではないと、明確に宣言した。この両国の関係を、「人心を離反させる要因である金が、分裂した国民を団結させているのである」²²⁸ と皮肉な表現で言い表している。

For I declare, next under God, I *depend* only on the King My Sovereign, and on the Laws of my own Country. And I am so far from *depending* upon the People of *England*, that, if they should ever *rebel* against my Sovereign, (which God forbid) I

²²⁷ Swift, *The Drapier's Letters*, p.62.

²²⁸ “*Money, the great Divider of the World, hath, by a strange*” (Swift, *The Drapier's Letters*, p.61.)

would be ready at the first Command from his Majesty to take Arms against them; as some of *my* Countrymen did against *theirs* at *Preston*. And, if such a Rebellion should prove so successful as to fix the *Pretender* on the Throne of *England*: I would venture to transgress that *Statute* so far, as to lose every Drop of my Blood, to hinder him from being *King of Ireland*.²²⁹

神の名に於いて私は宣言する。私は我が主君である王の許にのみ従属し、我が祖国の法律に従う。イングランド国民に従属しているわけではないのでもし彼らが、国王に背くことがあれば、(神がお許しになれば) 私はすぐさま武器をとって、国王の指揮の下で、プレストンで彼等と戦ったように戦う用意がある。反乱が成功して、まともでない人がイングランドの王座に就くことになれば、私の血の最後の一滴を失っても、彼がアイルランド国王に就くのを阻止するために危険を顧みず法令違反をする。

イングランドとアイルランドが同一国王を頂く共同国家であるという立法上の制約が、現実的にはアイルランドに適応されていないことに対する諷刺であった。しかしこの一文が反って、王位僭称者に王位への道を開くものと受け止められてしまった。アイルランド全国民が、イングランドに反抗する可能性は少なくないが、王位僭称者の存在が、イングランドに対する反乱の鍵ともなり兼ねなかった。イングランド政府要人たちは、ウッド貨ボイコット運動の一時も早い解決が必要と感じたに違いなかった。全ての根幹にあるのは、アイルランドを、イングランドの属領と考えているイングランド政府の政策にあった。ホイッグ党主導による重商主義政策が、アイルランドに対する不平等な取扱いを主導していることがその主因であり、ウッド貨ボイコット運動は、それに対する抗議なのであった。

スウィフトは、歴史を遡って共同国家としての存在であることを論述して、国民の理解を求め、「理性においては被統治者側の同意を得ていない政治は、隷奴制度に等しい」²³⁰ ことを取り上げ、アイルランドの現状が奴隷状態であることを訴えたのである。この奴隷状態からの脱却こそが、アイルランドが最も希求している主張なのであった。権力をもって自由を束縛し、不満すら表明することが出来ない上、救助を要請する自由すら奪われていると、アイルランドを隷属させているイングランド政府を諷刺した。「ドレイピア第4書簡」の目的には、アイルランドの貿易禁止令の撤廃でもあった。貿易禁止令に隠された、イングランドの属領としての役割から、アイルランドを解放することにあった。アイルランドの置かれている立場を奴隷制度下にあるに等しいと、アイルランド議会すら断罪した。アイルランドの現状に対するイングランドの人々の無関心さも、スウィフトの怒りを煽る要因であった。イングランドの、「アイルランドは、資源の供給基地でしかなく、アイルラン

²²⁹ Swift, *The Drapier's Letters*, p.62.

²³⁰ "all Government without the Consent of the Governed, is the very Definition of Slavery:" (Swift, *The Drapier's Letters*, p.63)

ド国民の困窮は、対岸の火事ではない」²³¹ との認識に対する、怒りからの告発なのであった。

彼は称賛を求めて『ドレイピア書簡』を発行して、アイルランドを救おうとしたのではなく、彼自身の怒りからの告発であり、梅毒治療のための、道徳的社会の到来を求めた結果でもあった。従来彼は、個人的恨みや個人に加えられた侮辱に対して、様々な例を持ち出して、非難の目をウッド一味の行為に集中することで、アイルランドに向けられた疑惑をかわそうとの意図もあった。アイルランドを、既にウッド貨の受領という判決を受けた囚人に擬して、「死刑の判決を受けたスコットランド人に、絞首、斬首、四裂、穴埋めの刑の、全ての執行を求めるのに等しい」²³² と訴えて、これ以上何回アイルランドに死刑を宣告するのだと、イングランドの締め付けを非難した。「ウッドを信じた結果、目論み以上の財を彼に与えてしまった」²³³ と、両国民がウッドの虚偽の発言を信じ、事実から遠ざかってしまった結果であると結論付けた。この「第4書簡」でのスウィフトの論及の姿が、アイルランド国民に愛国的行動と見られ、賞賛されたのであった。しかし、彼は称賛を求めて『ドレイピア書簡』を発行して、アイルランドを救おうとしたのではなく、彼自身の心からの怒りの発露からであり、梅毒治療のために道徳的社会の到来を求めた末の行為であった。従来の彼は、個人の恨みや個人に加えられた侮辱に対して、諷刺の手法で報復したのであるが、『ドレイピア書簡』は、アイルランドに加えられた過酷な政策に、当事者意識を持って抗議したのであった。彼の視線は道徳的社会の実現に向けて、愚かなアイルランドの庶民をも巻き込んだものとなったのである。そこには安全圏にわが身を置いて、諷刺で政策批判を行ったのではなく、自身の信念を前に押し出して訴えたのであった。その点で従来の抗議とは異なったものとなった。

²³¹ “that the People of *England* are utterly ignorant of our Case”(Swift, *The Drapier’s Letters*, p.64)

²³² “who (a Scotch man) receiving Sentence of Death, with all the Circumstances of Hanging, Beheading, Quartering, Emboweling, and the like; cried out, What need all this COOKERLY ?” (Swift, *The Drapier’s Letters*, p.67)

²³³ “as his Integrity is above all Corruption, so is his Fortune above all Temptation.” (Swift, *The Drapier’s Letters*. p.68)

第3章『謙虚な提案』にみる諷刺手法

『ドレイピア書簡』は、著者の姿を、ペルソナを使った諷刺の陰に隠して記述したのではなく、前面にスウィフトを押し出して、彼が軽蔑してやまなかったアイルランド国民に向け差し伸べた温かい応援歌であった。彼らを援助することが、道徳社会の実現の早道と信じたからである。彼は愚かなアイルランド国民に対して、見返りがなくては援助の手を差し伸べる性格ではなかった。彼が聖パトリック教会周辺の、羊毛産業に従事している住人に対して、生活の資を貸し与えていたが、これとて慈善を施したのではなく、利息を取っての行為であった。彼らに対する行為が、やがて利息以上のものをもたらすことを期待した末のことであり、強いて見返りを求めたとしたならば、それは道徳社会の実現であった。彼は一日も早く梅毒の楔から、解き放たれたかったのである。しかし、このアイルランドの貧民に対する、改善策の提案は無償の行為であったが、結果として道徳社会の実現が得られると信じていたのである。彼は強権を振るうものには、断固として戦いを挑み、弱者に対しては、温かい手を差し伸べる性格の持ち主でもあった。この論述は、イングランドの政策に対する批判ではなく、道徳的社会の実現の妨げとなっている、不平等貿易に対する批判なのである。

アイルランドの歴史は、イングランドによる征服、植民、それに付随する土地及び人民の収奪の歴史であった。とりわけ、ピューリタン革命 (Civil War, 1642-49) 時のオリバー・クロムウェル(Oliver Cromwell)の篡奪と、それに続くウィリアム 3 世(William III, 1650-1702 在位 1672-1702) の政策によって、アイルランドは完全にイングランドの植民地と化してしまった。アイルランドはイングランドの資源、食糧の供給基地とされ、イングランド産品の輸入市場の役割をも担わされていた。ピューリタン革命により荒廃した国土は、急速に回復し、畜産業が再び隆盛となった。良質で安価な畜産品がイングランドに流れ、イングランド牧畜市場を直撃した。この分野での収益に期待感を持った業者は、競争相手国への密貿易に走った。純良なアイルランド産羊毛を、イングランドの輸出競争国である、フランスやオランダに輸出することは、イングランドの利益を損なう行為なので、イングランド政府にとって許しがたいことであった。テンプル卿は、この畜産市場に関する貿易の事情を、著書『アイルランド貿易の進歩の雑感』(*An Essay upon the Advancement of Trade in Ireland*, 1675)で、次のように語っている。

And Lastly, whereas Ireland had before very little Trade but with *England*, and with the Money for their Cattle bought all the commodities there which they wanted; By this restraint they are forced to seek a foreign Market; and where they sell, they will be sure to buy too; and all the foreign Merchandize which they had before from *Bristol*, *Chester*, and *London*, they will have in time from *Roan*,

アイルランドはこれまでイングランド以外との貿易はそれほどなかった。家畜の代金で彼等が必要とする日用品は、すべて賄う事が出来た。イングランドが、貿易を禁止したので彼等は売り買いできる外国市場を求めざるを得なかった。以前はブリストル、チェスターそしてロンドンで取引をしていたのだが、これからはフランスのローン、アムステルダム、リスボンそして地峡と取引することになる。

1673年、当時オレンジ公ウィリアム3世(William of Orange)公²³⁵とメアリー2世(Mary II)の結婚を取り結ぶため、オランダに在住していたテンプル卿は、著書『随筆』(*An Essay*)の中で、アイルランドの現状に触れて、大規模な土地が牧羊地に転換され、国中に羊が溢れ、穀物生産が疎外されている様を報告している。卿は、アイルランドの輸入状況にも触れて、1663年に20万ポンドあったアイルランドの輸入が、1675年には、2万ポンドにまで激減してしまったことを記述している。アイルランドの国内経済は、活力を失ってしまっていた。テンプル卿は、これらは全て貿易禁止に起因すると断じて、イングランドの政策に異を唱えたのであった。スウィフトはこのような弱者アイルランドに、救援の手を差し伸べたのであり、この様な行動は彼本来の性格でもあった。その生来の性格が、梅毒罹患という事実で歪められたのである。そのため、彼のイングランド政府の政策に対する批判は、一段と熾烈なものに変化したのであった。

外国船舶などは、食料調達が安価に行えることから、競ってアイルランドで積み込み作業を行っていた。安い人件費や生活必需品、とりわけ、安価な食肉や酪農製品は魅力的で需要も多かった。「アイルランドの牧畜業者のみが豊かになり、その結果イングランドの土地価格を押し下げ、借地料の下落を招いている」²³⁶と述べている。スウィフトの報告によれば、一部のアイルランド牧畜業者の好況が、イングランド経済に悪影響をもたらしていると、その将来に懸念を表していた。英蘭戦争(British-Dutch War)²³⁷の勃発がなければ、アイルランド貿易は、異常な発展を遂げたであろうとまで論じていた。アイルランドの貿易に制限を加えて、イングランド国内産業を保護しようとした目論見は、反ってイングランド国内の土地価格を下落させ、借地料の低下を招いたばかりではなく、輸出先を失ったアイルランド牧畜業者による、羊毛の密輸出をも招いてしまっていた。イングランドと羊毛市場を争っていたオランダやフランスは、高品質で安価なアイルランド産羊毛を手に入

²³⁴ Sir William Temple, *Miscellanea*, pp.129-30.

²³⁵ William III. (1650~1702). Stadholder. (1672~1702).King of England. (1689-1702). Posthumous son of William II, Prince of Orange. (*Readers*)

²³⁶ As for the true causes of the decay of rents in England, which made the occasion of that act, they were to be found in the want of people,...(Temple, *Miscellanea*, p.20)

²³⁷ The Anglo Dutch War: 17世紀後半、イギリスの航海法(Navigation Act)が原因で、イギリスとオランダとの間に3次(1652-54, 65-6, 72-74)にわたって行われた戦争。その結果、イギリスの海上支配権の確立とオランダの衰退を招いた。『広辞苑』より。

れたことで、イングランドの脅威となった。アイルランドは、貿易禁止令により経済的に疲弊し、イングランドから食糧の輸出を仰ぐことも困難な状態となり、穀物の輸出先を失ったイングランドは、二重の損失を招くことになった。アイルランドで職を失う者の増加は、労賃を引き下げ、低下の一途を辿る労賃が、生活必需品の価格を押し下げることとなった。生活費は低落し安価となったが、困窮の度は増し、消費力が落ちた結果、国内産業は疲弊していった。国家財政は悪化の一途を辿り、国民の困窮の度合いは増大していった。イングランド政府は、アイルランド産品が市場を乱しているとして、更に厳しい「禁圧法」²³⁸ を制定し、アイルランドに履行を迫った。この法律の正式呼称は、“An Act to prevent the exportation of Wool out of the Kingdom of Ireland and England into foreign parts, and for the encouragement of the Woollen Manufactures in the Kingdom of England” で、文字通りイングランドの羊毛産業の振興を図るため、アイルランド産品の輸出を禁止したものである。この法案によって、アイルランドは完全に羊毛産業からも閉め出されることになった。これはイングランド羊毛産業保護を目的とした、イングランド重商主義の策謀であった。アイルランドは、完全に貿易を禁止され破綻の淵に追いやられ、アイルランド国民は、窮乏生活を余儀なくされることになった。

After the Act in England had wholly stopt the Transportation of Cattle, the Trade of this Kingdom was forced to find out a new Channel; a great deal of Land was urned to Sheep, because Wooll gave ready Money for the English Markets and by stealth for those abroad. ²³⁹

イングランドによる立法施行後、家畜の移動や、貿易は完全に停止してしまい、アイルランドは、新しい通商回路を探さなくてはならなくなった。かなりの土地で羊が飼育された。何故なら羊毛はイングランド市場で換金が容易であり、こっそりと外国で販売できるからであった。

この法案施行の影響はアイルランドだけに止まらず、イングランドでも畜牛の輸出は停滞し、新規の取り引き先を探さなくてはならなくなっていた。羊毛が換金しやすい商品のため、牧羊が盛んとなり、さらに広大な土地は牧羊地に転換されていった。やがて、アイルランドを襲った馬鈴薯の疫病で、農産物、とりわけ主食としていた馬鈴薯が根腐れを

²³⁸ 禁圧法： An Act to prevent the exportation of wool out of the Kingdom of Ireland and England into foreign parts, and for the encouragement of the woollen manufacture in the Kingdom of England.1666年の「家畜法」が功を奏さないばかりかアイルランド羊毛の対外輸出がイングランド経済を直撃し、近隣諸国を利することを恐れたイングランドがアイルランドの対外輸出を全面的に禁止した。そのためアイルランドは経済的に立ち行かなくなった法律。角田栄、『立命館大学経済学会』「アイルランド羊毛工業の抑圧」第11号、215-219頁。

²³⁹ Sir William Temple, *Miscellanea*, p.122.

起こし、アイルランド全土、特に北部地方は被害がひどく、収穫不能に陥っていた。食糧不足に加えて歳入の減少は、穀物の輸入の代金支払いにも支障をきたす状況であった。この苦境を脱する手段として、スウィフトが『謙虚な提案』(*Modest Proposal*)としてアイルランドの子供の死体を食肉として輸出するという、おぞましい提案をしたのであった。スウィフトはこの提案を、スチュワート朝の正式な後継者として名乗りを上げているウィリアム 2 世の同調者たち、ジャコバイトの数を減少させると同時に、困窮している彼らの生活の立て直しにも、一挙両得と自画自賛していた。この提案が出版されるや、敏感に反応したトーリー党は、その機関紙『クラフトマン』(*Craftsman*)で、国王大権の行使によって、スペイン、フランスへのアイルランドの若者を傭兵として輸出する施策を主張した。その方がよりカトリック教徒も減らせる上、王位僭称者の脅威も少なくなるという趣旨であった。

The Craftsman

No.227.

Saturday, Nov. 7, 1730

Such a Method of providing for Persons, whose Principles render them unserviceable in *our Army*, is indeed a little more charitable than a *late Project* for preventing *Irish Children* from being starv'd, by fattening them up, and selling them to the *Butcher*.²⁴⁰

クラフトマン

第 227 号

1730 年 11 月 7 日 土曜日

若者をわが軍では働かないようにする方策は、アイルランドの子供を飢えさせないで、太らせてから、肉屋に売り払うという計画よりは慈悲深いものである。

このクラフトマンの反論に素早く反応したスウィフトは、1730 年 12 月 12 日付の書簡「クラフトマンへの回答」(*The Answer to the Craftsman*)で反論を開始した。スウィフトは論述の正当性を、経済的利益と王位僭称者の脅威の排除の 2 点に的を絞って、実数を挙げて示したのであった。6,000 人の若者を傭兵として外国に輸出することで得られる利益は、1 人 5 ポンドとしても年間 3 万ポンドの利益しかなく、カトリック教徒も 6,000 人の減少にしかならない。王位僭称者を恐れて、ドイツ兵 12,000 人を雇い入れ、年間 100 万ポンドの戦費負担をしていることと比較するならば、どちらがより経済的かは明白であると、その不合理性を論断したのであった。スウィフトの提案は、無尽蔵に増大するカトリック教徒の幼児の販売なので、需要に充分応えられ、カトリック教徒の減少には効果的であると力説した。さらに、1,700 万エーカーに及ぶアイルランドの牧羊地に、国教会の信者を入植させて、王位僭称者に備えさせるほうが現実的で、より効果的であると計算して証明した。

²⁴⁰ Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.317.

スウィフトの計算によれば、8,400 家族 67,200 人を入植させ、彼らに牧羊地を管理させ、彼らに税金収納まで委託するならば、一挙兩得であり、外敵の侵入にも充分対処できると、論証したのであった。クラフトマンに反論し、論破することで、「家畜法」の不当性をも論難したのであった。

1727 年、スウィフトは『アイルランド短見』(*A Short View of the State of Ireland*) なる書で、アイルランドの現状に触れ、安価な生活必需品や利便性に優れた商品に満ち溢れ、その手工業品の数々は高品質であり、整備された港湾で輸出を待っている様を描写している。しかしながら、輸出禁止令が国民生活を脅かし、「農耕地の借地料は高騰し、貿易は不振、不在地主の存在が国民の意欲を殺ぎ、失業を生んでいる」と嘆じた。「アイルランドは古今東西の歴史上、唯一の貿易を禁止された国家であり、生活必需品すら、その取引を禁じられた国家である」²⁴¹と、極端な誇張でイングランド政府の政策を繰り返し論難した。諷刺の語調は激しいものとなり、アイルランドに生まれたことを身の不運とあきらめ、職が得られぬことこそアイルランドの勲章だと、激しさ一途となっていた。万が一にもアイルランドが繁栄の道を進むことがあるとしたならば、「それこそ神の意思に逆らい、自然の摂理に反しなければ、達成できぬ行為である」²⁴² と激しい語調で終始している。イングランドに向けての非難であるが、借地料の高騰は小作人の血涙をも絞り取り、彼らの生活はイングランドの生活困窮者以下、その住居も無きに等しいと、イングランドの不在地主の苛斂誅求振りを訴えている。

アイルランドで「金利が安いのは借りる人も仕事も無いからである」²⁴³ と簡潔な語調で、鋭い観察に基づいた現状を諷刺した。アイルランド国民のイングランドに対する想いを、旧約聖書の「出エジプト記」(*Exodus*)²⁴⁴ の故事に擬えて、「藁なしでレンガを焼かせた」古代エジプトのファラオに、イングランドを擬して諷刺しているなどはこの好例であろう。イングランドの愚かな政策を、「金の卵を産む鶏を殺して、その腹中を探るようなものだ」²⁴⁵ と諺を用いて諷刺した。巷には職を求めてさ迷い歩く失業者で溢れ、家や職を失った者が乞食となり、喜捨を請う姿で満ち溢れ、地獄の様相を呈していた。

「四旬節」の習慣が、年間の食肉需要の減少を招いていた。その結果、牧畜業者の数も

²⁴¹ *IRELAND* is the only Kingdom I ever heard or read of, either in ancient or modern Story, which was denied the Liberty of exporting their native Commodities and Manufactures, where they pleased; except the Countires at War with their own Prince or State.”(Swift, *Irish Tracts 1728-1833*, p.8)

²⁴² “If we do flourish, it must be against every Law of Nature and Reason,” (Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.10)

²⁴³ “The Lowness of Interest, in all other Countries a Sign of Wealth, is in us a Proof of Misery; there being no Trade to employ any Borrower.”(Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.11)

²⁴⁴ “Exodus: the second book of the Bible, which recounts the departure of the Israelites.” (*Readers*).

²⁴⁵ “that when the Hen is starved to Death, there will be no more Golden Eggs.” (Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.12)

減少していった。このドミノ倒しで、借地料や土地価格の低下を招いてもいたのであった。アイルランド国民の食を賄うには、ロンドン市場からの安価な穀類の輸入に頼らざるを得なくなって、かつては、安価で良質な穀類をイングランドに輸出して、関税収入をあげていたことから、想像できない現実であった。

*Agriculture, which hath been the principal Care of all wise Nations, and for The Encouragement whereof there are so many Statute-Laws in England, we countenance so well, that the Landlords are every where, by penal Clauses, absolutely prohibiting their Tenants from Plowing; not satisfied to confine them within certain Limitations, as it is the Practice of the English; one Effect of which, is already seen in the prodigious Dearness of Corn, and the Importation of it from London, as the cheaper Market:...*²⁴⁶

すべての賢明な国民の主要な関心事は農業で、イングランドでは、農産物奨励の為、多くの制定法がある。耕作人はどこでも耕地を耕すことを罰則条項で禁止されていることを私たちは容認している。イングランドでの実例のように或る程度の耕作制限ではうまくいかない。例えば穀物が莫大に高騰した際には、格安市場のロンドンから輸入するという事態が生じる....。

生活必需品を中心に、あらゆるものがイングランドから輸入され、それらがアイルランドの財政悪化をさらに押し上げていたのであった。アイルランド国家財政を改善させるためには、「たとえイングランド産品一品たりとも入らせてはならない」²⁴⁷ と言って人々はアーメンと唱えた。このようにスウィフトは強い調子でアイルランド産品の愛用を訴えた。国家運営の資すら与えないイングランド政府のやり方は、残酷そのものであり、このような抑圧が続くならば国民は密貿易に走り、更にイングランドの利益を削減させることもあると警告した。貿易禁止令のため、物流はアイルランド国内に限られているので、歳入面での不利益はイングランド政府も同様であった。「何と哀れなイングランドよ、アイルランドの不当な要求に苦しめられて」²⁴⁸ と、イングランドの政策の愚かしさを極端な論調で諷刺した。アイルランド国民は宗教心に富み、精神性の高い法治国家の民である。その法治国家が今や破綻の淵にあり、この窮地を脱するためにはアイルランド全国民が一致協力して、アイルランド産品を広く活用し、国家財政の収支を改善しなくてはならないと主張した。これらの提案が受け入れられないまま年月を重ね、事態はますます悪化し、国民の窮

²⁴⁶ Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.15.

²⁴⁷ “never to appear with one single *Shred* that comes from England; and let all the People say, AMEN.” (Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.16)

²⁴⁸ “how grievously POOR England suffers by Impositions from Ireland.” (Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.16)

乏は目を覆うばかりの惨状を呈していった。この状況に危機感を募らせたスウィフトは、1729年、「アイルランド婦人達に対する国内産品の常用の勧め」(“A Proposal that all the Ladies and Women of Ireland should appear constantly in Irish Manufacture”)なる一文で、アイルランドの婦人達を対象に、再び、アイルランド産品の愛用を求めた。日ごとに募る困窮で、職工たちは衣食の施しを求めて巷を彷徨い歩いている。このまま放置しておけば、国を捨てて逃散する以外に無いほど、追い詰められている状況を訴え、財政改善のため、国産品愛用を求めたのである。

If two thirds of any Kingdom's revenue be exported to another country, without one farthing of value in return, and if the said kingdom be forbidden the most profitable branches of trade wherein to employ the other third, and only allowed to traffic in importing those commodities which are most ruinous to itself, how shall that kingdom stand ? ²⁴⁹

いかなる国家であれ、歳入の3分の2が、外国に輸出されて、代金が1円も入らないとしたなら、その国が、残りの3分の1で、利益の上がる産業の貿易を禁止され、唯一儲けにならない商品の輸入だけが認められた、その王国はどのようにして国家を維持できるのだろうか。

アイルランドがこのような窮状に陥ったのも、全ては、不当なイングランド政府による貿易禁止令に端を発しているのであった。無用なガラクタばかりの輸入が横行しているため、アイルランドの国家財政は更に悪化の一途を辿っていると、直截な批判が続いている。貿易の自由も資金もない上、労働力も仕事もないのである。このようなアイルランドの現状への認識が欠けていることを、具体的な数値を示して訴えたのである。アイルランドはまさに、水に溺れて死に瀕しているネズミ同然であった。この溺れた鼠(アイルランド)を火のそばに置いたとしても、「その濡れた毛皮を乾かすことは出来ても生き返らすことは出来ない」²⁵⁰とアイルランドの極限状態にある窮亡ぶりを語った。

アイルランドの全負債は25万ポンドに達しており、この金額は、アイルランドの地代の3分の1に相当する金額なのである。この巨額な負債は、不在地主に対する支払いと、無用な嗜好品の購買によって発生したものであるから、小手先の細工では解決しない。不在地主達に、アイルランド国内での消費を義務付け、違反者には「1ポンド当たり5シリングの罰金を課す」²⁵¹との論陣を張ったのであった。現状改善の最善の政策は、アイルランドに

²⁴⁹ Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.123.

²⁵⁰ “would no more restore us, than it would the rat aforesaid to put him near the fire, which might indeed warm his fur-coat, but never bring him back to life.” (Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.122)

²⁵¹ “Of taxing our Absentees at five Shillings a Pound” (Swift, *Irish Tracts 1728-1733*,

貿易の自由を与えることであると重ねて要求し、それが果たせぬ今、アイルランドが取り得る策は、自尊心や虚栄心をくすぐる贅沢な輸入品の使用、着用を女性たちが中止することであった。女性たちがアイルランド産品を愛用することで、嗜好品輸入による財政赤字を軽減し、アイルランド産業を立て直すことであると説得を重ねた。この提案が受け入れられなかったことから、究極ともいうべき提案を、『謙虚な提案』の名前のもとに出版したのであった。

この小冊子の正式な題名は、『アイルランドの貧民の子供が、その両親や国家の負担になることを防ぎ、彼らが公共の利益となる存在にする謙虚な提案』(*A Modest Proposal For Preventing the Children of Poor People in Ireland, from being a Burden to their Parents or Country; and for making Beneficial to the Public*)である。貧民の根絶と、国家財政の健全化を踏まえた、一石二鳥の提案であった。スウィフトの諷刺の対象は、権力者の恣意に振るう行為に起因した、国民の不利益に対する私憤からであった。しかし、ステラの死から、彼の視線は庶民そのものに向けられてきた。この『謙虚な提案』も、イングランドの政策による、庶民生活の困窮を取り上げているが、彼の視線は、一人ひとりのアイルランド国民に向けたものであった。彼はアイルランド国民を、怠惰で愚かと軽蔑していたが、この論述では、この情けない、同情に値しない国民にすら温かい視線を投げかけたのであった。

彼は生来友好的な性格であったが、身内の冷たい経済的援助の中で、辛い青春時代を送り、やっと人並みに青春を謳歌出来るようになった時、売春婦から梅毒を罹病させられ、多くの貴頭に裏切られ、次第に頑なな性格になり、人間嫌いとなっていたのである。

彼は生来弱者に同情を寄せる心優しい性格であった。彼は部下の聖職者や、教区の仕事をする人たちには、平均以上の俸給で報い、自分用の支出は出来るだけ節約していたことでも分かる。そのようなスウィフトの傍らに常に居て、彼が信頼を寄せ、慈しんできたステラを失った今、弱者のために立ち上がったのである。彼の視線は愚かなアイルランドの庶民に向かい、悲惨な様相が日常的となっているダブリンの街区に向ったのであった。彼らの悲惨な状況の描写が、淡々として語られ、抑制のきいた文章が、現実の凄まじさをより明確に語っている。愛し児の死体を食肉として販売するという、残酷極まりない提案こそ、彼のアイルランドに注ぐ愛情あふれる逆説的表現なのであった。この提案が受け入れられると彼は信じていたのではなく、アイルランドの現状認識と、国民の置かれている立場を理解して、共同国家としての自主独立に努める気概を喚起しようとしたのであった。その結果アイルランドに道徳的社会が構築されることを願ったのであった。全ては梅毒からの解放を願った行為でもあった。

この時代のアイルランドでは、生活苦から人工中絶や嬰兒殺しが横行していた。巷には捨て子が横溢している有様は、悲惨な地獄の様相を呈していた。この惨状な状況を打破する唯一の手法として提案したのであった。アイルランド貧民の子供たちを、有益な人材に

するための公正な方策という表現は、当時のジャーナリズム界に於いて熱弁を揮っていた、「経済的企画者」(economic projector)と称する政策論者達の用いた常套句であった。スウィフトは明らかに、その表現をもじるパロディとして、「その方策」(Project)を見つけたものは、「国の功労者として手厚く遇され、銅像まで建てて貰う価値があるだろう。」と記述したのである。誇張した表現は、全く無力であった「方策」と、それを立案した「経済的企画者」に対する痛烈な諷刺と読み取れる。

1727 年来、アルスター (Ulster)、ミース (Meath)、レンスター (Lenster) などのアイルランド北部地方を中心に、農産物の凶作が続いていた。²⁵² 穀物生産をイングランドからの輸入に頼っていた大都市ダブリンは、食を求めて地方から放浪してきた人々で溢れ、物乞いや売春婦、泥棒で満ち溢れていた。この『謙虚な提案』の真意は、アイルランドをこのような窮状に陥れた、イングランド政府の政策に対する強烈な諷刺であり、アイルランド国民を、食肉並みに考えているイングランドの不在地主に対する抗議であった。同時に、イングランド政府の政策に唯々諾々と従ってきた、アイルランド国民の愚かしさに対する警告でもあった。スウィフトは具体的な数字を挙げ、類例を列挙する手法を駆使して、提案したのである。

The Number of Souls in *Ireland* being usually reckoned one Million and a half; of these I calculate there may be about Two hundred Thousand Couple whose Wives are Breeders; from which Number I subtract thirty thousand Couples, who are able to maintain their own Children; although I apprehend there cannot be so many, under *the present Distresses of the Kingdom*; but this being granted, there will remain an Hundred and Seventy Thousand Breeders. ²⁵³

アイルランドの人口は、大体 1,500,000 人で、その中で子供を産める夫婦は 200,000 組である。その中で子供を養育できるのは 30,000 組である。現在の王国の窮迫では、それほどはいないかもしれないが、170,000 人は子供を産めるかもしれない。

アイルランド 150 万人の国民中、20 万組の夫婦が子供を生むとして、そのうち 3 万組は、自力で子供の養育が可能である。更に、5 万組の夫婦の間に誕生した子供は、1 年以内に病死するか、事故死するとしても、残り 12 万組の夫婦から生まれる子供たちのうち、2 万人は次の商品製造の為に残しておくが、結局、残りの 10 万人は両親が貧しく、子供の養育もままならない環境なので、捨てるか、死に至らしめることになる。輸出対象となるのは、これ等の子供たちである。母親を飼育者(Breeders) と貶める表現を用いて、子供の死体を

²⁵² The first acute famine of the century struck the poor of Ireland in 1727. (Ehrenpreis, *Swift III*, p.544)

²⁵³ Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.110.

食肉として輸出する後ろめたさを覆い隠し、そこまで追い詰められなければ判らないアイルランドを諷刺したのであった。

余儀なく育てても、貧しさゆえに盗みを働くこととなる子供達を、12歳まで育てたとしても、彼らの養育に関する費用は、衣食費だけでも、総額12ポンドは必要である。12歳まで育てると、筋肉が発達するため肉が固くなり、食肉としての価値は、ほとんど無価値になってしまうのであると、経済的側面を強調することで、子供の肉を商品として輸出することの罪悪感を薄めようとした。1歳未満の子供たちの養育は、全て母乳で賄えるので、年間2シリングあれば事足りる上、その肉は柔らかく、滋味豊かで、栄養価の高い総合食品として、一体10シリングでの販売は可能である。そうすれば、両親は年間8シリングの利益を得ることとなり、次子を出産するまでの生活費は、充分賄うことが出来、働く必要も無く、十分に生計を営むことが出来る。アイルランドは、これらの幼児の死肉を輸出することで、年間48,000ポンドの外貨が獲得できると論じた。経済効果に重点を置いた論述は、愛児を食用として輸出するおぞましさを、回避する効果を狙ったものであった。

この諷刺表現は従来の諷刺手法とは異なり、諷刺が多面的な広がりを持って、複雑な構成をしている。まず、食品として売却する愛児の死肉に視線を向けさせて、そのおぞましさを食肉としての効用から説き起こし、その保存法に及び、質素儉約を旨としているクウェーカー教徒を同時に、「わずかな塩と胡椒で味付けをすれば、冬の水曜日にはよいご馳走になる」²⁵⁴と断罪している。復活を果したばかりの四旬節(Lent)を取り上げて、「40日間の齋戒期にも拘らず、身を慎まず、放埒と自堕落の果て、私生児を出産している」²⁵⁵と、カトリック教徒の風紀の乱れまでを諷刺、非難している。性風俗の乱れから、私生児が巷に溢れ、墮胎や嬰兒殺しが横行し、道徳の低下している世情の有様にまで、多面的に諷刺の刃を向けている。その上さらに、この提案によって、3人に1人のカトリック教徒を減らすことにもなり、イングランド政府を悩ましていたジャコバイト対策にも効果的であると、宗教、政治政策上にも、一挙両得の効果的施策であると、自画自賛した提案となっている。食肉としての嬰兒の死肉の輸出から、論点をずらして、罪悪感や嫌悪感を薄め、視線は社会経済的利点に重点を移して冷徹な陳述を淡々と繰り返している。かかる悲惨な状況は、イングランドの不公正な貿易制限と、羊毛輸出奨励策によって高騰した賃借料のため、農地を放棄し、穀物生産を失った結果なのであった。職と食料を失ってしまった国民は、物乞いに身をやつして巷を彷徨しているのだと、負の連鎖によるイングランドの政策非難と、この法案を廃止することで得られる、イングランドの利益にまで論及して、道徳的社会の一も早い構築を促す仕組みとなっている。全ては梅毒治癒に向けて集約されているのであった。

国民の大多数が困窮の底に突き落とされ、家や職を失った人々の姿が、巷に満ち溢れ、

²⁵⁴ “and seasoned with a little Pepper or Salt, will be very good Boiled on the Fourth Day, especially in Winter.” (Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.112)

²⁵⁵ “there are more Children born in *Roman Catholick Countries* about Nine Months after *Lent*, than at any other Season”(Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.112)

治安は乱れ、道徳は低下し、犯罪が横行していた。この解決手段は、輸出禁止令の廃止と、国内製品の消費奨励によるしか残された手段はなかった。アイルランドに残された輸出商品は、毎年生み続けられる子供しか残ってはいないのであった。この提案は、『謙虚な提案』といいながら、1歳未満の嬰兒の死肉の輸出奨励の提案という、謙虚さの欠片も無いものなのである。

....that a young healthy Child, well nursed, is at a year old, a most delicious, nursing, and wholesome Food; whether *Stewed, Roasted, Baked, or Boiled*; and, I make no doubt, that it will equally serve in A *Fricasie, or Ragout*.²⁵⁶

十分に養育された幼い健康な1歳の子供は、母乳で育てられ美味で体にいい食べ物を与えられている。煮たり炙ったり焼いたり茹でたりした料理であれ、フリカッセやラギーで調理されるであろう。

健康的に1歳まで育てられた幼子と、漸層的に語句を引き上げ、その十分に育てられた幼子を、美味な総合食品としての有用性に視点をずらして、その異質な食品に対する関心を薄めようとした対比の衝撃を和らげるため、食品としての調理法に言及して、「煮て」(stewed)、「炙り」(roasted)、「焼き」(baked)、「茹でる」(boiled)と、列挙することで、視点を食品としての肉に移行させておぞましさを和らげた。アイルランドを「子供の肉」に擬えて論じ、イングランドの、とりわけ不在地主たちの、アイルランドに対する苛斂誅求ぶりを諷刺した。その「子供の肉」を、「食料」「料理」「調理法」と論点を変えて論述を展開し、貿易制限がアイルランドに与えた影響の甚大な有様を悟らせる意図であった。この極端な「諷諭」(Allegory)²⁵⁷で輸出代替物としての幼児の死肉という、衝撃的な意外性を吸収し、「擬人法的」に商品としての有用性を列挙することで、惨酷な事実とその悲惨さを覆い隠しているのである。もっとも、商品が人肉ではないかのような印象を、「擬人法」(personification)を逆手にとって与えているのであるが、イングランドのアイルランドへの対応は、まさに食肉同様なものであった。

I HAVE already computed the Charge of nursing a Beggar's Child (in which List I reckon all *Cottagers, Labourers, and Four fifths of the Farmers*) to be about two Shillings *per Annum*, Rags included; and I believe, no Gentleman would repine to give Ten Shillings for the *Carcase of a good fat Child*; which, as I have said, will make four Dishes of excellent nutritive Meat, when he hath only some particular

²⁵⁶ Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.111.

²⁵⁷ 「諷諭」Allegory: 抽象的な主題をより具体的で、卑近な話題に仮託して展開する文彩。

Friend, or his own Family, to dine with him. ²⁵⁸

私は乞食の子供たちの養育費を計算してみました。(この数字には小作人や労働者や、農民の 5 分の 4 が含まれている) 衣服代を含んで 1 年に 2 シリングかかる。紳士たちはよく太った子供の死体に 10 シリング支払うのに不平を言うものはいないと思います。その死体から栄養価の高い肉料理が 4 皿作れ、それで特別な友人や、家族とで夕食がとれるでしょう。

諷刺はこの提案の経済的側面に及び、論点は商品の原価に及び、商品の供給、即ち毎年生み続け売却を続行することで、国家財政に年間 5 万ポンドの貿易利益をもたらし、負債の軽減が可能となると論じた。嬰兒の食肉としての価値にのみ目を向けさせ、愛しき我が児の死肉の販売という概念を遠ざけ、経済的有用性のみを強調する論法となっている。具体的な数値を列挙することで、現実的な願望を喚起させながらも、アイルランド国民には、「人肉輸出」という事実のおぞましさに目を向けさせた。イングランド政府には、嬰兒の死肉の販売という、事態の深刻さを認識させようとした。『謙虚な提案』は二重構造を持っているのである。

「良く肥えた子供」(a good fat child) を、その特性である「肥えた」(fat) で強調しながら、それが「死体」(carcase) であることから目を背けさせ、十分に「油の乗った肉」(fat meat) と発展させることで、視点を食肉としての有用性に向けている。この食肉の料理としての特性を、4 皿 (four dishes) の料理に置き換えた。この何気ない日常会話的やり取りのうちに、事実の疎ましさを隠蔽したのであった。「8 シリングの利益が母親の意欲を刺激し」²⁵⁹ 更に子供を生み続け、国家財政に貢献する。8 シリングの利益のため、両親の子供たちへの関心は高まり、手厚い保護を加えるようになる。夫が妻に乱暴を働らなくなるのも、8 シリングの報酬を前にして、流産を恐れるからである。僅か 8 シリングの利益を求めて様変わりする両親の姿が、アイルランドの現実であると言う、痛烈な諷刺なのである。それほどアイルランドは困窮していたのだ。

賢明な国民は、「報酬で意欲を増し、法律で勇気付けられる」。²⁶⁰ この愚かなアイルランド国民を賢いと反語を用い、報酬に目がくらみ、法律で強制されなければ、何事も実行しない国民であると諷刺している。この制度を法制化することで、一段と母親の意欲は刺激され、国家基盤はそれによって磐石なものとなると、無能なアイルランド政府まで強烈に諷刺した。

²⁵⁸ Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.112.

²⁵⁹ “besides the Gain of Eight Shillings *Sterling per Annum*, by the Sale of their Children, will be rid of the Charge of maintaining them after the first Year” (Swift, *Irish Tracts 1728-1733*. p.115)

²⁶⁰ “All wise nation have either encouraged by Reward or enforced by Laws.” (Swift, *Irish Tracts 1728-1733*. p.115)

子供に対する虐待や幼児殺し、墮胎も激減すると明かすことで、道徳の頹廃しているアイルランドの現状を諷刺した。我が児を食肉として輸出しなくては生きていけないほど、追い詰められているアイルランドの実情に対する怒りからの告発であった。全てはイングランドの圧政の故と、繰り返し貿易禁止令の不当性を訴え、その撤回を促したのである。

この提案は、「アイルランドの弱者や貧者を救済し、彼らに生きる喜びを与える、費用のかからぬ最善の策であり、イングランド政府の圧政で破綻してしまった、アイルランド国民に衣食住を担保する唯一の方策なのだ。」²⁶¹ と穏やかな言辞を弄しながら、イングランド政府を刺激することを避けた口調で、不平等政策を非難した。この提案を採用する以外に、100万人のアイルランド国民が200万ポンドに及ぶ借財を返済する手段はないと、実際には起こりえない、幼児の死体を食肉として輸出するという提案で、事態の深刻さを認識させようとした。異質な概念の語彙を組み合わせることから生じる、印象の鮮烈さとその衝撃性、その類語を積み重ね、抽象的概念を賞賛的な語彙の位置にまで昇華させておいた末、一気に現実の様相を映したのであった。「物乞い」(Beggars)の地位を「職業」(occupation)にまで高め、「窃盗行為」(stealing)の技を、「芸術的」(Art)であるとまで賞賛してはいても、窃盗技術を、芸術の域にまで到達させなければならぬほど、窃盗が日常化しており、国民が生存するためには、他人から奪わなくては生きていけないアイルランドの現状に対する諷刺であった。またそうさせた、イングランドの過酷な植民地政策に対する諷刺でもあるのだ。

「20万人の繁殖予定の4分の1は男性である」と、ここでも人間の出産にも拘らず動物並みに「繁殖」(Breed)と言い、生まれてくる子供達を、「羊」(Sheep)「黒毛牛」(black Cattle)、「豚」(Swine)と列挙して、家畜並みに取り扱っている。これはアイルランドがイングランドに、家畜同然と考えられていることに対する諷刺なのであった。背負っている子供たちや、手に引き連れている子も、「無用の穀潰し」(useless Mouths and Backs)と言い、「人間性の感じられない存在」(Creatures in Human Figure)として表現している。家も職も失って、物乞いに身を落とした大多数の農民や小作農、労働者や職業的物乞いとその家族に、200万ポンドの負債の支払いが可能であろうかと反問し、疑問を繰り返してイングランドの政策に抗議したのである。

『謙虚な提案』は、不公正なイングランド政府の政策非難に名を借りて、自墮落に日々を過ごして、自主独立の気概に欠けるアイルランド国民に、再生を促し、道徳的社会の実現に努めさせようとの意図を含んでいたのである。それは、アイルランド国民に生きる手段を与え、貧者を救済し、富者に幾らかの楽しみを与えられる社会を構築させたい一念からなのであった。その解決の方策は、貿易制限の解除にあると、従来の主張を繰り返しているのであった。スウィフトは、政治的闘士のペルソナで訴えるのをやめて、愛国者とし

²⁶¹ “having no other Motive than the publick Good of my Country, by advancing our Trade, providing for Infants, relieving the Poor, and giving some Pleasure to the Rich.”(Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.118)

での素顔で政策撤廃をもとめたのである。政党間の醜い利権争いに嫌気をさし、政治の世界に絶縁を宣告した彼は、弱者に涙する姿で論じたのである。アイルランドの現状を見聞するにつれて、アイルランド国民の愚かさよりも、強者イングランドが権力を恣意に用いて、弱者を虐げている姿に怒りを感じたのであった。道徳的社会は、このような社会悪を是正しなくては構築できないのであった。社会悪を是正し、道徳的社会を構築することこそ、梅毒治療の妙薬なのであるという固い信念が、彼にこの様な提案をさせたのであった。道徳の乱れが梅毒流行を助長しているとの時代には、信じられていたので、梅毒治療法は道徳に頼るしか無いのである。この考えが当時の医学水準でもあった。アイルランド国民に対する種々の提案に隠れて、愛国者のペルソナのスウィフトがいる。『ドレイピア書簡』は怒りの発露であり、『謙虚な提案』は究極の抗議なのであった。そこには弱者のために涙し、弱者のために立ち上がり、熱弁をふるって抗議する、人間愛に溢れた姿があった。校了ま近の『ガリヴァー旅行記』の執筆を中断してまで、スウィフトは『ドレイピア書簡』を翳して、イングランド政府のアイルランド政策に異を唱え抗議したのも、全ては道徳社会の実現を求めてのことであった。彼の視線の先には、日ごとに地獄の様相を濃くしていく、アイルランドの姿が焼きついていて、彼は愛国者として、不義を糾す社会改革者の姿で、我々の前に現れたのである。社会悪を糾す姿勢が、社会に遍く行き渡ることで、道徳的社会が構築され、梅毒を社会から一掃できると信じていたのである。

4 作家としてのスウィフト

第1章『桶物語』「狂気」の章

スウィフトが『桶物語』で狂気を取り上げているのも、ともすれば揺らぎがちな精神異常への恐怖を払拭するため、あえて狂気を論議したのであった。全ては梅毒が齎す悪疾の恐れを軽減したいためであった。「一国における狂気の起源と利用改善に関わる脱線」と題する『桶物語』第9章で論じたのは、優れた才能の主は、狂気によると思われるような発想をするということであった。彼の発想は、日ごろから奇想天外な着想と、論外と思われる語彙に基づいて記述することが多かった。彼の着想が梅毒による精神障害の産物と誤解され、梅毒罹患の事実が世間に知れ渡るのを怖れた。しかし、狂気によると思われるような着想が、梅毒罹患の果ての妄想と受け取られる危険も感じていた。彼の優れた才能による奇想天外な構想が、単なる狂気の末の出来事と受け止められることを嫌ったのである。彼は偉大な王の業績すら、王の狂気によってもたらされた結果であろうとの認識をもっていた。

1585年7月、「ヌムール協定」²⁶² (Treaty of Numours)でプロテスタントの礼拝を禁止し、牧師や非改宗者を国外追放したフランスのヘンリー3世 (Henry III) と、その跡を継いだヘンリー4世 (Henry IV) の史実を取り上げ、狂気の起源とその本質を説いている。そのヘンリー3世は、1589年8月、修道士によって暗殺されてしまった。宗教戦争に明け暮れ、改宗を重ねたヘンリー4世は1598年4月、新教徒の自由を規定した「ナントの勅令」(The Ordinance of Nantes)²⁶³ を発布した。この勅令によって、フランスにおける、36年に亘る宗教戦争を締結した史実を題材にしたのである。スウィフトは折に触れて狂気に関わる物語を執筆しているが、『桶物語』の「狂気」の章に関しても、梅毒罹患が強迫観念となつて、絶えずその結果の狂気に関心が向かっていた。

国王が戦勝を夢見て大軍を徴発して戦ったのは、ならず者が思うに任せぬ売春婦の所業に怒り、窓を壊した行為と同じ怒りからである。国王の場合は、凝縮された精液が刺激され、上昇し、燃え上がり、焼け爛れて、胆汁に変化し、脊髄を通過して脳に達した。これと同じことが起つたのであり、「狂気は胆汁の変化による」というのが、スウィフトの狂気に関する主張である。人間の知性を、創意工夫で豊かなものとするには、「下部機構から上昇する、一種の蒸気のようなものによって、攪乱されなければならない。この攪乱操作が狂気である」というのであった。その点、ギリシャの哲学者デオゲネス (Diogenes)²⁶⁴ や

²⁶² ヌムール協定：ヘンリー3世が、旧教派のギーズ公に屈して、アンリ・ナヴァルのフランス王位継承権を剥奪し、ユグノーに6ヶ月以内の改宗か、国外退去を命じた協定。

²⁶³ The Ordinance of Nantes (L'Edit de Nantes)：フランス王ヘンリー4世が、1598年フランスの新教徒ユグノーの信仰に自由を認めたフランス北西部の都市ナントで出した勅令。これによって38年に亘る宗教戦争は決着したが、1685年、ルイ14世が、これを廃止したため、多くのユグノーが国外に脱出した。『広辞苑』より。

²⁶⁴ Diogenes died. (c.320 B.C.).Greek philosopher. (M.W.B.D.)

アポロニウス (Apollonius)、²⁶⁵ フランスのルネ・デカルト (Rene Descartes) ²⁶⁶ 等の哲学体系も、同様に狂気のなせる業であると断定できる。暴君の怒りを避けるため、狂気を装っていたとされる、ローマのプルタルコス (Plutarch) ²⁶⁷ の狂気もまた、一種の下部機構から発生する蒸気のなせる業であるとした。哲学者として尊敬されていた人物が、他の人々にとっては馬鹿者扱いされるのも、皆これと等しいのであると主張して、奇想の発想も、これと同一に、狂気によると主張している。

Transposition of the Brain, by Force of certain *Vapours* issuing up from the lower *Faculties*; Then has this *Madness* been the Parent of all those mighty Revolutions, that have happened in *Empire*, in *Philosophy*, and in *Religion*.²⁶⁸

大脳の入替えは、肉体の下部機構から繰り出される、ある種の蒸気によって行われる。そうして、この狂気は、かつて帝国、哲学、信仰において起こったあらゆる大変革の原因となってきたのである。

近代派の作家が狂気によって作品を創造するのであるならば、哲学や信仰に支えられた帝国を創造したのは、他ならぬこの狂気となる。アレキサンダー大王の世界帝国建設も、大王の狂気の故である。想像力と実感との闘ぎ合いで、常識や分別といったものが否定されてしまうことがよくあるが、「これが果たして狂気のなせる技なのであろうか」という疑問を我々に投げかけている。「決まり文句を耳に、幻影は目に」²⁶⁹ この感覚は、撫ることが触覚に快感を与えるのと、同じ効果をもっているものであり、何れも感覚を騙している行為なのである。狂気があらゆる感覚を騙しているならば、幸福という概念を、この感覚との関連で定義すれば、どのようになるのかと問いかけているのも、この逆転する思考について論及することで、通常理念の不安定さを諷刺したのである。

幸福の概念を、知性や理性は虚構が真実よりはるかに勝っており、理性はほんの一握りに過ぎないと決めつけて論じている。「想像力が壮麗な光景を描き、自然が用意するものより、未来に素晴らしい展望を用意してくれる」²⁷⁰ スウィフトは「幸福とは上手に騙されることである」と定義して、虚構が実態よりも優位であることを謳った。「想像力で作り出し

²⁶⁵ Apollonius of Perga.(c.262-c.190 B.C.). Greek mathematician. (M. W. B. D.)

²⁶⁶ Rene Descartes.(1596-1650). French Mathematician and philosopher. Fame named on treatise *Dicours de la method* (1637). (M. W. B.D.)

²⁶⁷ Plutarch. (c.46-after 119 A.D.). Greek biographer. (M. W. B. D.)

³⁷⁸ Swift, *A Tale of a Tub*, pp.107-8.

²⁶⁹ “For, Cant and Vision are to the Ear and the Eye, the same that Tickling is to the Touch.” (Swift,*A Tale of a Tub*, p.108)

²⁷⁰ “because Imagination can build nobler Scenes, and produce more wonderful Revolutions than Fortune or Nature will be at Expence to furnish.” (Swift,*A Tale of a Tub*, p.108)

た幻影は、実在よりもより現実的である」²⁷¹ と、軽妙な言い回しを頻発して、「想像力は作品の母体であるが、記憶は墓場に過ぎない」²⁷² と、作家は想像力の飛翔する果てまで辿って著作するが、現代の批評は作品の思い出にすぎないと括って、批評の実態を示している。この論評で、スウィフトはテンプル卿の著作の弁護をし、批評はその実態に寄り添うものであるべきと主張したのであった。この主張を、「外見上どんなに美しい女性でも、どのように女性にもてはやされたダンディな男性でも、内面をあからさまに開陳してしまえば、ただの肉片と化してしまう」と美女の美しさを、肉体の内面を暴いて、外見とその内面の実態を逆転させ、本質を認識させようとした。本質は自然を捻じ曲げては得られないと、表層的な価値判断の無意味なことを諷刺したのである。このようにして狂気を見つめたとき、活力や精気を与える狂気もあるのだから、真の賢者は、自然の表面のみ掬い上げて、残渣は「理性や哲学に任せておくのである」²⁷³ と言って、ベットラム病院²⁷⁴ の患者でも、「口角泡を飛ばして絶えず語っている者は、狂気も饒舌もそれぞれが与えられた能力なのである。」と表層的現象を肯定的に理解することの重要性を論じた。「青いカバンを持って急いでいる者は、裁判所のあるウェストミンスター・ホール (Westminster Hall) に行く人で、彼は弁護士に向いている」とか、「織りものの寸法を測っている者は、先見の明と洞察力に富んでいるから、街 (City) の住人 (経済、財政専門家) に相応しい」などと表層的に、人物を特定することの重要性を例示した。「時期を誤った者が狂気の烙印を押され、長くその汚名を残すのである」と視点を変え、時間をずらして眺めた時、そこに新たな価値が見いだせることを論じた。この二重構造の理論を、古代の事例を挙げて、締めくくりに論証としている。スウィフトはこの章で、特異な才能による発想が、狂気に起因するものではなく、才能の開花した結果であることを説いたのである。彼は自分の梅毒罹患が、やがて精神異常をもたらすのではないかと怯えていたので、自分の特異な発想すら、狂気の果てと考えられるのを嫌い、この誤解から梅毒罹患の事実が明らかになることを怖れたのであった。彼の奇想な発想は、時間をずらし、視点を変えて表現したに過ぎないと主張したのであった。

『書物戦争』の詳細な顛末の章は、『桶物語』執筆の合間に、テンプル卿を擁護する目的で著述され、1696年、スウィフトのムーアパーク滞在中に書き上げられていた。続いて『桶物語』の残余の部分と、『精神の機械的作用』(*A Discourse concerning the Mechanical Operation of the Spirit in a Letter to a Friend. A Fragment*) が書き加えられ、これら3編の論文は相互に深い関係の上に成立している。

²⁷¹ “Whether Things that have Place in the Imagination, may not as properly be said to Exist, as those that are seated in the Memory”(Swift, *A Tale of a Tub*, p.108)

²⁷² “...,since This is acknowledged to be the Womb of Things, and the other allowed to be no more than the Grave.”(Swift, *A Tale of a Tub*, p.108)

²⁷³ “Such Man truly wise, creams off Nature, leaving the Sewer and the Dregs, for Philosophy and Reason to lap up.” (Swift, *A Tale of a Tub*, p.110)

²⁷⁴ Bedlam : 正式名は、The Hospital of St. Mary of Bethlehem と称するロンドン最古の精神病院。

テンプル卿が 1690 年執筆した、『古代と近代の学問について』(*Essay on Ancient and Modern Learning*, 1701) で、古代が近代に勝っているとの論述を展開した。テンブル卿は、古代人の知識は累積的ではなく、天才の産物であることを歴史的に裏付けて、哲学、修辞学、天文学、音楽、建築学、地理学、文学のいずれの分野でも、古代人は近代人に勝っていると論証した。その中で文学に関して、『ファラリス書簡』(*Epistle of Phalaris*)²⁷⁵ と、『イソップ寓話』(*Fable of Aesop*) の 2 冊を取り上げ、これらは散文学の最高傑作であるとの主張を展開した。テンブル卿の主張に対して、1694 年、ケンブリッジ大学のウォットン (Wotton)²⁷⁶ が、『古代と近代に関する省察』(*Refractions*, 1696) で卿を攻撃した。1697 年 6 月、前述の著書の第二版の付録に、Wotton の友人で、聖ジェームズ王立図書館の館長ベントレー (Bentley)²⁷⁷ が、『ファラリス書簡に関する論文』(*Dissertation on the Epistles of Phalaris*) で、『イソップ寓話』と『ファラリス書簡』は、共に他人の手になる偽作であると決め付けた。同時に、オレリー卿の著作『試案』(*Examination*) に対する攻撃を仕掛けた。このウォットンとベントレー、両者に対してオックスフォード大学クライスト・チャーチ (Christ Church) 校の学者たちが論争を仕掛けたことから論争の炎は燃えさかった。『ファラリス書簡』の著者、第 4 代チャールズ・オレリー卿 (Charles Boyle, 4th Earl of Orrery)²⁷⁸ も、その著書の出版にあたって、古文書閲覧の際、ベントレーに邪魔されたことから、反ベントレー陣営に与して、論争に加わったのは当然の帰着であった。こうした状況下の 1697 年、その年 3 度目のイングランドであったスウィフトは、尊敬するテンブル卿を守るため、卿を誹謗するベントレーたち銜学者に対する怒りから、ベントレー達を茶化した、「先週の金曜日に戦われた古代と近代の間の論争に関する詳細な解説」(“A Full and True Account of the Battle Fought last Friday Between the Antient and the Modern”) を発表して返礼した。この一連の出来事をまとめ上げたのが、『書物戦争』である。スウィフトの彼等に対する怒りの激しさは、実名を挙げてベントレーやウォットン誹謗していることでも良く分かる。スウィフトはテンブル卿に加えられた侮辱に対しても、直ぐこのような報復に出るのである。

『精神の機械作用』に関する論考で、狂気の原因が梅毒にあるのか、生来の資質にあるのか、その境界を曖昧にしているのは、自分の奇想な発想が、梅毒による狂気の発現の結果と、受け取られることを否定したい願望のあらわれであった。スウィフトの『桶物語』執筆の目的は、宗教と学術の腐敗墮落を是正することにあつたので、彼は聖職者というペルソナで論述した。その目的には、テンブル卿執筆の論考に対するウォットン-ベントレー

²⁷⁵ *Epistle of Phalaris* : 前世紀のシシリーの僭主、政権を獲得して残酷な政治を行ったとされる。現存する 148 通の書簡は、2 世紀末の偽作である。『広辞苑』より。

²⁷⁶ William Wotton. (1666-1728) .1693 年以降 Middleton Keynes の教区牧師、ケンブリッジ大学卒業、学識者。『キリスト教人名辞典』

²⁷⁷ Richard Bentley (1662-1742) He was educated at St.John's College, Cambridge, and appointed by Stilling fleet tutor to his son(1683-9),was keeper of the King's libraries in 1694. (M.W.B.D.)

²⁷⁸ Charles Boyle 4th Earl of Orrery. (1676-1731). (M.W.B.D.)

一たちの、あくなき批判から卿を擁護することもあった。スウィフトは卿崇拜者のペルソナで、その役割を演じた。『桶物語』における宗教問題こそが、文芸批判の矛先を逸らす目的で書き加えられた、「著者の意図を逸らし、身に及ぶ危険を回避する」ために書き加えられた「空の桶」であった。宗教批判に徹底さが欠けている原因を深町弘三は、「スウィフトが著者ではなく、無神論者の三文文士の手によるもの」²⁷⁹の故であると、作者不詳の説を唱えている。三浦謙は、『桶物語』誤読の原因は、英国国教会の墮落にあるとしている。英国国教会の墮落ぶりは、「英国国教会の説教は、陳腐な道徳論に堕した長談義に過ぎず、上級の僧侶は高禄を貪り、下級の僧侶は地方地主の取り巻きとなって、地主に媚を売り、彼らの主宰する野卑なスポーツや酒宴に加わった」²⁸⁰とあるほどであった。彼らの墮落の原因は、高給過ぎる高位聖職者の俸給と、低位聖職者の薄給と言う構図にあった。1762年現在の上級司教の収入は、カンタベリー司教 7,000 ポンド、ダラム司教 6,000 ポンド、ロンドン主教 4,000 ポンドといった高給であった。²⁸¹ 一方で教区司祭の年俸は、20～60 ポンドと低く、当時の労働者の年俸が 30 ポンドであることと比較して、それ以下の年俸の聖職者も数多く居たほどで、収入の少ない教区司祭は幾つかの教区の司祭を兼任したり、農業を行ったりしていた。彼らが教区司祭の選挙権を持つパトロンや、土地の有力者に媚び諂ったことも止むを得ない仕儀であった。²⁸² スペイン継承戦争時の社会情勢も乱れており、庶民の休日の娯楽は「熊いじめ」や、「牛攻め」の見物や、刑場であったタイバーン(Tyburn)で行われる「死刑の見物」といった残酷な類のものであった。英国国教会はこのような病める社会に、何ら改善の手を差し伸べることもなく、批判すらしなかったのである。スウィフトが、道徳社会の到来に最後に頼るところは、英国国教会であったからである。当時世間を賑わしていた論議にキリスト教廃止論があった。彼はキリスト教廃止の様々な利点を逆説的に取り上げ、キリスト教の必要性を力説している。

I CONFESS, if it were certain that so great an Advantage would redound to the Nation by this Expedient, I would submit and be silent: But , will any Man say, that if the Words *Whoring, Drinkine, Cheating, Lying, Stealing,* were, by Act of Parliament, ejected out of *English Tongue and Dictionaries*; we should all awake next Morning chaste and temperate, honest and just, and Lovers of Truth, Is this a fair Consequence ? Or if the Physicians would would that Expedient serve like so many *Talismans* to destoroy the Diseases themselves? *Are Party and Faction* rooted

²⁷⁹ 深町弘三、「スウィフトの桶物語」、『英文学研究』（日本英文学会）、1955年3月、287頁。

²⁸⁰ 三浦謙、「『桶物語』に見られる宗教批判について」、『中京大学教養論叢』第19-4号、81頁。

²⁸¹ 浜林正夫、『イギリス宗教史』、187頁。

²⁸² 井野瀬久美恵編、『イギリス文化史入門』、51頁。

in Mens Hearts firmer Principles? ²⁸³

申し上げますが、仮にもしこの方策に非常に大きな利点があり、国家を高めることが確かならば、私は沈黙を守って従います。しかし、もし議会法によって、*売春、飲酒、欺瞞、嘘、窃盗*といった言葉が英語や辞書から排除されれば、翌朝目をさますと、私達全員が純潔と節度、正直と正義、真実への愛を身に着けている、と言う者はいるでしょうか。これは理にかなった結果でしょうか。あるいはもし医者をなくせば、その方策はさながら**魔除け**のように、病気それ自体をなくすのに役立つのでしょうか。人間の心に根差している政党や派閥が、より確かな原理なののでしょうか。

法律を定めて、英語から好ましくない言葉を追放したところで、問題は解決しないと断じて、梅毒や通風、リウマチと言った言葉の発音を禁止したところで、それらの病気がたちどころに治癒するものでもない。ましてや、表面上は対立しているように見える宗教などは、人間性の臆深くに対立構造があるので、これらの言語の使用を禁止したところで、無くなるものでもないのである。人間性に根差した宗教間は、一朝一夕には解決しないのだと、キリスト教廃止論を退けている。スウィフトは「キリスト教廃止論に抗す」(“An ARGUMENT to prove, That the Abolishing of CHRISTIANITY in ENGLAND”) で、福音の教義を放棄すれば、永久に宗教は排除され、社会は大きな利益を得ることが出来、逆説論法で論じている。それによって、あらゆる偏見が取り除かれるが、道徳、両親、名誉、正義という名の下に、心の平安をかき乱しているものは、根絶出来ないと、逆説論法でキリスト教を擁護している。スウィフトは、やがてキリスト教の教義によって、道徳社会が到来する時が来ると信じていたのである。

It is likewise proposed, as a great Advantage to the Publick, that if we once discard the System of the Gospel, all Religion will, of Course, be banished for ever; and consequently along with it, those grievous Prejudices of Education; which, under the Names of Virtue, Conscience, Honour, Justice, are so apt to disturb the Peace of human Minds; and the Notions whereof are so hard to be eradicated by right Reason, or Free-thinking, sometimes during the whole Course of our Lives. ²⁸⁴

同様に、大衆への大きな利益として提案いたします。もしいったん福音を放棄するならば、当然あらゆる信仰は永遠に消滅します。そしてそれに伴う結果的として、教育の様々な嘆かわしい偏見もなくなるでしょう。それらは、美徳、良心、栄誉、正義の名のもとに、人々の心の平和を乱す傾向が高いものです。その概念は、正しい理性や自

²⁸³ Swift, *Bickerstaff Papers*, pp.31-32.

²⁸⁴ Swift, *Bickerstaff Papers*, p33.

由思想によって根絶するにはあまりに堅固であり、時には一生かかっても困難です。

聖職者が何の手立ても出来ない状況に、憂いを表明している。英国国教会が、人間性改善に何ら役立っていない現実を知り、改善のための努力を当面諦めてしまったのである。『桶物語』に文芸批評が加わるのは、テンブル卿の庇護のもとで生活を開始した後のことである。テンブル邸で寄食し始めた当初、卿のよそよそしさに、疎外感を持っていたスウィフトも、卿の学識や見識に触れるにつれて、次第に卿に対する尊敬の念が高まっていった。テンブル卿も、スウィフトの才能を認識するに従って、その距離を縮めていった。両者の関係が深まっていくにつれて、卿を擁護する目的で『書物戦争』を執筆して、ベントレー (Bentley) たちとの論争の弁護に回った。これらの事情を考慮するならば、彼の『桶物語』執筆の軸足が、テンブル卿擁護となったことは、当然の結果と言える。『書物戦争』執筆の時期が 1696 年頃であることも納得できる。

スウィフトが正式にララカーに赴任したのが 1700 年であるから、当時の彼には、カトリック批判と非国教徒批判は出来たとしても、聖職に就任して未だ 5 年足らずの、1704 年の出版当時は、自分の所属する英国国教会の実情には疎く、とても批判するだけの知識が無かった。赴任地ララカーには長老会派の信者が多く、英国国教徒はほとんど礼拝に来ない状況であったことから、宗教批判が、非国教徒とカトリックに軸足を置いたものになったのは、当然の帰着であった。それ故、初期の宗教諷刺を、非国教徒に限って「空の桶」として、過激な文芸批判で、身に及ぶ危険を避ける目的で投げ込んだのであった。

『桶物語』を読んで不快感を顕わにされたアン女王が、その心情を密かに打ち明けられた話として、「当時ミース (Meath) の大主教であったシャープ (Dr. Sharpe) 大司祭と、さる高貴な婦人とが、女王陛下にスウィフトの昇進に反対の意見を具申した」とスウィフトが語っている。シャープ大主教の反対理由は、彼はキリスト教徒ではないということであった。高貴な婦人は悪口で、シャープ大主教の意見を補強した」とのことであった。シャープ大主教は、宗教に関わる諷刺の下品さからも、また宗教批判に真摯に取り組んでいない姿勢からも、キリスト教徒が宗教批判を行なったのではなく、過激な文芸批評の結果、身に及ぶ危険を避ける目的で流した「空の桶」と感じ取ったのである。それ故、キリスト教徒の執筆とは考えられないと、著者の人柄にまで言及して、「キリスト教徒の著作ではない」と言上したのであろう。彼の執筆姿勢は、梅毒罹患に悩み、何時襲うか分からない狂気の発現に怯えながらの作品のため、支離滅裂な部分もあり、それがさらに誤読を助長したのである。彼のイングランドでの聖職就任の妨げとなった高貴な身分の婦人とは、サマーセット公爵夫人 (Dutchess of Somerset) であった。彼女はアン女王のお気に入りの側近であり、テンブル家と親密なシドニー家の従姉妹で、ジファール夫人とも親しく、ムーアパークの近隣に住まいを設け、夫人との交遊を楽しむ仲でもあった。彼女の経歴を、伝記作家ヴィクトリア・グレンディング (Victoria Glendinning) は、次のように伝えている。

The Duchess of Somerset was a dangerous enemy to make. She was the daughter of the Duke of Northumberland, and a wealthy and startlingly attractive redhead twice widowed before she was sixteenth; by the time the memoir was published she was high in the favour of William's successor, Queen Anne, and on intimate terms with her. Another complication was that a son of Lord Essex had married a daughter of Lord Portland, already related by marriage to the Temples.²⁸⁵

ソマーゼット公爵夫人は敵にするには危険な人物であった。彼女はノーサンバーランド公爵の娘であり、金持ちでとても魅力的な赤毛の女性で 16 歳になるまで 2 度未亡人となっていた。自叙伝が出版される頃には彼女はウィリアム公の後継者アン女王の寵愛を受けていて、彼女の親しい取り巻きでした。その他の複雑な状況は、エセックス公の息子とポーランド公の娘が結婚しており、彼女とテンプルとは縁続きであった。

サマーゼット公爵夫人エリザベス・パーシー (Elizabeth Percy, 1667-1722) は、第 5 代ノーサンバーランド伯爵 (the Fifth Earl of Northumberland) の娘で、魅力的ではあるが、敵にするには危険な人物であった。彼女は第 6 代シーモア公爵 (Charles Seymour, 1662-1748) と結婚した、裕福な赤毛のご婦人であった。16 歳の頃、すでに 2 度未亡人となっていた彼女の 3 度目の結婚は、オランダへの駆け落ちという結果で終わり、当時ハーグ大使であったテンプル卿の尽力で、無事問題が解決した仲であった。彼女の目下の悩みはエセックス (Essex) 卿との結婚問題であったと、グレンディングは綴っている。

スウィフトがテンプル卿の著書の第 3 集出版にあたり、ジファール夫人の許可を得ずに出版したことで、夫人は気分を害していた。スウィフトのこの行為を、ジファール夫人の従兄弟ジョン (Sir. John Danvers) は、「目先の利得に目が眩んで友人を欺く行為」²⁸⁶ だと非難している。ジファール夫人の友人知人たちは、彼女の怒りを知っていたので、夫人の側について「スウィフトには機知も信仰心も無い」²⁸⁷ と悪口を言ったのだと、エーレンプライスは語っている。スウィフトは、イングランドでの聖職就任の妨げの元となった、サマーゼット公爵夫人 に対する復讐を、詩篇「ウィンザーの予言」 (“The Windsor Prophecy”, 1711) を発表して晴らした。彼女が 3 度に及ぶ著名な資産家と結婚し、3 人目の夫は、結婚まもなく暗殺されてしまっていた。彼女はこの夫の死後 4 月後に、チャールズ・セイモア・サマーゼット公爵 6 世 (Charles Seymour, 6th Duke of Somerset) と結婚していた。この恋多き女性は、身分の高さに加え、富の多さにおいても著名であった。や

²⁸⁵ Victoria Glendinning, *Jonathan Swift*, p.59.

²⁸⁶ Sir John Davers, a cousin, exposed no surprise in this day and age to find someone sacrificing their deceased friends to their present peculiar interest. (Victoria Glendinning, *Jonathan Swift*, p.59)

²⁸⁷ “that he is a man of no principle either of honour or religion.” (Ehrenpreis, *Swift II*, p.341)

がて彼女はアン女王のお気に入りとして、お側近くお仕えしたので、女王に対する情報操作は容易であった。そのため、スウィフトに対する負の評価を、女王に伝えた可能性が高いと考えられる。スウィフトはサマーセット公爵夫人が赤毛であることから、人参に譬えて、彼女の不幸を詩中で嘲笑って鬱憤を晴らした。

But spite of the Harpy that crawls on all four,
There shall be Peace, pardie, and War no more.
But Englund must cry alack and well a day,
If the Stick be taken from the dead Sea.
And dear Englund, if ought I understond,
Beware of Carrots from Northumberlond.
Carrots sown Thyn a deep root may get,
If so be they are in Sommer set.

性悪女に呪われて4人はのたうった。
平和が訪れ、争いはもう起きないであろう。
しかし、イングランドよ安心するなかれ、
もし平和が死の海から齎されたとしたなら、
愛するイングランドよ、
ノーサンバーランドの人参には注意せよ、
その人参は死の海から引き抜いたものだ。
サマーセットが植えたから、根深いのだ。

このように受け取れるこの詩句は、サマーセット公爵夫人の私生活を暴いた内容をもっていた。4人の夫の死で購われた爵位と、赤毛であった身体的特徴を人参に譬えて、サマーセット公爵夫人の執念深さを嘲笑った諷刺詩であった。この詩を発表したことで、イングランドでの主教職就任を絶望の淵に追いやる結果となった。『桶物語』の出版により、思わぬ挫折に見舞われ、彼の命運を定める結果となった。彼の昇進を妨げた公爵夫人に対する報復の詩編が、更に彼の立場を危うくしたのである。スウィフトは受けた屈辱は必ず返すという、変質狂的な性格でもあった。

しかし彼のこの性格は生来のものであって、梅毒罹患がその原因ではないが、公爵夫人をその肉体的特徴から人参に譬えて諷刺したのは、彼の才能のなせる技であろう。

第2章 『ガリヴァー旅行記』

1726年10月28日、ポーブやゲイなどの友人達の協力を得て、『ガリヴァー旅行記』は無事上梓を果たした。スウィフトは、この作品を1714年には書き始めていた。題材は、アーバスノット(Arbutnot)やポーブとともに結成した、スクリブレルス・クラブ(Scriblerus Club)の『回想録』(Memoirs)から、ヒントを得て書き上げたものであった。元来このスクリブレルス・クラブは、仲間が集まり、グラブ・ストリート(Grub Street)に蔓延っている、三文文士達を諷刺する目的で合作した諷刺的作品を、世に問う目的で結成されたものである。その点でも、『ガリヴァー旅行記』の修正や削除作業に、ポーブ達『回想録』の仲間が関わったことは、当然のことであった。スウィフトは、『ガリヴァー旅行記』を『回想録』の荒筋に沿って書きあげたが、道徳的社会の実現を目指して、理想的社会の実態を描くことを目指していた。然しながら、彼を取り巻く環境は、彼に容易に理想社会到達を許さなかった。『ガリヴァー旅行記』執筆中も、病魔は彼を襲い、時折襲ってくる発作は、道徳社会の到来を信じさせなくなっても来たのである。その表れが、「ラピュータ」の数々の課題なのであろう。

フランスの精神科医アントニー・ベイル(Antoine Bayle, 1799-1858)が、1822年に審査を受けた博士論文「精神病に関する研究」で、慢性蜘蛛膜炎が症候性精神異常の原因であると論じて以来、彼の師アントニー・アタナシウス(Antonie Athanase, 1768-1825)や、イギリスの精神科医ジョン・ハスラム(John Haslam)等も、進行麻痺(Paralysis Generale)、すなわち第三期梅毒症髄膜脳炎の存在を論議していた。ハスラムは広汎性麻痺と結び付いた、誇大妄想が狂気の諸形態に大いに関わっていると論じて、「麻痺性疾患は想像以上に狂気の原因であり、偏執のありふれた結果である。麻痺患者は普通狂気とは、独立した運動障害を呈し、言葉は不明瞭で、口は曲がり、腕や脚は多少とも随意運動が不能で、大部分の患者は、記憶力が著しく減退している。この種の病人は、一般的に自分の状況に関する意識を欠いている」と論じていた。患者自身、「自分は極めて壮健で、最大の力を発揮できると思っているが、突然卒中で死ぬか、あるいは、何度も発作を起こして痴愚となるか、意気消沈状態になる」と患者の症例を取り上げて結論つけた。²⁸⁸ 1495年、爆発的流行を見た梅毒は、伝染力や症状は弱くなったが、その後200年以上もの間、治療法も特効薬も分からないまま、月日だけが経過していった。18世紀になると、研究が進み始め、治療法は未だ確立しなかったが、症状については研究が進んできた。スウィフトは、自分の梅毒罹患について医学書を読みあさり、症状だけは把握していたのである。

1688年、テンプル卿の下に食客として寄留下スウィフトが、当初、卿に疎外され、同じ食卓での食事も許されなかったのも、彼の孤児根性が、卿のお気に召さなかったのではなく、彼の梅毒罹患が原因であったと考えられる。クリストファー・コロンブス(Christopher Columbus, 1451-1506)が新大陸発見を果たして、スペインのセヴィーリヤに帰国したのは、

²⁸⁸ クロード・ケテル、『梅毒の歴史』寺田光徳訳、藤原書店、239頁。

1493年3月31日、4月20日にバルセロナに凱旋帰国した時には、現地人6名を引き連れて来ていた。梅毒が新大陸の風土病であったならば、当然連れてこられた現地人は、彼らの風土病でもあった梅毒に罹患していた筈である。船旅のさなかでも、これ等現地人たちと性交渉があったことは想像に難くない。そのため船旅の一行も梅毒に罹患していたため、帰国して故郷の人々との性交渉を通じて、梅毒が急激に流行したのである。1494年、フランスのシャルル8世(Charles VIII)が、イタリア遠征に旅立った時、その軍隊はヨーロッパ各国の傭兵で構成されていて、その中にはスペイン兵もいた。この軍勢が戦場地の売春婦との性交渉で、梅毒に罹患し、大勢の軍隊によって梅毒は、蔓延していったのであった。初期においてはこの梅毒は、ナポリ病とも、フランス病とも称されたのは、梅毒の病因となった土地や、兵士の出身地名に因んだのであった。1494年から焼結を極めた梅毒も、1508年には、繁殖力も減退する傾向にあることが、ヨハネス・ベネディクトス(Johannes Benedictus)が指摘していた。ウルリッヒ・フォン・フッテン(Urich von Hutten, 1488-1523)も、梅毒の最盛期は7年以上続いたと記述している。1546年には、ジェローム・フラカスター(Jerome Fracastor)は、「20年前から膿胞の数は少なくなっている。それと反対に次の段階のゴム腫がいつそうおびただしくなり、見たところ最初の頃と反対になった。およそ6年近く前からこの病気は大きく変化した。というのも〈膿疱〉は極めて少数の患者にしかもはや見出されず、みんなにショックな髪の毛やその他の体毛が抜け落ちることであり、病人はそれで人の笑いものになるような姿に変わってしまう。髭の生えないものがあるかと思えば、睫が抜け落ちていたり、禿頭になるものもある」と、梅毒の本質が変化していることを記述している。この様な状況下にあった梅毒に、スウィフトは罹患したのである。次第に伝播力に陰りが見えて、一時の流行の勢いは影をひそめていった。²⁸⁹ これは治療法が発見されたのでも、特効薬が出来たのでもなかった。その後200年以上も原因不明のまま、梅毒の病原体トレポネーマ(Treponema)の存在が発見されるまで、治療法が分らなかった。梅毒流行当時、様々な学説が唱えられ、古代ギリシャのヒポクラテスが唱えた、体液説(古代ギリシャ・ローマのピポクラテスの時代から心身の病態を説明し、治療法の拠り所となった万能の原理で、ヨーロッパでは形を変えて19世紀まで医学大きな影響を及ぼす。心身の健康は四体液の平衡と調和からなり、これらの体液の過剰、不足から変調や病態が生じると考えられた)、寄生体論(広義では病人とは独立した病原体に病気の原因を見る見方で前者の「体液説」以上に古くて、単純明快な病気の説明原理。病気についての存在論的理論と定義される。パストゥール以降の細菌学の発展で装いを新たにした)、生物学説(有機体の病的な現象を正常な生理的機能の量的変異に還元して説明説明する。19世紀のブルセーやクロード・ベルナルによって一世を風靡した学説。病気は生理的機能の変調の結果炎症などとして現れると見なすので、治療法としては鎮痛、消炎などの対症療法を基本にする)に求めていた。²⁹⁰

²⁸⁹ クロード・ケテル、『梅毒の歴史』寺田光徳訳、藤原書店、83-84頁。

²⁹⁰ クロード・ケテル、『梅毒の歴史』、13頁。

スウィフトの時代になる頃には、体力と治療法がうまく合致すれば、梅毒の伝染は容易に防げるものとなっていた。リンゴの食べ過ぎによる消化不良のため、胃腸障害から難聴、めまいの発作に見舞われ、転地療法のため故郷のダブリンに戻ったとされる 1699 年は、彼が梅毒罹患して 2 年目頃のことであった。近代医学が到達した梅毒は、罹病 2 年目くらいに発病し、性交渉が無ければ他人に伝染しないばかりか、病原体そのものも弱体化して、伝播力も失うものであった。スウィフトが単なる胃腸障害であったなら、治療はムーアパークでも可能な筈であるが、梅毒であったなら、梅毒が広く行き渡っていたダブリンなら、沢山の症例もあり、知識の集積もあるので治療は容易であると考えられる。スウィフトのダブリン転地療法はそのためであった。治療の効果も出て、一応梅毒症状は消えたので、ムーアパークに再び戻ったのであり、それ故、安全を期するために母親の元に、3 月以上も滞在を延長したのであった。他人に伝染させる恐れもないほど、表面的には梅毒が治癒したように見えたので、テンプル卿も心を許して、彼に陪席も許したのである。スウィフトはダブリンでの治療の際、当時流行していた水銀治療を行ったようである。水銀化合物の吸収によって起こる著名な障害には、中枢神経の障害がある。中枢神経障害は、末梢神経が受けた刺激を、過激に伝達することもあって、過剰な光や音声を感じ、強迫観念に陥ることもある。1721 年には、梅毒恐怖 (Syphilophobia) と呼ばれる、極端に梅毒罹患を怖れる患者の存在も明らかとなっている。スウィフトはある意味、梅毒恐怖症であったので、必要以上に梅毒の研究をしたのである。梅毒の記述を繰り返すことで、梅毒の恐怖を遠ざけ、恐怖を克服しようとしたのであり、精神分析で示された強迫観念の解消を願ったのである。彼が梅毒関連の書籍を読んでいた。1656 年、パリにおける総合救貧院の建設を機に、従来は性病患者に治療は行われず、治療費の支払いを代行して、市外に隔離していたのであったが、1690 年に、性病患者の収容を認め、彼らにバッヂを付けさせ、区別を明らかにした上で、梅毒の治療を行っていった。スウィフトはこれを真似て、ダブリンの全ての教区の貧民が、生活の資を教区に仰いでいる状況を批判して、「ダブリンのすべての乞食にバッヂを付けさせる提案」(“A Proposal for Giving Badges to The Beggars in All The Parishes of Dublin”, 1737) 上梓して、経費の負担の明確な区別がされない限り、行うべきではないとの趣旨を明らかにした。明らかにこの提案は、100 年前にパリが行った梅毒患者治療の垂流なのである。

スウィフトは『回想録』執筆の頃には、既に神経性梅毒は進行していたので、『ガリヴァー旅行記』のあらすじも、誇大妄想による連想が強かった。フランスの作家モーパッサン (Guy de Maupassant, 1850-1893) が 30 歳を迎えるころ、神経性梅毒の最初の兆候が現れ、それから右目の調節機能麻痺の兆候を感じた。それから 10 年後、『ル・オルラ』(Le Horla) を読んだ友人のフランク・ハリスは、「この作品の物語を思いついた激しい恐怖は、貴方の神経が混乱していることを示している」と、モーパッサンの神経状態に不安を感じたことを記述している。この様に進行性麻痺患者は、感覚が鋭くなり、奇想天外な発想をするようになるのである。スウィフトの『回想録』執筆の頃には、進行性麻痺が、第二期にまで

及んでいたのである。この病は、やがて狂気に進むと既に 16 世紀には論じられていた。梅毒の様々な変化形の一つに、狂気があることは常套的であったにもかかわらず、当時の医学水準では、梅毒と狂気を関連付けてはいなかった。

1993 年 10 月 2 日号の学術誌『ランセット』に王立マースデン病院 (Royal Marsden Hospital) の精神科医ポール・クライトン (Paul Crichton) が、1995 年ノーベル生理学賞を受賞したエドワード・ルイス (Edward B. Lewis) が主張した、「ストラルドブラグの描写は、終末期となった叔父ゴッドウイン・スウィフトの状態を描写したものである」説を支持する論文を寄稿している。彼はストラルドブラグの描写を医師として 4 段階にその病変を分けて診断している。第一段階では、憂鬱になり、気力が減退。第二段階になると、性格が変化し、感情的で自己中心的となり、時に憂鬱とり、多弁を労するようになる。感情の起伏は大きく、記憶力が減退する。とりわけ直近の認識が薄れる。第三段階では、物の名前や人名、特に近親者の名前の記憶が失われ、文章も読めなくなる。第 4 段階にまで達すると、相手を認識できず、会話もままならなくなる。

『回想録』執筆当時のスウィフトの精神状態は、水銀治療の影響もあって、進行性麻痺の第 2 期症状に相当する状況であった。感情の起伏が激しく、自己中心的となっていたうえ、緻密な計算までは、彼の思考は行き届いていなかった。そのため、『ガリヴァー旅行記』の構成にしても、第 1 話で、小人を普通の体格の人間の 12 分の一の大ききで描きながら、第 2 話ではあらゆるものの描写に当たって、巨人を通常人間の 20 倍の大ききで描いていて、両者の大ききは 240 倍にまで拡大している。彼の心象風景が、極端に変化している。その心理状態を如実に物語るのは、第 2 話「ブログディンナング」(Brobdingnug) の第 1 章から既に始まっている。ガリヴァーは乳母の裸体の描写で、吐き気を催すようなその姿態と、とりわけ巨大な乳首の感想は、彼女を化けもの扱いをしている。これなどは、梅毒を罹患させた女性に対する恐怖心の表れである。

I must confess no Object ever disgusted me so much as the Sight of her Monstrous Breast, which I cannot tell what to compare with, soas to give the curious Reader an Idea of its Bulk, Shape and Colour. It stood prominent six Foot, and could not be less than sixteen in Circumference. The Nipples and Freckles, that nothing could appear more nauseous....²⁹¹

私とその乳房を見て、吃驚したことを告白します、大きき、形、色合い、とても気もうちの悪い物でした。何しろ 6 フィートも突き出ている、周り 16 フィート位はあります。乳首や乳輪はそばかすだらけで、私の頭の半分くらいはあります....。

更に第 3 章になると、蜂に襲われる場面が出てくるが、巨人と普通人との体格の比較は、

²⁹¹Swift, *Gulliver's Travels*, p.75.

20 対 1 と、巨人が 20 倍の大きさであるのに、蜂は 40 倍の大きさを描写されている。それが 20 匹も部屋に入ってきたので、その恐ろしさと羽音のすさまじさは、耳を聳せんばかりであった。この描写は、スウィフトの幻聴、幻覚に由来していると考えられる。彼は猛烈な蜂の羽音におびえ、巨大な蜂の姿に恐怖したのである。これは強迫観念による、妄想と幻聴に起因するばかりか、眼球の調節機能麻痺による幻視なのである。更に、第 2 話「巨人の国」第 5 章では、篠突く雨と共に振って来た霰で、体中が傷だらけになるなども、彼の神経が研ぎ澄まされた結果の、過剰な被害妄想なのである。

....above twenty Wasps, allured by the Smell, came flying into the Room, hurming louder than the Drones of as many Bagpipes. Some of them seizes my Cake, and carried it piecemeal away; others flew about my Head and Face, confounding me with the Noise, and putting me in the utmost Terror of their stings. ²⁹²

おおよそ 20 匹の蜂が香りに魅了されて部屋にうるさくブンブン音を立てながらバグパイプの音より大きな音で飛ん入ってきた。それらは私のケーキや食事の残りを持って行き、またあるもの達は私の頭や顔をやかましく飛んで、音を立てながら刺そうとしていた。

スウィフトの梅毒描写は、『ガリヴァー旅行記』の随所に記述されている。さすがに理性で統治する第四話「賢馬の国」では、僅かに売春を生業とする牝ヤフーの生態に触れて、「ある種の病気にかかっており、彼女に抱かれた男たちは、骨まで腐る憂き目に会う」²⁹³ と梅毒の症状を細かく記述している。梅毒が子孫に遺伝するのを嫌って、子供の不要論まで展開している。第 2 話「巨人の国」第 4 章では、癌に罹患した物乞いを描出しているが、今ラッド・ライター (Conrad Reiter) の著書『マルティエグ』(*Mrtilogues*, 1508) をスウィフトが読み、その挿絵を見ての結果と考えられる。この子供の状況は、スウィフトの「巨人国」の描写や、「賢馬の国」に見られる梅毒の症状である。これらの描写は明らかに、ランベールの描いた道徳的主題の版画に描かれている情景である。梅毒に罹患した人物の無残な描写であり、梅毒のため両足を失い、肉腫が出ている子供の症状も描かれている。この版画は、梅毒患者が道徳的社会 (病院) に入る姿を象徴しているのである。道徳社会に入ることで、病気が治癒する姿を現しているとの感慨は、当時の社会風潮であった。

There was a Woman with a Cancer in her Breast, swelled to a monstrous Size, full of Holes, in two or three of which I could have easily crept, and covered my whole

²⁹² Swift, *Gulliver's Travels*, pp.93-94.

²⁹³ "That, prostitute Female *Yahoos* acquired a certain Malady, which bred Rottenness in the Bones of those, who fell into their Embraces" (Swift, *Gulliver's Travels*, p.237)

Body. There was Fellow with a Wen in his Neck, larger than five Woolpacks; and another with a couple of wooden Legs, each about twenty Foot high. ²⁹⁴

胸に岩腫がある女性おり、その大きさが途方もなく恐ろしく膨れ上がっており、私はたやすくはっても私の体を覆ってしまうくらいだった。大きな首に嚢胞がある男性がおり、それは5個の羊袋よりも大きかった、そして、脚の長さが20フィートもある者もいた。

第3話「ラピュータ」の第8章「魔法使いの島」では、歴史上の人物を自在に呼び出して会話する場面では、族長が指一本動かすことで、過去の人物たちを容易に呼び出し、呼び戻すことが出来るなどは、通常感覚では想像できない設定である。この様な描写は明らかに、幻覚に苛まれた状況から作り出されたものである。アクティウムの海戦を呼び出し、アントニウスの敗走を捉え、また、シーザーとブルータスとの話し合いの場で、彼らを称賛するなどは梅毒の影響による妄想以外の何ものでもない。梅毒の症状をイギリス人に映して見せることで、彼に加えられた差別に対する復讐心を満足させている。同時に、梅毒に対する知識を披歴して、自分の抱いている不安と恐怖心を薄めようとしたのである。

How the Pox under its Consequences and Denominations had altered every Linearment of an *English* Countenance; shortened the Size of Bodies, unbraced the Nerves, relaxed the Sinews and Muscles, introduced a sallow Complexion, and rendered the Flesh loose and *rancid*. ²⁹⁵

様々な種類の梅毒が様々な結果を伴って、イギリス人の目鼻立ちすべてを変えてしまい、体格を縮め、神経を鈍らせ、筋肉と腱を弛緩させ、顔色を土色にし、たるんで臭い肉体にしてしまった。

ガリヴァーは体躯も小さくイギリス人を映し出して、むき出しの神経と弛緩した筋肉が、悪臭を放っている様を描き出し、梅毒の恐ろしさを描写した。ストラルドブラグの第10章では、不死人の日常生活を語らせている。彼らは30歳くらいまでは、平常人と同じ生活状態であるが、80歳を過ぎ90歳になると、歯は抜け落ち、髪の毛は失われると、不死人の肉体的変化と特徴的な生活を語り始める。この描写には老醜への不安と、梅毒罹患の結果の痴愚の恐れが、現れているのである。自身のやがて至るであろう、梅毒の果ての姿を描き出したのである。老醜の怖れを描き出すことで、その怖れを軽減し、自分の運命を悟っていることを自認することで、そのような運命が避けられるであろう未来を、期待していた

²⁹⁴ Swift, *Gulliver's Travels*, pp.96-97.

²⁹⁵ Swift, *Gulliver's Travels*, p.185.

のである。

When they came to Fourscore Years, which is reckoned the Extremity of living in this Country, they had not only all the Follies and Infirmities of other old Men, but many more which arose from the dreadful Prospect of never dying. They were not only opinionative, peevish, covertous, morose, vain, talkative; but incapable of Friendship, and dead to all natural Affection, which never descended below their Grand-children. Envy and Important Desires, are their prevailing Passions. ²⁹⁶

彼らが 80 歳になると、この国ではこれが生有の限界とされているのだが彼らは他の同じ年代の老人達同様に、あらゆる愚かさやもろさを暴露するばかりでなく、決して死なないと言う前途に恐れおののいて更に多くの弱点、頑固で気難しく貧欲で不機嫌で、愚痴を言い、おしゃべりになる。そのくせ、人間関係は保てなくなり、人間としての自然な感情は全て失ってしまう。その感情すら、せいぜい孫に対してまでも実行出来ない。妬みや重大な欲求だけが、彼らに行き渡っている情熱だ。

老人特有の愚かさを列挙して、頑固で気難しい自分の性情を吐露し、他人を愛する感情が希薄となっていることを告白している。不死人の結婚観も披瀝して、80 歳を過ぎれば、「妻という頸木を背負わせ、不幸を倍加する。」²⁹⁷ として、法律が結婚の解消を許可していると語らせて、梅毒により結婚不適應となった自分の、結婚恐怖症を弁解している。スウィフトは自分なるであろう、梅毒の果ての感情の変化や、痴呆の末の愚鈍となる状況を、不安と共に表明している。彼は会話が成立しない時の到来を恐れ、自分の容貌の変化に不安を表明して、不死人の姿は見たくないと語った。

They were the most mortifying Sight I ever behold; and the Women more horrible than the Men. Besides the usual Deformities in extreme old Age, they acquired an additional Chastliness in Proportion to their Number of Years, which is not to be described;...²⁹⁸

それは最も屈辱を感じさせる光景であった。女性の方が男性より身の毛もよだった眺めである。かなり年老いた人のみにくさを彼らは年齢不相応の慎み深さが求められるが、それについては触れるのを止める。

²⁹⁶ Swift, *Gulliver's Travels*, p.196.

²⁹⁷ "should not have their Misery doubled by the Lord of a Eife." (Swift, *Gulliver's Travels*, p.196)

²⁹⁸ Swift, *Gulliver's Travels*, p.198.

第4話「賢馬の国」第6章でも、貴族の若者を取り上げ、淫らな女性相手に遊びまわり、財産を使い果たして、止むなくその女性の財産目当てに、結婚する風潮を取り上げて、梅毒罹患により奇形児が生まれることを暗示して、結婚の可能性まで否定したのである。彼はこの結果生まれてくる子供に、「たいていの子供に瘰癧があるとか、クル病にかかっている」²⁹⁹ と梅毒の結果の不安を表明している。更に、この梅毒が孫子の代まで遺伝することを語って、自分の不安がやがて現実となることへの確認をしているのであった。それだけ梅毒の恐怖が、スウィフトの心に、深く染みついていることの現れている記述である。

『回想録』の第13章、「マルティナスの離脱と旅行記のヒント」(“Of the Secession of Martinus, and some Hint of his Travels”)は、『ガリヴァー旅行記』の種もとの記述であるので、スクリブレルス・クラブの仲間は、『回想録』の粗稿を目にしていたのであった。そのため彼らが、『ガリヴァー旅行記』の荒筋を熟知していたことは、想像に難くない。この説を声高に提唱したのは、ジョゼフ・スペンス(Joseph Spence)³⁰⁰であった。1730年頃、ポープがスペンスに、「『回想録』には小人の物語や、ラピュータの研究結果の物語もある」³⁰¹と語ったのを聞いたスペンスは、スウィフトが『ガリヴァー旅行記』のヒントを、『回想録』から得ていたのだと提唱した。ポープがスペンスに伝えたのは、スウィフトは『ガリヴァー旅行記』執筆のヒントを、スクリブレルス・クラブの『回想録』の一部から得たにすぎないということであった。³⁰²ポープがスペンスに語った言葉の綾は、第2話「巨人国」の第5章で、ガリヴァーが猿に襲われる場面の描写で証明出来る。この場面はヴァネッサがスウィフトに伝えた話で、詳細は彼女が書簡で伝えていた逸話である。³⁰³ヴァネッサがさる高貴なご夫人可愛がっていた猿が、彼女の扇子を奪い取った出来事を、スウィフトに面白おかしく話した。それを聞いたスウィフトが、『ガリヴァー旅行記』の第2話「巨人国」で、ガリヴァーが、宮廷で飼育されていた猿に抱えられ、部屋中を飛び回られた状況として描写したのであった。彼女から聞いたこの話以外にも、ポープや、ゲイ、アーバスノットが執筆したと思われる章が、「ラピュータ」にある。科学的知識の持ち主、医師アーバスノットの手になる記述から、「ラピュータ」におけるプロジェクトのヒントを得て執筆したのであった。その他の章の何れかにも、スクリブレルス・クラブの同人が関与していたことは、容易に推定できる。ポープがスペンスに語ったのは、『回想録』の一部を、『ガリヴァー旅行記』に借用したに過ぎない、ということであった。この『回想録』13章は、目次だけを書き綴っただけであるが、『ガリヴァー旅行記』は、この目次を拡大解釈して、物語を構成し、詳述したのである。

²⁹⁹ “That, the Productions of such Marriages are generally scrophulous, rickety or deformed Children”(Swift, *Gulliver's Travels*, p.240)

³⁰⁰ Joseph Spence. (1699-1768). English anecdotist. (*M.W.B.D.*)

³⁰¹ “There were pigmies in Scribler's *Travels*, and the projects of Laputa.” (Arthur E. Case, p.103)

³⁰² “but he asserts that Swift took hints from them. It is unusual to speak of a man Taking hints from himself” (Arthur E. Case, p.103)

³⁰³ Swift, *The Correspondence II*, p.428.

It was in the year 1699 that Martin set out on his *Travels*. Thou wilt certainly be very curious to know what they were? It is not yet to inform thee. But what hints I am at liberty to give, I will. Thou shalt know then, that in his first Voyage he was carried by a prosperous Storm, to a Discovery of the Remains of the ancient *Pygmean* Empire. That in his second, he was as happily shipwreck'd on the Land of the *Giants*, now the most humane people in the world. That in his third Voyage, he discover'd a whole Kingdom of *Philosophers*, Who govern by the *Mathematicks*; with whose admiral Schemes and Projects he return'd to benefit his own dear Country, but had the misfortune to find them rejected by the envious Mistery of *Queen Anne*, and himself sent treacherously away. And hence it is, that in his fourth Voyage he discovers a Vein of Melancholy proceeding almost to a Disgust of his Species; but above all, a mortal Detestation to the whole flagitious Race of *Ministers*, and a final Resolution not to give in any *Memorial* to the *Secretary of State*, in order to subject the Lands he discover'd to the *Crown of Great Britain*.³⁰⁴

マーチンが旅に出たのは1699年の事でした。それがどんなものであったか、きっとぜひ知りたいと思うでしょう。まだお伝えしませんが、お知らせしてかまわない程度まで、申しませう。最初の旅で彼は嵐にあつて、都合よく古代小人族の帝国の遺跡を発見しました。第2の旅では、彼は難破してたまたま巨人の国にたどり着きました。この世で最も人間らしい人々でした。第3の旅で、彼は学者の国を発見します。学者たちは数理による統治を行っていました。彼はこの国の優れた計画と企画を自分の愛する国のために持ち帰りましたが、アン王女の嫉妬深い夫に拒絶されるという不運に見舞われ、裏切られて追い払われてしまいます。こうして彼は第4の旅で、メランコリーの気分気づき、さらにほとんど同胞の嫌悪にまで至ります。とりわけ極悪非道の聖職者全体に対し、彼は大変な嫌悪を抱くようになり、國務大臣にはいかなる記念も与えず、自分の発見した土地は大英帝国君主に捧げようと最後に決心します。

この第13章の記述を一瞥すれば、その内容からも、『ガリヴァー旅行記』の筋立てに酷似していることが分かる。『ガリヴァー旅行記』の第1話「小人国」では、最初にガリヴァーが乗船した船の船長の名前が、パーネル船長である。この名前はScriblerus Clubのメンバーで、詩人のトーマス・パーネル (Thomas Parnell)³⁰⁵からの借用である。残念ながら

³⁰⁴ *Memoirs of the Extraordinary Life, Works, and Discoveries of Martinus Scriblerus*. Written in collaboration by the Members of Scriblerus Club; Dr. John Arbuthnot, Alexander Pope, Parnell, and Robert Harley, Earl of Oxford. By Charles Kerly-Miller Oxford University Press Nov. 17 1988. p. 164.

³⁰⁵ Thomas Parnell (1679-1718). An Irish poet. Contributor of allegorical papers to the

ら、1718年に彼が死去したため、1726年発行された『ガリヴァー旅行記』を見ることはなかったが、執筆途中での情報に触れていたことは明らかである。第1話「小人国」の航海の出港日は、テンプル卿が死去された1699年で、スウィフトがムーアパークを去らなくてはならなくなった年である。嵐に遭遇して小人国に漂着した状況も、『回想録』と軌を一にする。第2話「巨人国」も、嵐に押し流されて到着した所も、『回想録』と同じ巨人の国であった。この国を理想的な国家と考えている点も、『回想録』に準じている。第3話「ラピュータ」は、数理で統治する哲学者の国であるが、バルニバービ (Balnibarbi) の科学者の数々の企画と体制は、『回想録』に準じている。この第3話では、ラピュータ (Laputa) 国以外バルニバービ (Balnibarbi)、グロブディンナング (Glubbudrib)、ラグナグ (Lauggnagg)、はては日本 (Japan)、に至るまでの国々を歴訪している点が、『回想録』の記述とは異なっている。ガリヴァーが不死人間の将来に失望して、日本経由で帰国することとなって、この第3話「ラピュータ」は結末を迎える。第4話「賢馬の国」は、理性をもった馬が支配する国で、人間に似た、非理性的な存在としてのヤフーに、祖国と同じ人々の姿を見て失望する。第3話、第4話に若干の相違を見るが、大筋では『回想録』を辿っている。

第3章 ガリヴァーのペルソナで理念を語ったのか

スウィフトは『ガリヴァー旅行記』を単なる諷刺作品として執筆したのではなく、政治的社会改造論を、ガリヴァーに語らせたのである。スウィフトは当時の医学会では、梅毒を治癒させるためには、道徳の必要性が叫ばれていた。道徳的社会が実現すれば、梅毒は治癒出来ると信じられていたのであった。何時まで経っても梅毒治療法が確立しない理由は、道徳的社会が構築されていないからだと思われていた結果である。道徳的社会を招来することで、梅毒患者が減少し、蔓延を防ぎ、その間治療法が見つけれられると信じていた。そのため、『ガリヴァー旅行記』に道徳を持ちこんだばかりでなく、頻りに執筆していた論文も、道徳的観点から論述したのであった。彼は梅毒が道徳社会の成立によって、治癒に至る道に継ったのである。スウィフトがガリヴァーというペルソナで、彼自身の理念を披歴したとするならば、自身の所属する宗教界に関する記述がなくてはならない。しかし、彼は信仰の世界に自分の進む道を定めていたのではなく、彼の心は政界に向かっていたのであった。その政界への道は、全て閉ざされてしまったので、止むなく宗教界に進んだのである。その点で T.C.D.は宗教家を養成する大学であったので好都合であった。それ故、彼の宗教家としての理念は、英国国教会の高教会派の域を出ないものに過ぎなかった。英国国教会の記述が極端に少ないのは、複雑に構成されている『ガリヴァー旅行記』に、信仰を持ち込んで、更に複雑にすることを恐れたばかりでなく、浅学ぶりが露呈し、いらぬ誤解を招き、『桶物語』の二の舞を恐れたからであった。道徳的にも乱れていた当時の教会を巻き込むことで、神に対する冒瀆の誹りの淵に、わが身を投げ込むことを避けたかったばかりでなく、教会を巻き込むことで、非道徳社会が実現してしまうのを怖れたからでもあった。彼が追い求めたのは政治的理想郷であり、政治的理想郷こそ道徳的社会であると信じていたからである。

その国家理念は、テンプル卿が主唱した、貴族と平民が平等の立場で国王に捧持するゴシック (Gothic) 体制であった。その体制下では、専制君主が出現して王権が侵された時に、革命的行動も是とするものであった。この信念が色濃く表れたのが、初版のモット (Motte) 版では削除された「ラピュータ」第3節の、革命的表現なのであった。³⁰⁶ 専制君主が、国民を圧政下で弾圧するときには、国民は武器をとって、専制君主に立ち向かうという信念を、第3節は表したものであった。

彼の信仰に対する理念は、英国国教会を信奉し、非国教徒を排除するものであった。スウィフトの立脚する宗教観は、理性的で中庸を重んじる英国人の立場を、聖職者としても守ることであった。彼が自分の理念を綴ったポープへの書簡がある。1710年頃、ホイッグ党から、トーリー党に軸足を移したことを、変節と捉えられ、非難されたが、その変節について、ポープへの1721年1月10日の書簡で信条を綴っている。

³⁰⁶ Appendix

スウィフトが変節したのではなく、「ホイッグ党自身はその性質を変えてしまったのだと訴えている」³⁰⁷ スウィフトと、ジョゼフ・アディソン (Joseph Addison, 1672-1719) やリチャード・スティー爾 (Sir. Richard Steele, 1672-1729) が不仲となってしまったのも、全ては、政党がその本質を変化させてしまったからで、決して彼が変心したのではないと述べている。当時アイルランド総督秘書であったアディソンは、議会の中枢人物と対立して、「ホイッグ党の面々は教会を誹謗し、聖職者を悪ざまに罵り、非国教徒を扇動して、啓示宗教 (神の啓示を認め、啓示にもとづく宗教) を侮辱することを専らとしている」と主張して、ホイッグ党の変節ぶりを批判していた。彼は、現実の政党の変容の姿を語ったのであり、その点で、スウィフトの主張は正しかった。急進的なホイッグ党が非国教徒に議席を与え、力を増した非国教徒議員が王権を弱め、国教会の力を削ぐことになり兼ねないことを危惧したスウィフトは、ホイッグ党を離れたのであった。力を失った王権が、カトリック回帰を黙認することを恐れたので、王権が国家と教会に及ぶ神威を認めているトーリー党に、その身を委ねたのであった。スウィフトのように真意を誤解され、不当な扱いを受けた者は、ともすれば政府に対して危険な思想を持ち勝ちであると断って、自身の政治信条をポーブへの書簡で綴っている。

First, I always declared my self against a Popish Successor to the Crown, whatever Title he might have by the proximity of blood: Neither did I ever regard the right line except upon two accounts, first as it was establish'd by law; and secondly, as it hath much weight in the opinions of the people. For necessity may abolish any Law, but cannot alter the sentiments of the vulgar; Right of inheritance being perhaps the most popular of all topicks; and therefore in great Changes, when that is broke, there will remain much heart burning and discontent among the meaner people; which (under a weak Prince and corrupt Administration) may have the worst consequences upon the peace of any state.³⁰⁸

まず、私はカトリックの王位継承者には、その人物が血縁的にいかに王位に近い称号を持っていたとしても、常に反対意見を表明したのです。私が正しい系統を認める場合は、必ず2つの理由がありました。第一に、その正しい系統が法によって認められているという理由、そして第二に、それが世論において大きな意味をもつという理由でした。というのも、必要なら、いかなる法律も廃止できるでしょうが、民衆の意見は変えられないからです。継承の権利は、おそらくあらゆる話題の中で最も人気のあるものです。それゆえ、大きな変化の中で、その権利が侵されると、一般大衆の中に、

³⁰⁷ that the Thing we call a Whig in England is a creature altogether different from those of the same denomination here, at least it was so during the reign of Her late Majesty. (Swift, *The Correspondence II*, p.371)

³⁰⁸ Swift, *The Correspondence II*, p.372.

怒りに燃え、不満に満ちた感情が消えずに残るでしょう。そしてそれは、(無力な皇太子や墮落した政府の下では) いかなる国家の平和にも、最悪の結果をもたらすかもしれないのです。

スウィフトは、名誉革命の成果を楯に、常備軍を持つ行為は国民を奴隷化するとして、ハノーヴァー朝 (Hanover) のジョージ 1 世 (George I) の即位は是認し難いという姿勢を見せた。ドイツから軍隊を雇うことは、国民の利益に反するし、政党に近寄り過ぎて、その政党の政策を保護しすぎることは、国民の利益を損なうことにもなり、怒りすら感じると語った。³⁰⁹ 彼はその怒りを、『ガリヴァー旅行記』第 4 話の第 5 章で語っている。年 1 回開催されるゴシック体制の議会制度の歓迎を表明して、「長期議会の開催を禁止しなければ、聖職者と議員の間で取引が行われ、国民の自由が阻害されるようになるので、聖職者と議員の間の政治的取引は、禁止されなくてはならない」と主張した。もし議会が年 1 回開催されるならば、閣取引はなくなるであろうと、現行議会制に賛意を表しているが、矢継ぎ早に出される法律改正には、「如何なる法律といえども、無辜の国民にとって代え難いものであっても、法律は限定的であらねばならない」と反対を唱えている。国民が延長を望む、1679 年チャールズ 2 世 (Charles II) 統治下において制定された、「人身保護令」(the Habeas Corpus Act)³¹⁰ のような法律であれ、権力者の恣意的意向で、国民の意を迎えようと仕組まれた法律改正には、反対であると中庸を重んじる自説を披瀝した。一連の国王暗殺未遂事件 (Popish Plot)³¹¹ や、王位僭称者擁立の陰謀は暴かれ、未遂に終わったにも拘らず、それを口実に、王権の強化に走る立法にも反対していた。彼は古代ローマ人を取り上げ、「危急存亡の時を除いて、彼らすら独裁者は求めていなかった」³¹² と語り、国民の犠牲のもとで、己の欲望を満たそうとして独断的な権力を揮っているウォールポール (Walpole) 政権に、反対の立場も明らかにした。

現政権が国民に与えている困窮が致命的なものとなれば、国民は暴力的行為で政府を転覆させ、安寧を得るかもしれないと真情を吐露した。彼のこの信念を記述したのが、「ラピュータ」の第 3 章で省略された革命的表現なのであった。暴力による解決が、決して良いものではないことを危惧していたのである。彼が大切にしていたのは、弁論による理性的、

³⁰⁹ “who hire out their Troops to richer Nations for so much a Day to each Man; of which they keep three Fourths to themselves, and it is the best Part of their Maintenance.” (Swift, *Gulliver’s Travels*, p.231)

³¹⁰ Habeas Corpus Act 「人身保護令」 states that a person cannot be kept in prison unless they have first been brought before a court of law, which decides whether it is legal for them to be kept in prison. [LEGAL] (*Coubuild E-E*)

³¹¹ Popish Plot : カトリック陰謀事件。1678 年カトリック教徒がチャールズ 2 世を暗殺して、カトリック復活を企てたという架空の陰謀。 Titus Oates が捏造したもので 35 人の無実の人が処刑された。『広辞苑』より。

³¹² “It is true, the Romans had a custom of chusing a Dictator, during whose administration, the Power of other Magistrates was suspended” (Swift, *The Correspondence II*, p.373)

論理的な説得にあった。

スウィフトは、テンプル卿の執筆姿勢をまねて、対応する人物や事象を、時代を超越して並行的に記述する手法を用いて、『ガリヴァー旅行記』を書いたのであった。

現実の世界を、空想の国の架空の時代として取り上げ、現実の世界の出来事と並行的に論じたのであった。彼がガリヴァーに語らせたのは、民意は議会で論ずべきであり、強権を恣意的に振う行為には異を唱えていた。政治のあるべき姿を第2話「巨人国」で取り上げ、その対極にある、スウィフトの理念に反する国として、第1話「小人国」で示して見せたのであった。彼は『ガリヴァー旅行記』を、単なる旅物語ではなく、腐敗しているイングランド政府を、ガリヴァーに批判させ、矯正することで、道徳的社会を建設する目的で書いた。彼の人生に起った出来事や感じたことを時系列的に描写したのであった。あまりにも悲惨で希望の持てない現実世界の描写に、「私の願いは、誰かこの現実を非難し、矯正して欲しい」³¹³ との救いを求めたのであった。ほぼ校了に近付いた1724年に、ウッドによる少額貨幣鑄造事件が起こり、『ドレイピア書簡』に対する、ウッド一味の不合理な反論で、王立科学院の杜撰でいい加減な研究に対する怒りと不信感が生じた。その怒りが、第3話「ラピュータ」となって、すでに完成していた第3話となる筈の「賢馬の国」の前に挿入された。『ガリヴァー旅行記』は、私憤から筆を起こしたのであったが、この出来事を機に公憤へと変わり、第3話の「ラピュータ」の挿入で、全4話となる『ガリヴァー旅行記』を完結する予定であった。『ガリヴァー旅行記』の構成は、第1話「小人国」では、現実のヨーロッパ社会の悪の政情を極端に微小化して顕わし、矮小化したミクロな悪業を諷刺することで、正常なサイズの国家における悪業を想像させた。第2話「巨人国」を巨大化して、悪業の入り込む余地のない、善業の国家のあるべき姿を示した。善業は善業のままであることで、このマクロな善業の国を、ミクロなヨーロッパ世界の悪業に満ちた政情の、反面教師として映し出したのである。マクロな王国のマクロな善業を映し出し、マクロの目を通して、より良い理想国家の存在することを描き出した。小人国に悪を、巨人国に善行を代表させ、善悪を大小の鏡面に写しかえ、その対比の中にみられる、あるべき善の世界を認識させようとした。たとえ如何なる悪業といえども、微小化することで、認識され難くなる反面、いかなる善業であっても、巨大化することで、微細な悪業も浮かび上がってくる。スウィフトはこの対比を踏まえて、現実社会の不合理を告発したのであった。物事の受け止めかたは、それぞれの文化や風俗習慣の相違によって、異なってしまうのは無理からぬことと認めた。それ故、第4話「賢馬の国」で、法律や文書による規制で国家を運営するのではなく、理性の命ずるままに行って、誤ることのない理想的な国家として、理性的な賢馬の支配する国を出現させた。この理想国家にも、本能の命じるままに行動する、姿形は人間に似たヤフーを、邪悪な野獣の姿として描き、理性的な賢馬と対比させた。理性的な馬が、非理性的ヤフーに君臨するという逆転を、この「第4話」で、地位の逆転

³¹³ “My greatest want here is of somebody qualified to censure and correct what I write”
(Swift, *The Correspondence III*, p.5)

という形で出現させた。この地位の逆転は、理性的であるべき人類を、ヤファーという醜悪な野獣の姿で示すという逆転で表わしたので。

ガリヴァーはやがてユートピア (Utopia) であるべき「賢馬の国」が、地獄郷 (Dystopia) であることに気が始めた。このユートピアの逆転を山内暁彦は、ユートピアとは似て異なる、逆ユートピア (Anti-Utopia) と受け止めている。³¹⁴ ガリヴァーも、理性だけすべてを律して、感性の入る余地の無い息苦しいまでの理性的国家に、理想郷を見いだせなかった。ユートピアの姿をしているが、実態は理想郷でない、地獄郷に等しい地であると感じたことが、彼を人間嫌いに導いたのであった。賢馬族は彼らの言語活動に関わりなく、理性によって、自らを律する存在であることを示すことで、理想国家のあるべき姿を示した。そのような「賢馬」に反して、咆哮を上げるヤファーの行動は、非理性的、俗悪な存在ではあるが、感性の存在は認めたのであった。彼の失望感が怒りとなり、その怒りが人間嫌いを誘発した。スウィフトはこの理想的な国家「賢馬の国」を描くことで、『ガリヴァー旅行記』は完結させるつもりであった。しかし、科学者と称する人々に対する失望と怒りが、諷刺という形をとって第3話「ラピュータ」の第5章、「ラガード学士院」で爆発したのであった。スウィフトの政治的立場は、1701年発行された「アテネとローマにおける貴族と平民館の紛争、論争の論議」(“A Discourse of the Contests and Dissensions Between the Nobles and the Commons in Athens and Rome”)に見られる、古いホイッグ党的思想を継承するものであった。腐敗した政府と軟弱な国王の下では、国民の不平不満は募るだけで、国家の利益を損なう結果となることを案じたのである。

スウィフトの記憶と意識の流れに沿っている『ガリヴァー旅行記』は、1708年から1715年の、ロンドン滞在中の経験をなぞったものであった。第1話「小人国」は、トーリー党とホイッグ党との関わりを論じている点で、当時のスウィフトの体験と符合している。第2話「巨人国」は、テンプル卿の許での感慨を綴ったもので、巨人王は卿であり、ガリヴァーの世話をしてくれた女官グラムダクリッチ (Glumdalclitch) は、ステラを指すのであろう。このムーアパーク滞在の期間、如何にスウィフトが心安らかでいたかが、第2話「巨人国」に映し出されている。スウィフトの自己確立の出来ていない、幼・青年期の、大人に対する敵愾心や、性衝動に対する不安感を暗示しているのであろうと、エーレンプライスも語っている。

『ガリヴァー旅行記』は多様な見方が出来る作品なのである。スウィフトはその各章において、ガリヴァーというペルソナにその身を託して、現実存在する善悪を対比する構成で論述している。善悪の対立構成によって読者の理解を高め、話題を多岐に展開することで、社会改良の一助になるよう、また、スウィフトの日ごろの主張を、理解して貰えるよう心掛けてもいるのである。その目的とするのは、党派や派閥の無い社会を希求して、国民の福祉の達成を求めるため、社会のあらゆる不合理や不都合の是正を心がけた論述と

³¹⁴ 山内暁彦「スウィフト、諷刺、〈擬似ユートピア〉：『ガリヴァー旅行記』」、徳島大学出版。

なっている。判事や弁護士の学識不足、また貴族や女性の教育にまでも論議は進み、美德や良識を備えた教養ある人々が、報われる道徳的善なる世になることを願っていた。何百もの社会的悪業や、倫理にもとる行為の是正と改善を求めて、『ガリヴァー旅行記』は出版されたのであった。とりわけスウィフトは、理性の命じるまま行動して、決して軌範を超えない「賢馬の国」を、理想の姿と見たのである。「賢馬の国」では、自分がヤフーの同族であることを忘れて、ガリヴァー船長のペルソナで語り、「賢馬とヤフーと、どちらが理性的な創造物と言うのであろうか」³¹⁵と問いかけた。彼の創造力と才知は輝きをまし、毒を含んだ諷刺は人の心を突き刺す。あらゆる対象に満遍無く痛烈にあたるので、すべての人の行動のみならず、諷刺された人の性格まで悪く見せてしまう。ある種の人たちにだけ、完璧な徳性を求めているのではなく、すべての人たちの中にある偉大なる善を、徳性の中に保持している人たちにも、完璧を求めているのであった。徳性はかくあるべきと求めているが、様々な誘惑に負けて、人間は策謀を図るようになり、道を外し、筋道を誤ってしまう姿を、ガリヴァーに語らせたのであった。

理性が万能である筈の「賢馬の国」が、ユートピアでないことに気付いたガリヴァーは、自分の梅毒罹患に思い及び、その怖れを書き連ねることで、不安から逃れようとしたのである。この執拗な梅毒に対する不安こそ、フロイドが精神分析で解明している、深層心理に押し込められている強迫観念を、抉り出すことで、強迫観念から脱け出せるとした、不安からの逃避による治療行為なのである。ガリヴァーは、この理想的国家にも梅毒の蔓延している事で、道徳社会でも、梅毒が治癒出来ないのではないかと、一抹の不安を覚えたのである。彼の梅毒への恐怖は、深層心理の底にまで存在していたことは、第6章で、ヤフーの雌の描写に見ることが出来る。

That, prostitute Female *Yahoos* acquired a certain Malady, which bred Rottenness in the Bones of those, who fell into their Embraces: That this and many other Diseases, were propagated from Father to Son; so that Numbers come into the World with complicated Maladies upon them: ³¹⁶

売春婦のヤフーはある種の疾病を持っている。その悪疾は骨を腐らせ、性交渉で罹病する。その他の多くの病気は、父親から息子に蔓延する。それ故、この病気は患者を増やし、世間に広まるのである。

不死人の描写には、梅毒罹患による精神障害が発現することを惧れているスウィフトの姿が見られる。『ガリヴァー旅行記』には、彼の全てが曝け出されているのであった。梅毒罹

³¹⁵ “as if these were Brutes, and those the rational Creature ?” (Swift, *Gulliver’s Travels*, p.xxxiv)

³¹⁶ Swift, *Gulliver’s Travels*, p.237.

患による、悪疾の発現は、ストラルドブラグにその怖れを語らせているが、あえて深入りをしないところに、彼の大きい関心と恐れが感じられる。結婚忌避の心情は、フィナムに種の保全を語らせて、彼自身の想いを代弁させているのであった。「友愛」と「博愛」は「賢馬の国」における2大美徳である。³¹⁷ スウィフトは、「友愛」と「博愛」を主張することで、両性間の性愛の存在を否定しようとしたのである。彼は梅毒罹患の末の、性愛不能を糊塗する目的で、ことさら友愛の存在を声高に主張したのであった。彼はこの第4話第8章で、結婚観を述べているが、彼の結婚観は、梅毒罹患により、結婚不適応となった事実を避けて語っているため、血統に拘り過ぎた論述となってしまっている。

この第4話になると、スウィフトの梅毒に関する知識は、深く正確なことがよく分かる。しかも、酒を飲み過ぎで前後不覚となり、消化能力が衰えた状況下で、売春婦と肉体交渉を行うと、梅毒に罹患しやすくなり、不幸な男性は、骨まで腐ってしまうばかりか、その病は父から子へと広まり、次第に複雑な病に侵され、その伝播力も強く、大勢の犠牲者が出ると、将来にわたる不幸の源泉であると語っている。彼は男性を不幸にするのは、女性はその仕掛け人であると認識していた。「好色」「媚態」「意地悪」「醜行」などは、女性が本能的に保持している特質であると考えていた。³¹⁸ その感慨が女性蔑視の元となっているのである。彼の精神障害に対する不安は、第3話「ラピュータ」第10章の、ストラルドブラグの描写に描き尽されている。梅毒による肉体的変化は熟知していたようであるが、精神障害については、狂気とはならないまでも、不死人の様に無気力、無意識状態にはなるだろうと、漫然とした恐怖は感じていたので、その姿を不死人として描いたのである。

In their Marriages they are exactly careful to chuse such Colours as will not Make any disagreeable Mixure in the Breed. *Strength* is chiefly valued in the Male; not upon the Account of Love, but to preserve the Race from degenerating: For, where a Female happens to excel in *Strength*, a Consort is chosen with regard to *Comeliness*, Courtship, Love, Presents, Joyntures, Settlements, have no Place in their Thoughts; or Terms whereby to express them in their Language. ³¹⁹

彼等は結婚に際して、血統の乱れを特に注意していた。好ましくない混血には注意していた。力は主として牡に価値を認め、愛の存在はどうしても良かった。種の退化には常に心を配っていた。雌馬が力に勝っているとしたら、配偶者には顔立ちがよく、上品な振る舞いの、愛に満ち、心穏やかな相手を選び、彼等の言葉で言う所の、考えの及ばない所に身を落ちつけさせた。

³¹⁷ Swift, *Gulliver's Travels*, p.252.

³¹⁸ Swift, *Gulliver's Travels*, p.248.

³¹⁹ Swift, *Gulliver's Travels*, pp.252-3.

「結婚において大事なことは、血統である」これは「賢馬族」の信条であるが、彼らにとって相手の毛並みが何より大切に、混血はもっとも忌み嫌うのであることであつた。彼らは毛並みに執着しており、類型的に雄はたくましさを求められ、雌では美貌が大切だと、日ごろのスウィフトの主張とは異なる見解を示している。子供に関しても、雌雄一頭ずつあればよく、血統の釣り合わない両親の間の子供は不要と言い捨てて、愛情から始まる結婚に否定的見解を示している。この様な記述にも、梅毒罹患の影響が強くあらわれ、彼の性格に深く染込んでいることがよく分かる。つまり、梅毒が子供にまで遺伝するという事実を踏まえての論述である。彼が売春婦の実態と、梅毒の病状に関する知識に、強い関心があつたことがこの例でも示されている。当時の啓蒙書籍には、梅毒は道德の廢頹によって蔓延し、梅毒以外の悪疾まで呼び込んでしまうのであるから、社会のあらゆる悪に対して、敢然として立ち向かわなくてはならないと記述している。梅毒撲滅のためには、道德が不可欠であると言う思想に、共鳴していたのである。そのため、あらゆる社会悪に立ち向かつて、これを是正しようとしたのであつた。その点からも、『ガリヴァー旅行記』は、スウィフトの思想をガリヴァーに語らせた作品なのである。読者の理解を深めるため、道德的社会の実現を達成できるであろう理想的政治社会も、善悪の対比構造の中で示したのである。次章政界と王室の章では、王室と政界の状況が善悪の対比の構図の中で綴られている。

第4章 政界と王室の姿

スウィフトが望み、ガリヴァーに語らせている道徳が律している理想社会とは、互いに協力し合って、私利私欲を捨て、公共の福祉を願うものであった。彼は『ガリヴァー旅行記』で、あるべき政情を描き、その実現を願ったのである。その目的を達成するため、イングランドの政情をありのまま描き、それに対比する、あるべき理想的国家の存在を描きだしたのである。スウィフトは「10分の1料減免請願」でホイッグ党と、トーリー党の間を走り回っていたので、当時のイングランドの実情を熟知していた。その現状を第1話「小人国」で描写したのであった。彼の信念は、王権は目的遂行のため、政治に助言と助力を行なう存在でなくてはならなかった。しかし現実には、互いに自分の党派の利益を中心に考え、彼の理念から遠く離れたものであった。国民全体の福祉には見向きもしなかった。そのような醜い現実を見るにつけて、諷刺の矛先は、政権を指導できない、弱体化した乱れた王権に及び、腐敗した政体に向かったのである。ガリヴァーは、18世紀の腐敗した社会構造を、『ガリヴァー旅行記』の第1話、「小人国」と第3話「ラピュータ」に映して、現実のイングランドの、愚かな政情の実態を諷刺した。第2話「巨人国」と、第4話「賢馬の国」では、それに対比する美德を備えた、優れた指導者の理想的な統治の姿を描いている。

スウィフトは愚かな政情の国家を描き、それに対比する理想的な統治国家を示すことで、理想的な社会の建設を求めたのである。理想的社会の実現が、梅毒治癒の良薬となるであろうことを、信じていたからであった。

スウィフトの理念は、この第2話「巨人国」と、第4話「賢馬の国」に集約されているのであった。第4話「賢馬の国」を、理性が律している理想国家と感じているガリヴァーは、この国の理念である「理性」と「友愛」掲げ、第8章で、節約、勤勉、清潔、肉体的鍛錬の必要性を説いて、第7章で、賢馬の主人にイングランド社会に欠けている特性の存在を批判させたのである。

That, he looked upon us as a Sort of Animals to whose Share, by what Accident he could not conjecture, some small Pittance of *Reason* had fallen Whereof we made no other Use than by its Assistance to aggravate our *natural* Corruptions, and to acquire new ones which Nature had not given us. ³²⁰

主人は人間をある種の動物と見做していた。どの様な出来事が発生するかによって少しばかりの理性が生まれつき持っているものを悪化させる程度の役にしかならないで、自然が我々に与えない新しい理性を手に入れようと図っていると考えていた。

³²⁰ Swift, *Gulliver's Travels*, p.242.

スウィフトは理性の存在で全てが正しく叶う国の対極にある、イングランドが徳性を備えた理性の力で、道徳的社会となることを求めたのである。『ガリヴァー旅行記』は、現実のイングランドの政界を忠実に写しながら、「小人国」の架空の物語として進めているのであった。

第1話「小人国」では、オックスフォード伯爵と、ボーリングブローク (Bolingbroke) 子爵の率いるトーリー党を、踵の高い党 (High Heel) と称し、ウオーポール政権下のホイッグ党を、踵の低い党 (Low Heel) で諷刺した。大きな端 (Big Endians) と小さい端 (Small Endians) で、卵を大きなほうの端から食べる人と、小さな端から食べる人と区別して、ローマン・カトリックと英国国教会の対立を暗示したのであろう。この第1話「小人国」のハイライトは第5章で、女王居室の火災をガリヴァーが、小便で消し止める場面であらう。この火災の件は、「スペイン継承戦争」(Spanish Scession War)³²¹ を、トーリー党政権の領袖たちが秘密裏に、「ユトレヒト条約」(“Treaty of Utrecht”)³²² を結んで、終結してしまったことの寓意であった。女王はガリヴァーの行為に立腹されて、以後この居室はご使用になられなかったとの記述は、オックスフォード伯爵の失脚を表していると考えられる。ガリヴァーが咄嗟の思い付きで、無作法ながら危急を救ったのであるが、この一節に、伯爵に対する女王の政治的、個人的な非難が具体的に表現されている。女王に対する伯爵の不作法で、礼儀知らずの行為は、1714年7月27日のエラスムス・ルイス(Erasumus Lewis)の書簡で知ることが出来る。³²³

第1話「小人国」は、立証できる現実の出来事が多く、心情的にトーリー党にくみしていた彼の、オックスフォード - ボリングブルック (Oxford-Boligbroke) 内閣の擁護が見られる。時系列的に、現実の状況を取り上げて、諷刺を潜ませて記述している。スウィフトの時代の政治の実態は、様々な資料から証明することが出来る。架空の旅の途次立ち寄った、未知の国における体験という体裁をとって、現実の姿を諷刺した構成に、政治の世界で名を成そうとして果たせなかったスウィフトの錯綜した心の葛藤が見られる。そのような諷刺による政治批判の点でも、『ガリヴァー旅行記』は諷刺文学の偉大なる傑作の一つと言える。

第1話「小人国」第6章は、1722-23年にかけてのジャコバイト(Jacobite)³²⁴ 陰謀を取り扱っている。この陰謀の首謀者の一人と目されていた、スウィフトの友人であったフランシス・アタベリー (Francis Atterbury)³²⁵ を折に触れて擁護している。第2話「巨人国」では、国王の巨大な姿に青春期のスウィフトに大きな影響を与えた、テンプル卿の偉大さを映し出したものである。この第2話「巨人国」は、奇抜な状況下におかれた主人公の、淡い恋

³²¹ Spanish Succession War (1701-14). An European War, provoked by the death of the Spanish King Charles II without issue, England, Holland and Austria alliance fought for Spain and France (E.B.)

³²² Treaty of Utrecht : 1713-4 に締結されたスペイン継承戦争の講和条約。

³²³ Swift, *The Correspondence II*, p.86.

³²⁴ Jacobite : Supporter of the deposed James II and his descendants.

³²⁵ Francis Atterbury (1663-1732). English ecclesiastic and controversialist. (*M. W. B. D.*)

あり、冒険物語ありで、ファンタジー旅物語の要素を含んでいる。

1702年6月20日、冒険旅行の誘惑に堪え切れなくなったガリヴァーは、僅か2ヶ月の家族団欒を振り切るように、冒険号 (*Adventure*) でユートピアを求めて再び旅立った。その途次、大暴風に見舞われ進路を失った一行は、水の補給のため立ち寄った島で、奇想天外な経験を積むことになる。船が進路を失うまでの記述は、ガリヴァーがやがて船長になる設定であろう。ガリヴァー船長の指揮下での旅の予告篇ともいべきこの章の記述は、緻密な描写で綴られている。島に立ち寄った瞬間から、物語は予想外の展開を見せ始める。その島の住人は、身長60フィートに及ぶ巨人で、一行は「巨人国」に立ち寄ってしまい、ガリヴァーは、仲間の水夫に島に置き去られてしまう。40フィートの高さに成長した麦畑、120フィートの高さの生け垣、階段は6フィートもの段差があった。その間を歩く巨人の歩幅は30フィートと、緻密に計算された描写で情景を描き出している。次から次へと繰り広げられる巨大な描写は、テンプル卿に擬した巨人国王の偉大さの伏線となっている。仲間に置き去られた件は、幼くして母親に見捨てられ、肉親の愛情も知らず育った彼自身の寓意であろう。農民の手に捉えられ、見世物となって巡業させられたガリヴァーは、やがて、王妃にその身柄を買い求められ、一転、安逸な生活を取り戻すこととなった。国王のもとに暮らした年月は、ムーアパークで、卿に身近く仕えた平穏な毎日の寓意である。巨人国で初めて知った女性の優しさは、女王の優しさと、グラムダクリッジの親切な対応に代表される。スウィフトは女王に、母親の温かさを見たのである。この第2話「巨人国」は、時代の出来事の諷刺に終始した第1話「小人国」とは様相を異にしている。「巨人国」では、ガリヴァーは国王に、イングランドの諸制度について説明をした後、国王の感想が述べられる。これはテンプル卿の理念を伝えることで、イングランド政府を諷刺したのである。第3章でガリヴァーは、イングランドの貿易、戦争、宗教、政党、教育等に関する説明をした。とりわけ、トーリー党やホイッグ党に対するガリヴァーの関与は、彼自身の重要関心事項でもあった。これらの記述は、スウィフト自身が、トーリー党とホイッグ党の勢力争いの谷間で、右往左往していた当時に対する寓意である。

卑小な英国の姿を国王に諷刺させ、闘い、論争し、騙し合い、裏切る風潮を批判したガリヴァーは、イングランドの現状を国王の口を借りて批判したのである。そこにはテンプル卿自身が味わった、苦い経験も反映しているのである。国王の批判は、イギリス議会の構成や宗教組織、裁判制度、教育にまで及んだ。これは全てスウィフトの諷刺であった。巨人王はイギリスの過去の歴史が、陰謀、偽善、反逆、背信、憎悪、悪意に満ちていることに、怒りを感じたのである。この一節もスウィフトの主張を、深くなぞったものである。あらゆる諷刺は、すべて現実のイギリスを対象にして、スウィフト自身の想いを綴っているのである。彼が蒙った、悪意に満ちた詐術に対する怨念なのである。その怨念のない世界を求めていることの、逆説なのであった。彼は、「スペイン継承戦争」を侵略戦争であると考え、そのための常備軍保持が、国民生活に重い税負担を強いていることを批判した。

All which, however happily tempered by the Laws of that Kingdom, have been sometimes violated by each of the three Parties; and have more than once occasioned Civil Wars, the last whereof was happily put an End to by this Prince's Grandfather in a general Composition; and the Militia then settled with common Consent hath been ever since kept in the strictest Duty. ³²⁶

王国の法律で、調節されたあらゆる事柄は、3 政党に依って、時には無視され、一度ならずも革命が起きた。最後の革命は、現国王の祖父による妥協の結果無事に収まった。その時以来、互いに厳密に条件を守っているのです、調和は崩れてはいない。

貴族の権力欲や国王の支配欲を明らかにして、国民が絶えず自由を欲している現実を突き付けた。³²⁷ 権力者たちのこのような病弊は、法律で抑制されてきているが、その抑制が利かなくなると、1642 年の「ピューリタン革命」³²⁸ のような内乱となって表面化するのである。その結果、アイルランドは革命の波に飲み込まれ、国民は塗炭の苦しみを味わい、その後の 10 数年にわたって苦しみを味わう結果となった。この惨状をもたらしたのは、宗教革命ではなく、権力者の土地支配と、金権支配欲の結果であった。ガリヴァーは巨人王国に「名誉革命」や、それに続く「王位継承法」成立への過程を説明して、ガリヴァー(スウィフト)の「ピューリタン革命」に対する見解を述べ、正義がどこに存在するか、疑問を投げかけた。

第 3 話「ラピュータ」では、第 4 章までは、当代の人物や出来事を取り扱っている。臣下が国王の耳を浮き袋で叩いて、注意を喚起する描写は、英語の判らないドイツから来た、ハノーヴァー朝ジョージ 1 世を諷刺したものである。ガリヴァーは、「ラピュータ」国を去り、バルニバービにあるラガード学士院に至るのであった。設立間もない「ロンドン王立科学院」(Royal Academy of London) を、このラガード研究所に擬して、学問の尊さ、化学、数学の重要性などを取り上げて論じているが、王立科学院の計画者たちの愚かな計画を示して、王立科学院を諷刺した。グラブダブリディブ (Glubbudubdrib) では、冥界の住人との会話で、体系的学説の虚しさを知り、ストラルドブラグで不死人と会う。人類が望んでいる不死の現実が、愚鈍と無気力に支配された、悲惨な人間の姿を見せつけた。この不死人の描写が、後にスウィフト後半生の予言と受け取られ、叔父ゴッドウィンの終末期の姿の描写と思われたのである。すべてはスウィフト一族の持つ宿命と受け取られ、晩年期のスウィフト

³²⁶ Swift, *Gulliver's Travels*, p.122.

³²⁷ "For, in the Course of many Ages they have been troubled with the same Disease, to which the whole Race of Mankind is Subject; the Nobility often contending for Power, the People for Liberty, and the King for absolute Dominion." (Swift, *Gulliver's Travels*, p.122)

³²⁸ The Puritan Revolution: 清教徒革命、大内乱 (the English Civil War) と称す。1642-49. Charles I が率いる国王軍と、議会軍との武力抗争。

の、病状の予言的描写となった。彼はこのストラルドブラグを不死人として描いたが、不老人として描かなかったのは、やがてわが身に訪れる老衰を、必然として受け止め、それに伴う愚鈍を恐れるあまり描かなかったのであろう。

「ラピュータ」はイングランド、リンダリノ(Lindalino)はダブリンもしくは、アイルランドを寓意しているのである。「ラピュータ」の削除された4節の表現は、『ドレイピア書簡』の表現より熾烈なもので、リンダリノの住民が、ラピュータ国王の命令に従わず、反乱を起こした場合、国王は浮島を空中に浮遊させて、太陽の光を遮り、国民生活を不能にするか、一気に浮島を下に落として、住民を押し潰すというものであった。この国王の発言に対して市民は、「市民は浮島を永遠に浮かび上がらなくし、国王とその従者を殺し政府を転覆する」³²⁹ という過激なものであった。この「国王を殺す」という表現が、過去の「内乱」(The English Civil War, 1642-46, 1648-52) 時を思い出させ、その表現が過激に過ぎるため、初版では削除されたのであった。至る所に鏤められた諷刺表現は、それだけ露骨で直接的表現であるため、容易に対象の人物や事件が推定できるものであった。この第3章は、露骨な表現で危険な諷刺で終始している。この削除された文中の、「市の中心の石」(“Rock that stands directly in the Center of the City”)は、明らかに、聖パトリック教会を指し、「4本の大きな塔」(“four large Tower”)が示すものは、枢密院(the Privy Council)、大陪審(the Grand Jury)、上下両院(the two Houses of Irish Parliament)である。第3章末の文は、1701年に制定され、1716年にその規定を国王が議会を説得して撤回した、「王位継承法」を踏まえているのである。音楽に対する造詣が深く、有名な鎮魂歌メサイア(Messiah)を作曲した、ヘンデル(George Frederic Handel, 1685-1759)を招聘した、ドイツ生まれの国王に対する諷刺は、国王が故郷ハノーヴァーへの旅行を重ねたことを取り上げて、「王位継承法」違反を唱えているので分かる。王国の基本法の一つである「王位継承法」によって、国王は勿論、妊娠中の妃と2人の息子は、国を離れることが禁止されていた。それにも拘らず、故郷のハノーヴァーに旅行したことを踏まえての諷刺である。第4章バルニバービの首都ラガードで、ガリヴァーは引退したマンドーディ(Munodi)卿に出会った。1717年、罪を許されて田舎に隠棲してしまった、オックスフォード伯爵を重ねて見ることが出来る。伯爵の特赦に、トーリー党復権の兆しを感じたスウィフトは、この章の表現を柔らかなものとしている。この様に、現実の現在の姿と、想像上の旅の描写が、『ガリヴァー旅行記』の、ファンタジーとしての効果を高めているのである。第3話の旅から無事母国に帰国を果たしたガリヴァーは、我が家で5ヶ月過ごただけで、最後の航海に出ることとなった。この航海で、ガリヴァー船長は反乱に遭遇し、馬の支配する国へ遺棄されることとなる。この第4話「賢馬の国」をオレリー卿は、次のように語っている。

In this last part of his imaginary travels. SWIFT has indulged a misanthropy

³²⁹ “the Citizens were determined to fix it for ever, to kill the King and al hi Servants, and entirely change the Government.” (Swift, *Gulliver’s Travels*, p.294)

that is intolerable. The representation which he has given us of human nature, must terrify, and even debase the mind of the reader who views it. His sallies of wit and humour lose all their force, nothing remaining but a melancholy, and disagreeable impression: and, as I have said to you, on other parts of his works, we are disgusted, not entertained; we are shocked, not instructed by the fable. I should therefore chuse to take no notice of his YAHOOs, did I not think it necessary to assert the dignity of human nature, and thereby, in some measure, to pay my duty to the great author of our species, who has created us in a very fearful, and a very wonderful manner.³³⁰

この空想上の旅の最後のところで、スウィフトは我慢できないほどの人間嫌いになった。彼が我々に見せて呉れた人間性が我々を恐れさせ、読者の人間性までも卑しいものにしてしまう。彼の機知やユーモアに富んだ会話は失われ、残されたものは、深いもの想いと、気分の悪さだけであった。私が言っているように、彼の他の作品についても、我々はこれを読んで楽しんだのではなく、この物語で教訓を受けたのでもなく、うんざりし、ショックを受けたのである。それ故私は、ヤフーには注目しないし、人間性の尊厳などは言い張る必要は感じない。したがって、人類の偉大な著者に、この恐ろしく素敵なやり方で、物語を送ってくれたことを御礼申し上げる。

スウィフトが第4話「賢馬の国」で我々に示した、理想郷についてのオレリー卿の感慨は、彼の鋭い機知や優しい気質は姿を消し、残るは物哀しさと、不愉快な卑しいものにしてしまう。気分だけで、読んでいて面白くなく、嫌悪感だけが残るというものであった。『ガリヴァー旅行記』を書き始めた当初は、スクリブルス・クラブの『回想録』の記述をなぞって、当代の行政府や国民を諷刺する、善悪の均整のとれた作品に仕上げるつもりだった。しかしながら、次から次へと発生する問題に、人類が歴史から何も学ばないと知って、もはや人類に期待することの無駄を悟ったのである。自分が蒙った過去の数々の背信行為が、相変わらず行われ、少しも改善されない現実に、彼の心情は次第に人間嫌いに傾斜していった。それ故、第4話「賢馬の国」はユーモアの欠片も見られぬ、厳しい諷刺で終始している。しかしながら、スウィフトの脳裏に深く刻み込まれた梅毒という悪疾が、記憶の底から浮かび上がってくるのを抑え込むことは困難であった。そのため理想的国家である「賢馬の国」にも、売春婦の存在は見られ、梅毒による障害が語られているのである。全ては梅毒による精神異常になるのではないかとの、強迫観念を緩和したいがための記述なのである。スウィフトは現実の汚辱にまみれ腐敗した社会と、その対極にある理性による政治、社会改造が実現している理想国家として「賢馬の国」を描くことで、あるべき道

³³⁰ Orrery, *Remarks*, p.215.

徳的社会的姿を示したのである。道徳社会の実現が、梅毒治療に役立つと信じていたのだが、「賢馬の国」ですらイングランドと同然の、悪行の存在する国家であることを気付かされてしまった。そのためこの「賢馬の国」でも希望を見出せなくなったのだ。彼が永住すら考えていたこの「賢馬の国」ですら、ヤフーの如き非理性的生物の存在があり、ヤフーの存在を容認している「賢馬の国」に失望した揚句、ガリヴァーがイングランドへの強制送還の羽目になったのを知って、故国イングランドに向け脱出することを決意したのである。「賢馬の国」滞在にも拘らず、梅毒が彼の脳裏から一時も離れず、やがて襲うであろう神経障害の病状が、顕在化するのではないかとの恐怖も、少しも去らず、強迫観念から逃れることは出来なかった。やがてこの強迫観念が彼を更に「人間嫌い」へと導くことになるのである。

第5章 スウィフトの人間嫌いの萌芽

「賢馬の国」の滞在が長期化するにつれて、ガリヴァーとスウィフトは、同調し始めて来た。スウィフトは、非理性的存在である梅毒がやがて齎すであろう罹患の行く末に不安を感じていたが、心地よい理性の支配する国（道徳的社会）で、梅毒も治癒するのではとの希望が生まれ、梅毒が齎す結果の精神障害の存在も、束の間忘れていた。しかし、理性万能の社会に全体主義の匂いを感じ、差別や背信といった非理性的存在もあるのではなかろうかとの不安を感じ、梅毒が齎す精神障害の恐ろしさに思い至り、人間嫌いに傾斜していった。理性の命ずるままに行動することで、常に正しい結果を生む筈の「賢馬の国」では、人間は非理性的存在として認識されていたので、次第にこの国にいるヤフーの如き非理性的人間を嫌いになっていった。梅毒こそ非理性的存在であり、梅毒患者は非理性的存在の最大のもと感じ、自己嫌悪に陥ったのである。加えて、イングランドで浴びせられた様々な差別や、理不尽な対応が非理性的であると思い、その想いが更に人間嫌いに拍車をかけたのであった。理性の存在に全てを委ねてしまっている「賢馬の国」に、むなしさを感じ取ったのも一因であった。彼の人間嫌いの根源が、日常生活の中で蒙った、様々な差別や背信を引き起こした非理性的存在に起因していたのである。³³¹

しかし、スウィフトの人間嫌いは、タイモン (Timon) の如く、富に群がってきた友人達が、富を消費尽くしてしまった後、手のひらを返すように、ことごとく去ってしまったことで人間嫌いになったのではなく、彼の誠実な対応に対する、数々の背信行為が、彼を人間嫌いにさせたのであり、梅毒罹患が、彼自身を人々から遠ざけたのである。正直な人々で世の中が満ち溢れるまでは心の平和は訪れないと、梅毒による精神異常の恐れを、ガリヴァーに託して語らせ、自分の不安を『ガリヴァー旅行記』の結末に結び付けたのである。

スウィフトは、「賢馬の国」が理性的な生物の国であるのに反して、「ヤフーが非理性的動物であることに怒り、ヤフーと同類である人間を嫌いになった」³³² と考えたポーブは、スウィフトの人間嫌いにふれた書簡の中で、ヤフーに対する理性の定義を変えるように忠告している。シェイクスピア (Shakespeare) は戯曲『アテネのタイモン』の中で、人間嫌いとなったタイモン (Timon) は、墓碑銘を「ここに不滅の魂を失いし、哀れな亡骸が眠る。その名を訪ねること無かれ！疫病よ、生き残れる人非人どもを滅ぼし尽くし、一人も逃すこと無かれ。われタイモンは、ここに在りて、生き残れるものたちを憎み、一人も余さず、

³³¹ “I have ever hated all Nations professions and Communities and all my love is Towards individualls for instance I hate the tribe of Lawyers, but I have ever hated all Nations professions and Commuities and all my love is towards individuals for instance I hate the tribe of Lawyers,” (Swift, *The Correspondence III*. p.103)

³³² “I tell you after all that I do not hate Mankind, it is vous autres who hate them Because you would have them reasonable Animals, and are Angry for being Disappointed”(Swift, *The Correspondence III*. p.118)

呪いで満たし、滅ぼし尽くす」³³³ と恨みの限りを4行詩で綴って、洞窟に隠棲してしまった結末を描いている。ポーブはスウィフトが人間嫌いとなって、タイモンのように理性までも失ってしまうことを恐れたのであった。

第4話「賢馬の国」では、賢馬とヤフーを対比させて、いずれが善で、いずれが悪かを問いかけ、理性のまま行動して途を誤ることのない賢馬族に、善性を見たのであった。賢馬族が善なる実在であるとするならば、果たしてヤフーは悪徳の化身なのかと問いかけている。第1章のヤフーとの遭遇の描写は、その悪意に満ちた描写で我々を驚かす。本能のまま生活し、理性の欠片も見られぬ野獣に等しい生物として、ヤフーを描くことで、スウィフトに加えられた数々の背信と、忘恩の行為への積年の思いを明らかにしたのであった。その悪意に満ちた描写に、彼の怨念の深さを知ることが出来る。全身を毛に覆われたヤフーは、人間に似ているが、動物の如く本能の命ずるままに行動する。その立ち居振る舞いは、人間とは別種の動物であると、ガリヴァーも軽蔑している。「この国では馬が支配者で、人間が獣であるという、地位を逆転させている想念は、イギリス人には受け入れ難い」³³⁴ とガリヴァーに感慨を述べさせている。「賢馬族」と「ヤフー族」との地位の逆転を、ガリヴァーは是認しているのである。彼は自分に加えられた侮辱の数々は、理性的行為とは考えられないと、非理性的行為をしたイングランドに、ヤフーの存在を見たのであった。スコットはこの地位の逆転を恥ずべきものと非難している。³³⁵

オレリー卿もまた、スコット同様「賢馬の国」渡航記を最悪の作品で、『ガリヴァー旅行記』中、最も恥ずべき部分であると評している。スウィフトが延々と人類の恥を曝し、その悪行を人類独自の特性だと記述して、人類の品位を失墜させたのは、「人類の悪行は生来のものであると認め、その行為を止むを得ないと認めたらうで、墮落している人類を矯正しようとしたのであろう」と語っている。あまりにもひどすぎる悪行を和らげ、理性にもとづく行動に導こうとしているが、その意図は達せられないであろうとまで言い切り、この作品をあまり評価していない。スコットはヤフー族に対立する、賢馬族の資質の優れている様は称赞している。この賢馬族たちの一挙手一投足は、合理的で整然としているだけでなく、鋭敏で思慮分別に富んでいる。ヤフーと姿形の似ているガリヴァーを見て、魔法にかけられたかのように動けずにいる「賢馬」の姿に、人間にない優れた資質のきらめきを見ていた。このような生物が支配する、「賢馬の国」に漂着したガリヴァー船長は、こ

³³³ “Here lies a wretched corpse, of wretched soul bereft: Seek not name: a plague onsume you wicked caitiffs left Here lie I, Timon; who, alive, all living men did hate: Pass by, and curse thy fill; but pass, and stay not here by gait.” (*The Complete Works of William Shakespeare*, Tally Hall Press 1911, p.771) 『シェクスピア全集』小田島雄志訳、白水社、1986年、161頁。

³³⁴ ...“our Countrymen would hardly think it probable that a *Houyhnhnm* should be the presiding Creature of a nation, and rendering reformation from a state of such base depravity a task too desperateto be attempted. Yahoos the Brute.”(Swift, *Gulliver’s Travels*, p.233)

³³⁵ ...“and which, if admitted, would justify or palliate the worst vices, by exhibiting them as natural attributes” (Kathleen Williams, *Swift, the Critical Heritage*, p.312)

の国に政治的な理想国家を見たのである。道徳観念が強いこの国の「賢馬族」は、理性の命ずるままに行動しさえすれば、常に正しく、正義に適う国家の住人である。この国の対極にある国として、イングランドの法律家を取り上げ諷刺したのであった。「賢馬の国」第5章でも、1721年ポープに送った書簡で綴った感慨の数々が繰り返されている。

And having been byassed all their Lives against Truth, and Equity, lie under such a fatal Necessity of favouring Fraud, Perjury and Oppression; that I have known some of them to have refused a large Bribe from the Side where Justice lay, rather than injure the *Faculty*, by doing any thing unbecoming their Nature or their Office.³³⁶

そして、長きにわたり真実と公正に偏見をもってきたために、彼らはどうしても詐欺、偽証、圧力に味方をしてしまう。彼らの中には、正義の側から、高額な賄賂を拒んだ者がいたのを私は知っている。自分の本性や職務に似つかわしくないことをして、*疵*に傷をつけることはなかったのだ。

法曹家たちが信奉している処世訓は、「過去の誤った判例でも、何度か繰り返せば、それが真実となる。誤った判例を再び繰り返しても違法ではない」³³⁷と、正邪の評価の逆転を取り上げ諷刺した。公共の正義や普遍的な理性に反することでも、不正な弁論を正当化できるイギリスの法体系を、理性が通じない法律形態として痛烈に諷刺している。「賢馬の国」は、理性がすべての動物的欲求を抑制できると信じているので、理性の命ずるままに行動すれば、正義が容易に行われる国なのであった。イングランドの指導者を、この国の指導者と比較したとき、そのあまりの落差に驚嘆のあまり、ガリヴァーはますます望郷の念を失ってしまい、人間嫌いが高じていったのである。イングランドの指導者達は、喜びや悲しみ、愛情や憎悪、憐れみや怒りといった人間的感情に欠けている。彼らが情熱を燃やし、飽くなき欲望を示すのは、富と権力と肩書に対してだけである。彼らは本心を明かす発言はしないが、真実を語る時は、相手に嘘だと思わせ、真実と思わせようとするときには嘘を語るのである。このような感慨は、彼自身が蒙った体験に由来しているのである。その経験から、イングランドの指導者は、理性を持ってはいないと断じた。理性的な「賢馬の国」で生活していたガリヴァーにとって、理性のかけらも見られぬヤファーや、ヤファーに似た人間に対する嫌悪感は、募るばかりとなっていた。

³³⁶ Swift, *Gulliver's Travels*, p.233.

³³⁷ "IT is a Maxim among these Lawyers, that whatever hath been done before, may legally be done again: And therefore they take special Care to record all the Decisions formerly made against common Justice and general Reason of Mankind." (Swift, *Gulliver's Travels*, p.233)

..., *Yahoo* in Shape and Disposition, perhaps a little more civilized, and Qualified with the Gift of Speech; but making no other Use of Reason, than to improve and multiply those Vices, whereof their Brethren in this Country had only the Share that Nature allotted them.³³⁸

姿形も気質もヤフーだが、若干洗練され、会話の能力を授かっているが、これ等の悪徳を増大させ、改善させる以外に理性を用いられない。それだから、この国の仲間は、自然が彼等に分け与えた役割以上のことは、出来ないのである。

賢馬族のヤフー（ガリヴァー）に対する評価は、彼が生来の悪徳を増大し、凶悪化するのに理性が役立っているだけであると非難して、ガリヴァーの持つ、非理性的な悪徳の数々を数え上げて追放を命じた。ガリヴァーは、貪欲なくせに仕事嫌いなこの国のヤフーに、イングランドの同胞の姿を重ねて、同じ姿形の自分の行く末に思ったり、人間嫌いに陥ってしまっていた。そのガリヴァーが、国外追放を甘んじて受諾したのは、若い牝ヤフーに水浴中抱きつかれたことによったのである。³³⁹ 理性的存在と自負していたガリヴァーが、裸になったとたん、牝ヤフーの欲望の対象となってしまったことで、ヤフーとの差異がたった布切れ一枚であることで、人間の理性の儂さを悟ったのであった。裸の存在である「賢馬族」は、裸でいても理性的存在であるが、人間は衣服の力を借りなくては、理性的存在とはなりえないことを認識したからであった。これは理性的と称する人間に対する、強烈な諷刺である。もはや、この国に滞在することを認められず、処分されそうになったガリヴァーは、この国を脱出することとなった。無事恙無く、航海してイングランドに到着したガリヴァーは、極端な人間不信に陥ってしまっており、人間の体臭にまで、嫌悪感を示すほどになっていた。この嫌悪感は、「賢馬の国」滞在中、次第に醸成されていったヤフーに対する嫌悪感であった。

第4章で、人間の気質を論じた折、人間に特有な資質として嘘の存在を論じたが、賢馬族を、偽りの表現に対してはある程度の理解は出来るが、意識的な表現としての嘘の概念には、理解を示せない生物として描いている。そして賢馬族を純朴で、純粋な気質の持ち主として、好感を持って描写している。³⁴⁰ 青春期に多くの嘘に踊らされ、人を信じる事が出来なくなっていたスウィフトにとって、その胸中に色濃く残っているテンプル卿の善なる徳性を、賢馬族に映したのである。常に理性的であった卿が持つ理性に対する概念を、ガリヴァーは次のように語っている。

³³⁸ Swift, *Gulliver's Travels*, p.262.

³³⁹ "It happened that a young Female *Yahoo* standing behind a Bank, saw the whole Proceeding, and inflamed by Desire,"(Swift, *Gulliver's Travels*, p.250)

³⁴⁰ "having Occasion to talk of *Lying*, and *false Representation*, it was with much Difficulty that he comprehended what I meant."(Swift, *Gulliver's Travels*, p.224)

So that supposing us to have the Gift of Reason, he could not see how it Were possible to cure that natural Antipathy which every Creature discovered against us; nor consequently, how we could tame and render them serviceable.³⁴¹

理性と言う贈り物を貰ったとすれば、あらゆる生物が我々に示す自然な反感を改善出来る筈であるが、どうしたら彼等を飼いならし、敬意を示させられるであろうか。

理性という贈り物は、あらゆる動物たちが示す反感を、解消することができる先天的な能力である。理性で動物たちを飼い馴らして、自由に出来るのである。理性を天与の才能と考え、「問題処理は理性の命ずるままに行えば解決出来る筈で、解決出来ないのは、人間に理性を統治する能力がないのである」との警告である。「賢馬族」に対する賛辞はさらに続く。「賢馬族」達は、生まれつき理性という美德を与えられているので、理性的生物である「賢馬族」には、悪徳の存在は考えられないのだ。彼らの信念ともなっている格言は、「理性を涵養せよ、理性の命ずるままに行動せよ」³⁴²であった。「賢馬族」にとって、理性のまま行動することは、さしたる問題ではない。しかし、理性が情念や利得によって曖昧なものにもならず、退色もしないので、どのような行動であれ、彼らの行動は理性的であるとガリヴァーは称賛している。「賢馬族」にとって、命題について論争したり、討論したりすること自体が、非理性的であり、悪なのであった。ガリヴァーは、自分を理性的存在であると考えていたので、「賢馬族」の鏡に、どのように映っていたのかを探し求めた。「賢馬族」はガリヴァーを「自然が与えてくれた、僅かばかりの理性を手放して、生来持っていた悪徳を増大させ、自らを墮落させる妙なものを考案し、人生を無駄に費やしている存在」³⁴³とみていた。それゆえ、危険な存在として、国外追放を命じられたのであった。理性という尺度で、イギリスの政治や法律制度を考えると、理性的な動物を律するには、理性だけで十分な筈である。「徳性に欠陥が生じているとするならば、そこには何らかの、非理性的存在が介在しているからに他ならない。」とイギリスの法体系を痛烈に批判した。「賢馬族」の法体系も、「友愛と博愛」で律していると賞賛した。³⁴⁴ 彼らは「嗜み」と「礼儀正しさ」を非常に大切にすが、決して形式張らない。このような態度こそが「友愛と博愛」の精神であり、それがヤフーには最も不足していることを「賢馬族」に語らせた。ガリヴァーと同調しているスウィフトは、「賢馬の国」の理念を語ることで、性愛を拒否している自分の友愛の主張を、弁護したのであった。理想郷の如きこの国の居心地の良さに魅了され、悪徳の巣窟ともいべきイングランドの、同胞の許に戻らなくてはならなくな

³⁴¹ Swift, *Gulliver's Travels*, p.227.

³⁴² “so their grand Maxim is, to cultivate *Reason*, and to be wholly governed by it.”
(Swift, *Gulliver's Travels*, p.251)

³⁴³ Swift, *Gulliver's Travels*, p.243.

³⁴⁴ “FRIENDSHIP and *Benevolence* are the two principal Virtues among the *Houyhnhnms*; and these not confined to particular Objects, but universal to the whole Race.” (Swift, *Gulliver's Travels*, p.252)

ったガリヴァーは、人間不信が高じてもう帰りたくないとまで叫んでいる。この叫びは梅毒に罹患した地への帰国拒否であり、梅毒罹患による精神障害の発現への恐れの表明なのである。

この「賢馬の国」の滞在は1年に満たないが、住民に対する愛情と、尊敬の念が募って、人間世界に戻りたくないと思心した。「私の残りの人生を、悪徳への誘いの無い、あらゆる美德を實踐し、瞑想の内に自らを律している、「賢馬の国」で過ごしたい」との想いが募り始めた。スウィフトにとって、この「賢馬の国」こそ、自分を受け入れ、優しく心を癒してくれる国であると考えていた。理性的な動物「賢馬族」が、非理性的人類「ヤフー」を支配するという逆転こそ、スウィフトの、人類に対する最大の諷刺であった。ヤフーこそはこの世で一番醜く、不潔な動物であり、彼らは反抗的で扱い難く、有害で残酷、悪意に満ちた動物である。このようなヤフーで充満しているイングランドに帰国したくないのも、もっともであると思わせたのである。ヤフーこそが、スウィフトに梅毒を感染させた張本人なのである。彼にとって非理性的存在であるヤフーは、売春婦であり、梅毒の病原菌そのものが、彼にとって非理性的存在であると感じていたのである。それ故ヤフーを悪しざまに面罵したのである。理性で全てを統治する賢馬の国の、美德に満ちた治世の対極にあるイングランドの同胞に対して、ガリヴァーは嫌悪感を示してはいない。そればかりか、賢馬の主人が、人類に対して負の評価を加えた折、弁解して、人類擁護の立場を貫いている。賢馬の主人が指摘した、人類の欠点である虚偽や欺瞞に嫌悪を示してはいるが、真実のためには、何を犠牲にしてもよいと考えるようになっていた。欠点を多く持つ人間、とりわけイングランド人に対する悪口は、決して口にしなかった。そればかりか、人間が時折示す癩癩に関しても、同胞に対するエコ最良もあって言及しなかった。³⁴⁵ このようにガリヴァーは、理性一辺倒の賢馬の国で生活したため、非理性的な人間が嫌いになったのではなく、非理性的存在であるヤフーが嫌いになっただけなのであった。彼はイングランドで自分に加えられた仕打ちを思い出して、人間嫌いが高じただけであった。理性が全てである賢馬の国こそ、悪徳が存在しない理想郷であるが、「悪徳の存在のない理性的な国家が、はたして理想郷なのだろうか」という疑問が生じ始めた。

スコットは、第4話「賢馬の国」の記述を取り上げ、「スウィフトが苛まれたのであろう受難の数々を、この章で記述したのであろう」³⁴⁶ とスウィフトの心境を推量している。墓碑銘ともいふべき、この作品に刻んだ痛烈な非難や、猛々しい怒りは、スウィフトの心に絶え間無い痛みを与えた人々の、悪徳に満ちた所業の数々の記録であると、同情的感慨を漏らしている。オレリー卿の『ガリヴァー旅行記』に寄せる感慨は否定的で、「賢馬の国」

³⁴⁵ “To this I was silent out of Partiality to my own kind...”(Swift, *Gulliver's Travels*, p.248)

³⁴⁶ “To source of such a diatribe against hunman nature could only be, that fierce Indignation which he has described in his epitaph He concedes that as so long Gnawing his heart.”(Scott, *Memoirs*,p.298)

の描写は、「人を惹き付けるものでも、楽しませるものでもない」³⁴⁷というものであった。この様に読者の評価が分かれるのは、スウィフトが生来の諷刺家であるとの立場で評価した人と、梅毒罹患によって生来の性格が変わったと受け取る人の立場の、差異にあるのである。オレリー卿やスコットは、青春期に性格に変化が生じたとの立場をとっているのである。この両者は、スウィフトが梅毒であったか否か確信はなかったが、疑惑は感じていたのである。

スウィフトは誕生日になるとよく、聖書の「ヨブ記」(“The Book of Job”) 第3章を読み上げたと伝えられている。苦難に満ちた生涯を送ったヨブに、自分を重ねて誕生日を呪ったのであろうか。それとも、自分の人生を、不幸の連続と感じていただけだろうか。

After this opened Job his mouth, and cursed his day.

And Job spake, and said, Let the day perish, wherein I was borne, and the night in which it was said, There is a man child conceived.

Let that day be darkness; let not God regard it from above, Neither let the light shine upon it. Let darkness and the shadow of death stain it; let a cloud dwell upon it; let the blackness of the day terrify it. (*Job*; 3;1~5)³⁴⁸

ヨブはこの日を呪って、口をあけるとよく叫んだ。

我が生まれし日よ消え去れ、男の子供を身ごもった夜よ。

その日が暗闇に包まれたままであれ、

神よ光を当て給うなかれ。明るく光りを輝かせたもうな。

この日を暗闇と死の影で汚したまえ。

暗雲が影を落とし、暗闇にその日を恐れさせ給え。(ヨブ記 3;1~5)

ヨブは光に何を見ていたのであろうか。1495年頃、突如として発生した梅毒は、その起源も病因も不明のまま、広く伝播して国民を恐怖の淵に沈めた。フランスのシャルル8世のヨーロッパ侵攻と時を同じくし、ナポリ公国占領時における傭兵に多く発現したことから、フランス病とも、ナポリ病とも称されたこの病気の起源は、不明のまま、ヨーロッパ諸国は、隣国の名をつけてその責任を退けたため、様々に呼ばれていた。18世紀にフランスの、ジャン・アストリック (Jean Astolic) によって、「最終的な証拠として、梅毒(梅毒を当時の医師はこの様に称していた)が出現した時代の、医師の証拠能力の重みを引き合いに出すのであろう」と結論付けられて、15世紀最後の時期に、梅毒がヨーロッパに持

³⁴⁷ ...“to correct vice, by showing her deformity in opposition to the beauty of virtue, and to amend the false systems of philosophy...”(Kathleen Williams, *Swift, The Critical Heritage*, p.15)

³⁴⁸ *The Holy Bible* containing the Old and New Testaments. Set forth in 1611. American Bible Society instituted in the year 1816, New York, p.498.

ち込まれたと証言された。当時この起源説は様々あって、その主要な説に、コロンブスによって新大陸から持ち込まれたとするアメリカ起源説と、「旧約聖書」以来、存在していたという在来説があった。ルイ 14 世 (Louis XIV) の治世の初期に、パリ大学医学部長を務めたギー・パタン(Guy Patan, 1602-1672) は、「旧約聖書」のダヴィデ(David)、ソロモン(Solomon)や、ヨブが性病を患ったと断言していた。彼の考えでは、ヒポクラテス(Hippokrates, BC. 460-375)がこの病気を記述し、ヘロドトス(Herodotos) ゼノン(Xenon)及び、エウリピデス (Euripides)にも言及し、インド諸島の癩病や、ホラティウス(Quintus Horatius Flaccus, BC. 65-8)の語るカンパニア地方の病気を、この梅毒と同一視してしまい、結論を出したのであった。³⁴⁹ ジャン・アストリック (Jean Astruc) の説は、1494 年、コロンブスによってヨーロッパに持ち込まれ、急速に伝播し、その伝染を媒介したのは、慰安婦たちであったというものであった。この様に梅毒伝播の経路に、諸説入り混じっていたのであった。17 世紀になると、梅毒伝播の力は若干衰え、治療法は確立されてはいなかったが、次第に梅毒の姿が消えて行ったのも事実であった。スウィフトはこれらの状況から、顕著な症状が現れないこともあって、自分の病気がヨブに起源するのではあるまいかと信じて、誕生日になるとこの詩編を唱えたのであろう。彼の梅毒に対する恐れは、想像以上のものであることが、この事からも想像できる。ガリヴァー (スウィフト) はこの恐れを抱いたまま、人間性の本質について描写したので、我々人間を恐れさせ、人間の品位を貶めさえするのは当然と言える。

「賢馬の国」第 7 章において、賢馬の主人から「牝ヤファーに備わっている好色や媚態、意地悪やスキャンダルなどは、人類共通の特性である」³⁵⁰と指摘され、返答に窮した姿勢には、人間嫌いの兆候は見られない。賢馬の主人にとって、不自然と思われるヤファーの雄が示すヒステリー症状や、牝の情欲は、地球上では人間独特の性情で、全ては技巧と理性が生み出す産物なのであると弁解している。この姿勢からも、ガリヴァーは決して人間が嫌いになったのではない。オレリー卿は、スウィフトの持つ人間的な情緒は失われ、残されたものは、憂鬱で不愉快な読後の印象だけであると、スコットと同様の否定的感慨を漏らしている。彼の人間嫌いの性向を、ジョージ・オーウェル(George Orwell, 1903-1950) は、次のように語っている。

In Part IV he conceives a horror of the human race which is not apparent, Or only intermittently apparent, in the earlier books, and changes into a sort of unreligious anchorite whose one desire is to live in some desolate spot where he can devote himself to meditating on the goodness of the Houyhnhnms. ³⁵¹

³⁴⁹ クロード・ケテル、『梅毒の歴史』、寺田光徳訳、藤原書店、63 頁。

³⁵⁰ “However, I could not reflect without some Amazement, and much Sorrow, that the Rudiments of *Lewdness, Coquetry, Censure, and Scandal*, should have Place by Instinct in Womankind.” (Swift, *Gulliver’s Travels*, p.248)

³⁵¹ George Orwell, *Collected Essays, Journalism and Letters 4*, Penguin Books. p.242.

第4部で、人類の恐怖について、はっきりでは無いが、時折最初の書籍の中では、時々想像している。そして、宗教とは無関係の世捨て人に姿を変えて、そこは彼が賢馬の善良さの中で、癒しを求めている場所である。

オーウェルは『ガリヴァー旅行記』の前半部分にも見え隠れしていた、人間性が持つある種の憎悪の存在を認めていたが、この第4話「賢馬の国」で、その憎悪を、「賢馬族の持つ美德の力で善に転化し、荒涼の地にわが身を捧げ、世捨て人の生涯に、我が身を託そうとしている」と、ガリヴァーの心境を推し測って同情している。果たしてガリヴァーは賢馬族に心酔し、ヤフーに対して憎悪を燃やしていたのであろうか。ガリヴァーのヤフーに対する憎悪は、理想的な肢体を持ち、価値ある存在と考えていた自分と、同一の形態ではあるが、汚濁にまみれた獣のごときヤフーの異形さに辟易し、強い嫌悪感を覚えたのだった。³⁵² ガリヴァーは、そのようなヤフーの存在を許している「賢馬の国」に、理想郷を見出すことが出来なかったのである。彼は理性が全ての「賢馬の国」にあって、本能の赴くまま、自由気ままに、悪逆の限り振舞っているヤフーの存在を認めているこの国に、理想郷の姿が見られぬことに気付いた。

ガリヴァーは、プロブディンナングの将軍たちが、頹廢的な風潮に流され、如何に駄目になってしまったかを見て、暗澹たる気分になり、人類の将来に悲觀的感慨を抱く。このガリヴァーの感慨は、スウィフト自身の想いであった。彼は、梅毒罹患による将来像が、不死人ストラルドブラグの様な状況となることを思い描いた時、暗たんたる気持ちになり、将来に希望の光を失って人間嫌いが募ったのである。自分の来るべき人生が、この様になるのではと恐れるあまり、人類全般の将来にも希望が見いだせなくなったので、次第に人間不信に陥ってしまったのである。彼の人間嫌いは、なるべくしてなった当然の帰着であったといえる。

³⁵² “I never behold in all my Travels, so disagreeable an Animal, nor one against which I naturally conceived so strong an Antipathy.” (George Orwell, *The Corrected Essays*, p.208)

第6章 終章 ヒエラルキーの倒置

スウィフトは第4話「賢馬の国」で、旧約聖書以来のキリスト教的世界観である、「全ての生物に君臨する人類」の姿を、逆転させて示して、人類の将来に警鐘を鳴らした。この「ヒエラルキーの逆転」³⁵³の着想を得たスウィフトは、自分の梅毒罹患の果ての精神異常に思い至ったのであった。精神異常の恐怖におびえながらの年月であったが、その恐怖が実現してしまったのではないかと、愕然としたのである。この様な奇想な発想を、天才的才能の成果と誇る気持ちもあったが、反面、狂気の末と恐れたのでもある。彼は一時も早く道徳社会の実現を願ったに違いない。梅毒治癒のためには、理性で全てを統治する理想的社会の到来を願ったのだが、この国にも非理性的なヤフーの存在を許している現実、この「賢馬の国」にも理想的国家の姿が見られないと思い始め、非理性的なヤフーに嫌悪感を示し、やがてスウィフトは人間嫌いの傾向を強めて行ったのである。その結果が、ヒエラルキーの逆転となったのであり、これこそ、西欧キリスト教社会に対する強烈な諷刺であった。³⁵⁴

フランス科学アカデミー(French Academy)の会員デ・モンクリフ (De Moncrif)³⁵⁵は、彼の翻訳した『ガリヴァー旅行記』で、「フィナムが人間の理性を持ち、人間は馬の本能を持つ」³⁵⁶と考へた。それはあたかも、女性と男性の立場を転倒させて、か弱い女性が戦闘に臨んで、勇猛果敢な男性兵士を指揮下に置く将軍になったように、地位を逆転させたのであった。壮大な想像力を用いて、あるべき自然の配置を逆転させたのである。表面的には、ヤフーと「賢馬族」の立場の転倒を捉えているに過ぎないが、スウィフトは、ヒエラルキーを逆転させることで、現実の社会形態に対する警告を与えたと、オーウェルは論じている。自然の最高傑作と称賛する、神性をもつ理性的な馬に対し、傲慢な癖に卑屈で、残酷な、獣性丸出しのヤフー、その姿形はガリヴァーに似た人間である。ヤフーが形成している社会形態は、未開の人類の社会形態にまでは発達していない。この対比と、地位の逆転発想こそ、スウィフトが『桶物語』狂気の章で主張した、「人間の知性を豊かにするには、下部機構から上昇する蒸気のようなもので、攪乱されなければならない」という論を発展、具現化した姿であった。ヒエラルキーを逆転するという奇想天外な展開は、梅毒の末

³⁵³ 先川暢郎、「ジョナサン・スウィフトと『ガリヴァー旅行記』」、『武蔵大学人文学会雑誌』38巻、2006年、96-87頁。

³⁵⁴ 先川暢郎、「ジョナサン・スウィフトと『ガリヴァー旅行記』」、『武蔵大学人文学会雑誌』38巻、2006年、92頁。

³⁵⁵ De Moncrif. (1687-1770). secretary to the Court of Clermont, reader to the Queen, a member of French Academy. (*M. W. B. D.*)

³⁵⁶ "It is a similar reversal of ideas that carries the whole economy of that Republic where, under the name of Houynhnhnis [*sic*] horses have human reason, and men the instinct of horses." (Kathleen Williams, *Swift the Critical Heritage*, p.107)

の狂気のなせる業だと、第4話「賢馬の国」で誇ろうとしたと考えられる。梅毒の病毒がもたらした狂気のごとき幻影だと主張しようとしたのである。この逆転の構図こそ、この作品で主張したかったテーマであり、諷刺の本質といえる。

非理性的なヤフーの牝は好色で、本能の赴くままに行動するが、果たしてそれが悪なのかと問いかけて、理性が本能に勝る存在なのかと反問している。賢馬族は節制、勤勉、修練に明け暮れ、清潔な生活を維持しているが、これはすべて理性の命じるままの行為である。³⁵⁷ この「賢馬族」は、「偽りや疑わしい事柄について、論争したり口論したり、喧嘩や主張することがない」³⁵⁸ この性向が理性に由来するのであるならば、論争に明け暮れているイングラッドには、理性が存在しないという痛烈な反問なのであった。

WHEN the Matron *Houyhnhnms* have produced one of each Sex, they no longer accompany with their Consorts, except they lose one of their Issue by some Casualty, which very seldom happens: But in such a Case they meet again; or when the like Accident befalls a Person, whose Wife is past bearing, some other Couple bestows on him one of their own Colts, and then go together a second Time, until the Mother be pregnant. This Caution is necessary to prevent the Country from being overburthened with Numbers.³⁵⁹

雌のフウイヌムが雄雌一頭ずつ子供を産むと、もはやそれ以上つれあいと睦まじくすることはありません。もっとも、滅多にないことですが、何らかの事故でどちらかの子供を失った時は別です。そのような場合、夫婦は再び一緒になります。あるいは、すでに子供を産めなくなった妻がいるところにこのような事故が起こると、他の夫婦が自分たちの子供を一頭与え、母親が妊娠するまで再び仲睦まじくします。こうした用心は、この国で頭数が多くなりすぎるのを防ぐために必要なのです。

愛情から始まる本能的行為ですら、理性の統轄の下で処理する、全体主義的傾向をガリヴァーは敏感に感じ取り、この国がユートピアであることに疑問を感じ始めた。果たして、このような「賢馬の国」が善であろうかとの疑問が生じた。理想郷と感じていた「賢馬の国」にも、失望を誘う要因のあることで、彼は嫌人傾向を強めていった。

『ガリヴァー旅行記』出版当時のヨーロッパでは、理神論が横行していた。アイルランド

³⁵⁷ “TEMPERANCE, *Industry, Exercise and Cleanliness*, are the Lessons equally enjoyed to the young ones of both Sexes.”(Kathleen Williams,*Swift The Critical Heritage*. p.253)

³⁵⁸ “So that Controversies, Wranglings, Disputes, and Positiveness in false or dubious Propositions, are Evils unknown among the *Houyhnhnms*.” (Kathleen Williams, *Swift, The Critical Heritage*. p.251)

³⁵⁹ Swift, *Gulliver's Travels*, p.252.

のジョン・トーランド (John Toland) ³⁶⁰ が、人間が生来持っている理性が、神のあらゆる啓示を認知できると唱え、従来の神の恩恵によって示された秘蹟を信じて、全ては神の恩恵によると主張したのであった。彼の主張は、啓示宗教を否定し、理性万能の風潮を齎すものとなった。³⁶¹ スウィフトは理性が全てを統治する国は、全体主義国家の匂いを持っていると感じたので、この擬似ユートピアは、当然の如くスウィフトが嫌悪する存在となっていた。理性的な馬が君臨するヒエラルキーの転換が、ガリヴァーを次第に人間嫌いに導いたのであった。『ガリヴァー旅行記』第4話「賢馬の国」では、戦争、政治、風習などの諷刺的描写の中で、理性的社会が果たしてユートピアであろうかと、問いかけたのである。ガリヴァーは理性的社会に疑問を感じ始めた。この理性的社会の存在についてオーウェルは、「賢馬の国」が魅力ある存在と映らないのは、理性の存在があるからだ、理性に批判的な見解を示している。

They are unattractive because the 'Reason' by which they are governed is really a desire for death. They are exempt from love, friendship, curiosity, fear, sorrow and —except in their feelings towards the Yahoos, who occupy rather the same place in their community as the Jews in Nazi Germany—anger and hatred.³⁶²

彼らが魅力的でないのは、彼らを支配する「理性」が本当は死の願望だからだ。彼らは愛情、友情、好奇心、恐れ、悲しみから免れているし、社会の中でナチス・ドイツ時代のユダヤ人と同じ立場にいるヤフーに対する感情は別として、怒りや憎しみからも免れている。

理性が全てに優先している「賢馬の国」では、正常な精神が死んでおり、人間的情緒である愛情や友情、そして好奇心、恐れ、悲しみすらなく、あるのは唯、ヤフーに対する嫌悪感だけである。ヤフーの存在は、同じ場所にいるということだけで嫌われた、ナチス・ドイツ時代のユダヤ人の如く、「賢馬族」の怒りと憎しみの対象となっている。「賢馬族」は子供に対する愛情すら希薄であり、友情や慈善と言った個人的感情は、種族全般の用に供する以外は無用の長物であると主張し、全体主義的であるとオーウェルは批判している。

ジャーナリズムが勃興した時代にあって、批判精神の欠如している国民に代わってスウィフトが、ガリヴァーの眼を通して逆転した体系を示すことで、彼ら賢馬族の全体主義的傾向を諷刺したのである。社会常識や、秩序が重要視される理性優位の時代にあって、「賢馬族」の処世訓に、ガリヴァーは無数の可能性を見たのではなく、絶望を見たのであった。彼の人

³⁶⁰ John Toland (1670-1722) Irish Deist. (*M. W. B. D.*)

³⁶¹ 岩崎泰男、『『フウイヌム国渡航記』と異教文明』、『同志社大学英文学英語英文研究』、1983年、3頁。

³⁶² George Orwell, "Politics vs. Literature: An Examination of Gulliver's Travels", *The Collected Essays*, p.14.

人間嫌いの性向は、ヤフーに人類の未来を見た故ではなく、理性がすべてと考える「賢馬族」に、閉ざされた未来を感じ、理性的とされている自分の姿を重ねて見たので人間嫌いになったのである。船長ガリヴァーの旅を通して、人間のあらゆる欲望や悪徳に対して、理性が何の役割も果たせぬことへの苛立ちが、人間嫌いに導いたのであった。彼の人生を振り返った時、襲いかかった苦難の数々が、人間に対する不信感を醸成した。その最初の原因は、梅毒罹患であり、出生不祥なアイルランド生まれの、イングランド人の末裔であるという不運であった。ガリヴァーが妊娠中の妻を残して第4の旅に出たのは、幼くして母親に見捨てられたことに対する諷刺であり、わが子の誕生を待たずに死去した父親に対する反問であった。彼の世間に向けた視線は、諷刺の眼を通してであったことは、梅毒罹患の事実を隠ぺいする手段であったが、その過激な諷刺が過激さ故に誤解を招いたのであった。多くの貴顕との交遊も利用されただけで終わり、彼らが認めていたのは、スウィフトの鋭い諷刺に彩られた筆力だけであった。自分を受け入れなかった世間に対する怒りを筆力で見返そうとし、理性の力で抑えきれない怒りを最終章で自嘲気味に慨嘆している。

...But, when I behold a Lump of Deformity, and Diseases both in Body and Mind, smitten with *Pride*, it immediately breaks all the Measures of my Patience; either shall I be ever able to comprehend how such an Animal and such a Vice could tally together. ³⁶³

しかし、心身ともに歪みと病の塊となっている者が、「傲慢」に浸りきっているのを見ると、私の忍耐の手段はすべてたちまち打ち砕かれるのです。こんな動物とこんな悪徳が、どうして一つになれるのか、私はいつまでも理解できないでしょう。

スウィフトは、人間の地位はその人格に相応しいものであるべきと考えていた。その地位に相応しくない人格の持ち主が、高位高官の地位を占めているのを不公平と感じていた。永住してもよいと感じるほど魅力的であった「賢馬の国」も、理想郷ではなかった。この国にもある種の身分制度があり、血統の正しいものと交配により生みだされたものでは、おのずから身分の差が生じる社会であった。「賢馬の国」は、イギリス社会と同じ社会基盤を持つ国であることに気付いたのである。法律によって統治するのではなく、理性の命ずるままに行なわれる、無政府主義社会を描くことで、イギリス社会を諷刺したのである。18世紀の理性万能の社会に慣らされ、何の批判も行なわず、喜んでその社会に溶け込むガリヴァーの姿を示すことで、イギリス国民を諷刺した。逆転に次ぐ逆転の連続は、永劫回帰のメビウスの環の中で、人間嫌いからの脱却は困難であった。スウィフトが嫌ったのは人類全般ではなく、一部の特権階級の人々であった。彼は市井に暮らす人々には、むしろ温かい愛情あふれる眼差しを注いでいた。『ガリヴァー旅行記』では、自分がなりすましていたガリヴァーの

³⁶³ Swift, *Gulliver's Travels*, p.280.

ペルソナの下で曝け出して、彼に代弁させたのであった。ガリヴァーの叫びは、スウィフト自身の叫びであり、彼の怒りは、数々の誹謗や裏切りに対してであった。生い立ちの故に加えられた差別に対する怒りであった。人生の出発点で、梅毒罹患という大いなる挫折を自分に見舞わせた売春婦に対する怒りであり、梅毒そのものに対する怒りでもあったのだ。

5 詩人としてのスウィフト

第1章 憂国の詩人スウィフト

『ガリヴァー旅行記』の上梓を果たしたスウィフトには、相次ぐ友人知己たちの訃報に接して、自分に残された時間も僅かなものとの感慨が襲っていた。生涯を共にしようと誓っていたステラとも、梅毒罹患が原因で、結ばれることもなく過ぎてしまった。その最愛の彼女を見送ったスウィフトは、残された人生には何の望みも持てなくなっていた。希望の全てを失ってしまった時、彼は梅毒罹患以前の自分に帰ることを考えたに違いない。梅毒罹患で人生に光明を失い、世間に背を向けていた姿勢を、人生と正面を向いて対決する姿勢に変えようとしたのである。梅毒罹患の加害者である売春婦たちに対する、報復までにはまだ3年間があった。彼が懸念していたもう一つのことには、1727年アイルランドを襲った早魃と、馬鈴薯の根腐れ病による食糧の不足問題があった。彼は自分の生い立ちの経験から、弱者の立場をよく理解していたので、弱者のために何かをしたいと考えたのであった。そのことが道徳的社会の構築に役立ち、梅毒治療の道を開くと考えた。恒常的な飢餓的状况に陥っていたアイルランドにとって、イングランド政府の政策と、不在地主に対する対策は、焦眉の的であり、弱者擁護の好適な対象であった。弱者救済を求める提案は、道徳的社会構築の基本であると、この頃しきりに提案を重ねていた。彼の視線は、専らイングランドとアイルランドとの両国間の不平等と、農民の生活改善策に向けられていた。

不在地主たちは農地を牧羊地に変え、小作人には耕作を禁じていたので、穀物不足は国民を飢餓に陥し入れていた。アイルランド議会は、牧羊地の農地化を禁止する法案の無効化を、1716年及び1719年に上程して、耕作を奨励しようとしていた。しかし、イングランド枢密院が異を唱え、1727年、100エーカー中5エーカーのみ、耕作を許可する法案を可決した。³⁶⁴ その結果、ダブリン (Dublin)、ウィクローウ (Wicklow) キルデア (Kildare)、カーロウ (Carlow)、ミース (Meath)、キルケニー (Killkenny) の北部各州は、耕作を制限されるに至った。これらの政策に異を唱えたのである。1727年、飢餓がアイルランド全土を襲った時には、スウィフトが酷く嫌っていたボールター (Boulter) 主席主教は、起っている事態のあまりの凄まじさに、事実を隠したほどであった。スウィフトは災厄の現状を曝け出して、ボールター主教に対策を求めた。スウィフトは、この頃より次第に自分の将来に、一種の諦観を抱いてきていた。思うに任せぬ自分の悪疾に加えて、国家財政改善

³⁶⁴ “An Act requiring the tillage of five every hundred acres was finally passed in 1727, but could not be enforced. Most of the leases in the countries of Dublin, Wicklow, Kildare, Carlow, Meath, and Kilkenny had articles restrcing cultivation” (Ehrenpreis, *Swift III*, p.544)

のための提言も、無視され続けている現実に、希望が見いだせなくなっていたからである。彼の関心は、ペルソナに隠れて諷刺する姿から、彼本来の姿に立ち戻って、実体を曝し、愚かなアイルランド国民に説得したのである。

....the great damage to this kingdom by landlords tying up their tenants from ploughing, the throwing so many families out of work that might be employed by tillage, and the terrible scarcity next to a famine that a great part of the kingdom now labours under by the corn not yielding well last year, and to which we are liable upon any the least accident in our harvest.³⁶⁵

....小作人を耕作させないようにしている地主によるこの国への大損害、耕作によって雇用されていたかもしれない多くの家族が仕事から放り出されたこと、そして今年の穀物の生産不足によって国の大部分が今苦しんでいる、飢饉に次ぐほどのひどい食糧難。こういったことに対しては、私たちは収穫上の責任を負ってはいないのだ。

地主たちが農民を飢餓に追いやり、凶作に近い穀類生産の減少の責任は、全て彼ら不在地主達にあると、ボールター主教に宛てた書簡で、1727年の春の惨状を訴えている。寒い冬が到来すると、事態は更に悪化していった。前年の不作は、幾千もの家族が食を求めて家を捨て、何百人も飢えのため死なせてしまっていた。冬の食料の馬鈴薯も、すでに食べ尽くしてしまっていた。貧者の主食である馬鈴薯は、既に底を尽き、食糧不足から家を捨てるものも出始めていると、窮状を語っている。穀物が十分行き渡っている南部から、不足している北部への食糧の移送も、心無い暴徒によって阻まれてしまって、飢餓に苦しんでいる北部には届かなかった。この飢餓状態のアイルランドの騒乱の冬、ステラは死去したのであった。スウィフトの心に大きな穴が開いたことは想像に難くない。アイルランドの窮状が、二重に彼の心を悲しませたことは、1729年8月11日のポープへの書簡で判る。

スウィフトが伝えたかったのは、アイルランドの窮状を招いている、もう一つの原因であった。歳入の3分の2が本来の用途以外に消費され、残りの3分の1は、勝れた自国産品の存在があるにも拘らず、女性達が輸入品消費で、自分達の自尊心を満足させていることであった。奢侈品の輸入制限がされていないことを好機として、過剰なまでに輸入に頼っている現状に、怒りを発しているのであった。「悪弊の原因はもっと複雑なのである。歳入の3分の2は、国家の裁量の外で消費され、残り3分の1での貿易は禁止され、女性たちは自国の産品を着用することでは、彼女たちの自尊心を満足させられないで、外国産品を身にまとうことで満足するのである」³⁶⁶これが国家財政悪化の原因なのであった。

³⁶⁵ Ehrenpreis, *Swift III*, p545.

³⁶⁶ ...“and our evils here lie much deeper. Imagine a nation the two-thirds of whole Revenues are spent out of it, and who are not permitted to trade with other third, and where the pride of the women will not suffer them to wear their own

1727年に、アイルランド議会議員を対象に書かれた、『アイルランド短観』(*A Short View of the State of Ireland*)で、『ドレイピア書簡』の成果によって勝ち得た自主独立の機運にも関わらず、アイルランドが依然として、イングランドへの隷従から脱却していない現実を述べ、自国産品の自由な輸出が出来ていない現状を訴えた。

I would be glad to know by what secret Method, it is, that we grow a rich And flourishing People, without *Liberty, Trade, Manufactures, Inhabitants, Money, or the Privilege of Coining;* without *Industry, Labour, or Improvement of Lands,* and with more than half the Rent and Profits of the whole *Kingdom,* annually exported;...³⁶⁷

どの様な秘密の手法があるのか、知りたいものです。自由も、貿易も、産業も、住民も、お金も、通貨偉鑄造の特権もないのに、私たちは金持ちになり繁栄するのか。産業も労働力もなく、土地改良もしないで、毎年の国全体の借地料と利益の半分以上を運び去られているのです....。

「国家としての自由や、貿易の自由、住居や通貨及びその鑄造に対する自由、そのような自由なくして国家が繁栄し、国民が豊かになれる法があるなら知りたいものだ」とスウィフトは主張している。勤勉な労働力や土地改良の努力があっても、借地料が半減され輸出による歳入の増加がなければ、すべて夢物語であると、イングランド政府の政策を切り捨てた。スウィフトは1728年6月1日のポープへの書簡で、アイルランドの窮状の原因を訴えている。³⁶⁸

現在の苦難は、3年続いた穀物の不作がその原因ではない。たとえ、豊作が12年続いたとしても、死んだネズミの毛皮を温める程度には役立つが、生き返らせることは出来ない。アイルランドが置かれている状況をネズミに譬えて諷刺した。その元凶はイングランドの不平等貿易にあり、女性達の輸入品尊重の姿勢にあると断罪して、国産品愛用を求めたのであった。女性たちの奢侈品のため、90,000ポンドの絹製品の輸入、モスリンやキャラコ、オランダ製布地や亜麻布などに30,000ポンドを費やしている現状を訴えた。これらの無用な日常奢侈品に、「国家財政の資が費やされているのでは、どうして国家が成り立つだろうか」と悲痛な叫びをあげ、国家的財政危機の全ては、不均衡な貿易と奢侈品の輸入に依るのだと訴えた。この苦境を脱するには、自由貿易の認可が不可欠であると、スウィフトは日頃の主張を繰り返したのであった。自由に貿易が出来れば、窮状打破は可能であるが、貿易の自由も、金も、労働力も、仕事も無いのだ。これは資金不足や労働力不足を

manufactures even where they excel what come from abroad...”(Swift, *Irish Tract 1728-1733*, pp.9-10)

³⁶⁷ Swift, *Irish Tract 1728-1733*, pp.9-10.

³⁶⁸ Swift, *The Correspondence III*, p.289.

訴えているのではなく、屈強な若者を傭兵として、外国に送り出すことを許して、対外貿易を禁止しているイングランド政府に対する抗議なのであった。アイルランドの病弊は、このように目に見えている原因なのであった。原因と結果はわかっているが手の打ちようがないイングランド政府の政策に、全てが起因しているという批判なのである。アイルランドの窮状を訴える『アイルランド短観』執筆の動機を、愛国心からではなく、怒りと憎しみからであり、貶められていることに屈辱を感じたからであると訴えた。

1728年、スウィフトは、「アイルランド王国の貧者、商人、労働者の覚書への回答」(“An Answer to a Paper called a Memorial of the Poor inhabitants, Tradesmen, and Labourers of the Kingdom of Ireland”, 1728) を発表した。この論文はジョン・ブラウン卿 (Sir. John Brown) なる人物の、アイルランドの現状分析に対する返答ともいべきものであった。ブラウン卿はアイルランド人の性格描写を、自己中心的で、他人にたいする無関心さを取り上げて論じている。スウィフトはアイルランド国民の現実逃避の性格と、怠惰な生活ぶりを物語っているが、彼等の心情に理解も示しているのである。『アイルランド短観』で論じた貿易不振は、「航海法」の厳密な適用がその原因であることは明白である。³⁶⁹ とスウィフトは断じて、イングランドに対する、毎年百万ポンドに及ぶ送金や、無駄な贅沢品の輸入による、破滅的な収支及び、不知って、農民が牧草地まで耕すので、牧畜業者による防衛のため、アイルランド農耕地の買収が進んだのであった。そのため、さらに牧畜が盛んになり、羊や牛が増加したが、食肉は反って高騰し、庶民の口に入り難くなっていた。ブラウン卿は食糧不足に対処するため、10万バレルの小麦粉の輸入を提言したが、スウィフトは1バレル20シリングとして、総額200万ポンドの金はアイルランドには存在しないと、具体的な数字を示して、この提案を一蹴した。

1728年頃、スウィフトは愚者がはびこり、悪徳が栄えているアイルランドの傾向に、警鐘をならすため、週刊誌『インテリゲンチャー』(*The Intelligencer*) を発行した。1728年3月11日の創刊号で、その目的が「ダブリンに起こった主要な出来事を週刊で発行する」³⁷⁰ ことにありとして、その編集方法を厳しく審査し、信頼に足る情報を提供するとあった。

『インテリゲンチャー』創刊号には、「信頼に足る人物を芝居小屋や教会に、又、或る者は舞踏会場や、議会や法廷にまで派遣し、公私に亘る情報を収集して掲載する」と記述してあった。その第3号には、当時評判であったジョン・ゲイ (John Gay) の、『乞食オペラ』(*Begger's Opera*) を取り上げている。スウィフトはこの作品を通じて、溢れるユーモアが、諷刺の存在を隠していると賞賛した。「神聖で深刻な話題を笑いものにすることは難しい。

³⁶⁹ The Navigation Act executed with utmost rigor, The remission of a million every year to England, the ruinous importation of foreign Luxury and vanity. (Swift, *Irish Tracts, 1728-1733*, p.66)

³⁷⁰ “from which they are to receive Weekly Information of all *Important Events* and *Singularities*, which this famous *Metropolis* can furnish.” (Swift, *Irish Tracts 1728-1733*, p.29)

宗教の腐敗や、政治や法律の悪用は、諷刺の対象にし易いのである」と感慨を述べている。

THERE are two Ends that Men propose in writing Satyr; one of them less noble than the other, as regarding nothing further than the pish Tracts private Satisfaction, and Pleasere of the Writer; but without any View towards *Personal Malice*: The other is a *publick Spirit*, prompting Men of *Genius* and *Virtue*, to mend the World as far as they are able.³⁷¹

諷刺作品を書こうとする目的は 2 つある。このうちの 1 つは、作家のくだらない個人的満足と喜びのろう息を出ないという点では、もう 1 つの目的と同様、気高さはないが、個人的な悪意に向かおうという意図はない。もう 1 つの目的は、「公共の精神」であり、天才と有徳の士を鼓舞して、この世界をできるだけ正そうとすることである。

スウィフトはこの論調で、諷刺の目的は 2 つあると語って諷刺の手法を論じている。これは『乞食オペラ』が、公共心の発露からの諷刺であることを強調しているのである。この作品を取り上げたのは、ユーモアを通じて、全ての悪を陽光の許にさらけ出すもので、決して一部の政府高官を揶揄しているものではないと、ユーモアに彩られたゲイの『乞食オペラ』を、『インテリゲンチャー』の記事で庇っているのがであった。スウィフトは心を許した友人には、この様に懇切な配慮もできるのであり、人間が好きなのであった。彼は諷刺にユーモアの存在が必要であり、ユーモアが存在することで、諷刺の対象が、読む者に自分で無いという認識を与え、それが実態を糊塗するであろうことも熟知していたのである。彼が諷刺からあえてユーモアを除去したのは、対象を明確にしようとの意図からであった。それ故、恣意に権力を振るう者に対しては、厳しい批判の目を向けたのであった。宮廷や、内閣、議員の愚かさや、腐敗を嘲笑うのは、年金や肩書、権力が欲しいからではなく、友人達と部屋の片隅で大笑いしたいに過ぎないからである。もしそれが間違っていると云うなら、「私が悪いのですから、すぐさま場面を変更いたします。」³⁷² とゲイを弁護している。この作品は、明らかに宮廷と政府高官、とりわけ、宰相ウオーポールをからかっているのは明らかであった。この作品の執筆にあたるゲイに、助言を与え、上演後は『インテリゲンチャー』誌で、このように擁護したのであった。このスウィフトの配慮に、恩義をに感じたポーブは、1728年5月18日上梓された詩「ダンシアッド」(“Dunciad”) で、スウィフトに賛辞を捧げている。

O thou ! whatever Title please thine ear,

³⁷¹ Swift, *Irish Tracts* 1728-1733, p.34.

³⁷² “there appears to be some Reflection upon *Courtiers* and *Statesmen*, whereof I am by no Means a Judge.” (Swift, *Irish Tracts* 1728-1733, p.34.)

Dean, Drapier, Bickerstaff, or Gulliver !
Whether they chuse Cervantes's serious air,
Or laugh and shake in Rab'lais' easy Chair....³⁷³

ああ、あなたはどのような肩書を喜ぶのでしょうか。
首席司祭、ドレイピア、ビッカースタッフ、それともガリヴァーか！
セルバンテスのいかめしい雰囲気好まれようとも、
ラブレールの安楽椅子で笑い転げようとも...

スウィフトが尊敬している、セルバンテス (Cervantes) ³⁷⁴ やラブレール (Rabelais) ³⁷⁵ と肩を並べて記述されて、彼は得意満面であった。1729年に再び『アイルランドの婦人に対する国産品着用の勧め』 (*A Proposal that All the ladies and Women of Ireland should appear constantly in Irish Manufactures*) で、1720年の提案を繰り返し、国内産業の振興による歳入改善を訴えた。国内産品の利用が進まない結果、国家債務は25万ポンドにまで及んだ。これは全小作料収入の3分の1を占める、巨額な金額であった。この提案に対する反応は、前回の「アイルランド産品愛用の提案」同様、ほとんど何の効果も生まなかった。食糧不足により、物乞いに身を落とすものは数知れず、国外逃亡者も、1729年には4,000人に達し、1730年には20,000人に及ぶ勢いであった。とりわけ、「禁圧法」の影響を強く受けている、手工業者や、羊毛織工の国外脱出の勢いは、とどまるどころを知らない状態であった。女性の輸入品依存の傾向も止め難く、高級奢侈品への依存は高いため、国内産品生産は低迷し、職を失った者達の、国外脱出を制限する法律が制定されるほどであった。スウィフトは、アイルランドの生活困窮者の困窮状態に視線を向けて、彼らへの強力な助言策として、「謙虚な提案」を上梓したのであった。同時に農業従事者の困窮を、『ダブリン大主教に対する書簡』 (*A Letter to the Archbishop of Dublin concerning the Weavers*) で、その農業衰退の実情を報告している。

IT was indeed the shameful Practice of too many *Irish* Farmers, to wear out their Ground with Plowing; while, either through Poverty, Laziness, or Ignorance, they neither took Care to manure it as they ought; nor gave Time to any Part of Land to recover itself....³⁷⁶

³⁷³ Alexander Pope, *The Dunciad*, Edited by James Southerland Methuen & Co. Ltd. London 36 Essex Street Strand W.C.2. p.62. ll, 17-20.

³⁷⁴ Miguel de Saverde Cervantes. (1547-1616) the great Spanish novelist and dramatist. (*The Oxford Companion to English Literature*)

³⁷⁵ Francois Rabelais (c.1494-1553). French physician, humanist, and satirist. (*O. C. E. L.*)

³⁷⁶ Swift, *Irish Tracts 1728-1833*, p.17.

あまりに多くのアイルランド農民が、大地を耕しすぎて疲弊させてしまうのは、何とも恥ずかしい光景だ。貧しさや怠惰、無知から、彼らと与えなければならない肥料を与えなかったり、どの土地も地力が回復するまで待たなかったりしたのだ。

農民は貧しさや怠惰、愚かさから施肥を怠り、畑を休まされることもなかったのに、収穫は減少していた。国内製品の消費減少に関しても、その原因となっている輸入品依存に固執している、アイルランド女性の現実の情勢を開陳して、その愚を説き、輸入関税の局面から国産品愛用の必要性を説得した。過度の自尊心と傲慢さ、虚栄心に満ちた女性達の、奢侈品に対する欲求を、輸入品なら月世界からのものでも欲しがると諷刺したのである。女性たちの国内産品を嫌い、輸入品への依存度が高く、輸入されたものならば何もかも尊重するという風潮を厳しく批判した。³⁷⁷ 食糧不足で、巷は食を求めて彷徨い歩く物乞いで溢れ、輸入嗜好品の購入で収支は悪化し、アイルランドが壊滅状態にあると感じていたスウィフトは、繰り返し国内産品愛用を訴えたのであった。

スウィフトは人生の終末になって、道徳的社会の到来を待って、梅毒罹患という束縛を解放しようとしたのであった。彼の人生における重要事項は、全て梅毒罹患の前に変質したものとなってしまっていた。梅毒に罹患してなかったなら、この様に論じ、この様に行動したであろうことを行い始めたのであった。繰り返し勧告しても、勧告に従わないアイルランドであったが、見捨てずに忠告を続けたのである。彼は彼本来の姿に立ち戻ろうとした。彼本来の姿とは、抒情詩人としてのスウィフトであり、政治、政策の論客としてのスウィフトなのであった。次章で詩人としての彼の实像を論じたい。

³⁷⁷ ...“their universal maxim is to despise and detest everything of the Frowth and Manufacture of their own Country, and most to values whatever comes from the very remotest parts of the glob.”(Swift, *Irish Tracts 1728-1833*, p.67)

第2章 情景詩人スウィフト

第1節 叙景詩「朝の情景」

スウィフトの初期の詩作は、稚拙ではあるが、青年らしい瑞々しさに満ち溢れた抒情性のある詩風であった。彼の詩風は、梅毒罹患を契機として、諷刺の彩りの濃いものと変わって行った。「朝の情景」も、1年後には「夕立の情景」へと更に厳しい風刺の要因が加わっている。彼の詩人としての才能を親戚の詩人ドライデン (Dryden) の言う如く、詩人としては若干の技量不足と言わざるを得ないのではあるが、社会批判の論文すら、韻文の様な省略が多く、余白を読む者が充足しなければ理解できない、韻文の体裁をしている。又韻文においてすら、この叙景詩のように、諷刺の眼を覗かせていたのである。彼の生来の性格は、育ちの良さを覗かせたものであったが、若さに任せての放蕩が、梅毒罹患という悪疾に罹患してしまった。それが引き金となって、生来の性格をゆがめ、諷刺表現に走らせてしまったのである。この初期の詩作にしても、叙景詩でありながら、諷刺詩の様相を滲ませている。彼は自分の梅毒罹患で、人生に夢も希望も抱けなくなり、日常のあらゆる現象にまで不満を感じていたのも、全てが不満となっていたのである。

1709年、初穂料減免請願に失敗し、失意のうちにダブリン帰国を余儀なくされたスウィフトは、帰国に先立って、リチャード・スティール (Richard Steele, 1672-1729) が創刊した『タトラー』 (*The Tatler*, 1709) に、彼の初めてとなる叙景詩ともいふべき、詩篇を投稿発表した。この当時彼は、初穂料減免請願に失敗しての帰国であったので、見聞きする全てに不満を感じ、怒りが充満していたのである。この請願の失敗も、政党間の利害がからんでのことで、彼の力量不足ばかりが原因ではなかった。

The Shipshod Prentice from the Masters Door,
Had par'd the Dirt, and Sprinkled round the Floor.
Now *Moll* had whirl'd her Mop with dext'rous Airs,
Prepar'd to Scrub the Entry and the Stairs.
The Youth with Broomy Stumps began to trace
The kennel-Edge, where Wheels had worn the Place.
The smallcoal-Man was heard with Cadence deep,
'Till drown'd in Shriller Notes of Chimney-Sweep,
Duns at his Lordships Gate began to meet,

And Brickdust *Moll* had Scream'd through half the Street. ³⁷⁸

小僧は親方の扉の泥を、
掃き出して、あたりに水を撒き散らした。
かたやモルは、モップを器用に振り回し、
玄関や階段を奇麗に磨いた。
小僧は箒で汚れの痕をなぞって、
馬車の車輪が傷つけた溝の縁を掃き始めた。
屑石炭売りの太い声が聞こえ、
煙突掃除の甲高い声に混ざっていった。
借金取りは判事に屋敷の閉まった門に集まり始め、
レンガ屑をかぶったモルの金切り声は通りを半分駆け抜けた。

ロンドン滞在中の風物詩を描いたのであるが、視点を田園風景や、自然の情景に据えたのではなく、視線を市井の一般庶民の生活に据え、彼らの日常を描いたのである。そのため、叙景詩が風物詩に姿を変えてしまった。朝、昨夜の喧騒は何処かにいって、人通りの絶えた街路に朝日が射してくる、という様に一日の始まりを告げる描写から始まる。商人たちの活躍の始まりを告げる描写は、外から内側の様子にまで及んで、波乱に満ちた一日を想像させる。この作詩の時期、スウィフトの体調は良好で、梅毒罹患の事実を一時忘れるほどであった。そのためこの詩編は、明るく伸びやかなものとなっているが、諷刺の視線は強く作品に反映されている。

NOW hardly here and there an Hackney-Coach
Appearing, show'd the Ruddy Morns Approach.
Now *Betty* from her Masters Bed had flown,
And softly stole to discompose her own. ³⁷⁹

いずこにも貸し馬車の走り回る影も見られず、
赤く染まった景色が朝の到来を告げている。
ベティはあわてて主人の寝床から這い出る、
忍び足で寝乱れたままの自分の寝室に戻る。

下女を寝床に引きずり込む不倫の主人、馬車の走る車輪の音が聞こえ、明るい太陽の輝きで明け方を知った下女は、あわてて自分の寝床に逃げ込む。そのような下女の姿を生き

³⁷⁸ Swift, *The Poems I*, p.124. ll.5-14.

³⁷⁹ Swift, *The Poems I*, p.124. ll.1-12.

生きと描いて、市井の風俗詩となっている。一つひとつの情景が、ひとコマの写真のように、生き生きと描写されている。町中に活気が戻り、雇い人たちの日常が始まる。物売りや職人たちの商いを求める掛け声が、街に活気を与え始める。物売りの声まで聞こえるように活写されている。この風景詩ですら、すでに社会批判と、道徳に対する諷刺に彩られた作品となっている。社会の秩序の無さを嘆きながら実は、自分の背負っている梅毒という悪疾が、不道徳に起因するだけに、自分自身に対する怒りもあるのであった。それだけに一層厳しい視線を注いでいるのであり、諷刺もそれだけ厳しい口調なのである。スウィフトの視線は、社会の底辺にいる庶民にも温かい目を向けているのであるが、そのような立場にあっても、社会的強者の主人に対する視線は冷たく、鋭いものとなっている。

第2節 叙景詩「夕立の情景」

1710年9月、「初穂料減免請願」のため、再びロンドンに戻ってきたスウィフトは、同年10月17日、『タトラー』238号に、「市中夕立の情景」(“A Description of a City Shower”)を掲載した。前回、ロンドン滞在中の1709年の、「朝の情景」に次ぐ2作目である。

今度こそは請願成就と、意気込みの感じられる詩編となっている。当時スウィフトは聖職に生涯を捧げる覚悟は未だ出来てはいなかった。

彼の視線は突然の夕立に振られ、慌てふためく人々に向けられ、人々の外見の描写から、次第に彼らの心中を推し量る心理描写へ移り変わり、情景描写は心理描写にと、次第に諷刺の色合いの濃いものとなっていった。雨の情景は、やがて洪水の様な水の流れに変わり、視線は水中にまで及んでいる、彼の鋭い観察眼が窺える。当時のロンドンの不潔な市場風景が、彷彿とする描写である。汚物の流れ下る描写からは、臭気まで感じられる細密な描写である。彼は道行く人々の外観から、彼らの実相にまで観察の視線を巡らしている。

NOW in contiguous Drops the Flood comes down,
Threat'ning with Deluge the *Devoted* Town.
To Shops in Crouds the dagged Females fly,
Pretend to cheapen Goods, but nothing buy.
The Templer spruce, while ev'ry Spout's a-broah,
Stays till 'tis fair, yet seems to call a Coach. ³⁸⁰

降りしきる雨が洪水となり、
豪雨がこの呪われた街を脅かす。
泥まみれの女たちが、大勢、店に飛び込んできた。
商品を値切るふりをしているが、その癖、買う気はないのだ。
こぎれいな法学生は、土砂降りの間は、
馬車を呼ぶふりをして、店先に立ち止まっている。

第3連の詩句では、視線を専らにわか雨に降りこめられた人々に注がれ、彼らの眼を通して、ロンドンの市井の人物の、夕立に遭遇した折に見せた咄嗟の行動を、静止画面に映しとって描写している。スローモーションで情景を見ているような、細やかな観察である。

³⁸⁰ Swift, *The Poems I*, p.138. ll,31-36.

ところが、第4連以降になると、スウィフトは視線を転じて、情景描写は、田園風景の描写の様な叙情的描写を捨てて、汚物にまみれたロンドンの場末の一隅に転じて、汚濁にまみれた下水の情景を描き出す。情景詩は社会風俗詩となっていった。彼は叙景に視点を定めた詩作より、人間に視線を定めた詩作を好んでいるようで、基本的に、人間が好きなのである。前半の登場人物の心理描写は、彼の表現力の並々ならぬことを見せている。

NOW from all Parts the swelling Kennels flow,
And bear their Trophies with them as they go:
Filth of all Hues and Odours seem to tell
What Street they sail'd from, by their Sight and Smell.
They, as each Torrent drives, with rapid Force
From *Smithfield*, or *St. Pulchré's* shape their Course,
And in huge Confluent join at *Snow-Hill* Ridge,
Fall from the *Conduit* prone to *Holborn-Bridge*.³⁸¹

今や至る所から集まってくる雨水は、溝から溢れだし、
水流は流れるにつれて、戦利品を抱き込んでくる。
様々な色合いの屑と、それらの放つ悪臭が、
どの通りから流れ来たのか、その形と臭いで物語っている。
スミスフィールドやパルカー通りから、すさまじい勢いで、
奔流が流れ下るにつれて、その流れの道筋を形作り、
スノーヒル峰の巨大な合流地点で、
大暗渠からホルボーン橋へと流れ落ちていく。

ロンドン市民の日常生活から吐き出される、汚物が下水を伝わって流れ去り、市民生活の残滓が見える。様々な廃棄物が流れ下り、合流して、大きなうねりとなって終末処理場に集まるさまを、巧みに描写している。その生き生きとした描写は、汚物の匂いまで感じさせる。汚水の描写は、すさまじい臭気を撒き散らして終わるが、その臭気が詩から滲み出て、この詩にも、彼の匂いに敏感な姿が見られ、糞尿譚の気配が既に感じられる。

Sweepings from Butchers Stalls, Dung, Guts, and Blood,
Drown'd Puppies, stinking Sprats, all drench'd in Mud,
Dead Cats and Turnip-Tops come tumbling down the Flood.³⁸²

³⁸¹ Swift, *The Poems I*, p.139. ll.53-60.

³⁸² Swift, *The Poems I*, p.139. ll.61-63.

肉屋の屋台から吐き出された屑や、糞便、内臓、おまけに血まで、
流れくるのは、溺れた子イヌの死骸、泥まみれの悪臭放つ魚屑、
死んだ猫どもに混じって、カブの切り屑が洪水に乗って転がるように流れ下る。

「朝の情景」では人間を活写し、「夕立の情景」では風物に視線を据えたが、従来の情景詩とは異なり、諷刺の視線で、現実の見たくない情景まで描き出している。スウィフトのこの2篇の詩は、情景描写でありながら、視線の向かう先は、風景の陰に存在する人間に向けられていて、風俗詩とも評すべきものである。この作品の評価は、ロンドンとダブリンでは、かなり違った受け止め方をされたようで、スウィフトも評価をかなり気にしていた様子が、『ステラへの消息』(*Journal to Stella*)に記述されている。

My Shower admired with YOU; why, the bishop of Clogher says, he has seen something of mine of the same sort, better than *Shower*. I suppose he means *The Morning*; but it is not half so good. I want your judgment of things, and not your country's.³⁸³

私の夕立の詩を貴女はほめられています、何故ですか。クローハーの司祭は同じような詩を以前見たとおっしゃっていますが、夕立よりは良いとお言葉です。私が思いますのに、朝の詩のことをおっしゃっているのですが、それほど良くはありません。ぜひ、貴女の言葉で批評をお聞かせください。貴女の国の言葉ではなくて。

『ステラへの消息』によれば、ステラは「夕立の情景」をより高く評価していたようであるが、クローハー (Clogher) の司祭は、「朝の情景」の支持が高かったと語っていた。スウィフト自身は、「市中夕立の情景」をより高く評価して貰いたかったが、この詩編を目にした友人たちの評価は、まちまちであった。市中ではどうかと言うと、「朝の情景」はダブリンでの評価が高く、「市中夕立の情景」はロンドンでは高く賞賛されていた。この評価に落胆したのか、以後、同様の叙景詩の発表は無く、専ら人物に視線を据えた詩作が中心となっている。人物も、鋭い諷刺の視線の中で描かれている。

スウィフトは人間描写に会っても、外見から窺い知ろうとしているのではなく、その人物の全てを知り尽くそうとしている。『桶物語』においても、どの様な美人であれ、外側の皮をはいでしまえば、全て同じ肉の塊で、美醜はそれぞれが、習慣で判断しているに過ぎないので、「真実は見る人に任せるか、本人の本質に依る」と言っているように、美醜においてすら、客観的ではなく、主観の存在の大きいことを語っている。彼の視線は、常に内部の本質に向けられているのである。人間の毀誉褒貶すら、時と場所が異なれば、違った評価がなされると主張している。彼は自分の評価すら、時と場所の相違で、低い評価しか

³⁸³ Swift, *Journal to Stella*, p.109.

与えられなかったと、社会に憤懣を持っていたのである。その憤懣が、梅毒罹患という事実と共に、彼の社会風刺の原動力の一部ともなったのであろう。

第3章 最後の長編詩

第1節 詩篇「スウィフト博士の死」

一連のスカトロジカルな詩を上梓した1731年頃、スウィフトは「スウィフト博士の死に寄せる詩」(“Verses on the Death of Dr. Swift, D.S.P.”)を執筆していた。この頃、梅毒罹患の果ての狂気に対する不安を持ち続けながら、この長大な詩編に取り組んだのであった。彼はこの詩編で過ぎ去りし日々の思い出を詠いあげているが、明らかに詩泉は枯れてしまったかのように見える。この傾向はその後も続いていることから、単に加齢による能力の低下ではなく、梅毒による難聴やめまいが、彼の詩的能力を奪っていたのであろう。その故か、死後の自分を反芻しているごとき構想となっている。ここには梅毒による発想の奇異さはない。特異な発想による狂気の表現の一端が見られるようである。この詩が、年末には出来あがっていたことを推測させる、ゲイへの書簡がある。当時のスウィフトは、進行性麻痺が進み、時折、怒りが抑えきれなくなり、容易に言葉が見つからなくなっていた。そのため、この作品以後の長大な詩編は、彼独特の言葉の面白さや奇抜な発想を見出すことが出来なくなっている。

この詩篇冒頭に、フランソワ・ロシュフコー (Francois Rochefoucauld, 1613-1680) の処世訓が提示されている。この詩は、スウィフトの死に際して、友人達がどのような行動をとるかを、皮肉交じりに推量したからかいの部分と、英国国教会の司祭で、後に反宗教的との咎で聖職を剥奪された、トーマス・ウールストン (Thomas Woolston)³⁸⁴ への共感を詠いあげた、深刻な部分で構成されている。この詩ではこれら後半部分の方がよい出来となって、彼の諷刺精神は衰えていないことが如実に分かる作品となっている。この様な構成そのものも、彼の詩的能力の低下のみならず、ある種、異常な組み合わせであると言える。諷刺も直接的な表現が多いため、単なる悪口とも受け取られかねない作品となっている。

ウールストンは1725年、『背教者と無神論者との調停者』(*A Moderator between an Infidel and an Apostate*)を執筆し、不敬罪で投獄され獄中死した人物で、彼は新プラトン主義を提唱していた。ギリシャの神学者オリゲネス (Adamantias Origenes, 185-254) に

³⁸⁴ Thomas Woolston (1670-1733). イギリスの自由思想家。英国ノーザンプトンで生まれ、英国国教会の司祭となる。オリゲネスに心酔した彼は、聖書を比喩的に解釈して、キリストの復活、処女降誕、その他の奇跡を比喩として解釈することをとなえた。『キリスト教人名辞典』より。

心酔していたウールストンは、キリストの奇蹟は寓意であると唱えたため、これが反信仰と捉えられたのであった。スウィフトは1689年、サンクロフト博士に「サンクロフト博士への頌歌」(“Ode to Doctor William Sancroft late Lord Bishop of Canterbury”)を献じていたほど、権力に逆らった硬骨の士に共感を覚える性格であった。カンタベリー(Canterbury)大主教のサンクロフト博士は、名誉革命に反対を表明したため、追放となった人物であった。

当時、クイーンズベリー(Queensberry)公爵夫妻の庇護の下で生活していたゲイへの、1731年12月1日の書簡で明らかのように、「スウィフト博士の死に寄せる詩」は、ほぼ校了間近で、目下修正終了段階にあることが分る。この作品の大半が、スウィフト博士の死に際して、友人や、宿敵の連中がとるだろう態度を、推量して描写した詩である。³⁸⁵明示されているロシュフコー(Rochefoucauld)の、格言に沿う形で作詩されているもので、「私は500行に及ぶ楽しい主題の詩篇を書いています。信頼する友人の困窮は、必ずしも我々を不快にするものではない。」³⁸⁶ 所謂、「他人の不幸は蜜の味」を実証した形となっている詩篇である。

WE all behold with envious Eyes,
Our *Equal* rais'd above our *Size*;
Who wou'd not at a crowded Show,
Stand high himself, keep others low?
I love my Friend as well as you,
But would not have him stop my View;
Then let him have the higher Post;
I ask but for an Inch most. ³⁸⁷

我々は皆、同輩を妬ましい目で見ている。
彼は、人が大勢いるところでは、
自分が有能だとか、周りの人間が自分より下だとかは、
顔には出さない。
僕は、君たちと同じぐらいその同輩のことが好きだ。
だが、その同輩に対する妬みをやめさせることはないだろう。
だから彼には高い地位にいてもらおう。

³⁸⁵ I have been severall months writing near five hundred lines on a pleasant Subject, onely to tell what my friends and enemyes will say on me after I am dead. (Swift, *The Correspondence III*, p.506)

³⁸⁶ In the Adversity of our best Friends, we find something that doth not displease us.(Swift, *The Poems II*, p.551)

³⁸⁷ Swift, *The Poems II*, p.554, ll,13-20.

せめて 1 インチでも彼に近づければいいのだが。

詩の出だしから、友人の才能を妬む心情の存在を認めているが、決して友人を、自分以上の才能の持ち主であるとは、認めないと言いたいのだ。人間は嫉み深い存在であることを、是認しているのであるから、交遊は妬まれる範疇を越してはならないという、ロシュフコーの格言をなぞったものとなっている。詩人は、友人が自分以上に立派な詩を書いたとしたならば、妬まないはずはないのだと、友人の才能に向けた嫉妬心を、明らかにしたのである。³⁸⁸ しかし、スウィフト自身は、友人たちより自分の詩才のほうが上であると誇っているのだが、この詩では、友人たちの詩才も褒めそやしている。生来の猜的な性格は影を潜め、自尊心を捨てている。

In POPE, I cannot read a Line,
But with a sigh, I wish it mine:
When he can in one Couplet fix
More Sense than I can do Six:
It gives me much a jealous Fit,
It cry, POX take him, and his Wit.

WHY must I be outdone by GAY,
In my own hum'rous biting Way ?

ARBUTHNOT is no more my Friend,
Who dares to Irony pretend;
Which I was born to introduce,
Refin'd it first, and shew'd its Use. ³⁸⁹

ポープの詩は、一行たりとも私には読めない。
だが、ため息をついて、自分の詩であったらと思う。
彼は二行連句の中に、私の 6 倍もの詩的センスを
働かせることができる。
だから私は、嫉妬のあまり、むっとなり、
痘症が彼に取り付き、その才覚を奪い去れと叫ぶのだ。

³⁸⁸ What Poet would not grieve to see, His Brethren write as well as he? (Swift, *The Poems II*, p.554. ll.30-31)

³⁸⁹ Swift, *The Poems II*, p.555. ll.47-66.

なぜゲイは、私の得意とするユーモラスで痛烈な書き方においても、私にまさっていなければならないのか。

アーバスノットはもはやわが友ではない、
なぜ彼は皮肉屋のふりをするのか
私こそが生まれながらの皮肉屋、
初めて皮肉を洗練されたものにし、その使い方を示したのは私だ。

友人の一人ひとりの才能を、嫉妬の眼で描写して、スウィフト自身は更に優れていると誇示している。しかし、彼は、自分の才能に対する称賛は、過去のものとして諦めているかのような詩句が見られる。このころ、眩暈や難聴に苦しみ、痛風の痛みを頻繁に訴え、詩才が衰えていることを嘆く詩句が詠われている。

FOR Poetry, he's past his Prime,
He takes an Hour to find Rhime:
His Fire is out, his Wit decay'd,
His Fancy sunk, his Muse a Jade.
I'd have him throw a way his Pen;
But there's no talking to some Men. ³⁹⁰

詩才といえ、彼の盛りはもう過ぎた。
押韻一つに一時間、
情熱の炎が消えれば、機知も朽ち果てる。
想像力が枯渇すれば、彼の詩神は駄馬となる。
私は筆を捨てたくなってしまう。
だが、このことはまだ内緒にしておこう。

時代から置き去られ、忘れ去られようとしている自分に、慄いているスウィフトの姿ばかりが見えるようになる。このころより、スウィフトの才能に陰りが見えてきたのか、はたまた、梅毒の影響が強くなり、詩作に向かう気力を奪っていったのであろうか。もはや彼の関心事は過去の栄光と、世間の評価に向けられているだけとなっている。僅かに、友人たちに向けられた視線には、皮肉にほくそ笑む、スウィフトが見られるのみである。

Here shift the Scene, to represent
How those I love, my Death lament.

³⁹⁰ Swift, *The Poems II*, p.556. ll.99-104.

Poor POPE will grieve a Month; and GAY
A Week; and ARBUTHNOTT a Day. ³⁹¹

ここで場面は変わって、
愛する人たちが私の死をどのように嘆くかお示ししよう。
可哀想なポープは1月嘆き、
ゲイは1週間、アーバスノットにいたっては、たった1日。

スウィフトの死を嘆き悲しむ友人たちですら、ポープは1月、ゲイは1週間に過ぎず、アーバスノットに至っては1日と言っている。悪趣味なこの表現は、スウィフトの友人たちに対する、交わりの実質的な評価を表しているのではなく、心から信頼しているポープ、才能の高さを評価しているゲイ、そして医師としても尊敬しているアーバスノットに、この詩篇がどのような感慨を与えるか計算して、冷やかしたのである。友人の死に弔意を表す我々の心の働きを、彼らとの交際の期間の長さではなく、それぞれの交流の濃淡に応じて、人は評価するものであると皮肉な口調で語っている。

WHY do we grieve that Friends should dye?
No Loss more easy to supply.
One Year is past; a different Scene;
No further mention of the Dean;
Who now, alas, no more is mist,
Than if he never did exist. ³⁹²

友が死んだら何故、我らは嘆くのだろうか、
友人などはいくらも居るのに。
1年が過ぎ去ると、事情は少々変わるようだ。
もはや誰も首席司祭のことなど口にはしないし、
司祭のことなど寂しがる人は誰もいない。
主席司祭など、本当にいた人物なのかと思うだけだ。

なぜ我々は友の死を嘆くのかと問いかけて、友の死は容易に埋め合わせる損失と切り捨てている。自分の死さえ、1年を経たしまえば誰も話題にしないのであると、人間心理を突いた冷徹な判断を下して、諷刺の視線を自分に向けているのである。しかし、スウィフトは、そのような冷徹な判断とは裏腹に、友人たちの関心が自分にとまってくれることを願

³⁹¹ Swift, *The Poems II*, p.561. ll.205-208.

³⁹² Swift, *The Poems II*, p.562. ll.243-248.

っていた。本来彼は、この様に友人知人に情の厚い人間なのである。この詩は、自分の死を客観的に眺め、過去の栄光と昔日を懐かしんでいるのである。

280行から、主題はウールストーンに移行して、この異端と言われた聖職者のウールストンの、大胆な主張を取り上げている。スウィフトは権力に逆らった硬骨の士に、強く共感する性格も持っていたので、自分の信念に忠実であったウールストーンに共感を覚えたのである。彼は『桶物語』で、墮落の底にあった英国国教会への諷刺を避けたのは、道徳的社会への救いの道の一つが、教会の純正化にあるとも信じていたので、あえて触れなかったのである。然し、何時まで経っても教会が正しい道を歩まないばかりか、高位聖職者から道を外している現状の墮落ぶりを見るに及んで、硬骨の聖職者や、不遇の聖職者に同情の眼を注いで、それらの人々の力を借りて、教会に道徳的理想郷を作りだしたいと念じていたのである。スウィフトがこの当時注目したのは、異端との烙印を押されたウールストンの、教会権威に逆らってまで貫こうとしている、彼の信念の強さであった。

He shews, as sure as GOD's in *Gloc'ster*,
That *Jesus* was a Grand Impostor:
That all his Miracles were Cheats,
Perform'd as Juglers do their Feats:
The Church had never such a Writer:
A Shame, he hath not got a Mitre! ³⁹³

グロスターの神々同様、確かに
イエスが詐欺師だったということ、彼は示す。
彼の奇跡はすべて嘘っぱちで、
祭りの大道芸人のように演じていただけだ。
教会はこんな作家を見たことはない。
恥と知れ。司教にもなったことがないのに。

ウールストンの訴追の原因となった彼の主張を取り上げ、イエスは詐欺師で、神の啓示は全ていかさま、手品師の早業にすぎない、と詠っている。スウィフト自身、ウールストーンと同様な見解を持っていたとは思えないが、腐敗が目にする教会で、宗教家が己の信念に忠実に従って主張することに、賛意を表していたのである。ウールストンの主張は、異端の思想ではなく、「公正な自由」³⁹⁴であった。この自由は、発言の自由であり、思想の自由である。この主張こそスウィフト自身の叫びであり、貿易の自由に対する要求であった。スウィフトはウールストーンに名を借りて、国民は右往左往して翻弄されていることが、公

³⁹³ Swift, *The Poems II*, p.564. ll.293-298.

³⁹⁴ "Fair LIBERTY was all his Cry; (Swift, *The Poems II*, p.566.ll.347)

正な自由を阻害しているのであると、訴えたのである。この詩編においても、イングランド政府の不当な政策に、異を唱えたのである。

HAD he but spar'd his Tongue and Pen,
He might have rose like other Men:
But, Power was never in his Thought;
And, Wealth he valu'd not a Groat....³⁹⁵

もし彼が口を閉じ、信念を書き連ねなかったら、
他の連中のように出世しただろう。
だが、権力を得ようなどと少しも思わなかったのだ。
しかも、財宝などには、一顧もしなかったのである.....

手厳しい論及と論述を控えていたなら出世したかもしれないが、「権力を握る気持ちは更々なく、財を得ることには何の価値もない。」と、ここにスウィフトが過去の自分の行動を振り返って、湧き上がった後悔にも似た感慨を明らかにしている。強烈な諷刺が昇進の妨げとなったが、決して悔いていないと答えて、「ドレイピア第4書簡」で300ポンドの懸賞金をかけられ、「ホイッグ党の公共精神」でも300ポンドの懸賞金をかけられても、怯まなかったのは、公正な自由を主張したにすぎないからだ、と、抗弁している。

For her he stood prepar'd to die;
For her he boldly stood alone;
For her he oft expos'd his own.³⁹⁶

自由のために何時でも死ぬ覚悟は出来ていた。
自由のために一人雄々しく立ち上がった。
自由のために一度ならずもその身を曝したのだ。

スウィフトが求めるものは、公正な自由であり、そのためには死ぬ覚悟が出来ていた。自由のためには危険を顧みず、わが身を曝し、1人でも戦ったのであった。この様に大上段に正義を振りかざしているが、彼の心中によぎるのは、若さにまかせて強権に逆らった過去を後悔しているのであった。この詩は1739年、過激な表現の箇所160行を削除して上梓されたが、これに不満を表していたスウィフトの意を汲んで、フォークナーがダブリンで無削除の、484行の詩として出版した。1739年中に、4版を重ねるほどの売れ行きで

³⁹⁵ Swift, *The Poems II*, p.567. ll.355-358.

³⁹⁶ Swift, *The Poems II*, p.566. ll.348-350.

あった。64歳にして、484行に及ぶ長編詩を書ける能力が、スウィフトに残されていたことも驚異である。権力に逆らってまで、正義を貫こうとする気概には、驚く以外の何ものでもない。1735年、スウィフトが遺書を書いていることが、1735年7月17日のオレリー卿への書簡で知ることが出来る。

「只今、正式な遺言書を書き終えたところです。全財産をダブリン市に寄託して、狂気と痴呆の患者の病院の建設と維持に使う心算です」³⁹⁷ 健康状態も悪いけれども、経費を節約することによって、精神病院建設への寄託の意思があることを書き送っている。残念ながらこの遺書は現存していないが、彼のこの意思は「スウィフト博士の死に寄せる詩」の、479行以下でも記されている。

スウィフトの意識の底には、常に梅毒による精神異常が身を襲い、狂気の果てに死に至るか、狂気となって野垂れ死にするか、思い悩んでいたのである。狂気となった患者の哀れな処遇に思い至った時、彼は精神病院の必要性を強く感じたのである。

HE gave the little Wealth he had,
To build a House for Fools and Mad:
And shew'd by one satiric Touch,
No Nation wanted it so much:
That Kingdom he hath left his Debtor,
I wish it soon may have a Better. ³⁹⁸

彼は自分の持てるささやかな財産の全てを
狂える病者のための病院を建てようと遺した。
そして、皮肉に満ちた言葉を残した。
この国ほどそのような病院を求めている国はないのです。
彼はアイルランドを彼の債務者としてこの世を去った。
この国が今に良い国家になることを望みながら。

スウィフトの遺言に従って、彼の名を付した聖パトリックス病院が設立されたのは、彼の死後の1757年であった。スウィフトの精神病院に対する関心は、1714年、ロンドンのベットラムの理事に、その名を連ねて以来のことであった。1732年1月頃、ゲイは書簡で、スウィフトのイングランド来訪を催促していたが、2月に司祭館の階段から転落して、足を捻挫してしまい、ゲイの望みは適えられなかった。10月になってようやく完治した頃、スウィフトは第5代オレリー伯爵と知己になった。

³⁹⁷ "I have now finished my will inform, wherein I have settled my whole forune on the City, in trust for building and maintaining an Hospital for Ideots and Lunnaticks," (Swift, *The Poems II*, p.572.ll.479-484)

³⁹⁸ Swift, *The Poems II*, p.572. ll.479-484.

第2節 詩篇「ラブソディ」

1733年12月31日、2つ折版のパンフレットの体裁で、「ラブソディ」(“A Rapsody”)を匿名で上梓した。1732年12月4日、ゲイの訃報に接したことが、この作品執筆の引き金となったのであった。この494行に及ぶ長い詩は、詩人の心得と詩人への中傷に対処する心構えで構成され、随所に、権力者に対する諷刺も鏤められている体裁の詩である。匿名で出されたこの詩を読んだポープは、作者がスウィフトであるのを見抜いた書簡を送っている。今回上梓された作品は、「匿名ながら、作者はあなたであることは明白です。匿名で出版するあなたの手法は、私が熟知しております。頭隠して尻隠さずで、インドの鳥と似ています。」³⁹⁹と作者がスウィフトであることを告げている。この詩でスウィフトは、詩人が世間からどのように見られているかを、皮肉交じりに開陳している詩である。

For Poets, Law makes no Provision:
The Wealthy have you in Derision.
Of State-Affairs you cannot smatter,
Are awkward when you try to flatter.⁴⁰⁰

詩人にとって、法律は何も規定しない。
金持ちは、詩人を嘲りの的とする。
生半可な知識で、国家を論じることはできないし、
国家に媚びようとする、不恰好になる。

動物は自分の能力の限界を知っているから、熊は空を飛ぼうとしない。馬はレースの前には、ゴールのことを考えるかもしれないが、人間は自然に逆らって行動することもあるかもしれない。宮廷も国家も、詩人を必要としないし、詩人は裏切りや陰謀を企てることも、賄賂を貰うこともしない。法律は、何の規定もしないし、金持ちは、詩人を嘲るだけである。詩人は、国家の出来事は何も判らないし、金持ちに諂ってみても、ごちないだけであると、一般的な詩人の評価を通して、世の中の現実の有様を諷刺している。次の数行では、皮肉な調子で詩人の心得を論じている。

³⁹⁹ “whether those printed here are, or are not genuine ? but one I am sure is yours; and your method of concealing your self puts me in mind of the bird I have read of in India”(Swift, *The Correspondence IV*, pp.217-8)

⁴⁰⁰ Swift, *The Poems II*, pp.641-2. ll.49-52.

Employ your Muse on Kings alive;
With Prudence gath'ring up a Cluster
Of all the Virtues you can muster:
Which form'd into a Garland sweet,
Lay humbly at your Monarch's Feet;
Who, as the Odours reach his Throne,
Will smile, and think 'em all his own:⁴⁰¹

国王の生存中に、詩魂をかたむけなさい。
注意深く、集められるすべての美德を
束にしなさい。
美しい花輪に仕立てて、
君主の足下にもうやうやしく差し出しなさい。
花輪の芳香が君主の王座に届けば、君主は微笑んで、
花輪が自分のものだと思うだろう。

詩人が認められたいと望むなら、存命中の国王に美德の数々を取りまとめ、花束にして、国王の足元に捧げよと告げている。権力者は従うものには寛容であるし、財力で動かすことの出来ない詩人を、権力は容易に動かせるのだと鋭く諷刺している。この論述は、彼の本来の姿勢ではない。逆説を多用する彼本来の論法とは異なっている。この頃彼は気力が減少し、意欲がなくなってきたのであろう。

If, on *Parnassus*' Top you it,
You rarely bite, are always bit:
Each Poet of inferior Size
On you shall rail and criticize;
And strive to tear you Limb from Limb,
While others do as much for him. ⁴⁰²

お前が詩歌の世界の頂点に立つならば、
滅多にお前が噛みつくことはないが、常に噛みつかれるだろう。
才能なき詩人たちは、お前をののしり、批判し、
そして詩の一句一句を切り刻む。

⁴⁰¹ Swift, *The Poems II*, p.647.ll.220-226.

⁴⁰² Swift, *Ihe Poems II*, p.651. ll.329-334.

他の者は、自分がやられたようにやり返してくるのだ。

詩人が詩境の頂点に上り詰めたとき、能力の劣る詩人は、勝れた詩才の詩人に嘔みつき、罵倒し、批判するのが常道であると忠告している。評判が高まればそれだけ、批判の矢面に立たされることが多くなると、一挙手一投足に、注意が必要であると論じている。この様な評価は、スウィフト自身への忠告であるが、彼は対象をすり替え、友人のために論じている体裁をとっている。友人が批判の的に曝された場合、どのようにして身をかかわすかについて、フォードに書き送った書簡でも論じている。

Swift to Charles Ford

Dublin Apr. 5th. 1733

I envy Mr Pope for his being railed at. I think all men of wit should employ it in Satyr, if it will onely serve to vex Rogues, though it will not amend them. If my Talent that way were equal to the sourness of my temper I would write nothing else. ⁴⁰³

スウィフトからチャールズ・フォードへ

ダブリン、1733年4月5日

私はポープが罵られていることに嫉妬する。諷刺が悪党どもをいらだたせるだけで、改心させないのなら、機知のある人は皆、その機知を全て諷刺に用いるべきだと思う。もし私のそういった才能が、私の気質の不機嫌さにに等しいなら、他のことは何も書かないだろう。

彼はポープの諷刺の手法を、才知ある人物の鏡であると賞賛している。たとえ、ならず者を矯正出来なかったとしても、彼らを苛立たせられるならば、それで十分であると言い、スウィフトは自身の性質を、諷刺に向いていると言い切っている。彼は諷刺を用いて相手を不愉快にするのだと、不愉快にする手法を授けようとまで申し出ている。その上、自分は諷刺以外の手法を用いる心算はないと言って、諷刺による表現が性格的にも、自分に最適の表現様式であることを誇りにも思っていた。意気軒昂な姿勢の半面、梅毒の不安に怯え、病苦に苛まれ苦しんでいたことを考えると、彼の強靱な批判精神に、追従出来るものはいないのではないかと思われる。彼は梅毒罹患による精神異常の発現を恐れ、狂気に至る過程に怯えていたのである。その恐れや怯えを、殊更平然を装って、諷刺表現を用いて見解を開陳して、社会へ秩序の乱れを露わにすることによって、健全な理想社会の構築を目指すことを促す事が、自分の背負った病に対して後ろめたさをかき消し、そしてあたかも自分がそんな乱れた社会とは無縁の人間であることを装い、自分の素姓や梅毒罹患の事

⁴⁰³ Swift, *The Correspondence IV*, p.138.

実を隠そうとしたのであった。諷刺表現は都合のよい手段であった。梅毒の恐怖を語ることで、意識の底に押し込め、狂気の恐れを発散させようと図っていたのである。

第3節 詩篇「軍団クラブ」

1719年のアディソン(Addison)の死去に続いて、1729年にはコングリーブ(Congreve)、ステール(Steele)が相次いで死去した。友人、知人の相次ぐ死に遭ってスウィフトは、残されたポーブが死去することを恐れた。彼はその想いを1736年2月7日のポーブ宛ての書簡で、「残されたのは自分ひとりとなってしまうので、どうか死なないで欲しい。」⁴⁰⁴と書き送っている。孤独を恐れ、心通わせた友人の死を恐れた様子が伝えられている。1736年になると、気力の衰えたかに見えるスウィフトの視線は、法律を乱発して、市民生活を脅かし、道徳社会の牽引力ともなる聖職者を、迫害し始めた議会議員に転じている。彼は『軍団クラブの特質、賞賛のあらまし』(*A Character, Panegyric, and Description of the Legion Club*)を上梓して、諷刺の矛先を議会議員に定めた。新約聖書ルカ伝に出てくるこの軍団のメンバーは、イエスの力によって悪霊を体から取り去ってもらった、無頼の輩ではなく、アイルランドの議会議員達である。スウィフトが、彼らを悪霊の軍団として糾弾したのは、アイルランド議会による、度重なる宗教界に対する弾圧であった。スウィフトはこの詩で、自らを梅毒による狂気を装って、彼ら議員を処断しようとさえ思った。彼は梅毒による狂気を超越していたかのように、より激しい口調で迫ったのであった。

1733年に上程された、「亜麻と大麻に関わる10分の1料の恒久的削減法案」は、下級聖職者の収入である10分の1料を永久に奪うものであり、彼らの生活権の侵害であった。1734年には、「牧畜業界の10分の1料廃止法案」(*An Act of discontinuance of the first fruit for the Cattle breedings*)と、相継ぐ宗教界に対する攻撃が、スウィフトの怒りを誘ったのだ。結局、これらの法案は棄却されたが、下院はこの抵抗運動を快く思わず、反対運動に干渉して弾圧したのであった。これらは道徳社会の完成を妨害し、教会の権益を縮小しようとする議会の策謀と認定したスウィフトは、彼ら議会議員に対して抗議したのである。これらの抗議運動は、地主階層からも起こっていた。この法案を上程しようとする下院議員を取り上げ、彼らを悪霊の化身と捉えて、諷刺したのである。

TELL us, what the Pile containes?
Many a Head that holds no brains.
These Demoniacs let me dub
With the Name of *Legion Club*.⁴⁰⁵

⁴⁰⁴ Swift *The Correspondence IV*, p.457.

⁴⁰⁵ Swift, *The Poems III*, p.829. ll.9-12.

この壮大な建造物は、何を収容しているのか、教えてくれ。
脳なしがたくさんいるのだ。
どうかこれ等の悪霊どもを
軍団クラブと呼ばせて欲しい。

壮大な建造物にいるのはだれかと問いかけて、大勢の知恵の無い悪霊どもを一纏めにして、「軍団クラブ」と名付けた。議員連中を悪霊の結社と糾弾し、狂人集団と諷刺し始めた。彼らは一旦議員になると、議席を守るため国を売り、虚偽の投票で、法律創りに狂奔する。口やかましく騒ぎたて、糞尿をかきまぜるようにして、大委員会を開催し、街中に災害をまき散らし、庶民を貧困に陥らせて、苦しませるのである。彼らは僧衣を見ると眉を顰め逃げ出すのだと、聖職者の生活を脅かす法案を、上程しようとする議員を、「詩篇」で口をきわめて罵ったのである。彼の胸中には「軍団クラブ」の実態が見えていたのであり、その姿は梅毒罹患による狂気の発現と、映っていたのであろう。

LET them, when they once get in
Sell the Nation for a Pin;
While they sit a-picking Straws
Let them rave of making Laws;
While they never hold their Tongue,
Let them dabble in their Dung ;
Let them form a grand Committee,
How to plague and starve the City;
Let them stare, and storm and frown,
When they see a Clergy-Gown. ⁴⁰⁶

彼らに、一度議席を手に入れたら、
議員バッジのために、国家を売らせてやろう。
彼らが眠そうに座っている時は、
法案作りに夢中にさせてやろう。
彼らはおしゃべりをやめないで、
糞尿の中で水遊びをさせてやろう。
大委員会を結集させて、
街を疫病にかからせ、飢えさせることを話し合わせよう。
聖職者に会えば、

⁴⁰⁶ Swift, *The Poems III*, p.831. ll.47-56.

その聖職者をにらみつけ、罵り、眉をひそめさせてやろう。

この詩でも、諷刺の矛先を教会に移して、強権をもつ高位聖職者に抵抗する弱者の低位聖職者に同情の目を投じている。「詩篇」は場面をスロップ (Roger Thropp) 師の訴訟問題に移して、聖職者に対する、いわれのない非難を非道徳的と難詰している。スロップ師が、パトロンであるウォーラー (Waller) 卿との土地争いで訴えられ、逮捕された事例を取り上げている。この頃、大土地所有者による教会所属地争いが頻発して、教会の権利が侵害されていた。さまざまな法律改正で、聖職者の生活が困窮している状況を、スロップ師の名を借りてこの詩篇で抗議したのであった。スウィフトは、スロップ師を困窮させたウォーラー卿を、名指しで糾弾した。同時に、議会の教会に対する弾圧的立法を、不当な行為であると訴えたのである。

Honest Keeper, drive him further,
In his Looks are Hell and Murther;
See the Scowling Visage drop,
Just as when he murther'd T—. ⁴⁰⁷

正直者の地獄の門番よ、ウォーラー卿を遠ざけよ
彼には地獄の人殺しの形相が見える。
あの怖い顔が落ちてくるのを見よ。
彼がスー師を殺害した時とちょうど同じような顔が。

リメリック (Limerick) のスロップ師が、パトロンであるウォーラー卿に対して訴訟や、迫害の数々を議会に訴えたが、議会は議員である卿に味方して、議員特権をもって訴えを退けた事件を取り上げている。「、彼がスロップ師を殺したときの怖い顔が見える。」と詩編で断罪した。スロップ師は 1736 年 1 月、失意のうちに死亡した。この詩篇は、内容が過激に過ぎるので、ダブリンで出版しようとの試みはなかったが、早くも 1736 年、ロンドンで、『アイリッシュ雑録』 (*An Irish Miscellany*) に採録されて上梓された。ダブリンでは、友人知己の間で回し読みされ、物議を醸した。そのため、スウィフトは議会から命を狙われる危険が生じた。スウィフトは暗殺者に狙われている事情を、シェリダン師に書き送っている。この頃より彼の諷刺は、詩においても過激な表現を用いて、必要以上に相手を刺激している。彼は人生の集大成を、過激な諷刺で締めくくろうとしたのである。この頃スウィフトは、書簡の記述もままならなくなっていて、この書簡もホワイトウェー夫人に代筆させていた。

⁴⁰⁷ Swift, *The Poems III*, pp.834-835. ll.141-144.

Swift and Mrs Whiteway to the Rev. Thomas

Sheridan

[Dublin, 15 May 1736]

Swift

If you could find Wine and Victuals, I could be glad to pass some part of the Summer with you, if Health would permit me; for I have some Club-Enemies that would be glad to shoot me, and I do not love to be shot; it is a Death I have a particular Aversion to. But I shall henceforth walk with Servants well armed, and have ordered them to kill my Killers; however, I would have them be the Beginners.⁴⁰⁸

スウィフトとホワイトウェー夫人からトーマス・シェリダン師へ

[ダブリン、1736年5月15日]

スウィフト

ワインか何か食べ物をお持ちなら、この夏一時期、喜んで貴方と過ごしたい。健康が許せばの事ですが、というのも、ある団体の人に憎まれていまして、その人たちは私を撃ち殺したいと思っているようです。私は殺されたくはありません。私はとりわけ死ぬのは嫌ですので。今後私は召使いに銃を持たせて、私を狙うものを殺させます。しかし、召使たちは殺しに関しては素人でしょうけれども。

この夏、共に過ごそうというシェリダン師の申し入れを、健康さえ許せばと、スウィフトは言い訳をしている。この当時彼は、宿痾の眩暈と難聴に悩まされていた。議会の反感を受け命が狙われているので、従者に武装させて、暗殺者が来たら射殺せよと命じていると、スウィフトは語っている。射殺するなどとの行為は、馴れていないのだとユーモアで締めくくっているが、死を10年後に迎える人物の作品とは思えぬほど精力的で、格調が高く、諷刺の精神が少しも衰えていない長編詩である。この頃には会話も、筆記もままならなかったようで、この書簡もホワイトウェー夫人との連書となっている。

Swift to Alexander Pope

Dublin, April 22, 1736.

My common illness is of that kind which utterly disqualifies me for all conversation; I mean my Deafness; and indeed it is that only which quite discourageth me from all thoughts of coming to England; because I am never sure that it may not return in a week. If it were a good honest Gout, I could catch an interval, to take a voyage, and in a warm lodging get an easy chair, and be able to

⁴⁰⁸ Swift, *The Correspondence IV*, p.489.

hear, and roar among my friends. 409

スウィフトからアレクサンダー・ポープへ

ダブリン、1736年4月22日

私のいつもの病気は、会話すら全く出来ないほど、酷くなっています。耳が聞こえない故ですが、本当にイングランドに行く気にもなれません。確かではないですが1週間以内には、ダブリンに戻れそうにありません。もし本当に痛風なら、少し待って、間を置けば、旅に出られそうです。温かい宿で、安楽椅子に座って、友人たちに交じって、大笑いしたり、話を聞いたりもできるでしょう。

ここで、スウィフトは難聴に加えて、痛風にも悩まされていることも訴えている。この当時のスウィフトが、よく文通していた年若の友人フォード (Ford) への、1736年1月22日の書簡でも、同様の悩みを打ち明けている。最近20ヶ月の間、左程めまいは酷くはないが、続いているので心が萎えると、宿痾が頻発していることを嘆いている。⁴¹⁰ 何より心を悩ませているのは、イングランドによる不平等な扱いと、両国に巣くう権力者の横暴であると、訴えている。自分が出来ることは彼らを憎み、諷刺することであると、未だ諷刺の筆の衰えていないことを誇っている書簡である。1735年家政婦ブレント (Brent) 夫人が死去した。その後を、彼女の娘リッジウェー (Ridgeway) 夫人が引き継いだのだが、スウィフトは従姉妹のホワイトウェー夫人を頼りにしていたようであった。夫人は1690年生まれで、最初の夫セオフィロス・ハリソン (Theophilus Harrison) 師とは離婚し、1716年、2度目の夫エドワード・ホワイトウェー (Edward Whiteway) と結婚していた。その夫とも1730年死別して、未亡人となった後、スウィフトの許に来たのであった。彼女の息子ジョン・ホワイトウェー (John Whiteway 1723-1798) は、スウィフトの死後解剖を行った、スティーブンス病院 (Steven's Hospital) の外科医である。1737年4月には、ホワイトウェー夫人に死後の始末を依頼している。この作品が遺作になることを予知していたので、何をどのように表現しても、自分に降りかかる危害は少ないと感じていたようで、自分の実像が白日のもとに、曝け出されても影響は少ないと、一段と鋭い諷刺を放ったのである。梅毒罹患による精神異常が、わが身に及ばないのだとの安心の境地にもなっていた。そのため、「軍団クラブ」と過激な呼びかけも、狂気のなせることと思いつけることも出来たのである。この作品を最後に、次第にスウィフトの知力は衰え、会話もままならなくなり、意識が混濁した状態のまま1745年10月19日に死去した。

⁴⁰⁹ Swift, *The Correspondence IV*, p.476.

⁴¹⁰ ...” I have not enjoyed a day of Health for twenty months past, with continuall giddyness though not always violent, yet enough to break my Spirits,...”(Swift, *The Correspondence IV*, p.504)

結び

1745年10月19日、聖パトリック教会の首席司祭のまま、スウィフトは死去した。若年よりの経済的困窮と孤児同然の環境にあった彼は、鬱勃とした野心を示した青春期に、幾多の背信や裏切りにあって、人間不信を募らせていた。T. C. D.を終了して、社会に乗り出す矢先、若さに任せての放蕩がもたらした梅毒罹患が、彼の将来に暗い影を落とした。1734年11月、『ジェントルマン マガジン』(Gentlemen's Magazine) に、耳鳴りと眩暈を嘆くスウィフトの、「ラテン語による詩」(“Written by the Reverend Dr. Swift, On his own Deafness”) が掲載された。

Vertiginosus, inops, surdus, male gratus amicis;
Non campana sonans, tonitru non ab Jove missum,
Quod mage mirandum, saltem si credere fas est,
Non clamosa meas mulier jam percutit aures.⁴¹¹

難聴と眩暈は、単なる友達より性質が悪い、
鐘の鳴る音も聞こえず、天空の輝きも貧しく見えるだけである。
見える景色は、魔法使いのように、飛び跳ねまわり、
騒音はそよ風のように、耳幕に当たる。

スウィフトは、難聴とめまいが、梅毒罹患の結果であることを認識していたのであった。ここには梅毒罹患の初期の頃によく見られる、幻影や幻聴が謳われている。この詩編を当時の医学者たちが吟味熟読していれば、彼の病因が何処にあるか判明したかもしれない。誰もスウィフト以上には、彼の病因に関する直観力を、持ち合わせていなかった。彼は自分の病気治療に関心を集中させていたが、当時の医学水準では、治療法は発見出来なかった。この詩編の執筆の頃には、悪戯にわが身の行く末を案じるよりはとの、諦めの境地に達していたのであろう。梅毒罹患を悟った時、彼は人生に希望を見失ってしまった。その絶望が梅毒のもたらす疾患、精神障害を知るに及んで、自己韜晦の技を用いて、自己を隠蔽するようになった。精神障害がもたらす狂気の強迫観念を怖れるあまり、梅毒が焼結を極めたその初期、梅毒罹患者が社会から隔離された風習に倣って、自身を世間から隠したのであった。その便法として諷刺表現で実態を隠し、自己韜晦の手段として、多彩なペルソナを用いることを覚えたのであった。自己の見解を表現する際も、実態を諷刺の陰に潜

⁴¹¹ Earnest William Browning, *The Poems of Jonathan Swift, D.D., Volume I*, p.370.

ませた。彼の諷刺表現は、時として過激に走り過ぎていたため、時として、著者の素性が明らかになってしまうことがあったが、彼はその点は意に介していなかった。彼が諷刺表現を多用した第1の理由として考えられるのは、『出版認可法』であった。この法案が廃止された当時とはいえ、社会に悪影響を与えると認定された出版物の著者に、重罰が科せられていたこともあって、彼は自己の見解を表現するにあたり、諷刺表現を多用して、実像を隠していた。以来、それが習慣となり、表現様式は、過激な諷刺に終始したものになっていった。様々な矛盾の中に身をおくスウィフトの実像は、彼自身の韜晦癖もあって、中々解明に近づくことは困難であった。

スウィフトが生を受けた17世紀後半は、複雑な時代であった。スペインの無敵艦隊を撃ち破って、七つの海の制海権を手にしたイギリスは、戦いの中世から一人抜け出そうとしていた。チューダー朝ヘンリー8世の離婚問題に端を発した宗教改革も、エリザベス1世の統治の終わりには、揺るぎないものとなっていたが、2度にわたる内乱（クロムウェルのピューリタン革命と、ウィリアムと王妃メリーの名誉革命）によって、カトリック教国であったアイルランドは、プロテスタントの国王の統治する国家へと変貌していった。そのようなアイルランドで、プロテスタントの聖職者として、彼は意に染まぬ地位に甘んじなくてはならなかった。彼の自尊心は、大いに傷ついたのであった。法治国家としての体裁を整え、議会中心の政治体制をとり始めたアイルランドは、2大政党の萌芽を見た時代でもあった。征服国家イングランドと、披征服国家アイルランドとの相克の狭間で、アイルランド生まれのイングランド人の末裔という苦難を強いられた。祖先にイングランドの貴族を頂くスウィフトにとって、内乱の渦に巻き込まれ、宗教の狭間でイングランドを離れ、アイルランド移住を余儀なくされたが、心は常に父祖の地イングランドに向けられていた。父親の顔も見ずに育ったスウィフトの、学費を賄ったのは叔父グッドウィン・スウィフトであった。しかし、この叔父の差し伸べる援助の薄さに、若いスウィフトは不満の声を上げていた。青春時代の満たされぬ思いをぶちまけたのが、『桶物語』であった。彼の満たされなかった青春の想いは、テンプル邸での生活のなかで、テンプル卿の聲咳に触れるに従って、卿の学識や見識を知るに及んで次第に癒されていった。

初めは『桶物語』で宗教批判を展開するつもりであったが、テンプル卿の人柄に魅せられたスウィフトは、卿の著作『古代と近代の学問について』(*Essay on Ancient and Modern Learning*)が、ウォットンやベントレーらの批判を浴びたことで、急きょ卿の著作の援護に舵を切った。そのため、『桶物語』は、宗教批判の部分の割合に比べて、文芸批判に割く割合が増えて行った。しかし、世間の批判は、『桶物語』での過激な宗教批判に向けられてしまっていた。スウィフトが宗教批判で、批判の矢を浴びせているのは、カトリック教徒と熱狂的なプロテスタント諸派に限られたのであった。墮落の極にあった英国国教会に対する批判は、殆どされなかったのも誤解を招く元であった。『桶物語』の「脱線」の章は、すべてはウォットンやベントレーたちの、文芸批評に対する諷刺であることが、この事実を裏付けている。宗教に関する諷刺が、熱狂的なプロテスタント諸派と、カトリック教徒

に限られていることも、『桶物語』が過激な文芸諷刺の、反動を避けるため投げ込まれた「空の桶」であることを物語っている。

スウィフトの諷刺の原点は、彼個人に寄せられた差別や裏切りに対する私憤や、理不尽な国家権力の乱用に対する公憤である。社会を善導することで、道徳的社会が構築出来ると信じて、梅毒治癒の近道である道徳社会実現のため、社会批判を行ったのである。諷刺による報復が、わが身に及ぶことを怖れたスウィフトは、自己韜晦で批判を避けるか、ペルソナに身を任せて本体を隠して、風当たりを避けたのであった。一連の『ドレイピア書簡』は、イングランド政府の、アイルランドに対する理不尽な権力の乱用への、公憤に起因するものであった。自国通貨の鑄造も許されぬうえ、その不条理を抗議することさえしないアイルランドの、不甲斐なさに対する憤りであり、不公正な政策に対する抗議であった。アイルランドに貿易禁止を命じる、イングランド政府による「禁圧法」は、アイルランド国家経済を破綻の淵に追いやり、国民は塗炭の苦しみに陥らされた。この経済的困窮から脱出する手段として提案した、諷刺表現に満ちた『謙虚な提案』は、謙虚さの欠片も見られぬ、幼児の死体の輸出策の提案であった。このような過激な諷刺表現こそ、彼の真骨頂であった。感性豊かなスウィフトは、梅毒罹患も通常以上に深刻に感じたのである。そのため彼の詩才は、本来抒情詩人として大成出来たのに、梅毒罹患の影響から、諷刺傾向を強めたものとなり、本来の抒情性が欠落してしまい、抒情詩人としての評価が得られなかった。彼の初期の詩作は、叙景詩「朝の情景」と「夕べの景観」の様な抒情詩であったのだが、ともすれば諷刺の視線で抒情を詠いあげたので、諷刺詩の方向に向かってしまっていた。その中であって、ステラやヴァネッサに対する詩篇は、女性に対する肉体愛の存在を許さぬスウィフトの、僅かに残った抒情詩人としての感性が蘇っている。彼の怒りの発露が綴られている詩である『近代女性日誌』は、国家的財政危機にも関わらず、華美な生活を続ける女性たちに、あくなき憎悪の眼差しを注いでいる姿がみられる。スウィフトが唯一、終生変わらぬ愛情を注いだのはステラであった。しかし、そのステラとも、結婚は出来なかったのである。結婚を迫ったヴァネッサには、冷たい眼差しで報いた。イングランドでの聖職禄獲得の障壁となったサマーセット公爵夫人には、『ウィンザーの予言』(Windor's Prophet) で復讐を果たすほどの、女性に対する粘液質な仕打ちを見せたスウィフトであった。

T. C. D.時代に罹患した梅毒が、彼に結婚をあきらめさせたのであり、彼に結婚不適應の烙印を押すこととなったのも、梅毒罹患が原因している。将来に希望が見られなくなった絶望から、個人に対する差別や、不当な扱いに対する復讐を、鋭い諷刺で報いたのである。そのため彼の諷刺表現は、ユーモアの欠片も見られないものとなった。ステラを失ったのち、醜悪詩とも言うべき詩篇を上梓して、売春婦を諷刺したのは、梅毒罹患に起因しているのである。彼の自己韜晦の試みも、彼の人格形成も梅毒罹患に原因があった。テンプル卿に心酔していたスウィフトは、卿に真似た歴史的指導書ともなるべき体裁の執筆を、『ガリヴァー旅行記』で果たそうと心がけていた。そのため、スウィフトが見聞きし、関わっ

た現実の政界の実態を、作品中に記述して、道徳的社会のあるべき姿を示そうとしたのである。その真意が伝わらないことを怖れて、『アン女王統治の最期の4年』(*The Last four Years of the Reign of Queen Anne*)を、匿名で上梓することで果たした。スウィフト自身が、トーリー党やホイッグ党の貴顕との交遊の体験を、ありのまま綴ったこの書は、上梓することを反対されたほどであった。真意を正しく伝えるため、スウィフトは、『ガリヴァー旅行記』を想像の国の架空の物語として、現実の姿を映して、あるべき理想社会の姿を描き出し上梓したのである。

『ガリヴァー旅行記』は善悪の対比の中で、理性が統治する理想的国家の実現を目指したのであり、理想的な国家の、道徳的社会の実現によって、自分の罹患した梅毒の治癒をも願ったのであった。理想的国家にあっても、不正は横行し、悪徳が蔓延していた。悪徳や不正を糾すために鑿められた諷刺の数々は、不条理な国家権力に対する公憤や、スウィフト個人に加えられた理不尽な、いわれのない差別や、裏切りに対する私憤に起因するものであった。このような悪徳の栄える時代の改善策として、スウィフトは第4話「賢馬の国」で、ヒエラルキーを転換させて、馬と人との立場の相違を示して、聖書が語るすべての生物の頂点に君臨する人間の危うさを、明らかにしたのである。スウィフトは若い頃より乗馬に親しんでおり、馬が大好きであった。この第4話を馬の国にしたのも、チャーサーの『カンタベリー物語』が脳裏にあった故である。この本の中に描かれている話は生活の中の物語であり、実生活にあり得ることである。人生は旅に例えられるが、まさにこの小さい社会の縮図であるからだ。このヒエラルキーの転換は、革命に繋がる危険な思想でもある。スウィフトの結婚に関する謎は、教区登録簿の出現を待つ以外にないが、スウィフトを苦しめた悪疾は、推論の積み重ねで梅毒に行き着いたのである。18世紀最大の諷刺作家の地位を『ガリヴァー旅行記』だけで確立したスウィフトの謎に満ちた生涯の探究は、まだその緒に就いたに過ぎない。

Appendix

Four Paragraphs eliminated from Part Three, Chapter Three in *Gulliver's Travels* of its first edition.

About three Years before my Arrival among them, while the King was in his progree over the Dominions, there happened an extraordinary Accident which had like to have put a Period to the Fate of that Monarchy, at least as it is now Innstituted. Lindalino the second City in the Kingdom was the first his Majesty visited in his Progress. Three Days after his Departure, the Inhabitants, who had often complained of great Oppressions, shut the Town Gates, seized on the Governor, and with incredible Speed and Labour erected four Large Towers, one at every Corner of the City (which is an exact Square) equal in Heigh to a strong pointed Rock that stands directly in the Center of the City. Upon the Top of each Tower, as well as upon the Rock, they fixed a great Loadstone, and in case their Design should fail, they had provided a vast Quantity of the most combustibile Fewel, hoping to burst therewith the adamantine Bottom of the Island, if the Loadstone Project should miscarry.

It was eight Months before the King had perfect Notice that the Lindalinians were in Rebellion. He then commanded that the Island should be wafted over the City. The People were unanimous, and had laid in Stone of Provisions, and a great River runs through the middle of the Town. The King hovered over them several Days to deprive them of the Sun and the Rain. He ordered many Packthreads to be let down, yet not a Person offered to send up a Petition, but instead thereof, very bold Demands, the Redress of all their Grievances, great Immunitys, the Choice of their own Governor, and other the like Exorbitances. Upon which his Majesty commanded all the Inhabitants of the Island to cast great Stones from the lower gallery into the Town; but the Citizens had provided agaInnst this Mischief by conveying their Persons and Effects into four Towers, and other strong Buildings, and Vaults under Ground.

The King being now determined to reduce this proud People, ordered that the Island should descend gentry within four Yards of the Top of the Towers and Rock. This was accordingly done; but the Officers employed in that Work found the Descent much speedier than usual, and by turning the Loadstone could not without great Difficulty

keep it in a firm Position, but found the Island inclining to fall. They sent the King immediate Intelligence of this astonishing Event and begged his Majesty's Permission to raise the Island higher; the King consented, a general Council was called, and the Officers of the Loadstone ordered to attend. One of the oldest and expertest among them obtained leave to try an Experiment. He took a strong Line of an Hundred Yards, and the Island being raised over the Town above the attracting Power they had felt. He fastened a Piece of Adamant to the End of his Line, which had in it a Mixture of Iron mineral, of the same Nature with that whereof the Bottom or lower Surface of the Island is composed, and from the lower Gallery let it down slowly towards the Top of the Towers. The Adamant was not descended four Yards, before the Officer felt it drawn so strongly downwards that he could hardly pull it buck. He then threw down several small Pieces of Adamant, and observed that they were all violently attracted by the Top of the Tower. The same Experiment was made on the other three Towers, and on the Rock with the same Effect.

This Incident broke entirely the King's Measures and (to dwell no longer on other Circumstances) he was forced to give the Town their own Conditions.

I was assured by a great Minister, that if the Island had descended so near the Town, as not to be able to raise it self, the Citizens were determined to fix it for ever, to kill the King and all his Servants, and entirely change the Government.

(These lines are extract from Swift's *Gulliver's Travels* with Introduction by Harold Williams. Oxford: Basil Blackwell: 1941, pp.293-294.)

Chronology of Jonathan Swift

- 1667 Birth of Swift in Dublin on 30 November.
- 1673-82 Swift at Kilkenny school.
- 1682-86 Swift attends Trinity College Dublin, B.A. *special gratia*.
- 1683 Rye House Plot.
- 1685 Death of Charles II, accession of James II.
- 1688 Glorious Revolution: William Orange invades England and ousts James II from throne.
- 1689 Swift given employment in Sir William Temple's household of MoorPark, Farmham, Surrey; meet Esther Johnson (Stella).
- 1690 Battle of Boyne, James II defeated by William III in Ireland. Swift returns to Ireland in May.
- 1691 Swift back to England in August, and returns to MoorPark.
- 1692 Swift obtains M.A., Oxford. He published his first work, *Ode to the Athenian Society*.
- 1694 Swift returns in Ireland, takes deacon's orders.
- 1695 Swift ordained priest, becomes prebendary of Kilroot, near Belfast.
- 1696-99 Swift again at Moor Park. He wrote *A Tale of a Tub* and related works.
- 1699 Swift returns to Ireland after the death of William Temple, becomes chaplain to Earl of Berkeley, lord Justice of Ireland.
- 1700 Swift becomes Vicar of Laracor, Co. Meath, and prebendary of St. Patrick's Cathedral, Dublin.
- 1701 Swift goes to England with Lord Berkeley. He publishes *Contests and Dissentions in Athens and Rome*. Swift Edited Temple's *Micellanea III*.
- 1702 Swift becomes D.D., Trinity College, Dublin.
- 1704 Swift published *A Tale of a Tub*, *Battle of the Books*, and *Mechanical Operation of the Spirit*.
- 1707-09 Swift in London on Church of Ireland business. He meets Addison, Steele and other authors. He writes tracts on political and ecclesiastical Issues and begins friendship with Esther Vanhomrigh
- 1708-09 Swift begins to publish *Bickerstaff Papers*.
- 1709 Swift's poem *A Description of the Morning* appears in No. 9.

- 1710 Swift comes to London in September on behalf of Church of Ireland, meets Robert Harley, appointed editor of pro-government paper, *The Examiner*; begins to promote friendship with John Arbuthnot.
- 1710-14 Swift works for Tory government against Marlborough and Whig Party as political journalist.
- 1711 Swift writes miscellanies in religious problem, *Sentiment of a Church of England Man, Against Abolishing Christianity, etc.*
- 1712 Swift writes *Proposal for Correcting the English Tongue*.
- 1713 Swift installed as Dean of St. Patrick's Cathedral, Dublin, and returns to London, founding of Scriblerus Club.
- 1714 Swift returns to Ireland after fall of Tory government and death of Queen Ann.
- 1715 First Jacobite Rebellion
- 1720 Swift's *Proposal for the Universal Use of Irish Manufacture, Letter to a Young Gentleman, Lately Entered into Holy Orders*.
- 1723 Death of Vanessa.
- 1724 *The Drapier's Letters* becomes known as Hibernian Patriot, and government offers reward for discovery of Drapier.
- 1726 Swift goes to London to publish *Gulliver's Travels*.
- 1727 Swift's final visit to London.
- 1728 Death of Stella.
- 1729 *Modest Proposal* appears.
- 1731 Swift writes Verses *On the Death of Dr. Swift*. (Published 1739).
- 1733 *On Poetry A Rapsody* appears.
- 1736 *with Legion Club*, Swift lampoons attaching member of Irish Parliament.
- 1739 Swift's verse *on the Death of Dr. Swift* published.
- 1742 Swift declared "of unsound mind and memory".
- 1744 Death of Alexander Pope.
- 1745 Death of Swift, 19 October. *Directions to Servants*.

Primary Sources

- Swift, Jonathan. *A Proposal for Correcting the English Tongue Polite Conversation, Etc.* Edited by Herber Davis and Louis Land. Oxford: Basil Blackwell, 1964.
- . *A Tale of a Tub with Other Early Works 1696-1707.* Edited by Herber Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1965.
- . *Bickerstaff Papers and Pamphlets on the Church.* Edited by Herber Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1957.
- . *Gulliver's Travels 1726 with an Introduction.* Edited by Harold Williams. Oxford: Basil Blackwell, 1941.
- . *Irish Tracts 1711-1713.* Edited by Herbert Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1964.
- . *Political Tracts 1713-1719.* Edited by Herbert Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1964.
- . *Direction to Servants and Miscellaneous Pieces 1733-1742.* Edited by Herbert Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1964.
- . *Irish Tracts 1720-1723 and Sermons with an Introductory Essay and Note on the Sermons by Louis Land.* Edited by Louis Land. Oxford: Basil Blackwell, 1948.
- . *Irish Tracts 1728-1733.* Edited by Herbert Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1971.
- . *Journal to Stella.* Edited by Harold Williams. Oxford: Basil Blackwell, 1974.
- . *Miscellaneous and Autobiographical Pieces, Fragments and Marginalia.* Edited by Herbert Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1962.
- . *The Drapier's Letters and other Works 1724-1726.* Edited by Herbert Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1941.
- . *The Examiner and Other Pieces Written in 1710-11.* Edited by Herbert Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1966.
- . *The Correspondence of Jonathan Swift I-V.* Edited by Harold Williams. Oxford: Clarendon Press, 1963.
- . *The History of the Four Last Years of the Queen.* Edited by Herbert Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1951.
- . *The Poems of Jonathan Swift III.* Edited by Harold Williams. Oxford: Clarendon Press, 1958.

Secondary Sources

- Barrett, John D.D. *An Essay on The Earlier Part of The Life of Jonathan Swift*. London: Kessinger Legacy Reprints, 1808.
- Beddoes, Thomas. *Essays on The Means of avoiding Habitual Sickliness, and Premature Martality, Eassy Ninth*. Printed by Wills, Bristol: St.Auggustines's, 1802-1803.
- Boller, Francois, and Margaret, Forbes. "History of dementia and dementia in history; An Overview". *Journal of the Neutrological Science*, Vol 158, 2nd. June,1998: pp.125-133.
- Boyle, John. *Fifth Earl of Cork and Orrery Remarks on the Life and Writing of Dr. Jonathan Swift*. Edited by Joao Froes, Newark: University of Delaware Press, 2000.
- Burn, John Southerden. *The History of Parish Registers in England*. London: E.P.Publishing Limited, 1976.
- Case, E Arthur. *Four Essays on Gulliver's Travels Gloucester*. Massachusetts: Peter Smith, 1958.
- Cressy, David *.Birth, marriage & Death, Titual, Religeon, and the Life-Cycle in Tudor and Stuart*. Oxford: Oxford University Press,1999.
- Cuddon, John Antony. *A Dictionary of Literary Terms and Literary Theory*, New Massachusetts : Blackwell Publishers,1998.
- Ehrenpreis, Irvin. *Swift, The Man, his Works, and The Age I-III*. Massachusetts: Harvard University Press Cambridge, 1983.
- Foster, John. *The Life of Jonathan Swift V-1 1667-1711*. London: Murray, Albemarle Street, 1873.
- Glendinning, Victoria. *Jonathan Swift*. New York: Henry Holt and Company, 1866.
- Gold, Maxwell. *Swift's Marriage to Stella Together with unprinted and misprinted letter*. Massachusetts : Harverd University Press, 1937.
- Johnson, Samuel. *The Lives of the English Poets, Congreve to Gray*. London J. M. Dent & sons LTd. New York: E. P. Dutton & Co INC, 1925.
- Maxwell, Constanitia. *A History of Trinity College Dublin 1591-1582*. Dublin: The University Press Trinity College, 1940.
- Orwell, George. *Politics VS. Literature: An Examination of Gulliver's Travels The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Volume 4 In*

- Front of Your Nose 1945-1950*. New York: Penguin Books, 1968.
- Pope, Alexander. *The Dunciad*. London: James Southerland Methuen & Co. Ltd, 1943.
- Scott, Sir Walter. *Memoirs of Jonathan Swift D.D. Dean of St. Patrick's Dublin Robert Cadell*. London: Edingburgh Whittaker and Co, 1834.
- . *The Works of Jonathan Swift Dean of St. Patrick's Dublin in nineteenth Volumes Vol VI*. London : Bickers & Son Leicester Square, 1883.
- Stephen, Sir, Leslie. *English Men of Letters 'Swift' English Faculty Library*. Oxford: Macmillan and Co, 1882.
- Temple, Sir William. "Miscellanea Third Part Published by Jonathan Swift". Printed for Benjamin Tooke at the middle Temple Gate in Freet Street, 1701.
- Williams, Kathleen. "Swift The Critical Heritage". *Riverside*. New York: New York Barnes & Noble Inc, 1970.
- Wilde, William Robert Wilis. *The Closing Years of Dean Swift's Life*. Dublin: Hodges and Smith, 1849.

Third Sources

- Browning, Earnes William. *The Poems of Johnathan Swift, D.D.* Massachusetts: Indy Publish, 2007.
- Krafft-Ebing, Richard Von. *Psychopathia Sexualis A Medico-Forensic Study foreword by Daniel Blain.* Complete English-language edition, New York: Arcade Publishing.
- Knox, Ronald. *Essay in Satire*, London: Sheed & Ward, 1928.
- Marjorie, Lorch. "Language and Memory Disorder in the Case of Jonathan Swift Consideration on retrospective diagnosis.", *Occasional Paper Brain* Vol.129, London: Birbeck College, University of London Brain, 2006. pp.3127-3137.
- Ogborn, Jane, Buckroyd, Peter. *Satire*, London: Cambridge University Press, 2001.
- Willson, Sir. Thomas George. *Swift's Deafness and His Last Illness*, The Irish Journal of Medical Science Sixth series, No.162, Dublin, 1939.

- 岩崎泰男、『スウィフトの時代の政争と文学』、東京、英宝社、1979年。
- 、『『フウイヌム国渡航記』と異教文明』、『同志社大学英語英文研究』第31号、1983年2月、1-23頁。
- 井野瀬久美恵、『イギリス文化史入門』、京都、昭和堂、2003年。
- 角山栄、「アイルランドの羊毛工業の抑圧-イギリス重商主義論」、『立命館経済学』第11号、1962年。
- クロード・ケテル、『梅毒の歴史』寺田光徳訳、東京、藤原書店、1996年。
- 先川暢郎、「ジョナサン・スウィフトと『ガリヴァー旅行記』『フウイヌム国渡航記』の諷刺性をめぐって」、『武蔵野大学人文学会雑誌』、第38巻、2006年、96-87頁。
- ウィリアム・シェークスピア、『シェークスピア全集』小田島雄志訳、東京、白水社、1986年。
- シシル、『色彩の紋章』伊藤亜紀、徳井淑子訳、東京、悠書館、2009年。
- 新保昇一、『諷刺・アイロニー・ヒューモア英文学論考ノート』、東京、近代文芸社、1996年。
- 徳井淑子、『色で読む中世ヨーロッパ』、東京、講談社、2006年。
- 夏目漱石、『漱石全集』文芸評論、第15巻、東京、岩波書店、1995年。
- 西山徹、「控えめな提案の目的」、『18世紀イギリス文学研究』、日本ジョンソン協会編、雄松堂出版、1996年、193-202頁。
- 、「女体解体カリキュラム - 『傷つけられた女の話』と『新婚の若い婦人への手紙』を結ぶ線』、『岡山商大論叢』、第32巻、第3号、1997年1月、86頁。

- 浜林正夫、『イギリス宗教史』、青森、大月書店、1987年。
- 深町弘三、「スウィフトの桶物語」、『英文學研究』第31巻第2号、日本英文学会、1955年、285-288頁。
- ジークムント・フロイド、『精神分析学入門』懸田克躬訳、東京、中央公論社、1973年。
- 前田仁、「神経梅毒のトピックス・中枢神経トピックス」、『北里医学会総会抄録』第18回1992年。
- ドナルド・マッキム、『キリスト教神学用語辞典』神代真砂実ほか訳、東京、日本キリスト教団出版局、2002年。
- 三浦謙、「『桶物語』に見られる宗教批判について」、『中京大学教養叢』第19巻第4号、1979年、623-635頁。
- 、『スウィフト管見』、東京、南雲堂、1984年。
- 、「スウィフトの生涯-14-1732年1月ゲイの書簡から、ダブリンに線とパトリック教会病院を設立する計画まで(1732-1735)」、『中京大学教養叢』第31巻第3号、1990年、829-847頁。
- 、『炎の軌跡：ジョナサン・スウィフトの生涯』、東京、南雲堂、1994年。
- 三宅川正、「J・Swiftの諷刺について」、『關西大學文學論集』第15巻、1966年7月、13-27頁。
- 、『英文学におけるユーモアと諷刺の伝統』、西宮、関西学院出版部、1983年。
- 山内暁彦、「*A Lump of Deformity* ガリヴァー旅行記における病気について」、『言語文化研究』徳島大学紀要第7巻、2000年、17-44頁。
- 、「スウィフト、諷刺、〈擬似ユートピア〉：『ガリヴァー旅行記』」、徳島、徳島大出版、1993年。
- カール・グスタフ・ユング、『心理学的類型』吉村博次訳、東京、中央公論社、2012年、101頁。

Work Consulted

- Arthur Quiller-Couch. *The Oxford Book of English Verse 1250-1918*. Oxford: The Clarendon Press, 1963.
- Briggs, Asa. *A Social History of England*. Tokyo, Seitensha, 2004.
- Fleetwood F. John. *The History of Medicine in Ireland*. Dublin: The Skellid Press, 1983.
- Fitz Patrick, Elizabeth, and Giespire, Raymond Editors. *The Parish in Medeval and Early Modern Ireland, Community, Territory and Building*. America: Four Courts Press, 2006.
- Johnston, Denis. *In search of Swift*. Dublin: Hodges Figgis & Co. Ltd, 1959.
- Peters, Belinda Roberts. *Marriage in Seventeenth Century English Political Thought*. Hampshire, England: Palgrave Macmillan, 2004.
- Stone, Lawrence. *Uncertain Unions Marriage in England 1660-1753*. Oxford: Oxford University Press, 1882.
- . *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*. New York: Abridged Edition, Penguin Books, 1979.
- Karl, Suso Frank. *Geschichte des Chrisshen Monchtuims*. Tokyo, Kyobunkan.2002.
- Miller, Charles Kerby. *Memoirs of the extraordinary Life, Works, and Discovers of Martinus Scriblerus*, New York: Russell & Russell, 1966.
- 有田昌哉、『ジョナサン・スウィフトと女性たち』、東京、近代文芸社、1997年。
- アレッサンドロ・ロンカリア、『ウィリアム・ペティの経済理論』津波古充文訳、京都、昭和堂、1988年。
- 安藤一也、『神経症状と捉え方と考え方』、東京、中外医学社、1986年。
- 今井宏ほか編、『イギリス史 II』、東京、山川出版社、1990年。
- 今井登志喜、『英国社会史』、東京、東京大学出版会、2001年。
- 石井美樹子、『イギリス中世の女たち』、東京、大修館書店、1997年。
- R・ウェレック、A・ウォーレン、『文学の理論』太田三郎訳、東京、筑摩書房、1967年。
- バーバラ・ウォーカー、『神話・伝承事典』山下主一郎ほか訳、東京、大修館書店、1988年。
- 小野功生、『17世紀イギリスの宗教と政治』、東京、法政大学出版局、1991年。
- 小野幹夫、『桶物語』の諷刺』、『滋賀英文学會論集』第2号、1983年、23-36頁。
- 海保真夫、『文人たちのイギリス十八世紀』、東京、慶応義塾大学出版会、2001年。
- 河崎良二、『桶物語』試論』、『大阪商業大学論集』第58号、1980年。131-147頁。

- 、「スウィフトの怒りと笑い『控えめな提案の構造』、『大阪商業大学論集』第70号、1984年11月、55-71頁。
- 木下卓・清水明、『ガリヴァー旅行記』、京都、ミネルヴァ書房、2006年。
- 岸本広司、「キルルートのスウィフト」『岡山大学教育学部研究集録』第136号、2007年、43-52頁。
- 、「日本におけるスウィフト研究」『山梨大学教育人間科学部紀要』第11号、2004年、49-70頁。
- 木下隆雄、「フイヌム考」、『熊本学園大学文学言語論集』第2号、1997年12月、151-169頁。
- 桑原博昭、立命館外国文学研究会編、「アイルランドにおけるスウィフト1」、『外国文学研究』第47号、1980年、89-106頁。
- 小嶋潤、『西洋教会史』、東京、刀水書房、1991年。
- 、『イギリス教会史』、東京、刀水書房、1988年。
- 近藤和彦編、『長い18世紀のイギリス：その政治社会』、東京、山川出版社、2002年。
- 佐久間康夫ほか編著、『概説イギリス文化史』、京都、ミネルヴァ書房、2002年。
- 佐藤信夫、『レトリック感覚』、東京、講談社、1992年。
- 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大著、『レトリック辞典』、東京、大修館書店、2006年。
- 鈴木善三、『イギリス諷刺文学の系譜』、東京、研究社出版、1996年。
- 玉田佳子、「Modest Proposalにおける諷刺とパロディ」*Asphodel*第16号、同志社女子大学学芸学部、1982年10月5日、16-32頁。
- ジョージ・トレヴェリアン、『イギリス史』大島真弓監訳、東京、みすず書房、1973年。
- 千葉康樹、「反復と逸脱 スウィフト『桶物語』第5版について」、『東邦大学教養紀要』2001年、86-71頁。
- 千葉幹子、「『Modest Proposal』についての一考察：その諷刺の意味するもの」、*Asphodel*同志社女子大学、1982年、33-56頁。
- 友清理士、『イギリス革命史』上下、東京、研究社、2004年。
- 中野好之・海保貞夫、『スウィフト政治・宗教論集』、東京、法政大学出版局、1989年。
- 中野好夫、『スウィフト考』、東京、岩波新書、1971年。
- 野内良三、『日本語修辭辞典』、東京、図書刊行会、2005年。
- 波多野裕造、『物語アイルランドの歴史』、東京、中央公論、1994年。
- 橋沼克美、「ジョナサン・スウィフトと医師たち」、『一橋論叢』第118巻第3号、1997年9月、438-455頁。
- 、「『桶物語』の政治的意義」、『言語文化』第42巻、2005年、61-75頁。
- 、「サー・ウィリアム・テンプル」、『人文科学研究』第36号、1999年、79-220頁。
- スーザン・ヒッチコックほか、『世界の宗教：信仰の歴史と聖地への旅』、東京、日経ナショナル・ジオグラフィック社、2006年。

- クリストファー・ヒル、『17世紀イギリスの民衆と思想』小野功生ほか訳、東京、法政大学出版局、1998年。
- ブリジット・ヒル、『女性達の18世紀—イギリスの場合』福田良子訳、東京、みすず書房、1990年。
- アド・フリース、『イメージ・シンボル事典』山下主一郎ほか訳、東京、大修館書店、1984年。
- 宮井敏、「J・スウィフト『桶物語の諷刺』」、『同志社大学英語研究』第10号、1975年、1-12頁。
- 盛節子、『アイルランドの宗教と文化：キリスト教受容の歴史』、東京、日本基督教団出版局、1991年。
- 森谷寛之、『チックの心理療法』、東京、金剛出版、1995年。
- 四方田犬彦、「空想旅行の修辞学 ガリヴァー旅行記論」東京、七月堂、1996年。
- 和田俊英、『スウィフトの詩』、福岡、九州大学出版会、1993年。
- 山口勝正、“Disease and Decay in Swift’s Poem about Women”, 『大阪樟蔭女子大学集』第24巻、1987年、75-88頁。
- 山本和平、「ジョナサン・スウィフト私記—ステラの死をめぐる(1)」、『一橋論叢』第12号第3号、2002年3月、222-262頁。